三重県埋蔵文化財調査報告74

松阪市深長町野村町

前沖遺跡発掘調査報告

1986.3

三重県教育委員会

序

松阪市西部域、堀坂山麓、及び東流する幾つかの河川によって形成された複合扇状地上は、松阪地内でも有数の遺跡の密集地帯として知られています。

県道合ケ野・松阪線改良工事は、近畿自動車道松阪インターから松阪市街地へ向うアクセス道路として建設計画が立てられました。

前沖遺跡では奈良～平安時代の竪穴住居、掘立柱建物等が検出され、当初、扇状地内でも低湿地帯と考えられたところにも集落跡が広がることが確認でき、加えて、当時の地形、地理復原にも重要な資料を提供しています。また、木製品（柱根・建築部材）の残存も良く、建築構造を知る上で興味深いものであります。

調査の円滑推進にあたっては、県土木部道路建設課、松阪土木事務所、松阪耕地事務所、松阪市教育委員会の関係各位、また、現地にあっては、地元土地改良区をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご援助があったことについて文末ながら記して、深甚の謝意を表します。

昭和61年３月

三重県教育委員会

教育長　横　田　猛　雄

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が県土木部から執行委任を受けて実施した県道合ケ野・松阪線改良工事に伴なう、松阪市深長町・野村町に所在する前沖遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、全額県土木部の負担による。

3．調査の体制は、下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会事務局文化課

主事　高見　宜雄　　技師　新田　　洋

主事　河瀬　信幸　　主事　増田　安生

主事　倉田　　守　　主事　中川　善夫

調査協力　　松阪市教育委員会　　県土木部道路建設課　　松阪土木事務所

松阪耕地事務所　　堀坂川沿岸地区土地改良区

4．発掘調査後の整理と報告書作成は、河瀬・増田が主として実施し、各報文における文責は文末に記した。

5．本遺跡の遺跡標示略記号は6ＧＭＯで、遺構標示については、下記の略記号によった。

なお、遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第6座標系を基準とし、方位の標示は座標北を用いた。

ＳＢ：竪穴住居、掘立柱建物　　ＳＤ：　溝

ＳＫ：土坑　　ＳＡ：柱列

ＳＸ：その他の遺構

※　図中に用いたWの記号は、柱根、及び木製品である。

6．実測番号は、実測者河瀬：Ｋ　増田：Ｍ　新田悦子：Ｎとし、各人の実測番号を付した。なおＣ地区は当初Ｅ・Ｆ・Ｇ小地区を含んでいたので混乱を避けるためもとの発掘区記号を記した。

なお、整理作業の中で、三重大学教育学部教授堀場義平氏、財団法人文化財建造物保存技術協会領家堯之氏、名古屋大学文学部助手斎藤孝正氏の指導と教示を得た。記して謝意を表したい。

7．スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　言 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　遺　構 …… 10

　　A地区 …… 12

　　B地区 …… 16

　　C地区 …… 22

　　D地区 …… 34

Ⅳ　出土遺物 …… 36

　　A地区 …… 36

　　B地区 …… 42

　　C地区 …… 53

　　D地区 …… 66

Ⅴ　柱根・木製品 …… 70

Ⅵ　前沖遺跡遺物の樹種同定 …… 86

Ⅶ　結　語 …… 89

挿 図 目 次

第１図　松阪市の地質図 …… 2
第２図　遺跡位置図 …… 3
第３図　遺跡地形図 …… 5
第４図　小字図・等高線図 …… 7
第５図　遺構全体図 …… 10・11
第６図　発掘区平面図 …… 11
第７図　Ａ地図遺構平面図 …… 13・14
第８図　ＳＡ3、ＳＢ4•5•7•8、Ｐ1実測図 …… 15
第９図　Ｂ地区遺構平面図 …… 17・18
第10図　ＳＢ10•13～15•17・24、ＳＫ12実測図 … 19
第11図　ＳＢ25実測図 …… 20
第12図　ＳＢ16•18•20•26•29、ＳＫ22実測図… 21
第13図　ＳＢ42実測図 …… 22
第14図　Ｃ地区遺構平面図（1） …… 23・24
第15図　Ｃ地区遺構平面図（2） …… 25・26
第16図　ＳＢ34・45・47・48・50・57実測図… 27
第17図　ＳＢ35・41・42実測図 …… 29
第18図　ＳＢ36・49・53・51・58・59実測図… 31
第19図　ＳＸ62実測図 …… 33
第20図　Ｄ地区遺構平面図 …… 34
第21図　ＳＢ66実測図 …… 35
第22図　地区割図 …… 35
第23図　Ａ地区遺構出土遺物•包含層出土遺物実測図 … 38
第24図　Ａ地区包含層出土遺物実測図 …… 40
第25図　Ｂ地区遺構出土遺物実測図（1） … 44
第26図　Ｂ地区遺構出土遺物実測図（2） … 46
第27図　Ｂ地区包含層出土遺物実測図（1） … 48
第28図　Ｂ地区包含層出土遺物実測図（2） … 50
第29図　Ｃ地区遺構出土遺物実測図（1） … 54
第30図　Ｃ地区遺構出土遺物実測図（2） … 56
第31図　Ｃ地区包含層出土遺物実測図（1） … 60
第32図　Ｃ地区包含層出土遺物実測図（2） … 62
第33図　Ｄ地区遺構出土遺物、包含層出土遺物実測図 … 68
第34図　Ａ地区ＳＢ4柱根実測図（1） …… 72
第35図　Ａ地区ＳＢ4柱根実測図（2） …… 73
第36図　Ａ地区ＳＢ4柱根実測図（3） …… 74
第37図　Ａ地区ＳＢ4•W11、Ｃ地区ＳＢ40柱根実測図 … 75
第38図　Ｃ地区W13•42•ＳＢ45柱根実測図 … 76
第39図　Ｃ地区ＳＢ41柱根実測図 …… 77
第40図　Ｃ地区ＳＢ35柱根実測図 …… 78
第41図　Ｃ地区ＳＸ62板材実測図（1） …… 79
第42図　Ｃ地区ＳＸ62板材実測図（2） …… 80
第43図　Ｃ地区ＳＸ62板材実測図（3） …… 81
第44図　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区板材、角材実測図 … 82
第45図　木製品、漆製品実測図 …… 83
第46図　試片の年輪幅と汚れ度 …… 88

図 版 目 次

ＰＬ１　航空写真
ＰＬ２　Ａ地区全景、ＳＡ3、ＳＢ4
ＰＬ３　ＳＢ5・7
ＰＬ４　Ｂ地区全景、ＳＢ15周辺
ＰＬ５　ＳＫ12、ＳＢ13・14
ＰＬ６　ＳＢ15・17
ＰＬ７　ＳＫ19・22、ＳＤ21、ＳＢ25
ＰＬ８　Ｃ地区全景、ＳＢ34、ＳＫ65
ＰＬ９　ＳＫ33、ＳＢ35•36、ＳＤ39、ＳＢ40•41
ＰＬ10　ＳＢ42・45
ＰＬ11　Ｃ地区北全景、ＳＢ48、Ｃ地区南ＳＸ62
ＰＬ12　Ｄ地区全景、ＳＢ66
ＰＬ13　Ａ地区出土遺物
ＰＬ14　Ｂ地区遺構出土遺物
ＰＬ15　Ｂ地区包含層出土遺物
ＰＬ16　Ｃ地区遺構出土遺物
ＰＬ17　Ｃ地区包含層出土遺物
ＰＬ18　Ｄ地区出土遺物
ＰＬ19　Ａ地区ＳＡ3…W9、ＳＢ4…W2・W5・出土状況
ＰＬ20　Ａ地区ＳＡ3…W10、ＳＢ4…W30•W7・出土状況
ＰＬ21　Ｃ地区ＳＢ42…W16・W17・W18出土状況
ＰＬ22　Ｃ地区ＳＢ45…W15、ＳＢ40…W12出土状況
ＰＬ23　Ｃ地区ＳＸ62…W10•W24•W25•W28•W30•W31
ＰＬ24　A・B・C・D地区出土柱：板材(1:4)木製品.漆椀、種子(1:2)
ＰＬ25　コウヤマキ材、モミ材顕微鏡写真
ＰＬ26　ヒノキ材、スギ材顕微鏡写真
ＰＬ27　イヌガヤ材顕微鏡写真

表 目 次

第１表　遺跡地名表 …… 3
第２表　Ｂ地区掘立柱建物一覧表 …… 22
第３表　Ｃ地区掘立柱建物一覧表 …… 28
第４表　A地区遺構出土遺物•包含層出土遺物観察表(1) … 39
第５表　Ａ地区包含層出土遺物観察表 …… 41
第６表　Ｂ地区遺構出土遺物観察表(1) … 45
第７表　Ｂ地区遺構出土遺物観察表(2) … 47
第８表　Ｂ地区包含層出土遺物観察表(1) … 49
第９表　Ｂ地区包含層出土遺物観察表(2) … 51
第10表　Ｃ地区遺構出土遺物観察表(1) … 55
第11表　Ｃ地区遺構出土遺物観察表(2) … 57
第12表　Ｃ地区包含層出土遺物観察表(1) … 61
第13表　Ｃ地区包含層出土遺物観察表(2) … 63
第14表　D地区遺構出土遺物•包含層出土遺物観察表 … 69
第15表　柱根・板材観察表 …… 84
第16表　柱根・板材・木製品観察表 …… 85
第17表　供試片の特徴 …… 87
第18表　主要遺構別出土土器数 …… 91

Ⅰ　前　　言

県教育委員会では各種公共事業の実施計画について、庁内各関係課あて事業照会し、当該年度、あるいは次年度以降の事業計画を早期に把握して、開発との調整の中で極力、文化財保護に支障のないよう努めている。

前沖遺跡はすでに昭和58年当時に県道合ケ野・松阪線改良工事計画として土木部からあがり、近畿自動車道松阪インターから松阪市街地へ抜けるアクセス道路として、近畿道本線との関連で分布調査が実施され、その段階では大きく伊勢寺遺跡（第２～第４地点）の範疇として把握されていたところである。

一方、農林水産部が事業主体である当地域（堀坂川沿岸地区）の県営圃場整備事業は、昭和59年度には曲町と野村町の一部を完了し、次年度には野村から深長・伊勢寺町方面への極めて広範囲にわたる計画が進行しつつあった。

アクセス道路は、いわばこの圃場整備事業域のほゞ中央部を東西に横断する形となるわけで、相互の事業の円滑推進と整合性についてはすでに土木部と農林部の間で昭和60年度事業遂行の線で調整がもたれていたようである。

文化課にこうした状況の説明と遺跡調査に関する協議要望があったのは昭和60年３月のことである。

また、近畿自動車道の久居～勢和間の昭和64年供用開始計画の具体的浮上も加え、農林・土木の両事業の単年度事業としての整合（国土庁調整費事業として）の中で、当課では遺跡調査の実施を余儀なくされたというのが現実であった。

とりあえず、試掘調査は農林事業の中で実施することとなり、昭和60年３月に事業地内に２×４ｍの試掘坑を61ヵ所、５月に13ヵ所を追加して試掘調査を行った。

この試掘調査結果をもとに再度、協議がもたれたが、最終的には県道改良予定部分のみを圃場整備事業区に先行して調査を実施することとなり、面積約8,800㎡がその対象となった。調査は昭和60年10月29日に開始し、翌年２月末日に現地調査を終了した。

作業風景（Ｃ地区）

Ⅱ　位置と環境

自 然 的 環 境

前沖遺跡は松阪市野村町字前沖に所在し、松阪市西部の秀峰堀坂山を西に望む標高17～20mの堀坂川左岸の扇状地扇端部に位置する。

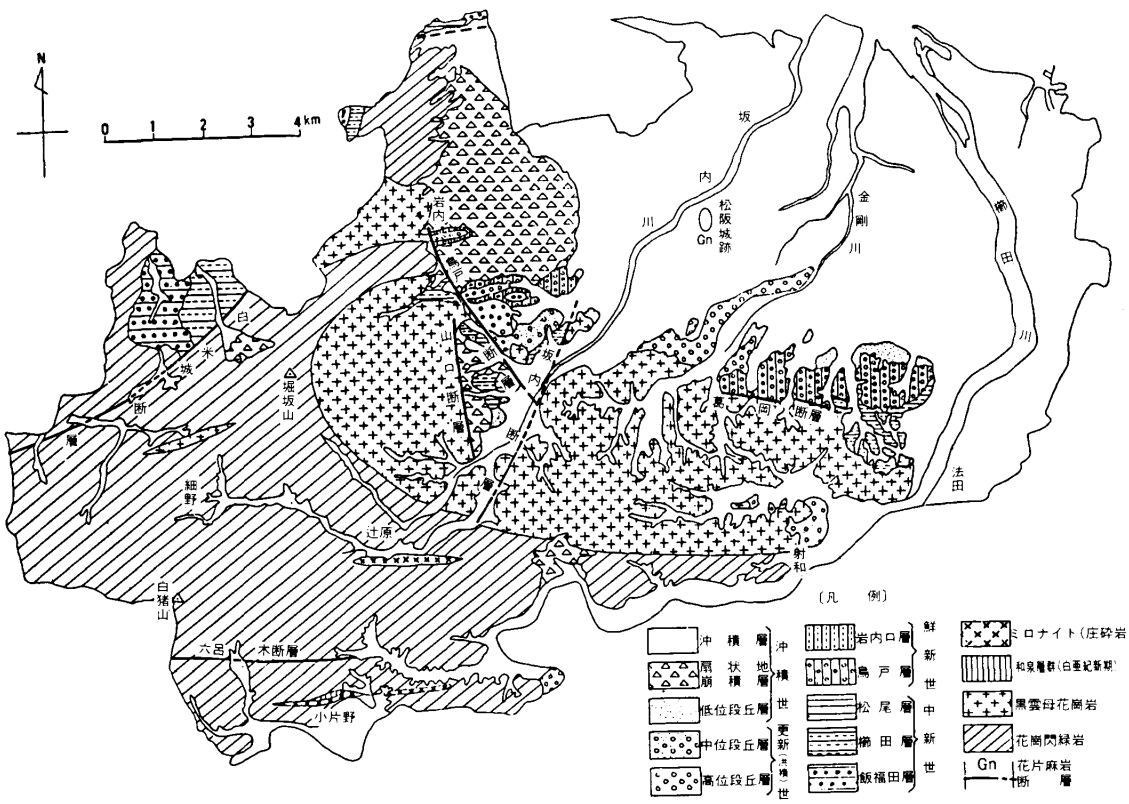
松阪市は南北に細長くのびた三重県のほぼ中央にあり、一般に西部は山地・丘陵地からなり、東部は肥沃な平野を形成している。前沖遺跡は松阪市西部の伊勢寺扇状地に立地しており、その自然的環境を『松阪市史　第1巻　史料篇　自然』[1]を参考に概観してみよう。

三重県中央部は断層山脈の布引山脈が南北に走り、これを分水嶺として伊勢と伊賀とが地域的に分かれている。これに対して、西日本中央構造線にともなう同じく断層山脈である三峯山脈が東西に走り、布引山脈と直交する形で連なっている。この両山脈にかこまれるように連なる扇形の山地が一志地塊である。松阪市西部の山地は主にこの一志地塊に含まれ、堀坂山を主峰として観音岳など標高600～760mの山々がそびえ、その東側には標高50～250mの丘陵が続いている。

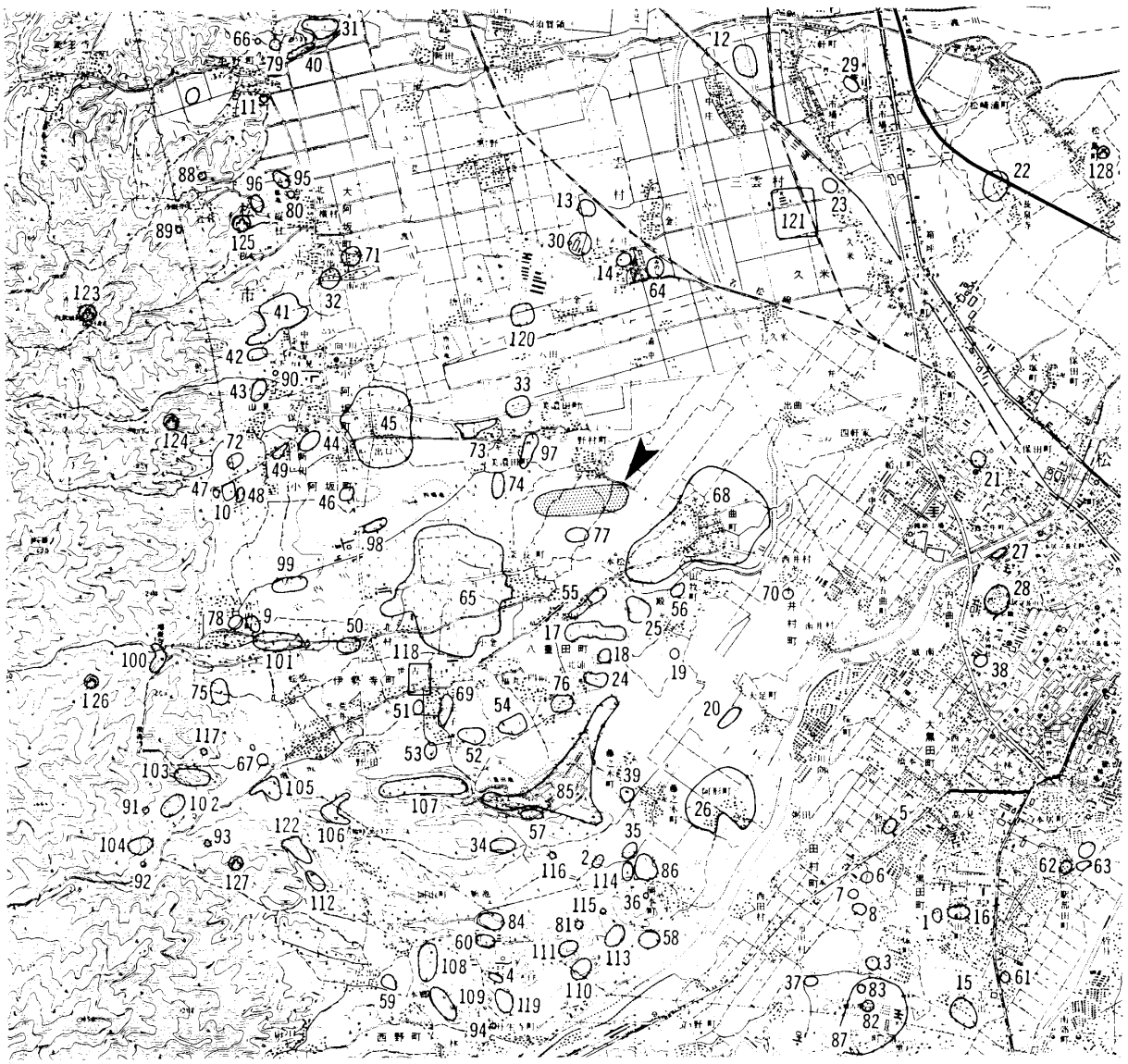
洪積世になると、これらの山地は大洪水によって浸食され、北から三渡川、岩内川、堀坂川、坂内川など東流する中小河川を形成し、運ばれた土砂は谷の出口に大規模に堆積し、大阿坂から伊勢寺におよぶ複合扇状地を形成している。殊に、岩内から伊勢寺にかけての山麓には鳥戸断層が南北に走り、岩内川、堀坂川によって運ばれた土砂がその東側に厚く堆積している。それらは西部山地の基盤岩類から由来した砂礫からなっており、標高40～50mのところにはチャート、砂岩、花崗質岩類などで構成された礫層があり、松阪礫層と呼ばれている。

さて、これら広い面積にわたり形成された複合扇状地は、一度ではなく数度におよぶ大洪水により形

松阪市の地質図



第1図　松阪市の地質図(『松阪市 第1巻 史料篇 自然』より抜粋)



第２図　遺跡位置図　（１：50,000）

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
1	長庄野遺跡	先土器	33	ケ所垣内遺跡	〃	65	伊勢寺遺跡	飛鳥・奈良以降	97	美濃田古墳群	〃
2	観音山遺跡	〃	34	藤ノ木岡崎山B遺跡	弥生以降	66	小野瓦窯跡	奈良	98	小田古墳群	〃
3	宝塚遺跡	〃	35	古野遺跡	〃	67	榎長遺跡	奈良	99	垣内田古墳群	〃
4	平林遺跡	縄文（早～前）	36	三ざい遺跡	〃	68	曲遺跡	奈良～鎌倉	100	瑞巌寺古墳群	後期
5	新田町遺跡	〃（前）	37	小広遺跡	〃	69	王子遺跡	奈良以降	101	岡崎古墳群	〃
6	笠松遺跡	〃（中）	38	幸小学校遺跡	〃	70	山の神遺跡	平安以降	102	上文珠古墳群	〃
7	池田遺跡	〃（〃）	39	藤ノ木小野遺跡	〃	71	市屋垣内遺跡	鎌倉	103	下文珠古墳群	〃
8	貝造遺跡	〃（〃）	40	小野遺跡	古墳以降	72	山見遺跡	〃	104	高須摩古墳群	〃
9	藪ノ下遺跡	〃（中～後）	41	広見遺跡	〃	73	尾田遺跡	〃	105	平林古墳群	〃
10	新田遺跡	縄文以降	42	中野遺跡	〃	74	別当垣外遺跡	〃	106	五輪山古墳群	〃
11	小野東出遺跡	〃	43	下山見遺跡	〃	75	蛇原広遺跡	〃	107	一越古墳群	〃
12	中ノ庄遺跡	弥生（前）	44	大瀬古遺跡	〃	76	門前遺跡	〃	108	白山古墳群	〃
13	文珠遺跡	〃（〃）	45	出口遺跡	〃	77	北小麦遺跡	〃	109	園古墳群	〃
14	宮ノ越遺跡	〃（〃）	46	墓垣内遺跡	〃	78	藪ノ下遺跡	鎌倉～室町	110	辰ケ鼻古墳群	〃
15	上出遺跡	〃（前）	47	新田A遺跡	〃	79	向山古墳	前期	111	すご山古墳群	〃
16	御殿山遺跡	〃（〃）	48	新田B遺跡	〃	80	市谷古墳	〃	112	横尾古墳群	〃
17	城垣内遺跡	〃（中）	49	新田C遺跡	〃	81	狼谷古墳	〃	113	川原表古墳群	不明
18	田高田遺跡	〃（〃）	50	鍛冶屋垣内遺跡	〃	82	宝塚1号墳	〃	114	三ざい古墳群	〃
19	蛸遺跡	〃（〃）	51	大垣内遺跡	〃	83	宝塚2号墳	〃	115	常光坊谷古墳	〃
20	大足遺跡	〃（〃）	52	向王子A遺跡	〃	84	分木山古墳群	〃	116	八原古墳	〃
21	川井町遺跡	〃（〃）	53	向王子B遺跡	〃	85	八重田古墳群	前期～後期	117	大谷古墳	〃
22	鍋屋分遺跡	〃（〃）	54	中広遺跡	〃	86	高地蔵古墳群	〃	118	伊勢寺廃寺跡	飛鳥～奈良
23	久米貝塚	〃（後）	55	茶屋前遺跡	〃	87	宝塚古墳群	〃	119	丹生寺廃寺跡	奈良
24	下林遺跡	〃（〃）	56	北狭間遺跡	〃	88	一ノ谷古墳	後期	120	大蓮寺跡	〃
25	わこ畑遺跡	〃（〃）	57	藤ノ木岡崎山A遺跡	〃	89	前谷古墳	〃	121	大行寺跡	平安
26	阿形遺跡	〃（〃）	58	川原表遺跡	〃	90	鳥岡古墳	〃	122	横尾墳墓群	鎌倉以降
27	内五曲遺跡	〃（〃）	59	西野遺跡	〃	91	善小広古墳	〃	123	阿坂城跡	室町
28	松阪城遺跡	〃（〃）	60	藤ノ木新畑遺跡	〃	92	古垣内古墳	〃	124	枳城跡	〃
29	権現角遺跡	〃（〃）	61	はざま遺跡	〃	93	めはじき古墳	〃	125	高城城跡	〃
30	辻世古中遺跡	弥生以降	62	東出遺跡	〃	94	奥古墳	〃	126	岩内城跡	〃
31	上野遺跡	〃	63	こうじ垣内遺跡	〃	95	八幡山古墳群	〃	127	伊勢寺城跡	〃
32	天白遺跡	〃	64	上ノ庄遺跡	〃	96	阿坂古墳群	〃	128	松ケ島城跡	〃

第１表　遺跡地名表

成されたと考えられ、そのため数個の段丘面が確認されている。段丘面は大きく３段に分けられ、低位面は10～25m、中位の面は25～35m、高位面は30～100mにもおよんでいる。しかし、それらの段丘面間には明瞭な段丘崖が見られず、緩斜面が続くところもあれば、また１～３mの差をもつ崖となっているところもある。そして、堆積層が軟弱な礫を含む土砂であるため、浸食され数条の小河川が東に流れ、浅い谷を形成している。

扇状地であるため、西部山地に降った雨は東に流れ、扇頂部で地下に潜り伏流水となる。従って、扇頂部・扇央部では水の確保のための大きな溜池が数カ所あり、また扇端部では伏流水が泉となって湧水するため、大小の溜池が数カ所ある。その中で小さい溜池は、前沖遺跡が所在する野村町に隣接する深長町地内に特徴的に多く見られる。地元住民の言う「泉の森」地内、及びその周辺には春から秋にかけて湧水の豊富な小さい溜池（泉）があり、これらから流れ出る水は東に向い、放射状に数条の小河川を形成し、扇端部を開析し、浅い谷を発達させ、流路跡と考えられる溝が現在も残っている。そして、この水が扇端部に立地する深長町、野村町、曲町などの水田を今も潤わせているのである。

歴史的環境

前沖遺跡が位置する松阪市西部は、一志郡一志・嬉野町から続く県下でも屈指の遺跡密集地域である。それらの遺跡は主に段丘面、丘陵地に立地しているものが多く見られるが、沖積地の微高地にも散在している。以下、この項では松阪市西部を中心とした地域の遺跡について概観してみることにする。[2]

先土器時代

先土器時代の遺跡は坂内川、及び金剛川にはさまれた丘陵上に、ナイフ形石器が出土した長庄野遺跡(1)や、サヌカイトの剝片散布がかつて確認された宝塚遺跡(3)などが知られるのみであり、坂内川左岸でも、サヌカイト製石鏃が出土した観音山遺跡(2)や、サヌカイト製の大型掻器が出土したさんざい林遺跡など少なく、今後の分布調査の進展が待たれる。

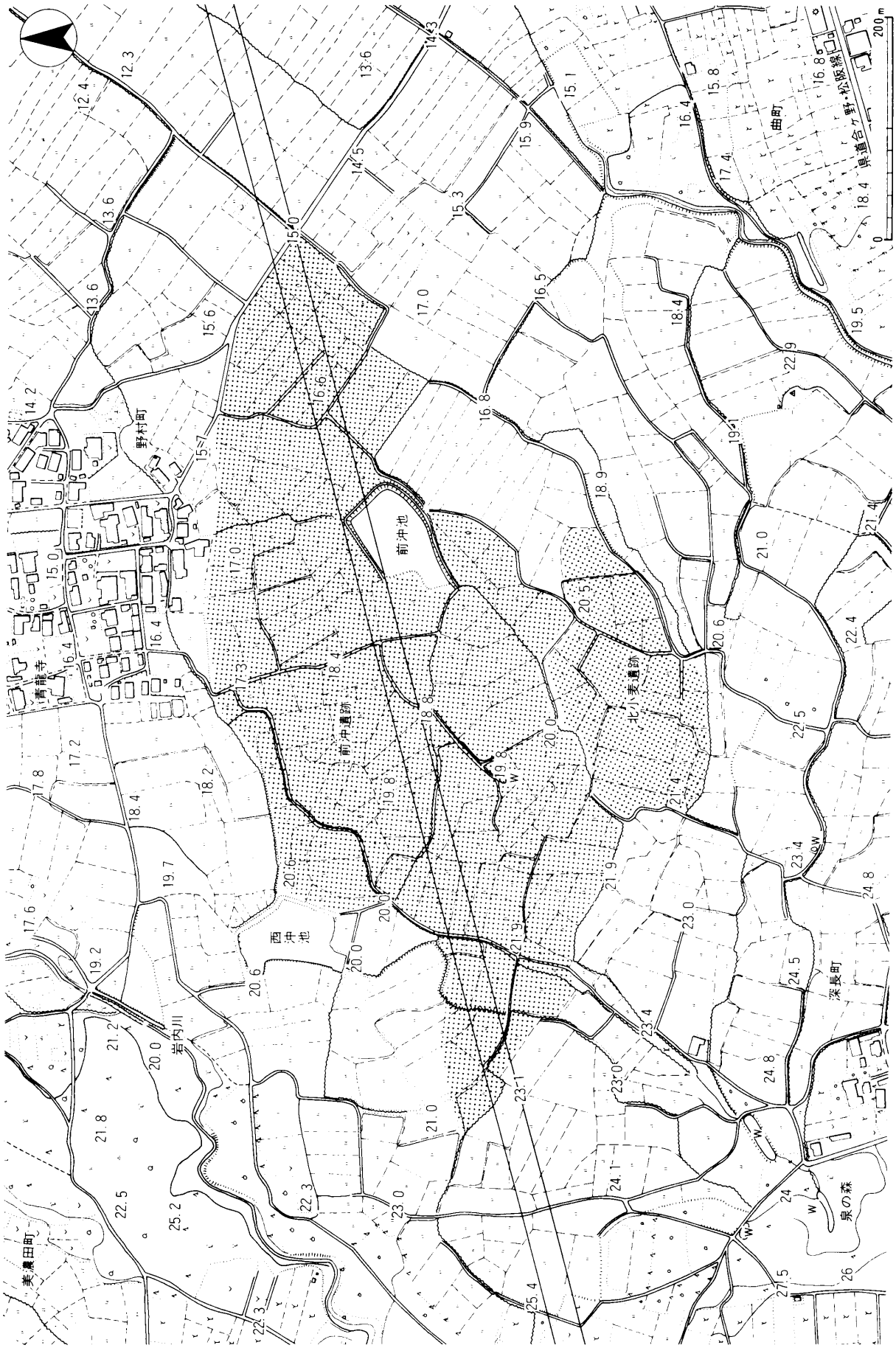
縄文時代

縄文時代の遺跡も、先土器時代と同様にその数も少ない。櫛田川流域には草創期・早期の遺跡が数ヵ所見られるが、西部地域では草創期の遺跡は確認されておらず、早期～前期と考えられる土器片が少量出土した平林遺跡(4)が知られるだけである。前期から中期になると、坂内川筋、特に右岸の微高地に新田町遺跡(5)をはじめ、笠松遺跡(6)、池田遺跡(７)があり、沖積地の微高地に生活の場が進出したことを物語る。中期から後期にかけて、はるかに伊勢湾を東に望む伊勢寺扇状地の扇頂部に、薮ノ下遺跡(9)、新田遺跡[3](10)があり、その立地上注目される。晩期になると良好な遺跡はほとんど確認されてはおらず、弥生時代を迎えることになる。

弥生時代

遺跡の立地条件、及び環境が各時期にまとまった様相を見せ始めるのがこの時代である。前期には畿内第Ⅰ様式の新の段階に始まる上出遺跡(15)、御殿山遺跡(16)などを代表とする遺跡が、坂内川と金剛川とにはさまれた水田を見下す低い台地にあり、また、文珠遺跡(13)、宮ノ越遺跡[4](14)などが沖積地に張り出す低い丘陵上にある。中期になると、沖積地の微高地、及び河岸段丘低位面に立地する遺跡が多く見られる。特に三渡川、坂内川にかこまれた地域に集中しており、中期前半と考えられる土器を出土する川井町遺跡(21)、鍋屋分遺跡(22)が沖積地の微高地に立地する。中期後半では、以前に器形・施文に中期後半の特徴を良く現わした土器が出土した田高田遺跡(18)が知られ、その他、城垣内遺跡(17)などが段丘面にある。そして沖積地の微高地に中期～後期にまたがる蛸遺跡(19)がある。

後期に入ると遺跡の数も増加し、その立地・分布も台地や丘陵の端部、丘陵頂部などにも広がる傾向を見せる。坂内川、堀坂川にはさまれた地域では、田高田遺跡などの後をうけて、パレススタイルと呼



第3図　遺跡地形図　　(1：5,000)

ばれる土器の出土した蛸遺跡が知られ、その他、段丘面には下林遺跡(24)が、わこ畑遺跡(25)、阿形遺跡(26)が沖積地の微高地に立地する。また、坂内川下流右岸の微高地に内五曲(うちごまがり)遺跡(27)が、丘陵頂部に松阪城遺跡(28)が位置する。

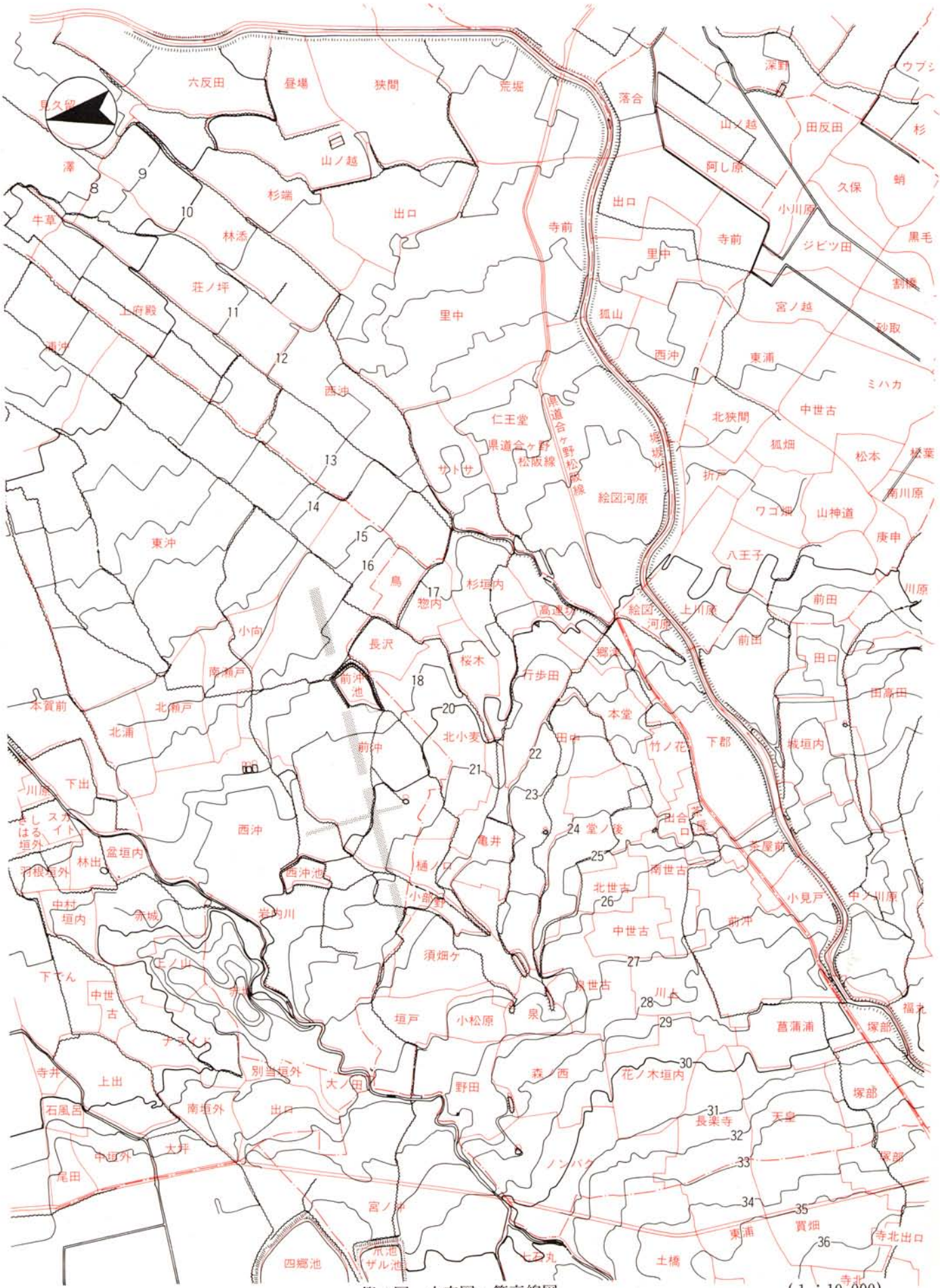
古墳時代

一志郡嬉野町から多気郡多気町へと続く丘陵地帯及び山麓部には、前期から後期にわたる古墳・古墳群が集中、或いは点在する。中でも、堀坂川流域の伊勢寺地区、坂内川流域の松尾・花岡地区に集中しているのが目立つ。そして、それらはいずれも扇状地や沖積低地を前面に見下すところに位置している。

前期の古墳では最も古い段階に位置づけられ、昭和50年に国史跡指定された一志郡との境界上に位置する全長71.4mの前方後方墳である向山古墳(79)が北に望める。向山古墳は4世紀後半に属すると考えられ、主体部に粘土槨をもち、小形仿製鏡である重圏文鏡をはじめとする鏡や、碧玉製石製品などが出土[5]し、現在その大半は東京国立博物館に所蔵されている。眼を南に転ずると、堀坂山東麓から東に伸びる丘陵の北側部分東端に昭和48年発掘調査された八重田古墳群[6](85)がある。中でも1号墳は木棺直葬で、副葬品として舶載の二神二獣鏡、玉類、鉄剣などが出土し、8号墳は内部主体に粘土槨をもち、副葬品として仿製の捩文鏡などが出土している。ともに円墳で、1号墳は推径24m、4世紀後半に、8号墳は推径23.8m、5世紀前半に位置づけられている。さらに、7号墳は墳麓から円筒埴輪、形象埴輪、須恵器片などが出土し、16号墳からは鉄鏃、眉庇付冑及び短甲片、ガラス丸玉などが出土した。7号墳は径14～15mの円墳で、16号墳は一辺16mの方墳で、ともに5世紀後半に属すると考えられている。その他、調査されなかった古墳では、径約40mで円墳の10号墳、全長50mの前方後円墳である11号墳がその規模の大きさから注目される。八重田古墳群から東南へ約700mと近接する地点に高地蔵古墳群[7](86)があり、その中で1号墳は5世紀後半に属すると考えられる全長58mの帆立貝式古墳であり、その規模から首長墓的性格をもつと考えられる。さらに、東南の坂内川右岸の丘陵地に宝塚古墳群(87)が位置し、代表的なものに、昭和7年に国史跡指定をうけた1号墳(82)、2号墳[8](83)がある。1号墳は全長95mと伊勢国最大の前方後円墳であり、2号墳も全長72mの規模をもつ帆立貝式の前方後円墳である。1号墳は5世紀前半に、2号墳は5世紀後半におのおの築造されたと考えられている。これら3つの古墳群は相互に消長を繰り返していたのではないかと想定されるが、いずれにしても、この様な前期の大規模な古墳が坂内川両岸の丘陵地帯に営まれたことはこの地域一帯が南勢地方の広範囲にわたる地域の支配権を確立していたと考えられるのである。

後期に入ると、横穴式石室を主体とした小規模な円墳を中心と群集墳が現われ、伊勢寺扇状地周辺では堀坂川、岩内川を見下す低丘陵地、山麓部、丘陵地帯に数多く分布する。低丘陵地には美濃田古墳群(97)など、山麓部には瑞厳寺古墳群(100)、上文珠古墳群(102)、下文珠古墳群(103)、高須摩古墳群(104)など、丘陵地帯には垣内田古墳群[9](99)、岡崎古墳群(101)、平林古墳群(105)、五輪山古墳群(106)、一越古墳群(107)などが営まれている。また、坂内川を見下す丘陵地帯にも、白山古墳群(108)、園古墳群(109)、辰ケ鼻古墳群(110)などが営まれている。これら後期の群集墳は、この時期になると支配者層だけではなく、古墳を造る階層が被支配者層にまで拡大したことを意味し、家族のあり方が変化したことにより、追葬が可能な家族墓的なものとして営まれたと考えられる。とすれば、この地域にも古墳時代後期の社会的変化が及んでいたことを物語っているといえよう。

古墳時代の遺跡は、古墳の数の増加と相関関係を持つと考えられ、増加している。それらはほとんど扇状地の中に立地しており、中には沖積地の微高地に立地するものもある。扇状地には北から、広見遺跡(41)、出口遺跡(45)、鍛冶屋垣内遺跡(50)、向王寺A・B遺跡(52•53)、中広遺跡(54)、茶屋前遺跡(55)などがあり、出口遺跡は広い範囲にわたり遺物の散布が認められる。沖積地の微高地には、阿形遺跡や北狭間遺跡(56)が知られている。特に阿形遺跡では、前期土師器が比較的まとまって出土しており、弥生時代との関連が注目される。



第４図　小字図・等高線図　（１：10,000）

歴史時代

飛鳥・奈良時代以降の遺跡で代表的なものは、伊勢寺扇状地に広大な面積をもつ伊勢寺遺跡(65)があり、その表面には須恵器・土師器・山茶椀などが濃密に分布している。伊勢寺遺跡の西、堀坂川左岸の扇頂部に奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物などが検出された榎長遺跡[10](67)が、東の扇端部が沖積地と接するところに、これもまた広大な面積をもつ曲遺跡[11](68)があり、その一部は発掘調査をされ、奈良時代後半から平安時代全般にわたる掘立柱建物など数多くの遺構が検出されている。この様に、広大な面積をもつ遺跡が扇状地内に立地しているのがこの地域の特色といえる。

奈良時代を中心とする寺院跡も数ヵ所点在する。中でも、伊勢寺遺跡の南に位置する伊勢寺廃寺[12](118)は、その出土する瓦に白鳳期と推定される複弁蓮華文をもつ軒丸瓦、重孤文を配した段顎の軒平瓦が若干あり、その創建を白鳳期に求める可能性をもち、また、方形地割が残存し、その中軸線が真北をさすなど寺域の推定も可能な寺院跡である。伊勢寺廃寺の南方、坂内川左岸の丘陵北東麓に丹生寺廃寺[13](119)がある。出土する瓦の中には白鳳期と推定されるものもあるが、そのほとんどは奈良時代が中心であり、また、整地面や土塁状遺構の残存も見られる。さらに、三雲村と松阪市の境界付近に大蓮寺跡の伝承地があり、平安時代の寺院跡としては、三雲村の大行寺跡が知られている。

平安時代初期に成立した『延喜式・神名帳』[14]に記載されるところの神社は、所謂「式内社」と呼ばれる。その式内社も現松阪市に比定される旧飯高郡内には、立野・大神・物部・加世智・意悲・堀坂・久爾都の各神社、飯高郡との境界付近の一志郡には、阿射加・敏太の各神社がある。その中で、現在深長町内の「泉の森」として残るところに、現在伊勢寺神社に合祀された大神社の故地があり、これが式内社の大神社と考えられており、そして周辺には美濃田町に敏太神社があり、明治時代に現伊勢寺神社に合祀された堀坂神社、物部神社が伊勢寺町にあったとされている。

『延喜式』よりやや遅れて成立した『和名抄』[15]の記載によると、現松阪市域の旧飯高郡内には、上枚・下枚・英太・立野・馬家・神戸・丹生の七郷の名が見え、上・下枚は現田枚町に、英太は現阿形町に比定されている。飯高郡は奈良時代中頃に君姓を賜わり飯高君を称した飯高県造が主宰した地域であり、朝廷とは深い関係をもち、奈良時代から平安時代中頃まで強い勢力を誇った地域と考えられている。飯高氏は国郡制の施行とともに郡司に任ぜられ、現在の阿形に飯高郡家がおかれたと伝えられている。[16]

坂内川、堀坂川、岩内川によって形成された扇状地扇端部から沖積地にかけて、古代条里制の名残りが随所に見られる。特に前沖遺跡の東、曲遺跡の位置するところにはその名残りが顕著に認められ、また、阿形遺跡周辺にも残っており、これらの条里の施行期は7世紀後半頃以降と推定されている。[17]

古代に於ける道路もまた重要な役割を担うものと考えられるが、南勢地方では大和から伊勢神宮へ向う古代の道がそれであったと思われる。この古代の道も推定復元作業が行なわれており、それによると一志頓宮から飯高駅家に至るルートが前沖遺跡のすぐ西を通り、扇端部を条里方位と平行する形で横切っているのが注目される。[18]

飯高郡は平安時代末期に神八郡の最後として神郡となり、多くの御厨・御園といった伊勢神宮領が成立している。この地域では、五勾御園、勾御厨、井村御厨・御園、深長御厨、英太御厨・御園・神田[19]、岩内御園[20]などが、また、一志郡と飯高郡の境界付近に阿射加御厨[21]がある。

鎌倉時代以降を中心とした遺物が散布する遺跡としては、伊勢寺扇状地の扇頂部に薮ノ下遺跡[22](78)などがあり、前沖遺跡と隣接する扇端部には、別当垣外遺跡(74)、北小麦遺跡(77)などが点在する。

南北朝以降、この地域も伊勢国司北畠氏の支配をうけ、白米城伝説を生んだ阿坂城跡(123)をはじめ枳城跡(124)、高城城跡(125)、岩内城跡(126)、伊勢寺城跡(127)が堀坂山系に多く築かれ、その栄古盛衰を偲ばせる。[23]

堀坂山系の丘陵の一つに横尾墳墓群（122）がある。この墳墓群は尾根の頂上付近に数多くの石組遺構・土坑が検出され、大規模な中世墓として、さらに中世の信仰形態を知る手がかりとして注目されて

いる。[24]

（河瀬信幸）

〔註〕

① 山本威「松阪市の地形」、荒木慶雄・北村治郎「松阪市の地質」『松阪市史　第1巻　史料篇　自然』　松阪市　1977年

② この項は、『松阪市史　第2巻　史料篇　考古』、松阪市　1978年　に負うところが大きい。詳細については、参照を願いたい。

③ 「薮ノ下遺跡」・「新田遺跡」　『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』　三重県教育委員会　1986年

④ 吉水康夫　「宮の越遺跡」　『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』　1973年　三重県教育委員会

⑤ 「一志郡向山前方後方墳について－三重県主要古墳調査」　『ふびと27号』　三重大学歴史研究会原始古代史部会　1967年

後藤守一　「伊勢一志郡豊地村の二古式古墳」『考古学雑誌14－3』　1923年

榧本亀次郎　『三重考古図録』　1954年　三重県教育委員会

⑥ 下村登良男　『八重田古墳群発掘調査報告』　1981年　松阪市教育委員会

⑦ 「松阪地区における埋蔵文化財の調査－その1　松尾・花岡・神戸地区」　『ふびと31号』　三重大学歴史研究会原始古代史部会　1970年

⑧ 註⑦参照

「松阪市・宝塚2号墳測量調査」　『ふびと32号』　三重大学歴史研究会原始古代史部会　1975年

⑨ 註③　「垣内田古墳群」

⑩ 註③　「榎長遺跡」

⑪ 新田洋・河北秀実ほか　「曲遺跡」　『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1985年　三重県教育委員会

⑫ 『三重県古瓦図録』　鈴木敏雄　1933年

⑬ 註⑫参照

⑭ 『延喜式・前篇』　新訂増補国史大系本　1981年　吉川弘文館

⑮ 池辺彌　『増訂版和名類聚抄郷名考證』　1970年　吉川弘文館

⑯ 倉田康夫　「伊勢湾西岸地域における条里制の歴史地理学的研究」　『条里制と荘園』　1976年　東京堂出版

⑰ 註⑯参照

⑱ 足利健亮　「大和から伊勢神宮への古代の道」『環境文化（特集・歴史の道）№45』　1980年　（『日本古代地理研究』　1985年　大明堂　再録）

⑲ 五勾御園から英太御厨・御園・神田までは、『神宮雑例集』・『神鳳抄』　正編群書類従・第1巻－神祇部　群書類従完成会

⑳ 註⑲の『神鳳抄』に記載

㉑ 『太神宮諸雑事記』・『神宮雑例集』・『神鳳抄』　正編群書類従・第1巻－神祇部

㉒ 中村信裕　「薮ノ下遺跡」　『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1984年　三重県教育委員会

㉓ 『三重の中世城館』　1976年　『三重の中世城館補遺』　1981年　三重県教育委員会

㉔ 註③　「横尾墳墓群」

その他、この項を書くに際し、下記の文献を参照した。

① 吉村利男　「小野遺跡」　『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1976年　三重県教育委員会

② 伊藤克幸　「貝塚遺跡」　『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1977年　三重県教育委員会

貝塚遺跡は大行寺跡（121）内に位置する遺跡である。

③ 谷本鋭次　『中ノ庄遺跡発掘調査報告』　1972年　三重県教育委員会

④ 吉田東伍　『大日本地名辞書・上方篇』（増補版　1972年　冨山房

⑤ 『三重県の地名』　日本歴史地名大系24　1983年　平凡社

⑥ 『角川日本地名大辞典・24　三重県』　1983年　角川書店

⑦ 藤堂元甫　『三国地誌・上』　大日本地誌大系第8冊　1916年　大日本地誌大系刊行会

Ⅲ 遺　　構

1．調査方法

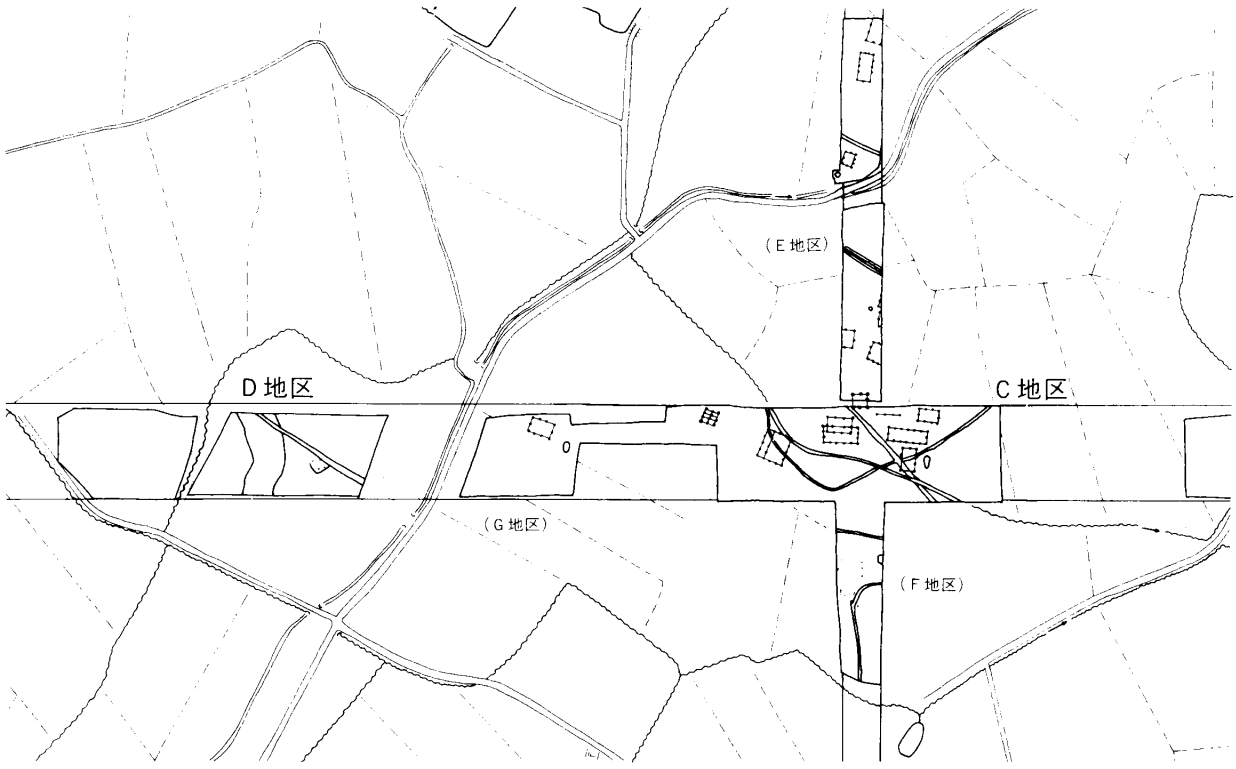
道路部分が発掘調査の対象となるため、幅25m、東西約640mの中を、東から順にA～D地区の4つの発掘区に分け調査を行った。各発掘区内の地区設定は、道路のセンター杭を基準にし、4m×4mのグリッドを基本に、北から南にアルファベット、東から西に番号を与え、地区名は北東隅の杭を基準とした。各発掘区の中でC地区は、県営圃場整備事業に伴う幅10mの幹線道路が直行するために、併せて同時に調査を行った。従って、この部分に限り西から東へアルファベット、北から南へ番号を与えた。なお、C地区の南北に直行する発掘区は、調査の際、北をE地区、南をF地区とし、また西に延びる不定形な発掘区をG地区と呼称した。

遺跡は扇状地の扇端部に位置し、調査区の西部が高く、東西に発掘区が延びるために、A地区とD地区の比高差は5～6mあった。また、扇端部特有の湧水が所々に見られ、地盤も不安定な箇所があり、そして、調査が晩秋から厳冬にわたったこともあって、遺構検出に困難な時・場所をまじえながらの調査であった。

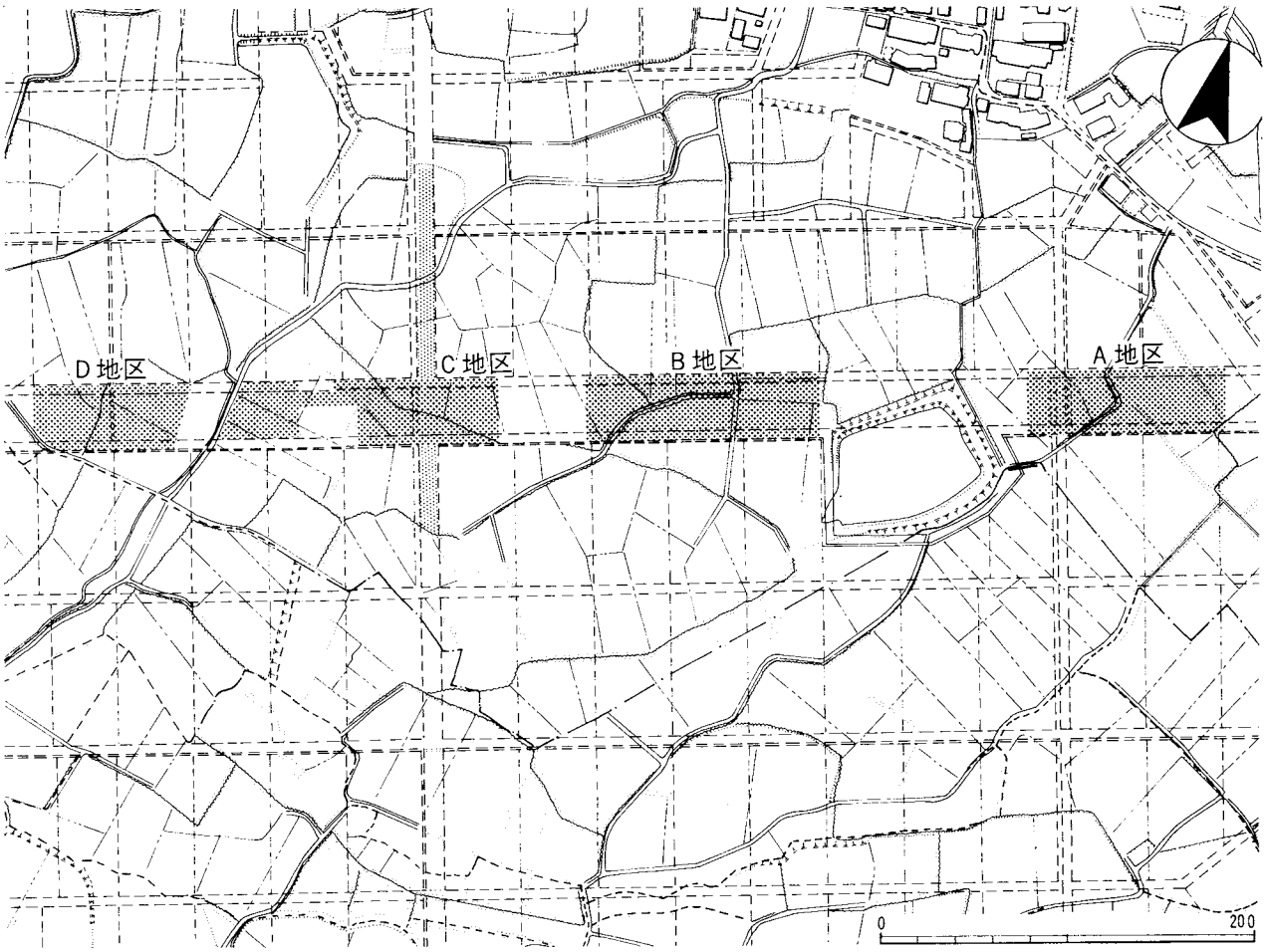
2．遺構の概要

A～D地区の各発掘区を総合すると、検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居、奈良時代を中心とする竪穴住居、掘立柱建物、柱列、土坑、溝、奈良時代末期～平安時代初期にかけての掘立柱建物、土坑、平安時代後期の土坑、中世から近世にわたる溝、時期不明の掘立柱建物、柱列、さらに埋没した旧河道などがある。これらの遺構は、各発掘区の随所に見られる訳ではなく、集中する箇所と疎らな箇所が割合にはっきりとしているのが特徴的である。

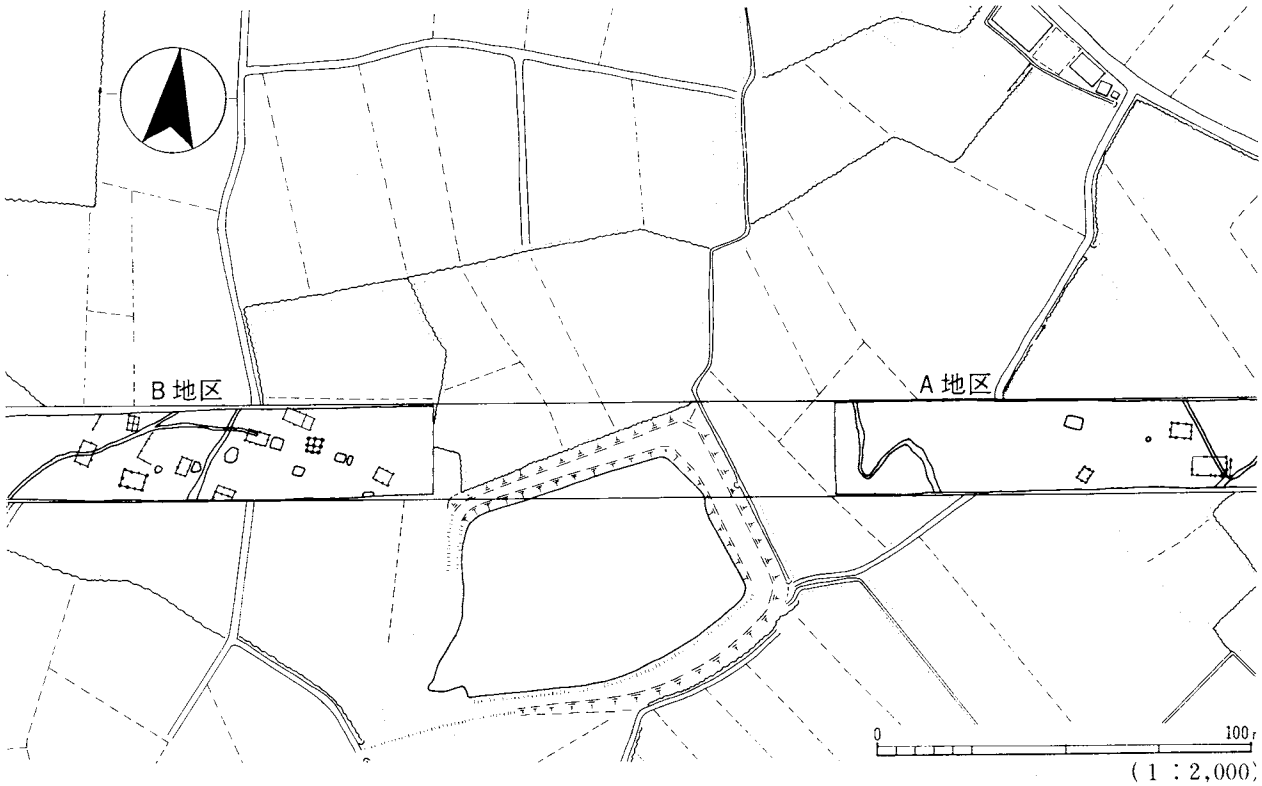
遺跡の基本的な層序は、扇状地の扇端部ということもあり、また、かっての小河川による開析や氾濫、後世の開墾等による削平など、その層序は各発掘区によってかなりさまざまである。基本的には、およそ3層（一部4層）に分かれ、第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層が遺物包含層を形成し、第Ⅲ層が地山である。



第5図　遺構全体図



第6図　発掘区平面図　　(1：4,000)



(1：2,000)

A 地区

A地区の基本的層序は3層に分かれ、第Ⅰ層は灰褐色の耕作土、第Ⅱ層は黒褐色土（遺物包含層）、第Ⅲ層は灰茶褐色粘質土（地山）である。

検出された主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、平安時代初期の掘立柱建物2棟、柱列1条、平安時代後期の土坑1基、中世以降と考えられる溝2条、小河川の旧河道と考えられる溝1条などである。そして、発掘区のほぼ中央には北西～南東へ走る多数の小溝がある。

1．奈良時代の遺構

SB7　南北棟の掘立柱建物。全体規模は3×2間、桁行3.3m、梁行2.6mであり、柱間は桁行1.45m＋1.0m×2と不等間、梁行は1.3mの等間である。柱掘形は一辺50～80cmの方形、長径50～85cm、短径35～60cmの楕円形など不揃いで、深さも15～56cmとばらつきがある。建物内中央に長径90cm、短径65cm、深さ43cmの柱痕跡らしきものをもつピットがあるが、この建物との関係は不明である。柱掘形内より土師器甕・甑片などが出土している。全体規模が小さく倉庫的な建物と推定される。棟方向はN8°Eである。

SB8　竪穴住居。東西5.1m、南北3.8m、深さ7～9cmの規模をもつが、主柱穴は確認できなかった。北辺中央部にカマド跡らしい焼土がある。南北軸はN88°Wである。

2．平安時代初期の遺構

SB4　東西棟の掘立柱建物。6×3間で、桁行9.1m、梁行4.95m、柱間は桁行1.55m×4＋1.45m×2の不等間、梁行は1.65mの等間である。柱掘形は一辺60～85cmの方形で、深さは15～85cmとさまざまである。北側桁行の東端を除く柱掘形、西側梁行の北から2ヵ所、南側桁行の西から3番目の柱掘形が溝で切られたりして検出、確認が出来なかったが、残りの柱掘形から推定して復元した。南側桁行の西端、東端から3ヵ所、東側梁行全箇所の柱掘形内には柱根が残る。柱掘形内より土師器片が少量出土している。棟方向はE15°Nである。

SB5　東西棟の掘立柱建物。4×2間で、桁行5.5m、梁行3.6m、柱間は桁行1.5m＋2.5m＋1.5mで不等間、梁行は東側で1.5m＋2.1m、西側で1.8mの等間と不揃いである。柱掘形は径40～50の円形、一辺40～85cmの方形で不揃いであり、深さは20～40cmである。南東隅、西側梁行中央の柱掘形に柱痕跡が残る。柱掘形内より土師器片が少量出土した。棟方向はE7°Nである。

SA3　SB4のすぐ東側に位置する南北の柱列である。柱掘形は、一辺50～80cmの方形で、深さは20～40cm、中央を除く南と北の柱掘形には柱根が残る。

3．平安時代後期の遺構

SK6　東西1.0m、南北1.2m、深さ約5cmの方形を呈する土坑である。東北隅にわずかではあるが焼土が認められる。出土遺物には灰釉椀片，常滑甕の胴片などがある。

4．中世以降の遺構

SD1　南西から東北へ走る、幅0.4～1.3m、深さ6～10cm程の溝である。中世陶器片が若干出土している。このSD1は現在東北へ向って流れる水路と殆ど重なっている。

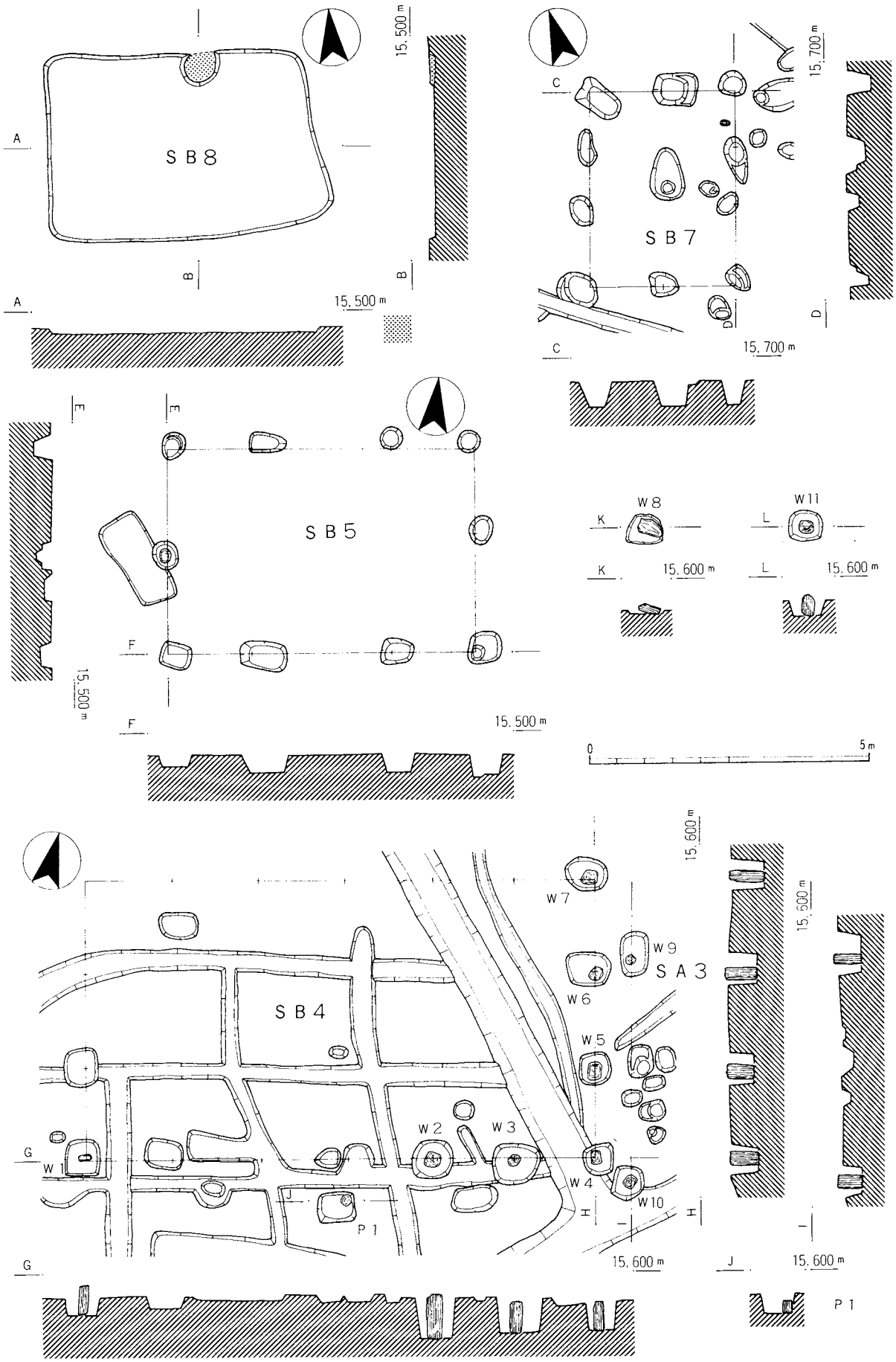
SD2　SD1と直行し、南東から北西に向って走る。幅60～90cm、深さ20～30cmの溝である。出土遺物には青磁片、土師器鍋・羽釜片、瓦器片などがある。これも現在の水田の畦畔と重なっている。

5．時期不明の遺構

SD9　自然流路と考えられる溝である。幅0.3～2.1m、深さ5～40cmで、幅が広い所には細かい砂が堆積し、周囲にも増水時にあふれた細かい砂の広がりがみられる。

その他　発掘区中央に東西に走る溝が多数検出されたが、これは後世の耕作時による耕作溝と考えられる。

第7図　A地区遺構平面図（1：200）



第8図　SA3，SB4・5・7・8，実測図　(1：100)

B 地区

B地区の基本的層序は、A地区と同じく3層に分かれる。第Ⅰ層は灰褐色の耕作土、第Ⅱ層は黒褐色土（遺物包含層）、第Ⅲ層は灰茶褐色の地山である。

しかし、発掘区中央から西側では耕作土直下が地山になる箇所も見られる。

検出された遺構の主なものは、奈良時代の竪穴住居4棟、掘立柱建物8棟、土坑2基、溝1条、奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物1棟、土坑1基、溝2条、中近世以降の溝1条、その他時期不明の土坑1基、柱列1がある。さらに、A地区と同様に東西に走る小溝が縦横に走っている。発掘区西端部と東側部の比高差は約1mあり、遺構の集中している箇所は比較的地盤が安定している。

1．奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

ＳＢ11　南側半分が調査地区外にあるために全体規模は不明であるが、東西3.2m、深さは約5cm程である。土師器皿片が少量出土している。

ＳＢ13　東西3.0m、南北2.5m、深さ5～12cmの規模をもつ。主柱穴は確認出来なかったが、住居内に4ヵ所の土坑が掘り込まれており、貯蔵穴の可能性もある。北東隅にカマド跡と思われる焼土がある。南北軸はＥ3°Ｓ。出土遺物には土師器甕・皿などがある。

ＳＢ14　東西2.7m、南北2.9m、深さ6～12cmの規模をもつ。主柱穴は確認できなかったが、これも住居内に土坑が3ヵ所掘り込まれており、ＳＢ13同様に貯蔵穴の可能性もある。カマド跡はみられなかった。南北軸はＮ6°Ｅ　出土遺物は土師器片が少量ある。

ＳＢ17　全体規模は東西2.9m、南北3.2m、深さは5～10cmである。これも主柱穴と、カマド跡が確認できなかった。ＳＢ13・14と同しく住居内に貯蔵穴と考えられる長軸1.1m、短軸80cm、深さ23cmの土坑をもち、これを取り囲むように、50～70cm、深さ10～16cmのピットがある。南北軸はＮ6°Ｅ。出土遺物は土師器甕・皿片が少量あるが、住居内南東隅ピットより土師器皿が出土している。

(2) 掘立柱建物

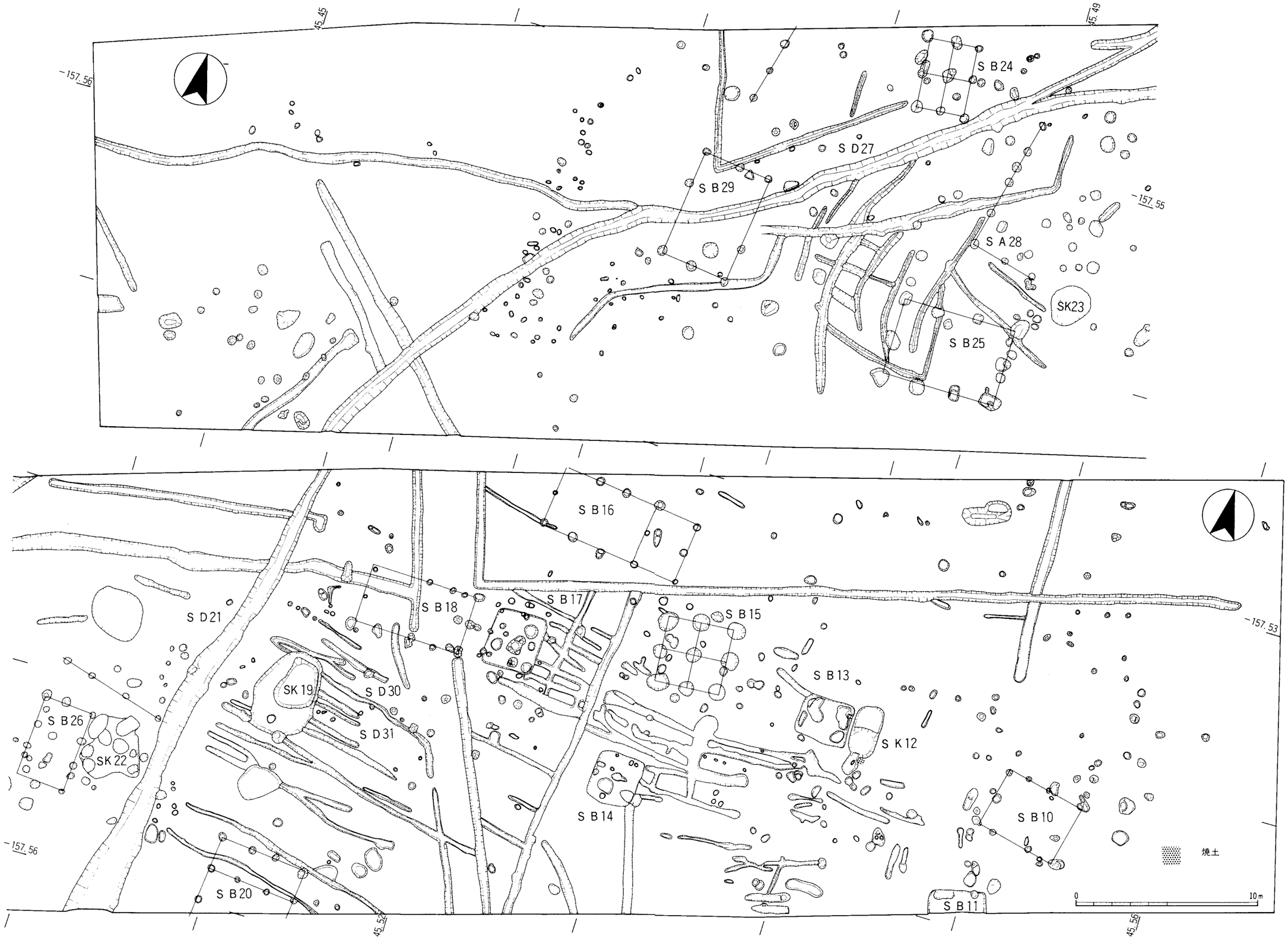
ＳＢ10　東西棟。3×2間で、桁行4.5m、梁行3.4m、柱間は桁行1.0m＋1.9m＋1.6mの不等間、梁行1.7mの等間である。柱掘形は径30～55cmの円形、径45～90cmの楕円形など不揃いで、深さも5～26cmとさまざまであり、東側梁行中央の柱掘形が検出できなかった。土師器片が若干出土している。

ＳＢ15　2×2間の総柱建物。桁行、梁行とも3.6m、柱間も桁行、梁行とも1.8mの等間である。柱掘形は径0.7～1.2mの円形と楕円形で、深さは20～42cmであり、柱掘形が大きいのが特徴的である。出土遺物は柱掘形内より土師器杯・甕片などがある。総柱構造とその規模から考えると倉庫と推定される。

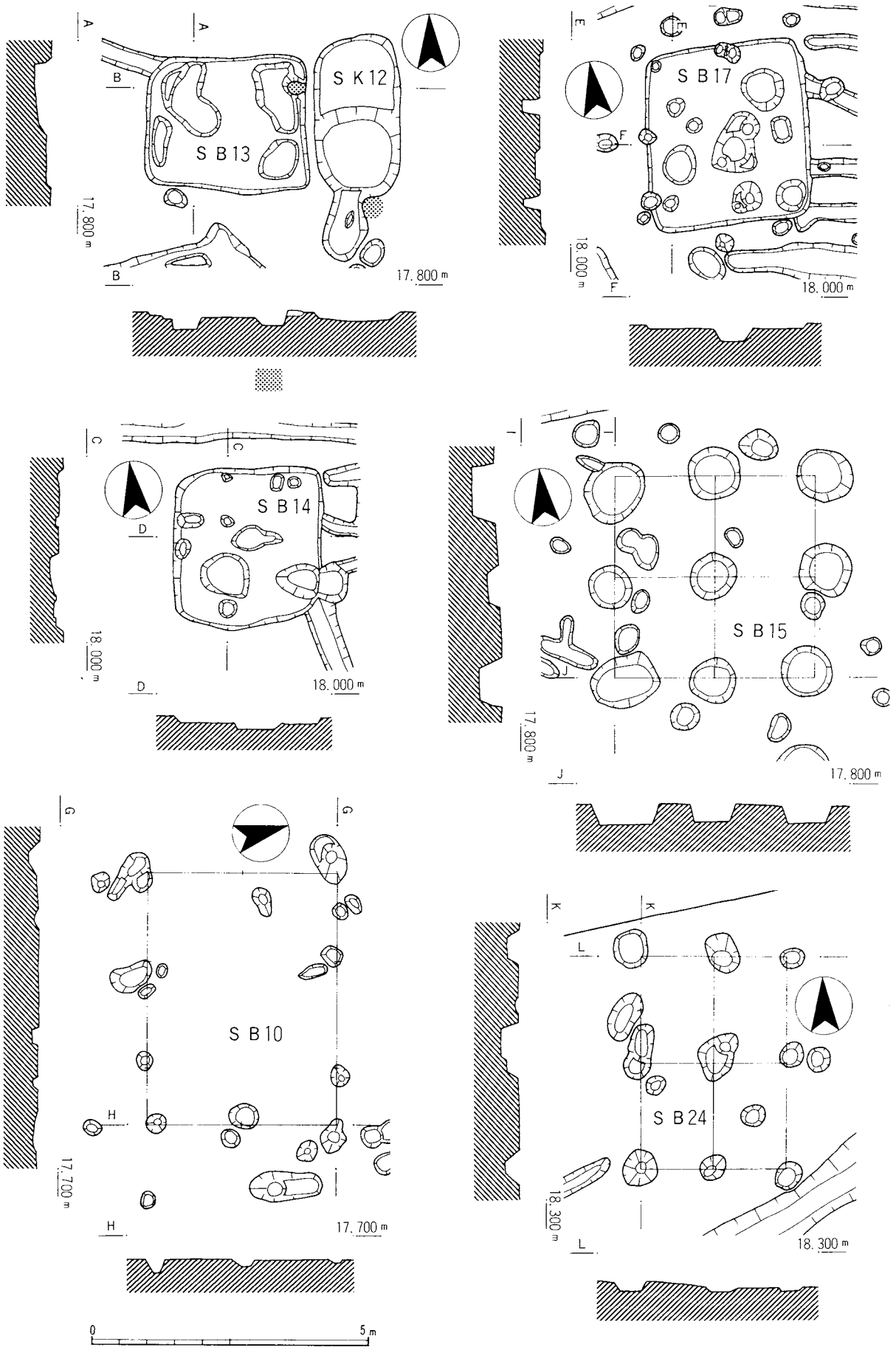
ＳＢ16　東西棟。4×2間で、桁行7.9m、梁行3.4m、柱間は桁行2.5m＋1.8m×3の不等間、梁行1.7mの等間である。柱掘形は径25～32cmの円形で、深さ10～32cmであるが、発掘区北壁で切られているために、北西隅の柱掘形が確認できなかった。なお、建物内の柱掘形は間仕切りのためのものと考えられる。柱掘形内より土師器杯片などが出土している。

ＳＢ18　東西棟。4×2間で、桁行5.95m、梁行3.2m柱間は桁行1.5m＋1.65m＋1.4m×2の不等間、梁行1.6mの等間である。柱掘形は径20～40cm、径45～75cmの楕円形など不揃いで、深さは10～29cmであるが北側桁行西から2列目の柱掘形が検出できなかった。柱掘形内より土師器皿などが出土している。

ＳＢ20　発掘区南壁で切られているため全体規模は不明だが、2間以上×3間の東西棟と推定。桁行3.6m以上、梁行4.95m、柱間は桁行1.8m、梁行1.65mの等間であり、柱掘形は径30～75cmの円形・楕円形で深さは11～48cmである。東西棟と推定すれば、北側桁行に柱間1.8mの廂が付くと考えられる。そ



第９図　Ｂ地区遺構平面図



第10図　ＳＢ10・13～15・17・24，ＳＫ12実測図　（１：100）

の廂部分の東から２列目の柱掘形内には、柱根らしき木片が残っていた。柱掘形内より土師器皿などが出土している。

ＳＢ24　南北棟。２×２間の総柱建物である。桁行3.8m、梁行2.6m、柱間は桁行1.9m、梁行1.3mの等間である。柱掘形は径35～70cmの円形、径0.4～1.0mの楕円形と不揃いで、深さは15～26cmである。柱掘形内よりの出土遺物はないが、南北の柱通りの方向がＳＢ15と似通っており、ほぼ同時期の倉庫的な建物と推定したい。

ＳＢ26　南北棟。３×２間で桁行4.5m、梁行2.7m、柱間は桁行1.5m、梁行2.7mの等間である。柱掘形は径30～55cmの円形で、深さは10～24cmであるが、南西隅の柱掘形は検出できなかった。出土遺物は柱掘形内より須恵器杯、土師器片などがある。

ＳＢ29　南北棟。３×２間で、桁行6.0m、梁行3.8m、柱間は桁行2.0m、梁行1.9mと等間であり、柱掘形は径40～60cmの円形で深さは10～28cmである。西側桁行の南から２列目、東側桁行北から２列目の柱掘形は、ＳＤ27によって消滅している。柱掘形内よりの出土遺物はないが、南北の柱通りの方向がＳＢ26と似通っており、ほぼ同時期と推定したい。

(3)　土坑・溝

ＳＫ12　ＳＢ13の東に隣接して検出された土坑で、長径2.9m、短径1.5mの長円形を呈し、深さは10～30cmである。南で別の土坑を切り込んでおり、肩の所に焼土が認められた。ＳＢ13に隣接することから何等かの関連があると想定される。出土遺物には土師器長胴甕などがある。

ＳＫ22　ＳＢ26の東に隣接する土坑である。一辺3.2～3.5mの不定な方形を呈し、中に大小のピットが掘り込まれ、その深さも10～40cmとさまざまである。ＳＫ12と同様に、ＳＢ26に隣接するため何等かの関連が想定される。

ＳＤ21　発掘区の中央を南から北へはしる溝であり、幅0.5～2.5m、深さ18～30cmである。埋土は単純な黒褐色土で、須恵器杯蓋（墨書）、土師器片などが出土している。

２．奈良時代末期から平安時代初期の遺構

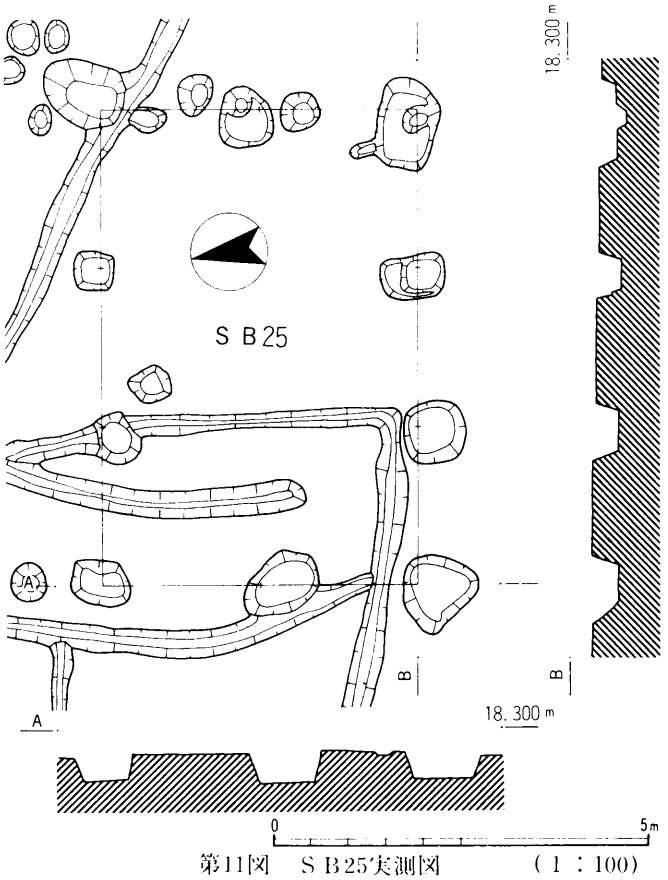
ＳＢ25　東西棟の掘立柱建物。３×２間で、桁行6.3m、梁行4.2m、柱間は桁行・梁行とも2.1mの等間である。柱掘形は径0.7～1.25mの楕円形、一辺50～90cmの方形で、深さも20～50cmと不揃いである。出土遺物は柱掘形内より、土師器皿片、製塩土器片などがある。

ＳＫ19　長径4.9m、短径3.5m、深さ20～50cmの規模をもつ大形の土坑である。出土遺物には土師器皿・杯・高杯、須恵器杯身・蓋などが多くある。

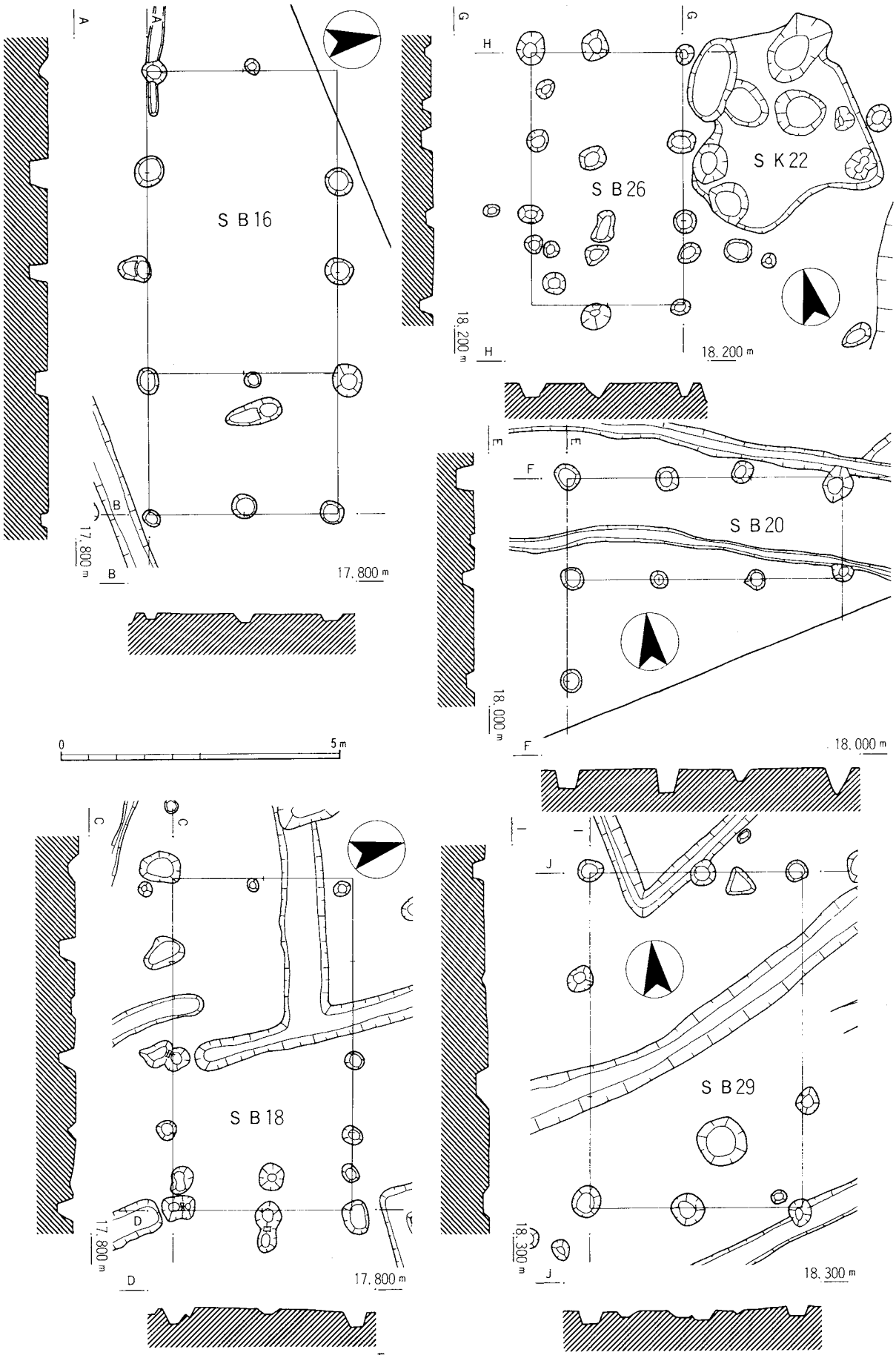
ＳＤ30・31　ＳＫ19と直行する形で東西に走る溝である。ＳＤ30は幅25～40cm、深さ10cm、ＳＤ31は幅40cm、深さ10cmである。ＳＤ30からは須恵器杯蓋など、ＳＤ31からは土師器皿などが出土している。この両溝からは、上記の遺物の出土があるものの、他の多くの小溝と方向・規模をほとんど同じくしており、後世の混入の可能性もある。

３．中世以降の遺構

ＳＫ23　径2.3mの不定な円形の土坑で、深さは24cmである。出土遺物は奈良時代から平安時代の土師



第11図　ＳＢ25実測図　（１：100）



第12図　ＳＢ16・18・20・26・29，ＳＫ22実測図　（１：100）

器片や中世の土師器までにわたっている。

ＳＡ28　南北４間、東西２間の柵列と推定。柱間は東西、南北とも1.9mの等間である。柱掘形より若干の中世土師器片が出土している。

その他　発掘区中央に多くの小溝が縦横に走っているが、その溝内よりの出土遺物は奈良時代から中世以降にかけてのものが混り、その規模や方向性などから、中世以降の耕作に関係する溝と考えられる。

名称 ＳＢ	規模（間）	柱間（m） 桁行	柱間（m） 梁行	桁行	梁行	棟方向	備考
10	３×２	1.0＋1.9＋1.6	1.7	4.5	3.4	E14° S	
15	２×２	1.8	1.8	3.6	3.6	N3° W	総柱建物
16	４×２	2.5＋1.8×３	1.7	7.9	3.4	E8° S	間仕切りをもつ？
18	４×２	1.5-1.65-1.4×2	1.6	5.95	3.2	E2° S	
20	２以上×３	1.8	1.65	(3.6以上)	4.95	(E7° S)	柱掘形1ヵ所に柱根 北側桁行に廂
24	２×２	1.9	1.3	3.8	2.6	N5° W	総柱建物
25	３×２	2.1	2.1	6.3	4.2	E1° S	
26	３×２	1.5	1.35	4.5	2.7	N6° E	
29	３×２	2.0	1.9	6.0	3.8	N8° E	

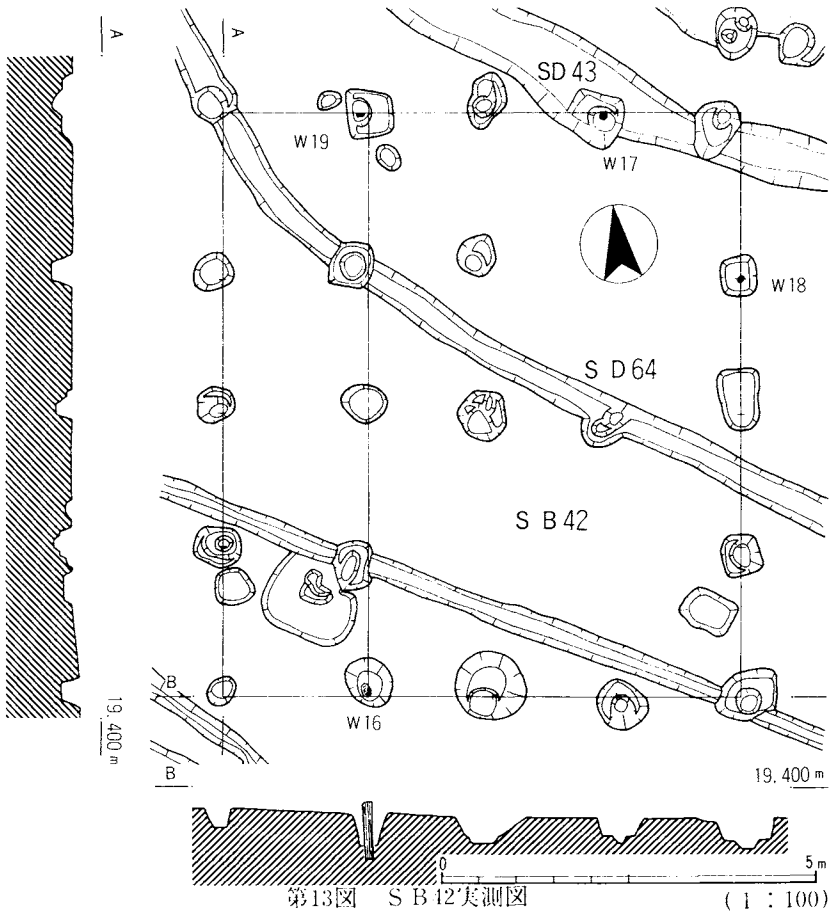
第２表　Ｂ地区掘立柱建物一覧表　（ ）推定

Ｃ地区

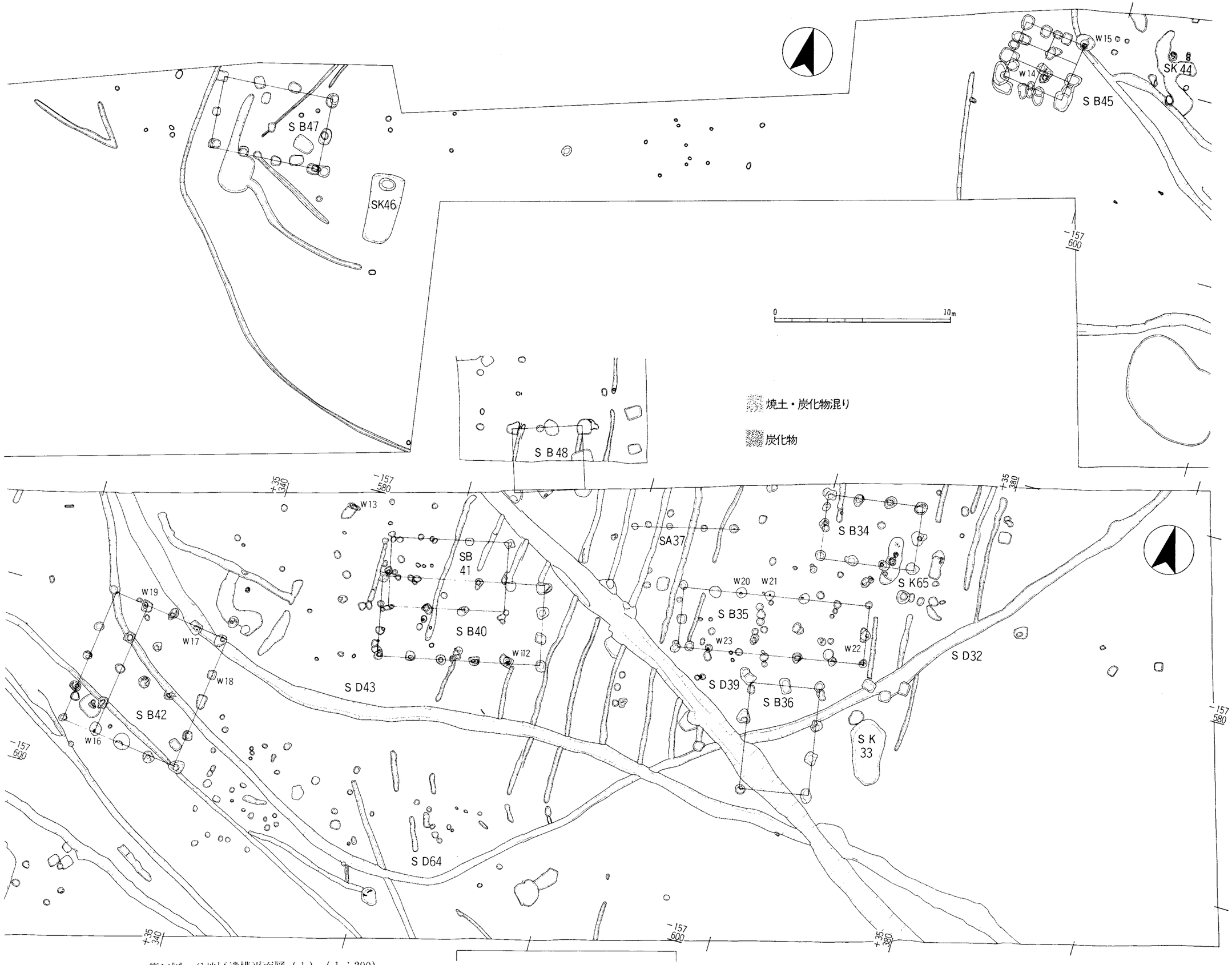
Ｃ地区はあたかも東西144m、南北180mの十字のトレンチを入れた形となっている。従って、その基本的層序は若干異なるが、概ね４層に分かれる。第Ⅰ層は灰褐色の耕作土、第Ⅱ層は黒灰褐色土、第Ⅲ層は黒褐色土、第Ⅳ層は灰茶褐色土（地山）であり、その内で第Ⅱ層・Ⅲ層が遺物包含層を作成している。

検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物４棟、土坑２基、溝５条、奈良時代末期から平安時代初期にかけての掘立柱建物10棟、土坑５基、柱列１条、その他、時期不明の掘立柱建物２棟、溝２条、柱列群１、南北に走る多くの溝である。

このＣ地区は比較的地盤の安定した箇所と不安定な箇所に分かれており、掘立柱建物はその比較的安定した箇所に建られている。なお、発掘区西端と東端との比高差は約1.85mである。

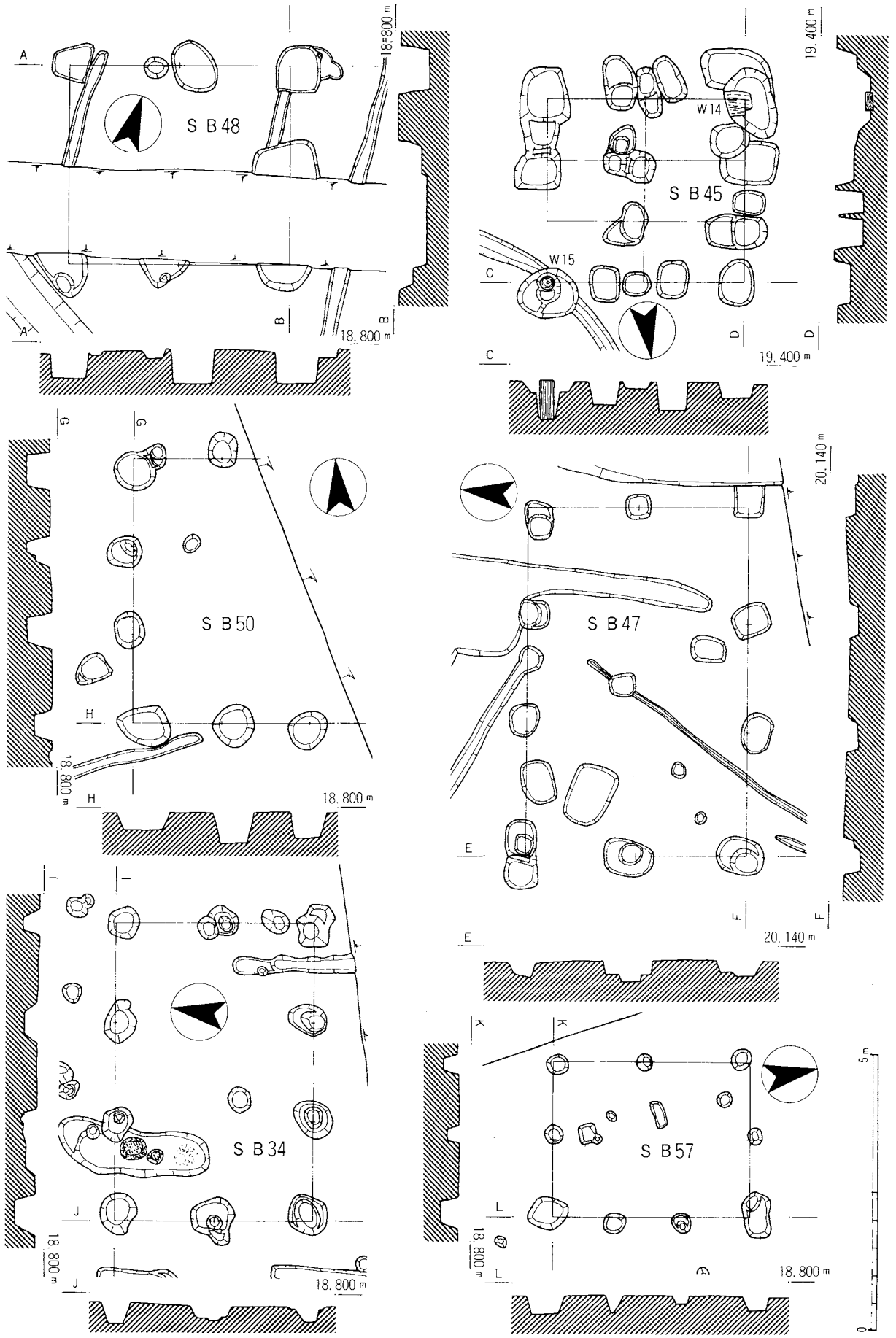


第13図　ＳＢ42実測図　（１：100）



第14図　C地区遺構平面図（1）（1：200）

第15図　C地区遺構平面図（2）（1：200）



第16図　S B34・45・47・48・50・57実測図　(1：100)

1．奈良時代の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ42　南北棟。４×４間で、桁行7.75m、梁行6.9m、柱間は桁行2.2m＋1.8m＋1.75m＋2.0m、梁行1.95m＋1.65m×３の不等間である。柱掘形は径35～95cmの円形・楕円形で、深さは20～60cmである。北側梁行中央３ヵ所の柱掘形に、北側桁行の北から２列目、南側梁行西から２列目にそれぞれ柱根が残る。一応、４×４間で西側桁行に柱間1.95mの廂がつく建物と推定したが、柱掘形の不足はあるけれども総柱建物の可能性もある。柱掘形から土師器甕・皿、須恵器杯などが出土している。

ＳＢ45　南北棟と推定。３×２間の総柱建物で、桁行3.3m、梁行3.6m、柱間は桁行1.1m、梁行1.8mの等間である。柱掘形は一辺0.45～1.05mの方形、長径0.85～1.35m、短径45～85cmの楕円形など不揃いで、深さは24～70cmである。北東隅の柱掘形には柱根が、南西隅の柱掘形には礎板が残る。規模などから倉庫的な建物と推定したが、切り合うピット等が多く、またその位置などから、さらにもう１棟の建物が考えられる可能性もある。柱掘形より土師器皿などが出土している。

ＳＢ47　東西棟。３×２間で、桁行6.3m、梁行4.0m、柱間は桁行2.1m＋1.95m＋2.25mの不等間、梁行は2.0mの等間である。柱掘形は一辺45～95cmの方形で、深さは16～35cmである。柱掘形よりの出土遺物は、少量ではあるが土師器片などがある。

ＳＢ48　東西棟。２×２間で、桁行4.0m、梁行3.6m、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mの等間である。柱掘形は長径1.0m、短径60cmの楕円形、一辺50～60cm方形で、その他は発掘区内の排水路により切られているために形・規模は不明である。建物の規模に比べて柱掘形の規模が大きいのが特徴的である。柱掘形より須恵器杯・杯蓋などが出土している。

(2) 土　坑

ＳＫ46　長辺4.0m、短辺1.6～1.95mの長方形の土坑で、深さは20～30cmである。出土遺物には土師器皿・甕、須恵器杯などがある。ＳＢ47に近接しており、何等かの関連が想定しうるかも知れない。

ＳＫ61　発掘区東壁で切られているため、全体規模は不明であるが、南北の径は2.2m、深さは15cmである。土師器皿などが出土している。

(3) 溝

ＳＤ32•64　発掘区中央を南東に走り、さらにほぼ直角にカーブをして東北に走る溝である。両溝はＳＤ39により切られているが、同一の溝であると考えられる。幅0.4～1.0m、深さ平均40cmで東北に行くほど深くなる。溝内より土師器皿・杯・甕などがある。

ＳＤ39　発掘区の北西から南東へ走る溝で、幅1.0～1.8m、深さ45～75cm、南東へ行くほど深くなる。断面形は底が平坦なＶ字形である。埋土は３層に分

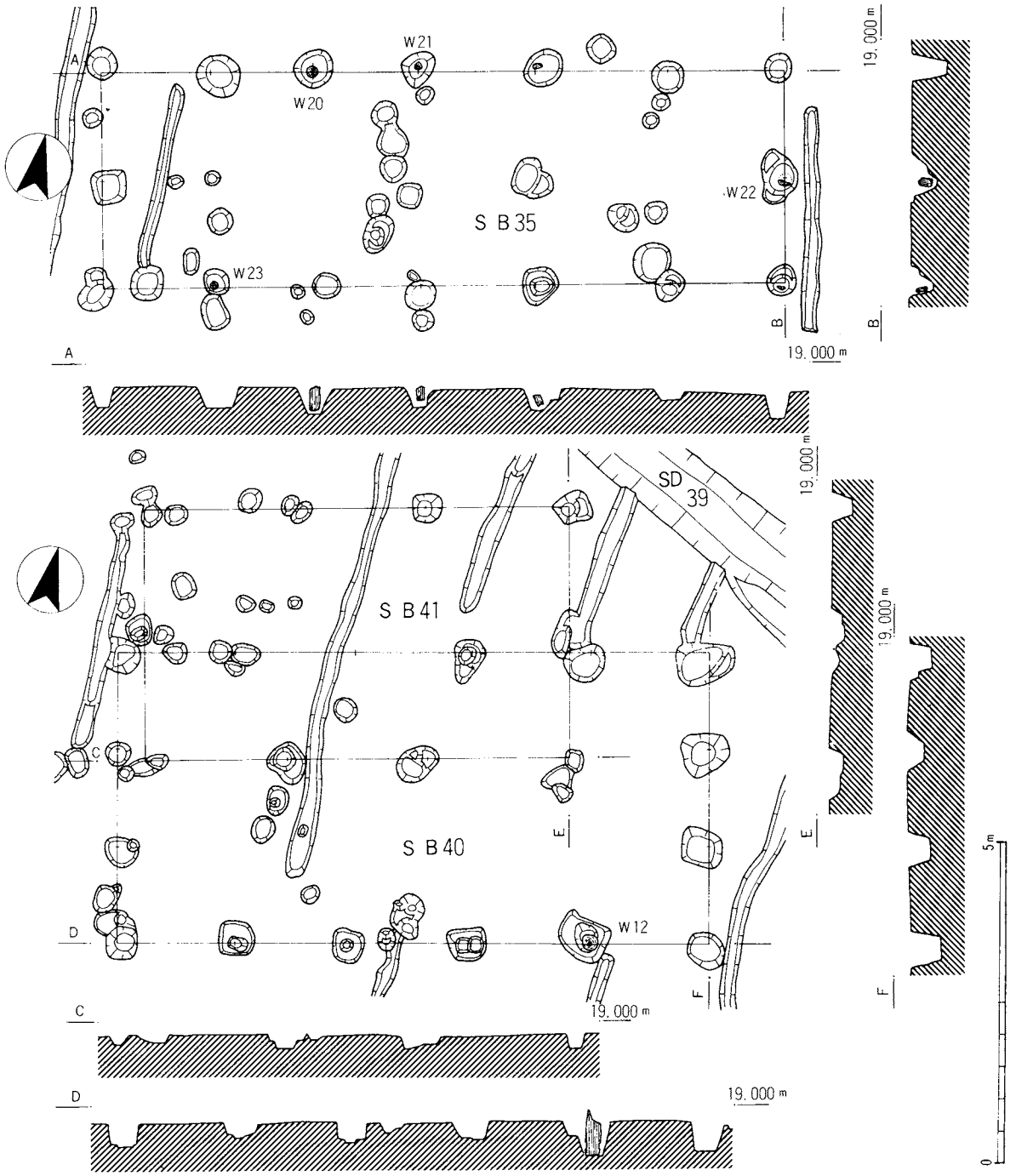
名称 ＳＢ	規模 (間)	柱間(m) 桁行	柱間(m) 梁行	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	備考
34	３×２	1.8	1.8	5.4	3.6	E8° N	
35	６×２	1.7+1.6+1.65+1.8+2.05+1.8	1.65	10.65	3.3	E9° N	柱掘形６ヵ所に柱根
36	３×２	2.1＋1.8＋2.1	2.0	6.0	4.0	N9° W	
40	５×３	1.85	1.5	9.25	4.5	E12° N	柱掘形１ヵ所に柱根
41	４×２	2.2	1.95	6.6	3.9	E12° N	
42	４×４	2.2+1.8+1.75+2.0	1.95＋1.65×３	7.75	6.9	N8° E	西側桁行に廂 柱掘形5ヵ所に柱根
45	３×２	1.1	1.8	3.3	3.6	N7° E	柱掘形１ヵ所に柱根、礎板
47	３×２	2.1＋1.95＋2.25	2.0	6.3	4.0	E5° N	
48	２×２	2.0	1.8	4.0	3.6	E18° N	
49	１以上×２	—	2.1	—	4.2	(E15° N)	
50	２以上×３	1.6	1.6	(3.2以上)	4.8	(E６° S)	
51	１以上×２	2.25	2.25	(2.25以上)	4.5	E9° N	
53	１以上×２以上	—	1.7	—	(3.4以上)	(E３° S)	
57	３(2)×２	東側1.2 西側1.8	1.4	3.6	2.8	N3° E	
58	４×２	1.95	1.8	7.8	3.6	N8° W	
59	２以上×２	1.6＋2.0	1.9	(3.6以上)	3.8	(N２° W)	

第３表　Ｃ地区掘立柱建物一覧表　（ ）推定　—不明

れ、上層から暗褐色有機質混り土、暗黒褐色粘質土、青灰色粘土である。遺物は上層、中層より出土するものが多く、時期差も大きな差は見られない。主なものに土師器甕・皿、須恵器杯蓋・甕などがある。

ＳＤ60　南へ延びる発掘区の西から東へ走る溝で幅50㎝、深さ25㎝である。出土遺物には須恵器高杯・甕、土師器甕・皿などがある。

ＳＤ63　南へ延びる発掘区の南端中央から北に走り、ほぼ直角にカーブし東へ走る溝である。幅20～70㎝、深さ４～10㎝で、カーブし東へ行くほど少しずつ深くなる。



第17　ＳＢ35・40・41実測図　（１：100）

2．奈良時代末期から平安時代初期の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ34 東西棟。３×２間で、桁行5.4m、梁行3.6m、柱間は桁行1.8m、梁行1.8mと等間である。柱掘形は径60～90cmの円形・楕円形で、深さは23～33cmである。東側梁行全部、西側梁行中央に柱根と考えられる木片が残っており、南側梁行東から２列目の柱掘形がＳＫ65を掘り込んでいる。柱掘形内より土師器片が若干出土している。

ＳＢ35 東西棟。６×２間で、桁行10.65m、梁行3.3m、柱間は桁行1.7m＋1.6m＋1.65m＋1.8m＋2.05m＋1.8mの不等間で、梁行は1.65mの等間である。柱掘形は径40～70cmの円形・楕円形で、北側桁行中央部の３列に、南側桁行西より２列目、西側梁行の柱掘形南から２列に柱根が残る。細長い建物であるが、西側梁行に柱間1.7mの廂がつく可能性もある。柱掘形内より土師器甕・皿・杯、製塩土器片などが出土している。

ＳＢ36 南北棟。３×２間で、桁行6.0m、梁行4.0m、柱間は桁行2.1m＋1.8m＋2.1mの不等間、梁行は2.0mの等間である。柱掘形は径0.5～1.0mの円形・楕円形や、一辺40～90cmの不整方形の不揃いで、深さは30～50cmである。西側桁行南から２列目の柱掘形がＳＤ39を掘り込み、東側桁行北から２列目の柱掘形がＳＤ32を切り込んでいる。出土遺物は柱掘形内より土師器片などがある。

ＳＢ40 東西棟。５×３間で、桁行9.25m、梁行4.5m、柱間は桁行1.85m、梁行1.5mの等間である。柱掘形は径40～75cmの円形・楕円形、一辺50～90cmの方形など不揃いで、深さは25～55cmであるが北側桁行西から３列目の柱掘形が検出出来なかった。南側桁行東から２列目の柱掘形に柱根が残り、その他数箇所の柱掘形には柱痕跡がある。北側桁行東から２列目、西端の柱掘形が、ＳＢ41の東側桁行中央、西側桁行中央の柱掘形を切り込んでいる。柱掘形内より土師器甕、須恵器杯などが出土している。

ＳＢ41 東西棟。４×２間で、桁行6.6m、梁行3.9m、柱間は桁行2.2m、梁行1.95mの等間である。柱掘形は径25～70cmの円形・楕円形、一辺40～75cmの方形で不揃いであり、深さも10～70cmと幅がある。ＳＢ40と東西の柱通りの方向がよく似ており、ＳＢ40はＳＢ40の建替えとも推定可能である。柱掘形内より、土師器杯、製塩土器片などが出土している。

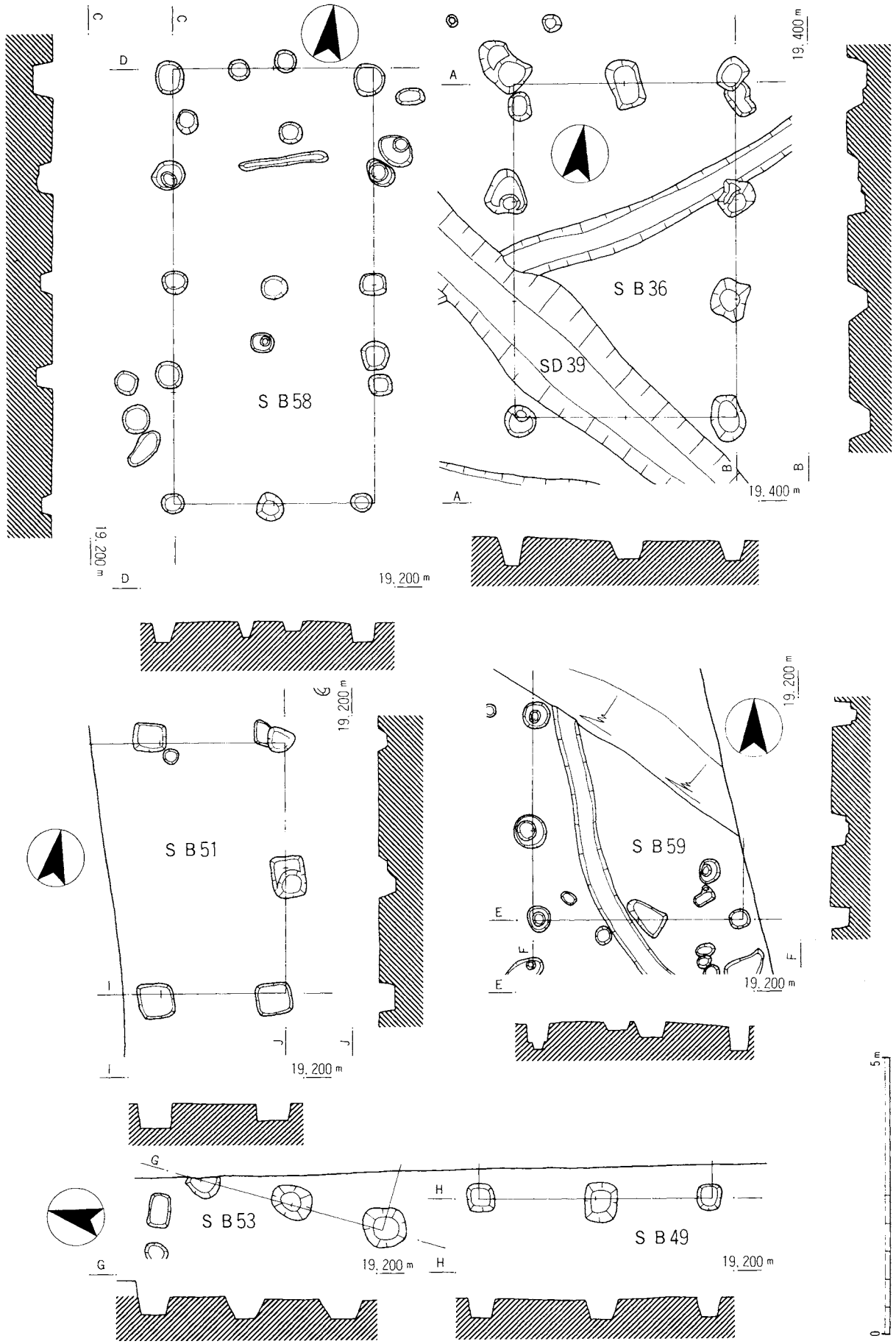
ＳＢ50 発掘区東壁で切られているために全体規模は不明であるが、２間以上×３間の東西棟と推定。柱間は、桁行1.6m、梁行も1.6mと等間であり、柱掘形は径0.55～1.0mの円形・楕円形で深さは30～55cmである。土師器甕・甑片などが柱掘形内より若干出土している。

ＳＢ53 北へ延びる発掘区東壁付近で検出。そのために全体規模は不明だが１間以上＋２間以上の東西棟と推定。梁行は3.4m以上、柱間は梁行1.7mの等間である。柱掘形は一辺60～75mの方形で、深さは30～40cmである。柱掘形内より土師器甕・甑片などが出土している。

ＳＢ57 北へ延びる発掘区が道路で途切れた付近で検出された南北棟。３(2)×２間で、桁行3.6m、梁行2.8m、柱間は東側桁行1.2m、西側桁行1.8m、梁行1.4mの等間である。柱掘形は径25～40cmの円形、一辺45～60cmの方形など不揃いで、深さは20～35cmである。北東隅、南東隅の柱掘形は他と比べて大きく東西の桁行の間数が違うのが特徴的である。このことから東側桁行に出入口を想定出来るのではないかと考えられる。土師器甕片などが柱掘形内より出土している。

ＳＢ58 北へ延びる発掘区北端付近で検出された南北棟。４×２間で、桁行7.8m、梁行3.6m、柱間は桁行1.95m、梁行1.8mと等間である。柱掘形は径35～60cmの円・楕円形、一辺40～45cmの方形で、深さは16～43cmである。建物内中央に柱掘形らしきものが１ヵ所あり、それが間仕切りのためのものであるのかは不明である。出土遺物は柱掘形内より土師器片が若干出土したのみである。

ＳＢ59 発掘区北端で検出した２間以上×２間の南北棟と推定。発掘区北・東壁で切られるために全体規模は不明である。桁行3.6m以上、梁行3.8m、柱間は桁行1.6m＋2.0mの不等間、梁行は1.9mの等間である。柱掘形は径35～60cmの円形、一辺50～75cmの方形である。西桁行の柱掘形３ヵ所には柱痕跡が良く残っている。柱掘形内より土師器片、須恵



第18図　S B36・49・53・51・58・59実測図　（1：100）

器片などが出土している。

(2) 土坑・柱列

ＳＫ33 ＳＢ36の東に近接して検出された土坑で長径3.3m、短径2.0mの長円形を呈し、深さは平均30cmである。近接することからＳＢ36との何等かの関連が想定しうる。出土遺物は土師器甕などがある。

ＳＫ44 ＳＢ45の東に近接して検出された、長軸9.8m、短軸4.0mの不定形の土坑で、深さは5～10cmである。土師器皿片などが出土している。

ＳＫ52 ＳＢ53のすぐ南西で検出された、径1.2～1.5mの楕円形の土坑で、深さは10cmである。出土遺物は土師器甕・甑片などがある。

ＳＫ56 ＳＢ57の南に近接して検出された土坑で、一辺80～90cmの方形である。深さは17cmで、須恵器高杯、土師器甕・皿などが多数出土している。

ＳＫ65 ＳＢ34と重複して検出された土坑で、長軸2.8m、短軸1.0mの長円形で、深さは10～15cmである。ＳＢ34の南側桁行東から2列目の柱掘形が切り込んでいる。埋土中に焼土、及び炭化物がブロック状に含まれている。出土遺物は土師器甕・皿片などがある。

ＳＡ37 ＳＢ35の北西で検出された柱列である。柱掘形は一辺30～50cmの方形で深さは15～18cmである。柱間はそれぞれ1.9mの等間隔であり、東端の柱掘形には柱根が残る。

(3) その他、時期不明の遺構

ＳＢ49 北へ延びる発掘区で、ＳＢ53のすぐ南に隣接して検出された掘立柱建物。発掘区東壁で切られているため全体規模は不明だが、梁行2間の東西棟と推定。梁行4.2m、柱間は2.1mの等間である。柱掘形は一辺45～70cmの方形で、深さは35cmである。柱掘形内よりの出土遺物はなかった。

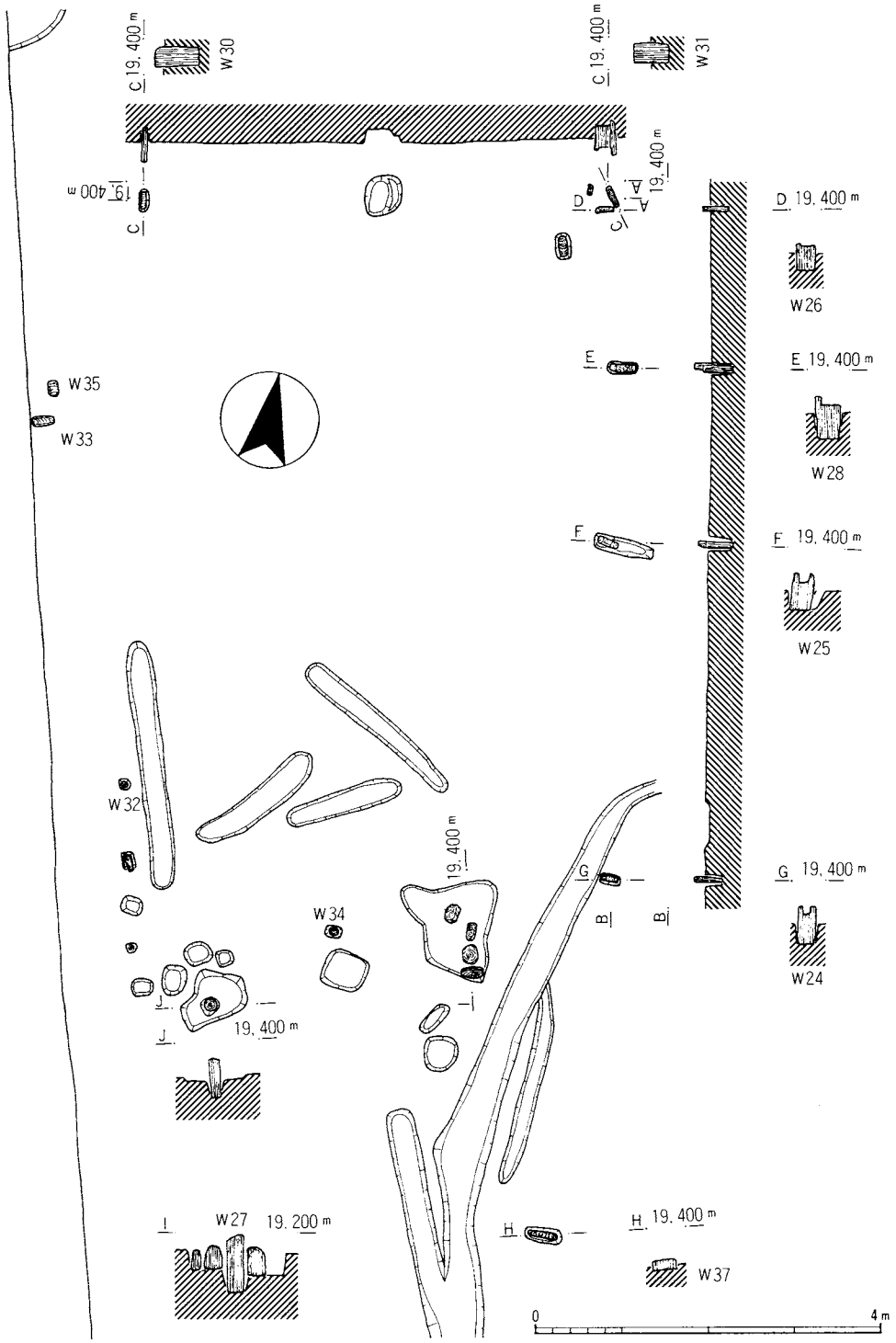
ＳＢ51 ＳＢ50の西で検出された掘立柱建物で、1間以上×2間の東西標と推定。発掘区西壁で切られるために全体規模は不明であるが桁行2.25m以上、梁行4.5mで、柱間は桁行2.25mの等間、梁行も2.25mである。柱掘形は一辺55～75cmの方形で、深さは16～40cmである。柱掘形内よりの出土遺物はなかった。

ＳＤ54・55 北に延びる発掘区を北西から南東へと走る2条の平行した溝である。ＳＤ54は、幅40～50cm、深さ20～40cmで、東にいくほどやや深くなる。ＳＤ55は、幅40～60cm、深さ15～30cmで、これも東に向かいやや深くなる。両溝とも出土遺物は見られなかった。両溝間の幅は0.5～1.0mであり、灰褐色の砂質土が敷かれており、道路跡かとも考えられる。

ＳＸ62 南に延びる発掘区のほぼ中央で検出された、板材を直立させた小穴と木材が残る小穴群である。これら群の中で主体のなすのが、Ｌ字形に並ぶ加工が施された、土中に埋設された板材である。板材は厚さ平均6cm、長さは平均34cm、幅は平均23cmである。規模は南北7.7m、南から2列目が検出できなかったが、あったとすれば板材の間隔はそれぞれ1.925mとなる。東西は5.5m、中央にピットがあり、そこに板材が存在した可能性を考えると、板材の間隔はそれぞれ2.75mとなる。東西、南北とも等間隔で並んでいるところから何等かの構築物と考えるのが妥当であろう。例えば、これら板材がある程度の高さをもち、凹状にえぐられている箇所が元来矩形に穿孔され、それがホゾ孔の役割を持っており、そこに貫の役割をもつ角材を通し、そして、さらに上部に同じような構造をもつと考えれば、柵のような構築物が想定可能となる。もう一つ無理がある想定をするならば、並んでいる板材のさらに南にある板材から南北に並ぶ板材頂部のレベルは、わずかに北に向い低くなっており、凹状に抉られた箇所に太い割竹を通せば、樋となる可能性もあるのではと考えられる。なお南北の板材の通り方向はN11.5°Wである。

いずれにせよ幾通りかの想定が可能な遺構である。

その他 発掘区中央で、ＳＤ39周辺に南北に走る多数の小溝があるが、出土遺物がほとんどなく、後世の耕作によるものと考えられる。なお、東西に走る小溝は、その殆どが暗渠排水である。



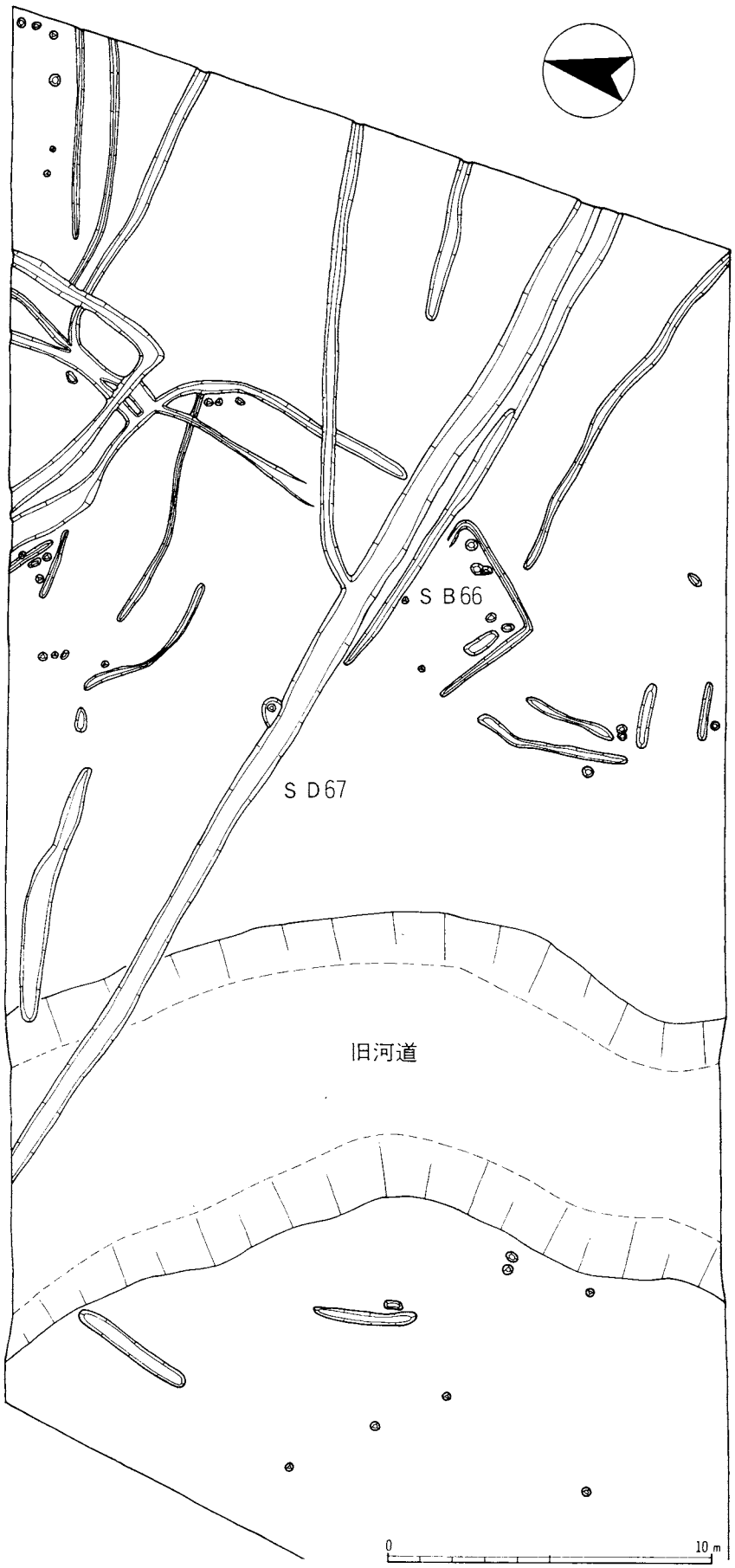
第19図　ＳＸ62実測図　（１：80）

D 地 区

発掘区としては最も西に位置する。基本的層位は、概ね3層に分れるが一部もう1層加わる箇所もある。第Ⅰ層は灰褐色土の耕作上、第Ⅱ層は黒色粘質土（遺物包含層）、第Ⅲ層は地山の黄灰色粘質土であり、第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に黄灰色砂質土が入る箇所がある。発掘区はその中央で北に流れる溝によって西と東とに分断される。西の発掘区は湧水が多く遺構は遺物を含まない溝・土坑などがあるだけである。東の発掘区のさらに東側は地盤が安定しており、耕土直下が地山である。主な遺構はこの東の発掘区に集中しており、古墳時代前期の竪穴住居1棟、近世以降の溝1条、時期不明の溝が数条あり発掘区の西側で旧河道が検出された

ＳＢ66　一辺4.0mの方形の竪穴住居と推定される。削平をかなり受けており、深さは不明であるが、幅15～40cm、深さ10cmの周溝をもつ。主柱穴らしきピットは数ヵ所あるが、主柱穴とは確定できない。周溝内より須恵器片が少量出土している。古墳時代前期と推定。南北軸はN55°Wである。

ＳＤ67　西から東へ走る近世以降の溝である。幅0.6～1.9m、深さ30～50cmである。出土遺物は中世以降から近世までの陶器片がある。この溝は旧地形の東

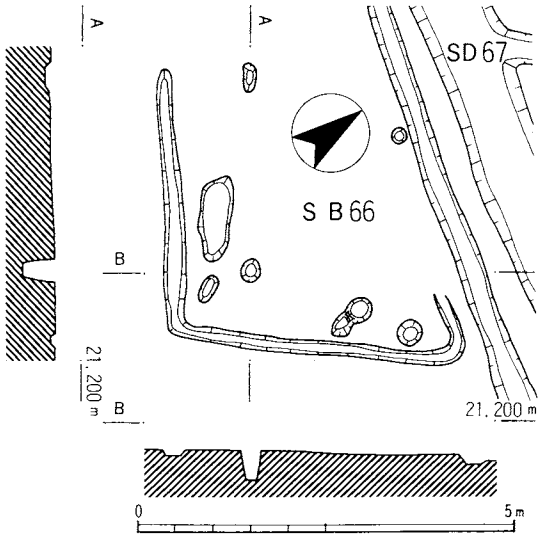


第20図　D地区遺構平面図　（1：200）

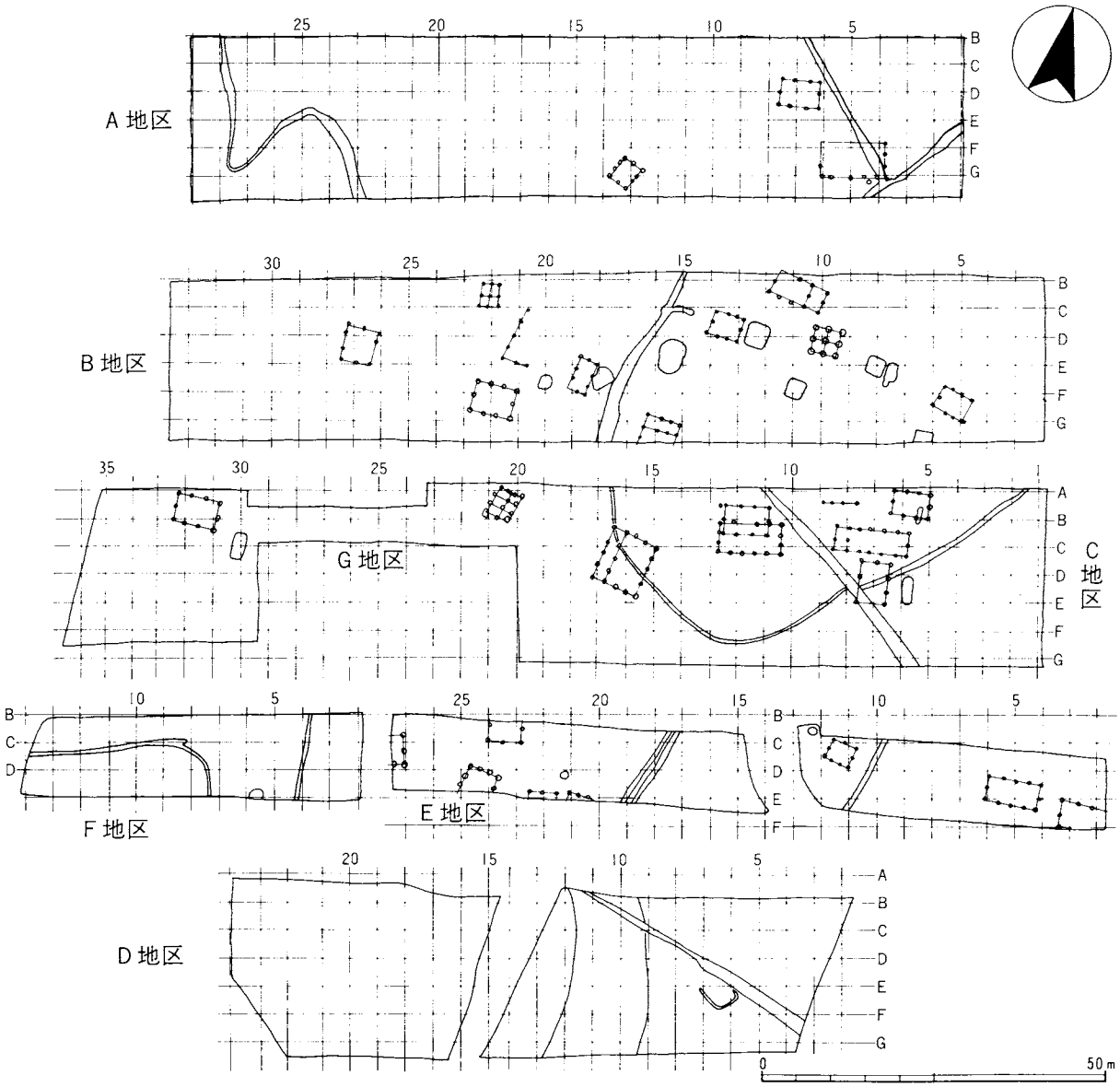
西の畦畔と一致しており、近世以降にも機能していたと考えられる。

旧河道　南から北に流れる埋没した旧小河川であり、幅7.8～10.5m、深さ0.7～1.0mである。下層の礫層より縄文時代中期末葉の土器片と、建築部材と考えられる板材が出土している。

（河瀬信幸）



第21図　SB66実測図　（1：100



第22図　地区割図　（1：10,000）

Ⅳ　出土遺物

A～D地区約12,000㎡を発掘した結果、コンテナ箱約120箱の土器、1箱の石製品、金属器、瓦、瓦器、柱材、板材約40本、半加工木製品、木片、炭化木など5箱、樹木の種子など1箱を得た。以下地区毎に別けて個々を概述してゆきたい。

A 地区

1．奈良時代、平安時代の遺構出土遺物

○ＳＡ３

土師器高杯(1)　脚部のみ残すものでやや薄手で接地面が先細る。平安時代初期の所産であろう。南端柱掘形出土。

○ＳＢ４

土師器甕(2)　ＳＡ３と柱列方向を同じくし、一辺約15cmの方形柱根を検出した建物の南辺西端柱穴よりＷ・Ｉと共に出土した。口径26cmで、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。斎宮編年のＳＫ1445併行、平安時代初期の所産である。

○ＳＢ７

土師器杯(3•4)　口縁部が外反し、底部外面ナデ(指圧痕を残す)。色調は淡褐色で、胎土は良である。この類例は、斎宮編年ＳＫ1098出土の№2、浄土寺南遺跡Ａ区ＳＢ５の№17に類似する。西辺中央柱穴出土。

土師器甕(2)　口縁部が肥厚し端部が角ばる。この傾向は斎宮編年ＳＫ3000に比定できる。東辺中央柱穴出土。これらを総合して奈良時代前半と考えたい。

○ＳＫ6

灰釉山茶椀(6)　底部径8.8cm。はりつけ高台で底部外面には糸切り痕を残す。平安時代末葉のもの。

2．室町時代以降の遺物

○ＳＤ２

青磁椀(7)　底部のみ残存し、高台内面に釉がかかる。龍泉窯系青磁椀Ⅲ類である。

3．包含層出土遺物

○縄文時代晩期

深鉢(8•9)　色調褐色～淡褐色で、口縁部に凹線を持つ。(9)は、底部で外周を指でつまみ出している。

○弥生時代前期

甕(10•11)　(10)は、口径25.0cmで内外面ハケ調整を施す。体部上半に3条の横位にヘラ描沈線を施している。(11)は、甕底部で内外面にハケ調整がなされる。

○弥生時代後期

高杯(13)　直径26cm。口縁部外面と口唇部に波状文が施される。後期前半のものである。

○古墳時代

土師器高杯(14)　底部径9.8cm。淡褐色で、脚部はゆるやかに外反する。

土師器壺(15)　淡赤褐色で、胎土は精良である。体面にハケ調整がされている。

須恵器杯蓋(16•17)　口径13～16cm。稜部は消失して沈線が残る。淡青灰色で胎土に白色砂を含む。

須恵器杯蓋(18•19)　口径11cm前後で宝珠つまみがつく。(18)は、7世紀第2四半期に、(9)は7世紀第3四半期のものである。

須恵器杯身(20～23)　口径9～10cmでいずれも淡青灰色で白色砂を多く含む。7世紀代のものであろう。

○奈良時代・平安時代

土師器皿(24～26)　(24•25)は、口径29cm・27cmで、内面に暗文を持つ。(26)は、口径18.0cmで口縁部が外反する。

土師器杯Ａ(27～30)　口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、器高が深いものである。(27•30)は小型で、(28)は器壁が厚い。(29)は、やや薄手である。

土師器杯Ｃ(31～34)　口径11.6～13cm程度で、器高3cm前後の古墳時代の系譜を引く軟質のものである。成形は、粘土ひも巻き上げである。奈良時代のものである。

土師器杯Ｂ(35)　高台を持つものを杯Ｂと呼ぶが、この個体は、外面をハケ調整している。平安時代前半のものである。

土師器高杯(36)　色調淡赤褐色で口縁部は外反し

たのち、上を向く。口縁部横ナデ。

土師器椀(37)　底部径10.6cm。高台部ハリツケ。

土師器杯B蓋(38)　宝珠つまみのみ残存する。色調橙褐色である。

土師器小型甕(39～44)　口径13.8～18cm程度で体部内外面をハケ調整する。口縁部は、横ナデする。

土師器長胴甕(45～48•50•51•59)　口径24～26cm。口縁部ヨコナデで、体部内外面ハケ調整。

土師器把手付甕(49)　口径34.0cm。口縁部が外反し先が細くなる。

土師器甑(52•53)　(5)は口径22.0cm。体部外面たてハケ。(53)は、底部は両側から半月形に穴があく。

須恵器杯B蓋(54)　口径14.4cm。器高が低く、天井部外面をヘラケズリする。

須恵器杯B(55)　口径15.0cm。脚部が外開きになる。口縁部は外反し内面に面を持つ。奈良時代前半のものである。

須恵器杯A(56)　口径14.0cm。無台の杯で底部をヘラケズリし、口縁部が外反する。奈良時代前半のものである。

須恵器長頸瓶(57・58)　(57)は、口径7.4cmで口縁部が上に引き出される。(58)は、底部糸切痕をナデ消し、高台をはりつける。色調は、青灰色で胎土は良好である。折戸10号窯併行期のものであろう。

須恵器平瓶(59)　口径5.4cm。口縁端部がやや肥厚し面を持つ。折戸10号窯併行期の在地産である。

須恵器小型短頸壺(60)　口径7.4cm。口縁部は直立し先細る。

須恵器横瓶(61)　口径12.8cm。口縁端が肥厚し角ばる。奈良時代前半のものである。

須恵器鉄鉢(62)　口径15.2cm。底部が丸味を持つ鉄鉢で体部外面下半をヘラケズリする。奈良時代前半のものである。

須恵器高杯(63•64)　(63)は短脚で、(64)は長脚である。これらは、奈良前半よりも古相を帯びる。

○平安時代後半・鎌倉時代

青磁椀(73•74)　森田分類龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類である。外面に蓮弁が彫られている。釉の色調は、灰緑色で、胎土は灰白色である。

山茶椀(65～68)　(66)は口径17.2cmで、口縁部が外反し口縁内面に面を持つ。藤澤編年のⅡ－4類である。(65)は口径16.8cmで、口縁部が肥厚する。色調明灰色である。藤澤編年Ⅲ－6類である。(67)は、底部径7.0cmで断面形三角形の高台がつく。高台には、モミ殻痕がつく。(68)は、平底で底部に糸切痕が残る。Ⅲ－7類である。

山皿(69•70)　(69)は、糸切痕をナデ消した後高台をはりつける。平安時代末葉のものである。(70)は、平底で糸切痕を残す。(67)の時期に併行する。

練鉢(71•72)　山茶椀と同様の胎土、焼成のものである。(71)は、口径28.4cmで口縁部が肥厚し丸味を持つ。(72)は、底部調整は不明ではりつけ高台がつく。いずれもⅢ－6類山茶椀に併行するものであろう。

土師器皿(75)　口径11.2cm。淡褐色で胎土、焼成は良好である。口縁部を強く横ナデし、底部は未調整。平安時代後半のものである。

○室町時代

土師器小椀(76)　口径11.0cm。色調淡褐色で薄手のものである。この小椀は、横尾墳墓群、丹生川上城に類例があり、仏器、仏餉具と考えられる。

土師器茶釜型土器(77)　口径12.0cm。色調赤褐色で薄手のものである。口縁部は直立する。室町時代後半16世紀代のものである。この他に土師器煮沸具としては鍋（口縁部が内面に折り返される。口縁部断面形三角形になるものの二種類がある。）土釜も数点出土している。

瀬戸・美濃産縁釉皿(78)　口径12.0cm。釉の色調は、暗緑色である。胎土は、灰白色である。底部は糸切痕を残す。口縁部は、外反し先細る。釉は、口縁部内外面にかかる。

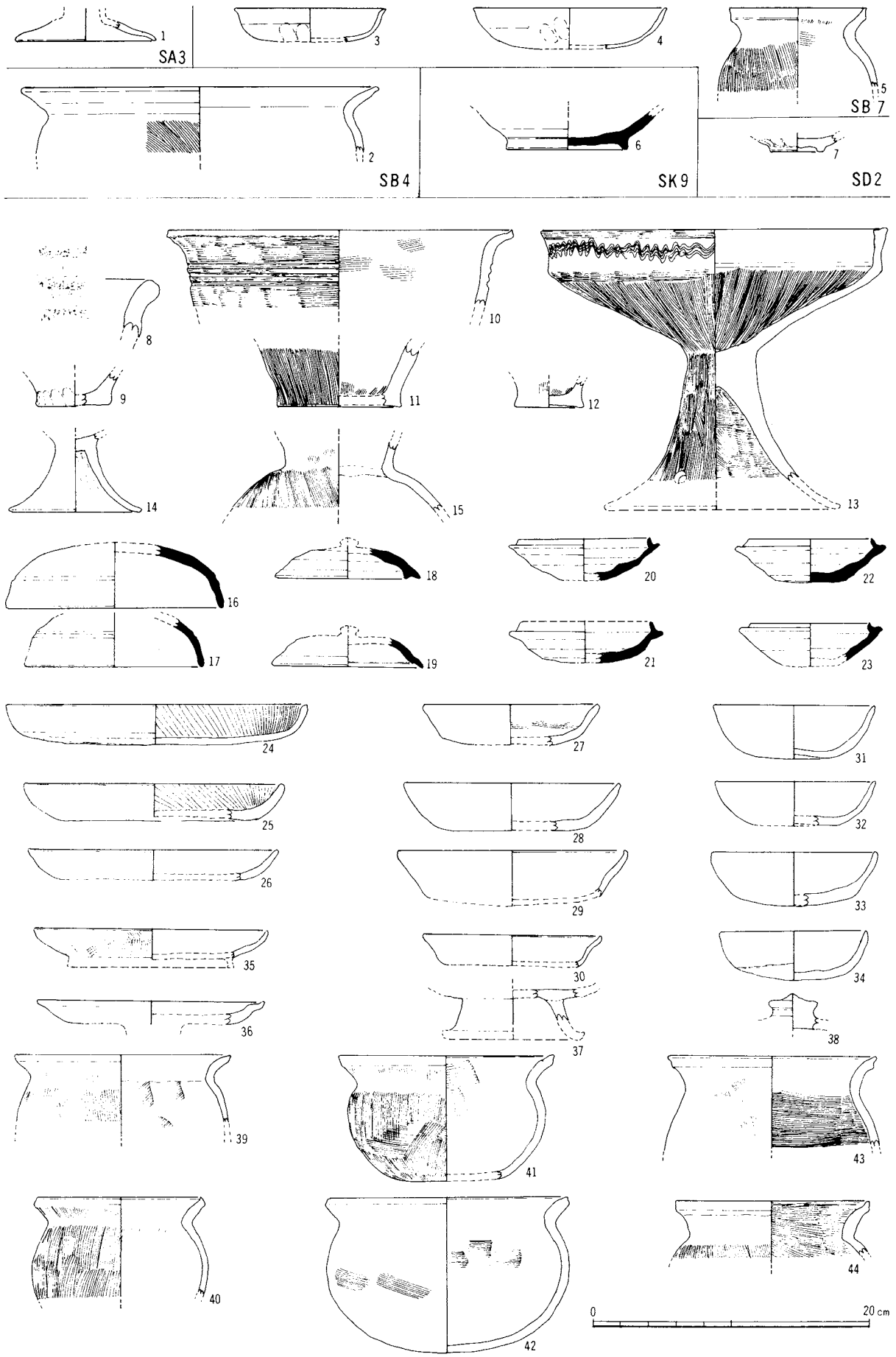
瀬戸・美濃産天目茶椀(79•80)　(79)は、口径12.0cmで口縁部の屈曲が強い。釉の色調は漆黒色で、胎土の色調は灰白色である。(80)は、口径10.4cmで口縁部の屈曲が強い。釉の色調は、漆黒色で、胎土の色調は、灰白色である。いずれも室町時代末から江戸期のものであろう。

常滑産壺(81)　口径11.6cmで色調暗茶褐色である胎土焼成ともに良好。口縁部は折り返されて玉縁状になる。室町時代後期も15世紀後半のものである。

常滑産甕(82)　口径25.0cm。色調褐色である。口縁部端部は、上方・下方に引き延ばされる。14世紀代後半のものである。

鉄製刀子(83)　全長12.7cm、幅1.4cmで、断面形三角形である。柄部分と刀身部分が残存する。

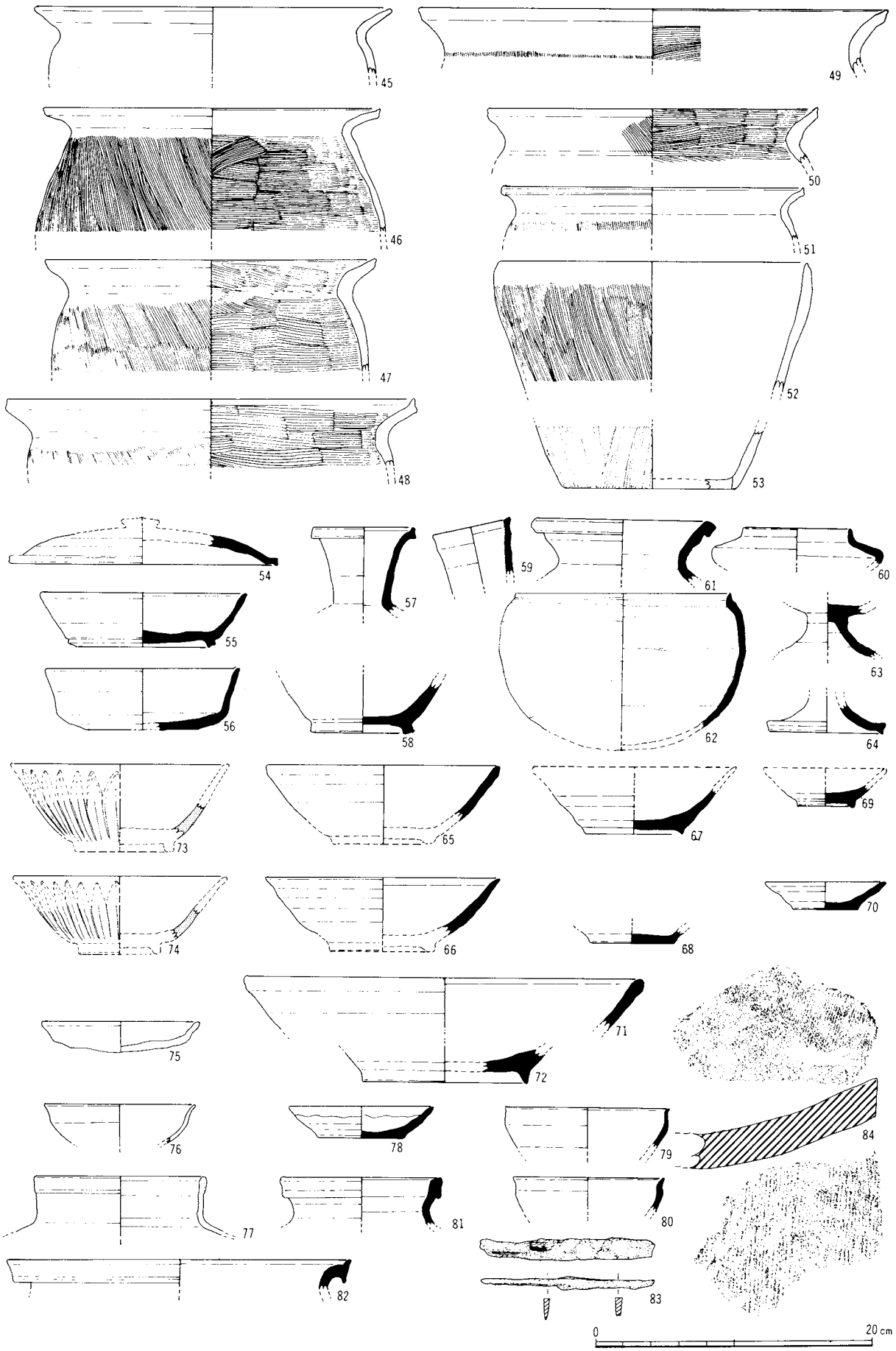
平瓦(84)　暗青灰色で、凸面部に平行縄目タタキが施される。裏面は、布目が残る。



第23図　A地区遺構出土遺物・包含層出土遺物実測図　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
1	M12	SA3	高杯		10.6			赤褐色	良	良	脚部は強く外反し接地面が丸くなる	内外面ともヨコナデ
2	M10	SB4	甕	26.0				淡橙褐色	良	良	口縁部が厚く直線的に立ち上がる	
3	M6	SB7	杯	11.0		2.4	22	淡褐色	良	良	体部は丸く立ち上がり口縁部が外反する	底部e手法、口縁部ヨコナデ
4	M7	SB7	杯	14.0		3.0	2.1	淡乳褐色	良	良	〃	〃
5	M1	SB7	甕	9.0				褐色	良	良	体部やや胴長。口縁端が先細る	体部外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
6	M5	SK7	灰釉陶器椀		8.8			明灰色	良、白色砂	良	高台がやや高い	ロクロナデ
7	M16	SD2	青磁椀		3.8			釉青緑色	良	良	底部が断面四角い胎土灰白色	ケズリ出し高台
8	包M103	C27	縄文土器深鉢					褐色	並	軟	口縁部が外反し、肥厚する、凹線が配される	ヨコナデ
9	包M20	G12	縄文土器深鉢		5.4			褐褐色	並、白色砂	良	底部はやや上げ底となる	底部側縁に指圧痕が残る
10	包M1	E21	弥生土器甕	27.4				暗褐色	並、白色砂	良	直線的に斜め上方に立ち上がる体部から短い口縁がつく	体部内外面ともヨコハケ、体部に3条の櫛描沈線（幅2mm）
11	包M8	C10	弥生土器甕		9.0			暗赤褐色	粗	良	底部やや上げ底で体部が外反し急に立ち上がる	体部内外面タテハケ
12	包M19	G21	弥生土器甕		5.0			暗赤褐色	良	良	底部やや上げ底で体部が外反し急に立ち上がる	体部内外面タテハケ
13	包M2	F21	弥生土器甕	26	17	20.2	78	暗橙褐色	良	良	長い脚部にやや深い杯部がつき、口縁部は端面をもつ	脚部内面ヨコハケ、外面タテハケ、透し穴あり、鉢部内外面タテハケ、5条の1単位の櫛描沈線
14	包M100	B22	土師器高杯		9.8	脚部5.1		淡褐色	良（均質）	良	底部端がやや角ばる	外面不明、内面ハケの後ヨコナデ
15	包N40	G22	土師器壺	頸部8.0				淡茶褐色	良、金雲母白色砂	良	頸部はやや外反する。	頸部内外面ハケの後ヨコナデ、体部外面ハケ
16	包N11	G12	須恵器杯蓋	15.4		4.6	30	淡青灰色	良、細砂	良	蓋の接地面が外開きになり丸味を持つ	稜部が退化し沈線のみが残る
17	包N4	D17	須恵器杯蓋	13.0		3.4	26	淡青灰色	良、白色砂（1～4m）	良	蓋の接地面が外開きになり丸味を持つ	稜部が退化し沈線のみが残る
18	包N9	D14	須恵器杯蓋	10.8		3.1	29	淡青灰色	良、白色砂（1mm）	良	反り部分がシャープさを欠く	天井部へラケズリ
19	包M119	F13	須恵器杯蓋	11.0				淡灰色	良	良	反り部分がわずかに残っている	ケズリの後ナデ
20	包M102	F3	須恵器杯身	9.6				淡青灰色	良	良	薄手で屈曲がシャープである	ロクロ回転反時計回り
21	包N6	F15	須恵器杯身	9.6		3.0	31	淡灰色	良	堅緻	体部が丸味を持つ	底部へラケズリ
22	包N16	B4	須恵器杯身	8.0		3.0	38	暗青灰色	良、白色砂（1mm）	良	体部が直線的に立ち上がる	底部外面ケズリの後指ナデ、内面仕上げナデ
23	包N5	G16	須恵器杯身	9.8		3.1	32	淡青灰色	良	堅緻	〃	〃
24	包M3	G27	土師器皿	21.8		2.9	13	赤褐色	良	堅緻	やや厚手で口縁の立ち上がりが急である	底部外面へラケズリ、体部上半ヨコナデ、内面暗文（4～5cm間隔）
25	包N49	C25	土師器皿	18.9		2.7	14	淡赤褐色	良	堅緻	やや厚手で口縁端が丸味を持つ	底部外面へラケズリ、内面暗文（4～5mm間隔）
26	包M104	G28	土師器皿	18.0		2.1	12	赤褐色	並	並	斜め上方に立ち上がり口縁端がやや外反する	内外面ヨコナデ
27	包N20	G23	土師器杯A	12.6		3.0	24	暗茶褐色	良	堅緻	斜め上方に立ち上がり口縁内面は強くナデられる	内外ともていねいなヨコナデ、底面の平行線は暗文か
28	包N54	C25	土師器杯A	15.8		3.6	23	淡茶褐色	良	良	斜め上方に直線的に立ち上がり口縁端が丸くなる	内外面ともヨコナデ
29	包N51	C22	土師器杯A	16.4		3.6	22	淡茶褐色	良	良	斜め上方に2段に弯曲して立ち上がる	内外面ともヨコナデ。内外とも媒が付着。
30	包N55	C22	土師器杯A	12.8		2.4	19	淡赤褐色	良	軟	口縁部が外反した後立ち上がり丸くなる	内外面ともヨコナデ
31	包N24	E28	土師器杯C	11.7		3.9	33	淡褐色	良、細砂	良	底部から急に立ち上がり口縁部が丸くおさまる	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
32	包N31	G6	土師器杯C	11.6		3.2	28	淡褐色	良	良、細砂	〃	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
33	包N42	D12	土師器杯C	12.0		4.0	33	淡褐色	良	良	〃	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
34	包N57	C22	土師器杯C	10.6		3.7	35	淡褐色	良	良	〃	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
35	包M36	G25	土師器杯B	17.2	12.0	3.0	17	橙褐色	良	良	薄手で器高が低い、口縁端部が先細る	底面に剥離あり、型による圧延か、体部外面ハケ調整
36	包N56	B22	土師器高杯	16.6				淡赤褐色	良	良	口縁部は先尖る	口縁部ヨコナデ
37	包N44	C22	土師器高杯		10.6			淡褐色	良	良	脚部は、斜めに直線的に外開きとなる	
38	包M118	A区包	土師器杯B蓋	つまみ径3.40				橙褐色	良	良	つまみの先端が尖る	つまみ部はりつけ
39	包N35	F17	土師器小型甕	15.8				淡褐色	良（均質）	良	口縁部が外反し先細る	体部外面ハケ、体部内面ハケ
40	包N28	C13	土師器小型甕	11.8				淡赤褐色	良（均質）	良	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる	体部外面ハケ、体部内面ハケ
41	包N27	C19	土師器小型甕	15.8		9.0	57	淡褐色	良	良	体部が偏平で口縁部が先細る	体部外面ハケ、体部内面上部ハケ、下部ケズリ（ハケ6本／1cm）
42	包N25	F13	土師器小型甕	17.4		11.0	63	淡赤褐色	精良	軟	体部が偏平で口縁部がやや肥厚する	体部外面ハケ、体部内面ハケ、口縁部ヨコナデ
43	包N26	E28	土師器小型甕	15.0				淡赤褐色	良	堅緻	体部が細長く、口縁部が先細る	体部外面ハケ、体部内面ハケ、口縁部ヨコナデ（ハケ10本／1cm）
44	包N33	F15	土師器小型甕	13.8				淡褐色	良	良	上胴部が角張り、口縁部は外反して先細る	体部外面ハケ、体部内面ハケ、口縁部ヨコナデ（ハケ6本／1cm）

第4表　A地区遺構出土遺物・包含層出土遺物観察表(1)



第24図　A地区包含層出土遺物実測図（2）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
45	包M105	G6	土師器長胴甕	26.0				淡橙褐色	良	良	口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり丸味を持つ	体部外面ハケ、内面不明
46	包M106	E24	土師器長胴甕	24.4				淡褐色	良(白色砂)	良	薄手で口縁部がくの字状に外反する	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ(ハケ13本／1.6cm)
47	包N47	F15	土師器長胴甕	24.0				暗褐色	良	良	口縁端がつまみ出され上に立ち上がる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ(ハケ7本／1cm)
48	包N32	F15	土師器長胴甕	28.8				茶褐色	良	良	〃	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ(ハケ5本／1cm)
49	包M107	F7	土師器把手付甕	34.0				暗褐色	良	良	口縁部は外反し先が細くなる	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ヨコナデ
50	包M108	F10	土師器長胴甕	24.0				淡褐色	良	良	厚手で外反する	
51	包N109	E7	土師器長胴甕	22.0				淡褐色	良	良	薄手で口縁端部が先細り上を向く	体部外面タテハケ、内面不明、口縁部ヨコナデ
52	包N37	F15	土師器甑	22.2				淡褐色	良(均質)	良	口縁部は直立する	体部外面細いタテハケ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ
53	包N38	F15	土師器甑		14.4			淡褐色	良(均質)	良	薄手である	体部外面細いタテハケ、外面ケズリ
54	包N15	B24	須恵器杯B蓋	19.4				灰色	良	良	器高が低い。	ロクロナデ
55	包N15	C23	須恵器杯B	15.0	9.8	4.0	27	暗青灰色	良	良	体部は直線的に外開きとなる	ハリツケ高台
56	包N17	F23	須恵器杯	14.0		4.5	32	淡灰色	良(均質)	良	腰部が張り出し、口縁部は外反する	底部ヘラケズリ、体部ロクロナデ
57	包N2	D22	須恵器長頸瓶	7.4				青灰色	良	硬	口縁部はつまみ出され受け口状になる	ていねいなロクロナデ
58	包M117	C24	須恵器長頸瓶		7.4			暗青灰色	良	堅緻	高台が外に張り出す	ハリツケ高台
59	包N18	D22	須恵器平瓶	5.4				淡灰色	良	堅緻	口縁部は上に端面を持つ	ロクロナデ
60	包M8	A区包	須恵器小型短頸壺	7.4				淡青灰色	良	良	口縁部は直立し先細る	ロクロナデ
61	包N3	C9	須恵器甕	12.8				淡灰色	やや粗	良	ゆるやかに外反し端部が肥厚する	体部内面に青海波文が施される
62	包M118	B28	須恵器鉄鉢	15.6		11.4	73	淡灰色	やや粗	並	器高が高い。口縁部は直立する	体部下半ケズリ
63	包N7	G6	須恵器高杯					暗青灰色	並(白色砂、多し)	良	脚部は外反する。	ロクロナデ
64	包N19	B19	須恵器高杯		8.3			淡青灰色	良	堅緻	接地面がつまみ出されて尖る。	ロクロナデ
65	包M63	E6	山茶碗	16.8	7.2	5.7	34	明灰色	良	良	口縁端部がやや肥厚する	自然釉が付いている
66	包M64	E6	山茶碗	17.2	7.0	5.5	32	明灰色	良	良	口縁部が外反し内側に面で持つ	ロクロナデ
67	包M3	C15	山茶碗	14.7	7.0	5.0	34	明灰色	良	良	体部が斜め上方に直線的に引き出される	ハリツケ高台、もみ跡痕あり
68	包M62	D19	山茶碗		6.0			明灰色	粗	良	平底	底部に糸切痕あり、ロクロ回転時計回り
69	包M6	F6	山皿	8.5	4.0	2.8	33	灰色	粗	良	ハリツケ高台	底部糸切痕スリ消し、ハリツケ高台
70	包M6	F6	山皿	9.0	4.8	2.0	22	明灰色	良	良	平底	糸切根痕残る
71	包M58	C9	練鉢	28.8				灰色	良	良	口縁端が肥厚し丸くなる	ロクロナデ
72	包M115	B9	練鉢		12.0			灰色	粗	良	底部内面に使用痕あり	はりつけ高台、底部調整不明
73	包M116	B22	青磁椀	15.8				釉灰緑色	良	良	胎土灰白色、蓮弁幅1.2cm	内外面とも施釉
74	包M117	A区包	青磁椀	17.6				釉灰緑色	良	良	胎土灰白色、蓮弁幅1.2cm	内外面とも施釉
75	包N43	G21	土師器皿	11.4		2.2	19	淡褐色	良	良	口縁部は外反した後肥厚する	e手法、口縁部ヨコナデ
76	包M110	F15	土師器小椀	11.0				淡褐色	良	良	薄手である。高台がつく可能性あり	手づくね
77	包M36	B6	土師器茶釜型土器	12.0				赤褐色	良	良	頸部が直立する	口縁部が折り返し
78	包M10	B15	灰釉緑釉皿	10.4	6.4	2.3	22	釉暗灰緑色	良	良	胎土灰白色、口縁部は外反する、縁に施釉	底部に糸切痕あり
79	包M65	B6	天目茶碗	12.0				釉漆黒色	良	良	やや薄手で口縁部が外反する、胎土灰白色	ロクロ成形
80	包M111	A区包	天目茶碗	11.0				釉漆黒色	良	良	やや厚手で体部の張りが強い、胎土灰白色	
81	包M66	A区包	常滑甕	11.6				暗茶褐色	良	良	口縁部は折り返されて玉縁状となる	
82	包M9	D17	常滑甕	25.0				褐色	良	良	口縁端部上、下方に肥厚	
83	包M112	D22	刀子					褐色	―	―	柄、刀身部残存、全長12.7cm、幅1.4cm	鍛造
84	包M113	B9	平瓦					暗青灰色	良	堅緻	厚さ2.6cm	縄による平行タタキ、布目がつく

第5表　A地区包含層出土遺物観察表

B 地 区

1. 奈良時代後半～平安時代初期の遺構出土遺物

○ＳＢ13

土師器杯Ｃ(85)　口径12.0cm。淡褐色で軟質である。やや厚手で口縁内面に沈線を持つ。

○ＳＢ14

土師器杯Ａ(86)　口径19.4cm。口縁部は内弯気味に立ち上がり内面に沈線を持つ。

土師器高杯(87)　口径30.2cm。口縁部は外反した後、上方向につまみ出される。淡橙褐色で、胎土は良好。

土師器甕(88)　口径37.0cm。口縁部は、外反し端部に面を持つ。

須恵器杯Ｂ蓋(89)　口径18.4cm。青灰色で白色砂を含む。口縁部が屈曲する。

これらは、奈良時代後半のものである。

○ＳＢ15

土師器杯Ａ(90)　口径16.0cm。口縁部は内弯して立ち上がり先細る。色調淡褐色で胎土は良好である。

土師器甕(91～93)　(91)は口径34.0cm。器壁が厚く、口縁部は外反した後先端が上につまみ出される。(92)は、口径22.0cm。色調淡褐色で、口縁部が角ばる。(93)は、小型甕で口径14.0cmである。口縁部内面にハケ調整がなされる。(91)は、南東隅柱掘形から出土した。(96)は、(94)と、共に北辺中央柱堀形から出土した。(92)•(93)は、北東隅柱掘形から出土した。

須恵器小型短頸壺(94)　口径8.0cm。色調淡灰茶褐色で口縁部は外反しながら上方に立ち上がる。

○ＳＢ16

土師器杯Ｃ(102)　口径14.0cmで厚手のものである。色調淡灰黄褐色で、焼成は並である。南辺中央柱掘形より出土した。

○ＳＢ17

土師器杯Ａ(95～97)　口径16.0cm。口縁部は斜め上方に引き出され口縁部内面に沈線を持つ。内面には暗文が施されている。(96)は、口径14.8cmで口縁部はゆるやかに立ち上がる。(97)は、口径17.4cmで口縁部が面を持つ。

土師器皿(98)　口径27.6cm。口縁部は、やや肥厚する。口縁部ヨコナデである。

土師器杯Ｃ(99～101)　口径12.0cm～12.6cm。厚手の軟質のものである。粘土ひも巻き上げ成形である。(101)にはススが付着している。径高指数は24～28である。

○ＳＢ18

土師器皿(103)　口径16.0cm。色調濁橙褐色で胎土は良好である。口縁部は、横ナデされる。南西隅柱掘形から出土した。

○ＳＫ19

土師器皿(104)　口径15.7cmで径高指数は、13である。底部ケズリ。口縁部は、ヨコナデされる。

土師器杯Ａ(107～109)　(107)は、口径14.5cmで口縁部が直線的に立ち上がり口縁部が先細る。(108)は、やや薄手で口縁部が斜め上方に立ち上がる。口径は、15.5cmである。(109)は、口縁部がやや外反するもので底部ヘラケズリ、口縁部をヨコナデする。口径は、14.7cmで径高指数は、20である。

土師器杯Ｃ(105・106)　(105)は、口径14.4cmで口縁部内面に沈線がある。(106)は、口径13.2cmで、体部外面下半に指圧痕が残る。

土師器高杯(110)　口径30.2cm。色調赤褐色で胎土は精良である。

須恵器杯Ｂ蓋(111)　口径15.2cmで器高は3.9cmである。色調青灰色で白色砂を含む。

須恵器杯Ａ(112)　口径13.4cm。器高4.0cm。底部ヘラケズリで、口縁部はやや外反し、内側に面を持つ。これらは、奈良時代末葉から平安時代初期のものである。

○ＳＫ12

土師器甕(113•114)　(113)は、小型のもので口径17.2cmで体部外面をタテハケ、体部内面上半をヨコハケ、下半をヘラケズリしている。

土師器長胴甕(115•116)　(115)は、口径27.0cmで

口縁端がやや先細る。(116)は、口径26.4cmで器高36.4cmである。色調淡褐色で体部外面をハケ調整する。体部内面下半をヘラケズリする。

これらは、奈良時代後半のものである。

○ＳＢ20

土師器皿(117)　口径26.4cm。やや厚手で口縁部は外反した後やや立ち上がる。北東隅柱掘形出土。

土師器杯Ａ(118)　口径23.0cm。器高30cm。径高指数15。淡褐色で口縁部は、内弯気味に立ち上がる。(117)と共に東隅柱掘形から出土した。

これらは、奈良時代後半のものである。

○ＳＫ22

土師器杯Ａ(119•121)　(119)は、口径20.0cm。やや厚手で口縁部をヨコナデする。(121)は、口径16.0cmで口縁部は外反した後先端が上を向く。

土師器皿(120•121)　(120)は、口径21.0cmで器高は2.1cmである。橙褐色で口縁部をヨコナデする。(121)は、口径16.0cmで口縁端部が内弯して立ち上がる。

土師器杯Ｃ(122)　口径12.0cm、器高3.1cm。褐色で胎土に砂粒を含み焼成は良好である。口縁部は、先細る。灯明皿として用いられたものである。

土師器甕(123)　口径27.0cm。濃赤褐色で胎土焼成ともに良好。口縁部は、外反し端部が上方に向く。

これらは、平安時代初期のものである。

○ＳＤ21

土師器皿(124～128)　(124)は、口径26.0cmでやや厚手である。口縁端部は先細る。内面に暗文をもつ。(125～127)は、口径20cmを越すもので、厚手で口縁部をヨコナデする。(128)は、口径18.6cmで口縁部をヨコナデする。色調は、淡橙褐色で胎土は良好。薄手である。

土師器杯Ａ(129～133)　(129)は、口径12.6cmで口縁部が外反した後わらび手状に立ち上がる。(130•131)は、口径18.0cmで口縁部を横ナデする。(132•133)は、口径22.0cmである。

土師器杯Ｃ(134～138)　口径13～14cm、器高４～５cmである。色調淡黄褐色でやや軟質である。体部外面に指圧痕が残る。(138)は、体部の立ち上がりがゆるやかで椀的な形をしている。

土師器甕(139)　口径21.0cmで、体部内外面をハケ調整する。

土師器長胴甕(140～144)　口径19cm～24.6cm。体部外面ハケ調整、内面ヨコ方向ハケ調整を施す。(144)は、内面のみナデ。

土師器小型甕(145～147)　口径15.0cm～16.4cm。体部内外面ハケ調整される。

須恵器杯Ｂ(148～150)　(148)は、口径17.5cmで器高6.0cm、やや深い個体である。底部外面糸切痕を粗くナデ消している。(149)は、底部径11.6cmで底部外面をヘラケズリしている。(150)は、底部径17.0cmの大ぶりのもので高台部が外張りになる。

須恵器杯Ｂ蓋(151•152)　口径14.0cm、器高2.7cmである。天井部外面をヘラケズリする。接地部は、やや外反する。(152)は、口径13.6cm、器高3.5cmで接地部が直立する。

須恵器長頸瓶(153)　底部径12.6cm。底部外面をヘラケズリする。高台部断面形は、四角形である。

須恵器甕(154)　口径20.6cm。口縁部が外反した後端部は、上を向く。在地産か。

これらの遺物は、(124・125)のように奈良時代中期に位置づくものもあるが、大半は、奈良後半のものである。斎宮編年ＳＫ1970～ＳＫ1291段階で、須恵器は、鳴海32号窯から折戸10号窯古段階のものである。

○ＳＤ29

土師器杯Ａ(156)　口径17.4cm。器高は、4.5cmである。口縁部はヨコナデする。色調橙褐色で、胎土は並である。奈良時代中期のものであろう。

○ＳＤ30

土師器杯Ａ(157)　口径15.6cm。器壁が厚く口縁部はつまみ出されて口縁内面に沈線を持つ。内面には暗文が施される。奈良時代前半のものである。

○ＳＤ31

土師器杯Ａ(155)　口径18.0cm。器壁が厚く、口縁部が外反する。内面に暗文が施される。奈良前半のものである。

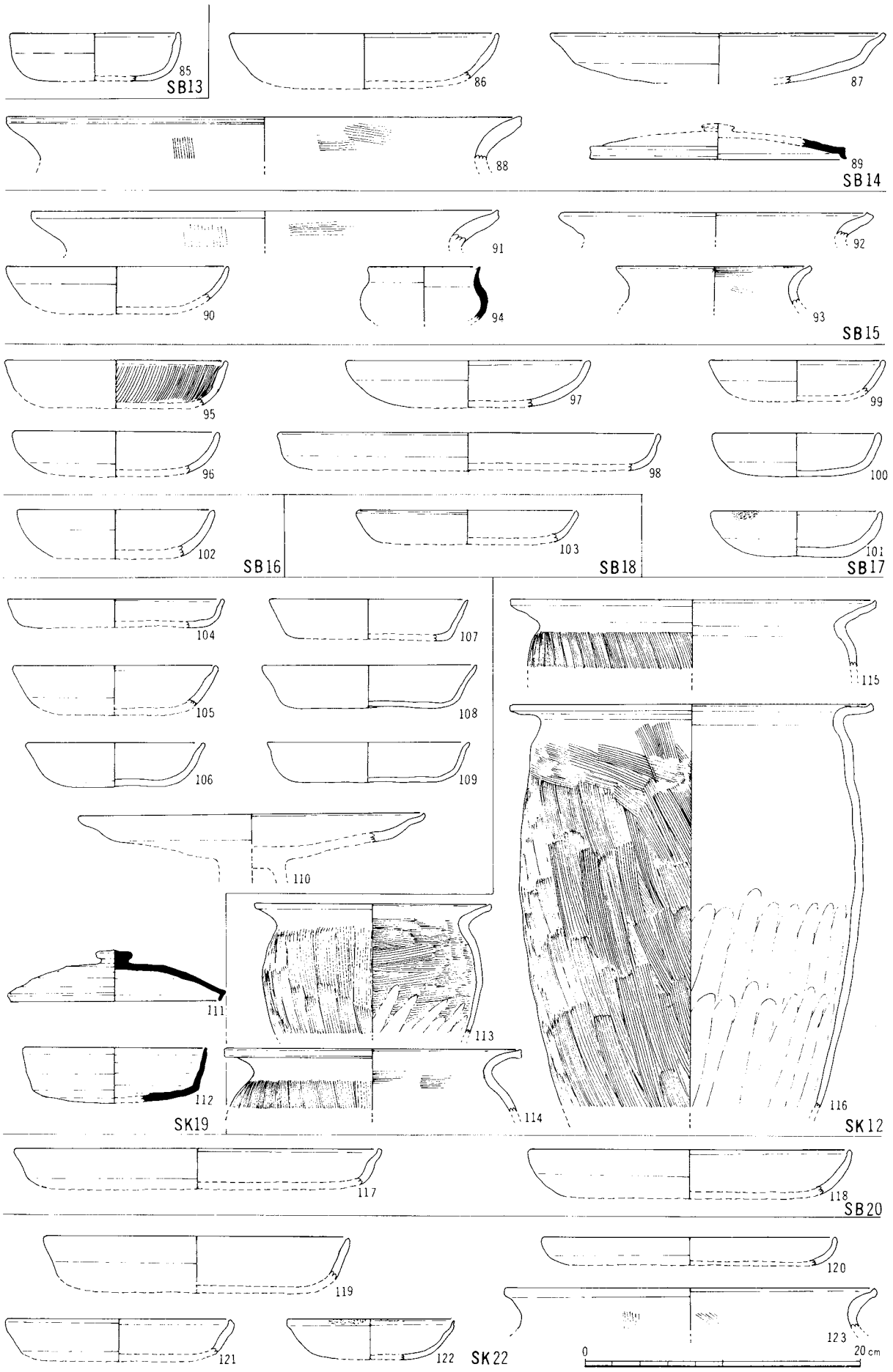
2. 包含層出土遺物

○縄文時代後期

深鉢(158)　深鉢の胴部である。２条の沈線の区画内に縄文を施文している。中津式併行期である。

○縄文時代晩期

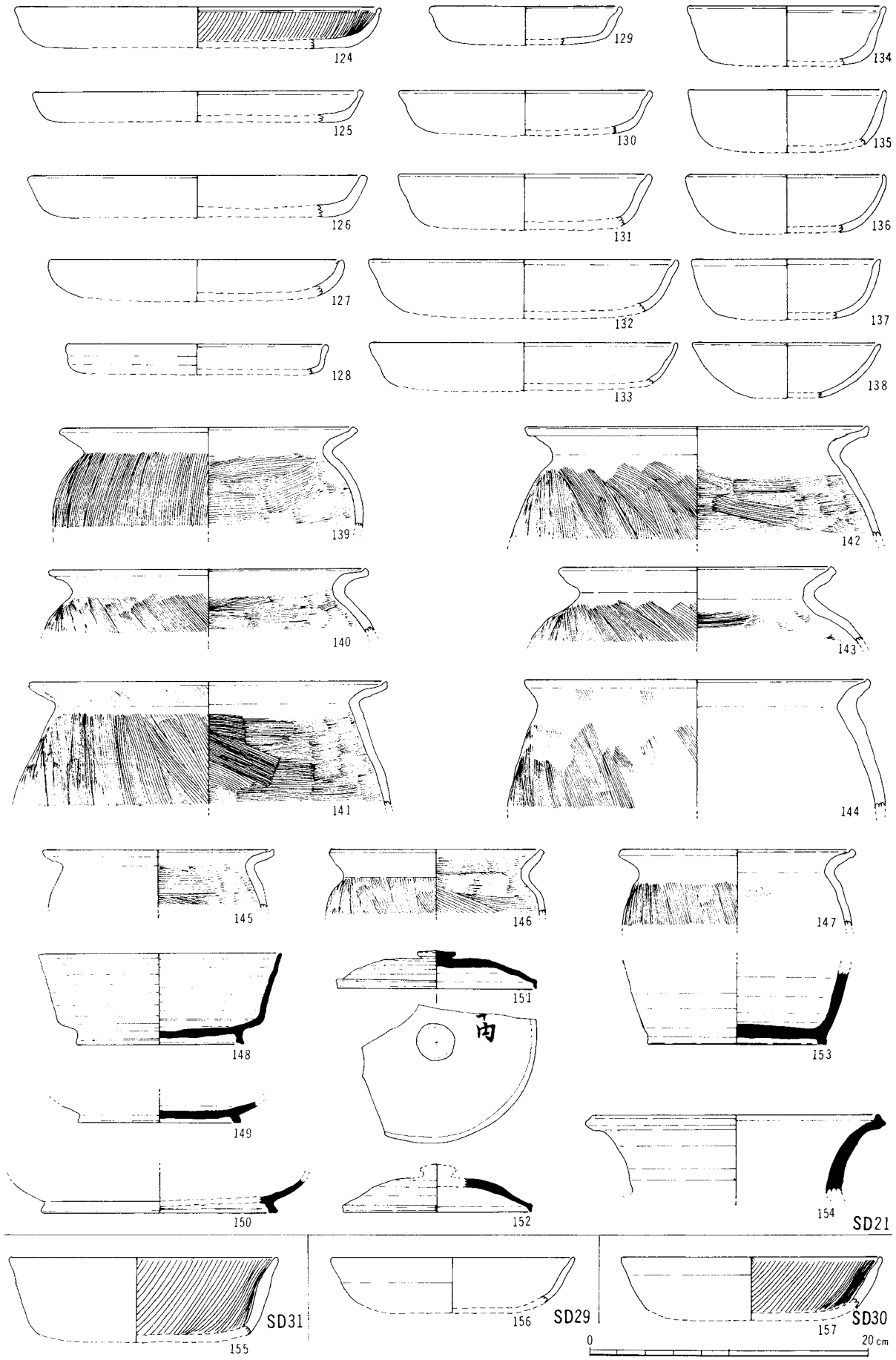
深鉢(159)　口縁部外面に突帯を持つ。突帯には



第25図　B地区遺構出土遺物実測図（1）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
85	K160	SB13	土師器杯C	12.0		3.5	29	淡褐色	良(細砂)	並	器壁が厚い。口縁部内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ
86	K145	SB14	土師器杯A	19.4		4.0	21	暗橙褐色	良、細砂	良	口縁部内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ
87	K142	SB14	土師器高杯	30.2				淡橙褐色	良	良	口縁部は外反して後立ち上がりわらび手状になる	杯部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
88	K146	SB14	土師器甕	37.0				淡黄褐色	良	良	口縁部はやや外反し、端部に面を持つ	内面ヨコハケの後ナデ、外面タテハケの後ヨコナデ
89	K147	SB14	須恵器杯B蓋	18.4		2.5	14	青灰色	良、砂粒φ8mm	並	器高が低く、口縁端部がやや外反する	ロクロナデ
90	K158	SB15	土師器杯A	16.0		3.5	22	橙褐色	良	軟	口縁部は斜め上方に立ち上がり先細る	口縁部ヨコナデ
91	K156	SB15	土師器甕	34.0				橙灰褐色	良	良	器壁が厚く、口縁端部は引き出されて先が尖る	口縁外面にタテハケが残存、口縁部外面ハケの後ヨコナデ
92	K155	SB15	土師器甕	22.0				淡橙褐色	良、細砂	良	口縁部は外反する	口縁部内外面ヨコナデ
93	K157	SB15	土師器小型甕	14.0				淡橙褐色	良、細砂	良	口縁部はゆるやかに外反する	体部内外面にハケ。口縁部内面ヨコハケの後ヨコナデ
94	K154	SB15	須恵器短頸壺	8.0		4.8	60	灰茶褐色	良	並	口縁部はやや外反しながら上に向く	ロクロナデ
95	K141	SB17	土師器杯A	16.0		3.5	22	橙褐色	良	並	器壁が厚い	内面に暗文あり（間隔2mm）
96	K140	SB17	土師器杯A	14.8		3.3	22	淡橙褐色	良	良	器壁が厚く外弯しつつ立ち上がる	口縁部内外面ヨコナデ
97	K144	SB17	土師器杯A	17.4		3.4	20	橙褐色	良	軟	器壁が厚い。口縁部は上端面を持つ	口縁部内外面ヨコナデ
98	K139	SB17	土師器皿	27.6		2.7	10	橙褐色	良	良	器高が低い。口縁部内面に沈線模様	口縁部内外面ヨコナデ
99	K143	SB17	土師器杯C	12.6		3.0	24	淡灰黄褐色	良	良	口縁部の立ち上がりが急である	口縁部内外面ヨコナデ
100	K138	SB17	土師器杯C	12.0		3.3	28	淡灰黄褐色	良(細砂)	良	口縁部が肥厚する	底部外面ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ、スス付着
101	K137	SB17	土師器杯C	12.4		3.2	26	淡灰黄褐色	良	良	口縁部内面に沈線がある	底部外面ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデスス付着
102	K153	SB16	土師器杯A	14.0		3.5	25	淡灰黄褐色	良	並	器壁が厚く、器高が高い。口縁部は丸い	口縁部内外面ヨコナデ、底部ユビオサエ.
103	K161	SB18	土師器皿	16.0		2.5	16	淡橙灰褐色	良	良	器高が低い	口縁部ヨコナデ
104	M10	SK19	土師器皿	15.7		2.0	13	赤褐色	良	良	器高が低い、口縁部がやや外反し細丸くなる	底部ケズリ、口縁部ヨコナデ
105	K152	SK19	土師器杯A	14.4		3.5	24	橙褐色	良	良	器壁が厚く、口縁部内面に沈線を持つ	口縁部内外面ヨコナデ
106	M4	SK19	土師器杯A	13.2		3.1	23	濃褐色	並	軟	口縁部が外反する	体部外面下半ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
107	M12	SK19	土師器杯A	14.5		3.0	21	赤褐色	精良	堅緻	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる	底部ケズリ、口縁部ヨコナデ
108	M9	SK19	土師器杯A	15.5		3.1	20	赤褐色	良(赤色土)	良	平たい底部から口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる	底部外面不明、底部内面乱ナデ、口縁部内外面ヨコナデ
109	M3	SK19	土師器杯A	14.7		3.0	20	淡赤褐色	良、白色砂赤色砂	良	口縁部が外反した後、つまみ出され段を持つ	底部ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ
110	M11	SK19	土師器高杯	30.2				赤褐色	精良	堅緻	口縁部は立ち上がり先細る	口縁内外面ヨコナデ
111	M2	SK19	須恵器杯B蓋	15.2		3.9	26	青灰色	良	良	蓋の接地面が直立する	ロクロ回転時計回り、天井部外面ケズリ、外面灰かぶり
112	M31	SK19	須恵器杯	13.4		4.0	30	灰色	精良	堅緻	体部が直線的に立ち上がり、口縁部内面に面を持つ	底部外面ケズリ
113	M7	SK12	土師器甕	17.2		13.2	77	橙褐色	良	良	頸部から口縁部はくの字状に外反する。	体部外面タテハケ（7本／1.4cm）体部内面上半ヨコハケ、下半ヘラケズリ
114	M8	SK12	土師器甕	21.5				淡褐色	並	良	口縁部は外反し、口縁部が上につまみ出される	体部内外面ハケ、口縁部ヨコナデ（内面にハケ残る）
115	M5	SK12	土師器長胴甕	27.0				濁褐色	良	良	頸部から口縁部は斜め上方に直線的に引き出される	体部外面タテハケ
116	M1	SK12	土師器長胴甕	13.4		36.4	137	淡褐色	並	軟	口縁部が直線的に横に引き出され、口縁端が上を向く	体部外面タテハケ、体部内面上半
117	K150	SB20	土師器皿	26.4		3.0	11	淡橙褐色	良	良	口縁部が外反する	口縁部ヨコナデ
118	K149	SB20	土師器杯A	23.0		3.5	15	淡橙褐色	良、細砂	良	器壁が厚い、口縁部内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ
119	K168	SK22	土師器杯A	22.0		4.0	18	橙褐色	良	良	器壁が厚い、口縁端部が丸くなる	口縁部内外面ヨコナデ
120	K169	SK22	土師器皿	21.0		2.1	10	橙褐色	良	軟	器高が低い。口縁端部は丸くなる	口縁部ヨコナデ
121	K171	SK22	土師器杯A	16.0		3.0	19	淡橙褐色	良	良	口縁端部が内側に引き出される	口縁部ヨコナデ
122	M20	SK22	土師器椀	12.0		3.1	26	褐色	並	良	薄手で、口縁部が直立し先尖る	口縁部ヨコナデ、スス付着
123	K172	SK22	土師器甕	27.0				淡赤褐色	良	良	口縁部は内弯して立ち上がる、端部が肥厚する	口縁部外面タテハケ後ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ

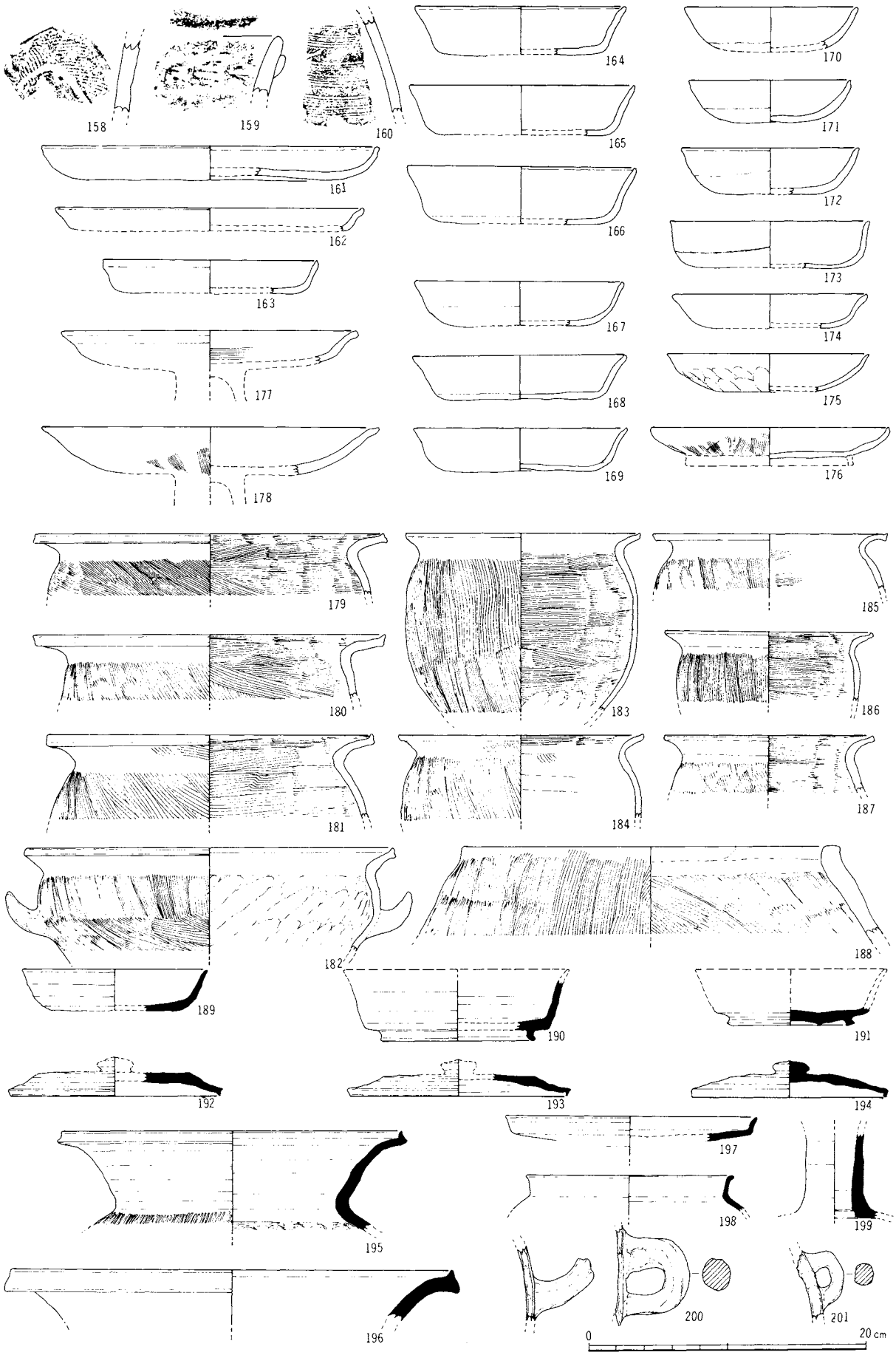
第6表　B地区遺構出土遺物観察表(1)



第26図　B地区遺構出土遺物実測図（2）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
124	K106	SD21	土師器皿	26.0		3.0	12	淡橙褐色	良	並	口縁端が丸く肥厚し内側に沈線を持つ	底部外半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面に暗文（3mm間隔）
125	K118	〃	土師器皿	23.4		2.2	9	橙褐色	良	良	口縁部が強くヨコナデされ端部が丸くなる	底部外面不明、口縁部ヨコナデ
126	K112	〃	土師器皿	20.0		3.0	15	橙褐色	良	良	器壁が厚い。口縁部は斜め上方に引き出され丸くなる。	口縁部ヨコナデ
127	K126	〃	土師器皿	21.0		3.0	14	淡橙褐色	良	軟	器壁が厚い。口縁端部が肥厚する	口縁部ヨコナデ
128	K120	〃	土師器皿	18.6		2.2	12	淡橙褐色	良	並	器壁が薄い。体部の立ち上がりが急である	底部外面ユビオサエ口縁部ヨコナデ
129	K114	〃	土師器杯A	12.6		2.5	20	淡茶褐色	良	良	器壁が厚く、口縁端がわらび手状になる	口縁部ヨコナデ、底部内面乱ナデ
130	K120	〃	土師器杯A	18.0		3.2	18	淡黄褐色	良	並	口縁端は斜め上方にゆるやかに立ち上がる、端部は丸い。	口縁部ヨコナデ、底部内面乱ナデ
131	K113	〃	土師器杯A	18.0		4.0	22	橙褐色	良 白色砂(2~3m)	並	器壁が厚い。斜め上方にゆるやかに立ち上がり内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ
132	K123	〃	土師器杯A	22.0		4.3	20	淡黄茶褐色	良	並	器壁が厚い。斜め上方にゆるやかに立ち上がり内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ
133	K122	〃	土師器杯A	22.0		3.5	16	淡灰黄褐色	良	並	器壁がやや薄く口縁端部が丸くなる	口縁部ヨコナデ
134	K110	〃	土師器杯C	14.3		4.3	30	淡橙褐色	良	やや軟	腰部が急に立ち上がる	口縁部ヨコナデ
135	K111	〃	土師器杯A	14.0		4.5	32	灰黄褐色	良(白色砂)	並	腰部が急に立ち上がる	口縁部ヨコナデ
136	K108	〃	土師器杯C	14.0		4.2	30	灰黄褐色	良	並	器高が高い	口縁部が内側に曲がる体部外面下半ユビオサエ
137	K109	〃	土師器杯C	13.4		4.4	33	淡橙褐色	良(白色砂)	並	器高が高い。口縁部内側に面を持つ	体部外面下半ユビオサエ
138	K119	〃	土師器杯C	13.4		4.0	30	黄茶褐色	良	やや軟	器高が高い。斜め上方に立ち上がり端部が丸い。	体部外面下半ユビオサエ
139	K127	〃	土師器甕	21.0				淡黄褐色	良	並	口縁部は体部から斜め上方に直線的に立ち上がり端部が角ばる。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
140	K136	〃	土師器長胴甕	22.6				淡灰黄褐色	良	良	口縁部は体部から大きく外反して立ち上がる、長胴甕か。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
141	K129	〃	土師器長胴甕	23.4				淡黄褐色	良	並	やや薄手で口縁部が斜め上方に立ち上がる先細る。長胴甕か。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
142	K134	〃	土師器長胴甕	24.4				暗灰黄褐色	良	並	頸部を強くヨコナデされた後、口縁部が外反する。長胴甕か。	体部外面ていねいなタテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
143	K130	〃	土師器長胴甕	19.0				淡橙褐色	良、細砂	良	器壁がやや厚い。口縁端部が角ばる。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ（ハケ6本／1.0cm）
144	K135	〃	土師器長胴甕	24.6				淡灰茶褐色	良、細砂	並	器壁が厚い。斜め上方に立ち上がる、口縁部は短い	体部外面タテハケ、体部内面ナデ、口縁部ヨコナデ
145	K128	〃	土師器小型甕	16.4				淡褐色	良	軟	口縁部は外反し、口縁端がつまみ出されて上を向く	体部外面不明、体部内面ヨコハケ
146	K132	〃	土師器小型甕	15.0				淡橙褐色	良	良	頸部が明瞭で、口縁部は斜め上方に立ち上がる角ばる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
147	K131	〃	土師器小型甕	16.4				淡灰橙褐色	良	並	口縁部は外反し、口縁端は上下が強く圧され丸くなる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ
148	M116	〃	須恵器杯B	17.5	12.0	6.0	34	濃灰色	良、白色微砂	堅緻	高台がやや高く、杯部は器高が高い	底部ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り、はりつけ高台
149	K104	〃	須恵器杯B		11.6			灰褐色	良、細砂	軟	高台の断面形が四角で、ややハの字状に開く。	底部外面ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り
150	K103	〃	須恵器杯B		17.0			青灰褐色	良	やや軟	大ぶりで高台がハの字状に開く	底部不明、ロクロナデ
151	M117	〃	須恵器杯B蓋	14.0		2.7	19	濃灰色	良	良	やや薄手で接地面がほぼ真下を向く	天井部に「内」の墨書あり、ロクロ回転時計回り
152	K101	〃	須恵器杯B蓋	13.6		3.5	26	青灰色	良、白色砂	良	小ぶりで端部の作りがにぶい	内面自然釉
153	K105	〃	須恵器長頸瓶		12.6			灰褐色	良	良	平たい底部から体部は急に直線的に立ち上がる	底部外面ヘラケズリ、体部外面下半ヨコナデ、ハリツケ高台
154	K102	〃	須恵器甕	20.6				明青灰色	良	良	口縁部が外反した後、端部は上を向く。	ロクロナデ
155	K148	SD31	土師器杯	18.0		6.0	33	淡橙褐色	良	良	体部は急に立ち上がり、外反する	口縁部ヨコナデ、内面に暗文（4mm間隔）
156	K167	SD29	土師器杯	17.4		4.0	23	橙褐色	良	良	やや薄手で斜め上方に立ち上がる	口縁部ヨコナデ
157	K163	SD31	土師器杯	15.6		4.5	29	淡橙褐色	良	良	器壁が厚い。口縁部は斜め上方に立ち上がり内面に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ、内面に暗文（3～4mm間隔）

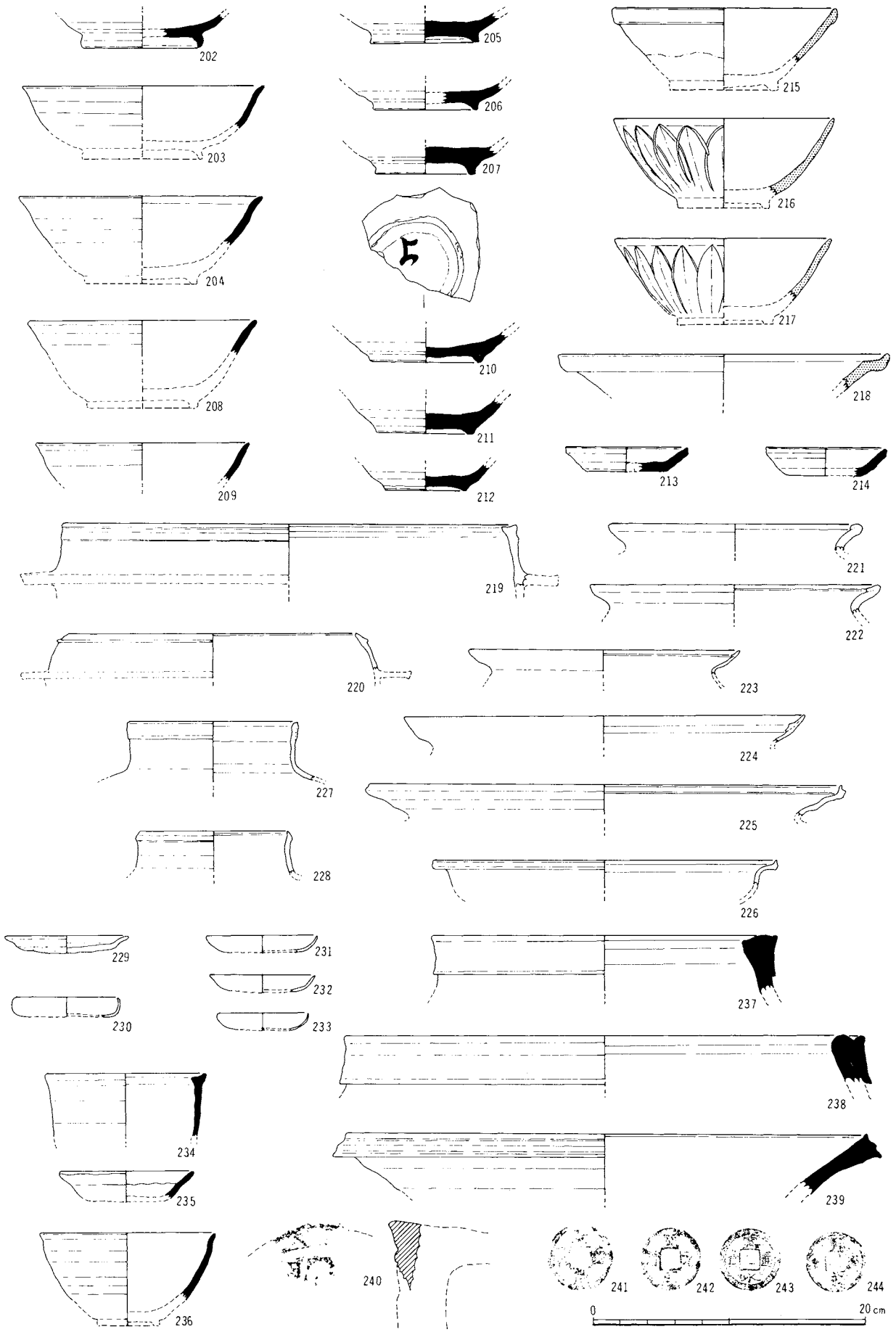
第7表　B地区遺構出土遺物観察表(2)



第27図　B地区包含層出土遺物実測図（1）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
158	包M76	G8	縄文土器深鉢					褐色	並、細砂 全雲母	良	上向きの2条の弧状沈線で区画された中に縄文が施される	粘土ひも巻き上げ、後期の所産
159	包M77	C20	縄文土器深鉢					淡黄褐色	良、白色砂	良	口縁部が斜め上方に立ち端部が丸くなる	はりつけ突帯に条痕が施される
160	包M6	C27	弥生土器壺					濁橙褐色	良、白色砂	良	器壁が薄い	体部外面5本1単位の櫛描平行線、内面タテハケ
161	包M15	E8	土師器皿	24.0		2.4	10	赤褐色	良、赤色土	良	器高が低い、口縁部内面に沈線を持つ	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
162	包M13	F5	土師器皿	22.0		1.7	8	赤褐色	良、赤色土	良	口縁部がやや外反した後、端部が上を向き先細る	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
163	包M17	E8	土師器皿	15.3		2.5	16	濃橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は斜め上方に立ち上がり先細る	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
164	包M8	D5	土師器杯A	15.0		3.6	24	橙褐色	良、赤色土	良	やや厚手で斜め上方に直線的に立ち上がる	底部外面不明、口縁部ヨコナデ
165	包M11	B区	土師器杯A	16.0		3.5	22	橙褐色	良、赤色土	良	平たい底部から体部は急に立ち上がる	底部外面不明、口縁部ヨコナデ
166	包M25	E7	土師器杯A	16.2		4.1	25	橙褐色	良、赤色土	良	口縁部端部がつまみ出された後先細る。	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
167	包M14	E16	土師器杯A	15.0		3.3	22	橙褐色	良、赤色土	良	底部からの立ち上がりが柔く、口縁部がやや外交する	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
168	包M8	F8	土師器杯A	15.0		3.1	21	橙褐色	良、赤色土	良	平たい底部から斜め上方に立ち上がる。	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
169	包M21	E8	土師器杯A	15.0		3.0	20	淡橙褐色	良、赤色土	良	底部から丸味を持って外反した後口縁部が先細る	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
170	包N5	B区	土師器杯C	12.1		3.4	28	乳褐色	良、白色土	良	底部から外弯しつつ立ち上がり、口縁部が丸味をもつ	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
171	包M19	C11	土師器杯C	11.6		3.0	26	淡褐色	良	軟	底部から外弯しつつ立ち上がり口縁部が先細る	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
172	包M24	B区	土師器杯C	12.6		3.2	25	赤褐色	良、赤色土	良	底部から外弯しつつ立ち上がり口縁部が外反し先細る	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
173	包M18	E8	土師器杯A	14.0		3.4	24	淡褐色	並	軟	薄手で平たい底部から急に立ち上がり口縁部が外反する	底部内面同じ円状のハケ、口縁部ヨコナデ
174	包M10	E16	土師器杯A	14.0		2.5	18	赤褐色	良	良	口縁部が外反する	底部外面不明、口縁部ヨコナデ
175	包M31	B13	土師器皿	14.4		2.7	19	淡橙褐色	良	良	薄手でゆるやかに引き出された後、口縁部が外反する	底部外面ユビオサエ、内面乱ナデ、口縁部ヨコナデ
176	包M36	G25	土師器杯B	17.0		2.2	13	橙褐色	良、赤色土	良	器高が低い、口縁部が先細り直立する	底部外面ハケ圧延か、口縁部ヨコナデ
177	包M12	D19	土師器高杯	21.4				橙褐色	良、赤色土	良	口縁部が外反し端部が丸くなる	底部内面にハケ残る、口縁部ヨコナデ
178	包M16	F7	土師器高杯	24.0				濃橙褐色	良	良	器壁がやや厚く、口縁部が外反し丸味を持つ	底部外面ハケ、口縁部ヨコナデ
179	包M5	B区	土師器長胴甕	25.0				淡橙褐色	良	良	口縁部が外反し、端部が角ばる。未調整か	口縁部ヨコナデ
180	包M20	B区	土師器長胴甕	25.0				淡橙褐色	良、赤色土	良	口縁部が横に引き出され、口縁端が上を向く。長胴甕か	口縁部ヨコナデ
181	包M19	C20	土師器長胴甕	25.0				淡橙褐色	良、白色土	良	口縁部が外反し、先端が上を向く	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ハケナヨコナデ
182	包M	E7	土師器広口甕	26.0				赤褐色	良、赤色土	良	口縁部が斜め上方に直線的につき端部が角ばる	把手つき、体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
183	包M4	F8	土師器甕	17.0		15.4	90	淡橙褐色	良	良	体部はやや胴長である。口縁部は先細り直立する	体部外面タテハケ、体部内面下半ヘラケズリ、上半ヨコハケ
184	包M22	D18	土師器甕	17.6				淡褐色	並	良	口縁部が外反し、強く上下から圧延され丸味を持つ。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
185	包M21	D16	土師器甕	16.6				橙褐色	並	並	口縁部が外反する	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
186	包M3	E7	土師器甕	15.0				橙褐色	良、白色土	良	口縁部が外反し、端部が直立する	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
187	包M23	C16	土師器甕	15.0				橙褐色	並	良	やや器壁が厚い。口縁端部が角ばる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
188	包M128	C9	土師器甕	24.0				淡橙褐色	並	良	口縁部が肥厚し上端面を持つ。	体部外面タテハケ、口縁部ヘラケズリ、使用のススあり
189	包M129	G18	須恵器杯A	13.0		3.0	23	褐灰色	並、白色砂	軟	器壁がやや厚い、口縁部が外反し内角に面を持つ	底部外面ヘラケズリ
190	包M39	F13	須恵器杯B	16.0	11.2	5.2	33	明灰色	良	良	器壁が厚い、杯部は外反気味に立ち上がる	底部外面ヘラケズリ
191	包M40	M40	須恵器杯B	13.8	9.0	4.0	29	淡青灰色	良	良	高台が外開きになる	底部外面ヘラケズリ、ハリツケ高台
192	包M32	B区	須恵器杯B蓋	15.0		3.0	20	褐灰色	並、白色砂	良	器壁が厚い。接地部が断面三角形となる	天井部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ
193	包M33	B区	須恵器杯B蓋	15.6		2.6	17	淡褐灰色	良	良	器壁がやや薄い、口縁部が内反りとなる	天井部外面ヘラケズリ
194	包M30	C23	須恵器杯B蓋	14.0		2.5	18	淡青灰色	良、白色土	良	口縁部が直立する	天井部外面ヘラケズリ、宝珠つまみはりつけ、ロクロ回転時計回り
195	包M29	B区	須恵器甕	24.5				青灰色	良(白色土)	良	薄手である。口縁部は外反し端部は直立し先細る	体部外面平行タタキ、体部内面に青海波文あり
196	包M37	C7	須恵器甕	30.8				赤灰色	良	良	大型である。口縁部は外反した後、端部が上につまみ出される	口縁部外面に櫛描波文(8本/1.6cm)、自然釉がかかる
197	包M35	B区	須恵器高杯	18.0				淡青灰色	良、白色土	良	口縁部が直立し外反する	ロクロナデ、ロクロ回転時計回り
198	包M130	B区	須恵器壺	15.0				赤灰色	良	並	器壁が薄く直立する	ロクロナデ、自然釉がかかる、生焼け
199	包M37	E17	須恵器壺	頸部径410				褐灰色	良、白色土	良	体部上端から頸部は直立する、頸部径4.0cm	体部上端と頸部は2段成形となる
200	包M28	SD21付近	須恵器盤	把手幅5.4				淡乳褐色	並	軟	把手部分のみ残存、断面径2.0cm	やや上向きに体部にはりつけられる、生焼け
201	包M25	E15	須恵器壺	幅4.0				淡灰色	良	良	耳部分のみ残存、断面径1.2cm	ハリツケ

第8表　B地区包含層出土遺物観察表(2)



第28図　B地区包含層出土遺物実測図（2）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
202	包M41	B区	灰釉椀		9.0			明灰色	精良	堅緻	高台が三日月状になる	糸切痕ナデ消し、ハリツケ高台
203	包M42	F9	灰釉山茶椀	18.4		5.3		灰白色	良、鉄粉	良	薄手で口縁部が外反する	
204	包M54	B区	山茶碗	17.6		6.5		明灰色	良	良	口縁部が外反し、内面に端面を持つ	ロクロナデ
205	包M47	G27	山茶碗		8.0			明灰色	良、鉄粉	良	高台がかなり高い	糸切痕を残す、ハリツケ高台
206	包M45	B区	山茶碗		7.8			灰白色	良	良	腰部の立ち上がりがゆるやかである	糸切痕を残す、ハリツケ高台
207	包M50	B区	山茶碗		7.4			灰色	良	良	高台が高い、底面に「上」の墨書あり	糸切痕をすり消す、ハリツケ高台
208	包M44	B区	山茶碗	16.6		6.4		明灰色	良	良	斜め上方に立ち上がり口縁部は丸くなる	ロクロナデ
209	包M44	B区	山茶碗	15.6				灰白色	良	良	口縁部が外反する	ロクロナデ、口縁部から体部外面に自然釉
210	包M46	B10	山茶碗		8.3			灰白色	良	堅緻	底部の作りが甘くなり高台高も低い。	糸切痕を荒くナデ消す。底部内面に重ね焼痕あり
211	包M48	C18	山茶碗		7.0			灰色	並	良	底部の器厚が厚い、高台高はやや低い	糸切痕残る
212	包M49	B10	山茶碗		6.0			褐灰色	粗	並	高台の断面に三角形になる	糸切痕残る。高台にもみ跡残る
213	包M52	B10	山皿	9.0	6.0	1.8		褐灰色	良、白色砂	良	平底。直線的に斜め上方に立ち上がり口縁部が先尖る	糸切痕残る
214	包M53	F23	山皿	8.6	5.4	2.4		褐灰色	良、白色砂	良	平底。直線的に斜め上方に立ち上がり口縁部が先尖る	糸切痕残る
215	包M121	B区	白磁椀								森田分類、白磁Ⅳ	
216	包M27	B区	青磁椀								鎬蓮弁で蓮弁数約28、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5	内外面とも施釉
217	包M122	B区	青磁椀								龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5	
218	包M26	E21	青磁盤	24.0				釉、暗灰緑色	良	堅緻	胎土明灰色、口縁部が横にひろき受け口となる	体部内面ケズリ
219	包M71	SD21西	土師器土釜	33.0				淡乳褐色	並、やや砂粒多し	良	口縁部は上端面を持つ	口縁部ヨコナデ
220	包M75	C14	土師器土釜	21.0				赤褐色	良 砂粒多し	良	口縁部外側に突帯を持つ	口縁部ヨコナデ
221	包M67	D25	土師器鍋	18.0				暗褐色	良	良	口縁部は、折り返されてわらび手状となる	口縁部ヨコナデ
222	包M66	F21	土師器鍋	21.0				暗褐色	良、白色粉	良	口縁部は、内側に折り返される	口縁部ヨコナデ
223	包M69	E17	土師器鍋	19.8				赤褐色	良（均質）	良	器壁が薄い。口縁部は内側に折り返される	口縁部ヨコナデ
224	包M68	F16	土師器鍋	29.0				乳褐色	良	良	器壁が薄い、口縁部は内側に折り返される。	口縁部ヨコナデ
225	包M70	D13	土師器鍋	34.0				乳褐色	良	良	口縁部断面三角形を呈する	口縁部ヨコナデ
226	包M71	F30	土師器鍋	25.0				乳褐色	良	良	口縁部断面三角形を呈する	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、スス付着
227	包M30	B区	土師器茶釜	12.0				赤褐色	良	良	口縁部が外側に折り返される	口縁部ヨコナデ
228	包M63	F18	土師器茶釜	10.8				淡乳褐色	良	良	内傾して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ
229	包M62	G27	土師器皿	9.0		1.3		橙褐色	良	良	口縁部が外反する	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
230	包M60	B区	土師器皿	7.6		1.4		淡橙褐色	良	良	薄手、口縁部が直立する	底部圧延、口縁部ヨコナデ
231	包M58	B区	土師器皿	8.0		1.4		乳褐色	良	良	薄手。口縁部は斜め上方に弯曲しつつ立ち上がる	口縁部ヨコナデ
232	包M61	B区	土師器皿	7.6		1.2		乳褐色	良	良	薄手。口縁部は斜め上方に弯曲しつつ立ち上がる	口縁部ヨコナデ
233	包M59	B区	土師器皿	6.6		1.2		淡茶褐色	良	良	薄手。口縁部は斜め上方に弯曲しつつ立ち上がる	口縁部ヨコナデ
234	包M64	F21	瀬戸・美濃産香炉	11.8				釉黄褐色	良	良	胎土黄褐色、口縁部は圧延され上端面を持つ	ロクロナデ
235	包M57	D9	瀬戸・美濃産鉄釉丸皿	10.0		2.2		釉漆黒色	精良	良	口縁部はやや外反する	口縁部内面に幅1.6cmの鉄釉がかかる
236	包M56	SD21西	天目茶碗	12.6		6.7		釉漆黒色	並	並	胎土黄褐色	ロクロナデ
237	包M65	D19	常滑甕	25.0				暗茶褐色	良、砂粒多し	良	口縁部は折り返され器壁に密着する	ロクロナデ
238	包M73	D19	常滑甕	38.0				茶褐色	粗	軟	口縁部は折り返され器壁に密着する	ロクロナデ
239	包M74	G18	常滑捏鉢	38.0				赤褐色	良	良	口縁部が上下に肥厚する	ロクロナデ
240	包M123	B区	軒丸瓦	15.4				明灰色	良	良	外区鋸歯文、複弁が1つ、間弁が1つ認められる	白鳳期、本薬師寺の創建期併行か
241	包M124	C区	銭貨					暗赤褐色			「熙寧元宝」初鋳1068年、直径2.4cm	北宋銭
242	包M125	B区	銭貨					暗赤褐色			「咸淳元宝」初鋳1266年、直径2.3cm	南宋銭
243	包M126	B区	銭貨					暗赤褐色			「寛永通宝」初鋳1627年、直径2.2cm	江戸期
244	包M127	B区	銭貨					暗赤褐色			「寛永通宝」初鋳1627年、直径2.2cm	江戸期

第9表　B地区包含層出土遺物観察表(2)

貝殻条痕が施される。馬見塚式併行期であろう。

○弥生時代中期

壺(160)　濁橙褐色で器壁が薄い。体部外面に5本1単位と3本1単位の櫛描平行線が交互に施される。

○奈良時代・平安時代

土師器皿(161～163)　(161)は、口径24.0cmで口縁部が内弯して立ち上がる。底部外面ヘラケズリ、口縁部乱ナデである。斎宮編年ＳＫ1098併行。(162)は、口径22.0cm、(163)が口径15.3cmで共に口縁部ヨコナデである。

土師器杯Ａ(164～169・173・174)　(164～166)は、器壁が厚く口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。(166)は、底部外面をヘラケズリしている。奈良後半のものである。(167)～(169)は、器壁が薄く口縁部が先細る。口径は、15～16cmである。奈良後半から末葉のものである。(173)は、平たい底部から直線的に立ち上がった口縁部が外反するもので、粘土ひも巻き上げ成形である。奈良時代後半のものである。(174)は、口径14.0cmのやや小ぶりのもので口縁部をヨコナデする。平安時代前半のものである。

土師器杯Ｃ(170～172)　口径11.6～12.6cm。色調淡褐色で粘土ひも巻き上げにより成形している。口縁部は、ヨコナデである。奈良時代後半のものである。

土師器皿(175)　口径14.4cmで底部は指でナデつけ口縁部を横ナデする。平安時代中期のものである。

土師器杯Ｂ(176)　口径17.0cmで体部外面をハケ調整している。平安時代前半のものである。

土師器長胴甕(179～181)　口径25cm前後で、体部内外面は、ハケ調整である。口縁部は、ヨコナデされる。

土師器把手付甕(182)　口径26.0cm。体部外面は、ハケ調整である。体部内面はヘラケズリしている。把手が一対つく。口縁部はヨコナデされる。

土師器小型甕(183～187)　口径15.0cm～17.0cm。体部内外面をハケ調整する。(183)は、体部内面下半をタテ方向にヘラケズリする。

これらの甕類は奈良時代のものである。

土師器竈(188)　口径24.0cm。内外面をハケ調整している。甕が据えられる部分はヘラケズリする。

須恵器杯Ａ(189)　口径13.0cm。器高3.0cm。褐灰色で器壁が厚い。底部外面をヘラケズリする。奈良時代中期のものである。

須恵器杯Ｂ(190・191)　(190)は、底部径11.2cm、(191)は、底部径9.0cmである。共に底部ヘラケズリ後に高台をはりつけている。奈良中期のものである。

須恵器杯Ｂ蓋(192～194)　(192・193)は、口径15.0～15.6cmで器高が低く偏平なタイプである。天井部外面をヘラケズリしている。畿内的な形式ものである。奈良中期のものである。(194)は、口径14.0cmで接地面が直立し先細る。奈良時代後半のものである。

須恵器甕(195・196)　(195)は、口径24.5cmで口縁部が上に引き出される。体部外面にタタキ、内面に青海波文がつく。(196)は、口径30.8cmで口縁部がやや上方に立ち上がる。頸部外面に、波状文がある。猿投産のものであろう。

須恵器盤(197)　口径18.0cm。杯部は、斜め上方に張り出した後外反する。折戸10号窯併行期であろう。

須恵器短頸壺(198)　口径15.0cm。器壁が薄く口縁部は、直立する。猿投産のもので鳴海32号窯から折戸10号窯期であろう。

須恵器長頸瓶(199)　頸部は細く、途中に凹線が施される。焼成、白色砂の混入度から在地産かと考える。奈良時代後半のものである。

須恵器把手付鉢(200)　把手部のみ残存する。幅5.4cm断面は円形。猿投窯産で、鳴海32号窯期のものである。

須恵器有耳短頸壺(201)　耳部分のみ残存する。幅4.0cm、断面径1.2cm。美濃須衛窯産で老洞期のものであろう。

灰釉陶器椀(202)　底径9.0cm。高台が三ヶ月状になる。底部は糸切痕をナデ消す。折戸53号窯併行期か。

○平安時代末期・鎌倉時代

山茶椀(203～212)　(203)～(210)は、口縁部が外反し、高台は高い。これらは藤澤編年のⅡ－4段階のものである。(207)の底部外面には、『上』と墨書されている。(211)・(212)は、底部径6.0～7.0cmで底部に糸切痕を残す。Ⅲ－6段階である。

山皿(213・214)　口径9.0cm程度で、平底で糸切痕を残す。口縁部先端部は尖る。Ⅲ－6段階である。

白磁椀(215)　口径16.0cm。玉縁口縁の白磁である。釉の色調は、濁乳白色である。白磁椀Ⅳ類である。

青磁椀(216・217)・盤(218)　口径16.0cm前後。体部外面に蓮弁が彫られる。(216)は、釉の色調淡灰緑

色で蓮弁は28弁程度である。(217)は、灰緑色である。龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類である。これらはは、当地域においては、山茶椀Ⅲ－6類と共伴することが多い。

土師器鍋(221•222) (221)は口径18.0cm。口縁部がわらび手状に立ち上がる。12世紀後半のものである。(222)は、口径21cmで色調暗茶褐色を呈し口縁部はわらび手に立ち上がり内面に沈線を持つ。12世紀前半のものである。

土師器皿(229) 口径9.0cm底部に指圧痕を残し、口縁部はヨコナデされる。12世紀後半のものである。

○室町時代

土師器土釜(219•220) (219)は、口径33cmで口縁部が、やや角ばり面を持つ。14世紀後半代のものであろう。(220)は、口径21.0cmで色調赤褐色を呈する。口縁部は内傾して先端が折り返され突帯状になる。16世紀のものである。

土師器鍋(223～225) (223)は口径19.8cm、(224)は29.0cmでいずれも口縁部が折り返されている。15世紀末のものである。(225)は、口径34.0cm。口縁の断面形は、三角形である。16世紀代のものである。

土師器茶釜型土器(227•228) (227)は、口縁部が外側に折り返される。口径は、12.0cmである。15世紀後半のものである。(228)は、口径10.0cmで口縁部が断面形三角形になる。16世紀代のものである。

土師器皿(230～233) (230)は、薄手で偏平な底部から口縁部は直立して先細るものである。(231)～(233)は、口径6.0cm～8.0cmの手づくねの小皿である。これらは、15世紀後半～16世紀代のものである。

常滑産甕(237・238) (237)は、口径25.0cm。15世紀末のものである。(238)は、口径38.0cmで口縁部は折り返されて肩部に密着する。16世紀のものである。

瀬戸・美濃産天目茶椀(236) 口径12.6cm、釉色調漆黒色で、胎土は黄褐色である。大窯Ⅰ期のものである。

○安土桃山時代・江戸時代初期

瀬戸•美濃産香炉(234) 口径11.8cm。釉色調黄褐色で内面は、口縁部のみ施釉される。大窯Ⅴ期のものであろう。

瀬戸•美濃産鉄釉丸皿(235) 口径10.0cmで口縁部が外反する。釉色調は、漆黒色である。胎土は精良で焼成は良好である。大窯ⅤからⅥ期月山窯、白山社窯併行期であろう。

常滑産捏鉢 口径38.0cm。色調赤褐色である。大ぶりで口縁部が上下に引き伸ばされる。17世紀代のものである。

土師器鍋(226) 口径25.0cm。口縁部は、断面形三角形である。器高が低い。江戸初期のものであろう。

○白鳳時代瓦・室町時代・江戸時代銭貨

軒丸瓦(240) 推定口径15.4cm。色調明灰色で胎土、焼成ともに良好である。外区に鋸歯文をめぐらし、蓮弁は複弁である。本薬師寺タイプのものである。

銭貨(241～244) (241)は、「熙寧元宝」(北宋銭初鋳1068年)で直径2.4cmである。C地区包含層出土であるがここに列記した。(242)は、「咸淳元宝」(南宋銭、初鋳1260年)で直径2.3cmである。(243)は、「寛永通宝」で初鋳は1627年である。直径2.2cm。(244)は、「寛永通宝」で直径2.2cmである。

C 地区

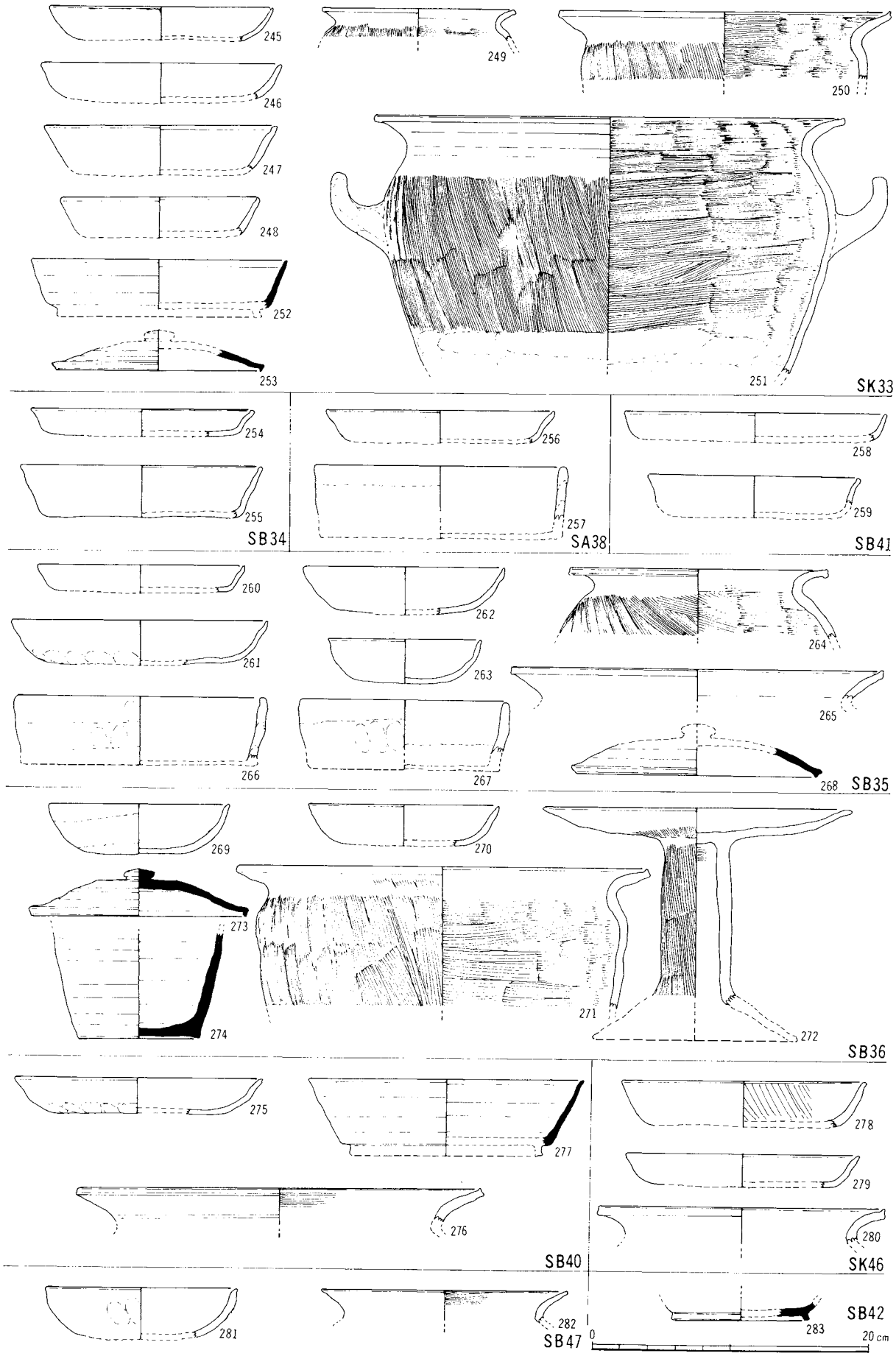
1. 奈良時代•平安時代初期の遺構出土遺物

○SK33

土師器杯A(245～248) (245)•(246)は、口径16～17cmで底部をヘラケズリする。口縁部の立ち上がりが丸味を持つものである。(247)は、口径16.8cmで口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がるものである。(248)は、口径14.4cmと小ぶりで、器形は(247)と同タイプのものである。

土師器甕(249)•(250) (249)は、口径14.9cmの小型のもので体部内外面をハケ調整している。(250)は、口径24.0cmで体部内外面をハケ調整し、口縁部はヨコナデである。

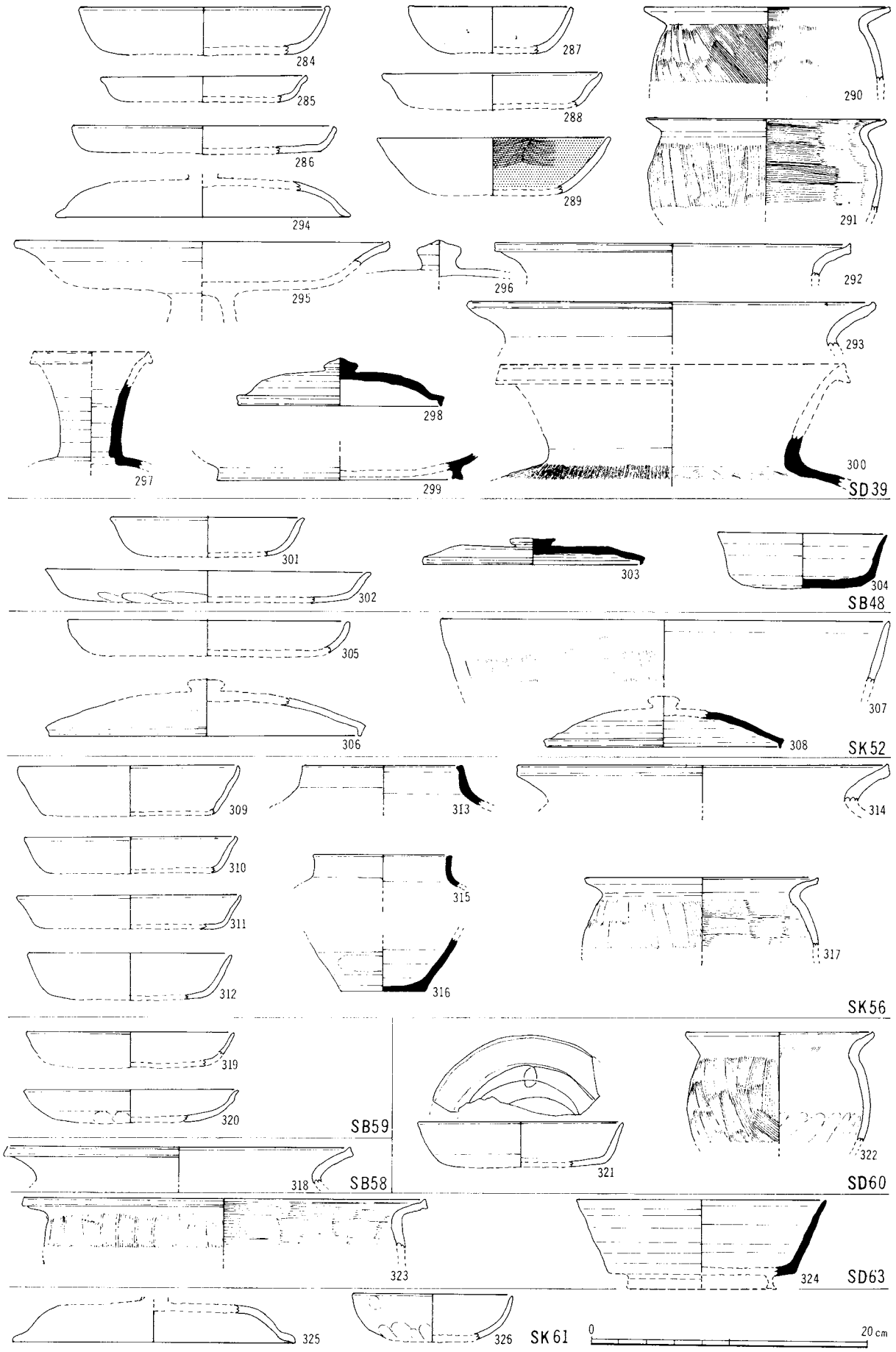
土師器把手付甕(251) 口径33.8cm。体部内外面



第29図　C地区遺構出土遺物実測図（1）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
245	M12	SK33	土師器杯A	16.0		3.4	21	橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は斜め上方に引き上げられやや丸味を帯びる	底部外面ケズリ、口縁部ヨコナデ
246	M215	SK33	土師器杯A	17.4		3.0	17	淡橙褐色	良、赤色土	良	器壁がやや厚い	底部不明、口縁部ヨコナデ
247	M13	SK33	土師器杯A	16.8		3.6	21	橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は斜め上方に立ち上がり内面に沈線を持つ	底部不明、口縁部ヨコナデ
248	M14	SK33	土師器杯A	14.4		2.9	20	淡橙褐色	やや粗	良	口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる	口縁部ヨコナデ
249	M16	SK33	土師器甕	14.0				淡橙褐色	良	良	口縁部は外反し、端部が角ばる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコナデ、口縁部ヨコナデ
250	M17	SK33	土師器甕	24.0				橙褐色	良	良	口縁部は外反し、端部が角ばる	体部外面タテハケ、体部内面ヨコナデ、口縁部ヨコナデ
251	M18	SK33	土師器把手付甕	33.8				橙褐色	良	良	体部下半に最大径がある。口縁部は外反し、端部が角ばる	体部外面上半タテハケ、体部内面上半ヨコハケ、体部外角下半ヨコ端ヘラケズリ、体部内面下半ヨコ端ヘラケズリ
252	M11	SK33	須恵器杯B	16.4		4.1	25	淡灰色	良	良	杯部は斜め上方に直線的に立ち上がる	ロクロナデ
253	M10	SK33	須恵器杯B蓋	14.8		3.0	20	淡灰色	良	良	接地面が内側を向く	ロクロナデ
254	M46	SB34	土師器皿	16.4		2.0	12	赤褐色	精良	堅緻	器高がやや低い、口縁部がわらび手状になる	底部ケズリ、口縁部ヨコナデ
255	M45	SB34	土師器杯A	17.6		2.4	13	淡橙褐色	良、砂粒多し	良	口縁部は直線的に斜め上方に引き出されて端部が丸い	底部不明、口縁部ヨコナデ
256	M31	SA38	土師器皿	16.8		2.4	14	橙褐色	良	良	口縁部は斜め上方に立ち上がり、先端が上を向く	口縁部ヨコナデ
257	M32	SA38	土師器製塩土器	17.6	17.6	5.2	30	赤褐色	粗硬質砂粒多し	並	口縁部が直立し、端部が四角い	粘土ひも巻き上げ（幅1.5〜2cmで3重につぐ）
258	M52	SB41	土師器皿	19.0		2.1	11	赤褐色	良、赤色土	良	口縁端部が丸くなる	口縁部ヨコナデ
289	M53	SB41	土師器杯	14.4		3.0	21	橙褐色	良	良	器壁がやや薄くなり口縁端部がわらび手状となる	口縁部ヨコナデ
260	M44	SB35	土師器皿	15.0		2.2	15	橙褐色	良、赤色土	良	器高が低い、口縁部は斜め上方に引き出されて先細る	口縁部ヨコナデ
261	M34	SB35	土師器杯A	18.4		3.2	17	橙褐色	良、赤色土	良	薄手である。底部から丸味を持って立ち上がり口縁端が先細る	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
262	M38	SB35	土師器杯A	14.4		3.6	25	淡乳褐色	良	良	器高が高い。口縁部は	底部外角ユビオサエ、底部内面乱ナデ、口縁部ヨコナデ
263	M37	SB35	土師器杯C	14.5		3.2	22	淡乳褐色	良、白色土	良	口縁が外反し先細る。	底部外面ユビオサエ、口縁部スス付着（灯明用か）
264	M43	SB35	土師器長胴甕	18.6				褐　色	良、白色土	良	口縁部は外反し、端部は角ばる。長胴甕か	体部外面タテハケ（6本／1.4cm）体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
265	M48	SB34	土師器長胴甕	24.0				淡橙褐色	良、白色細砂	良	口縁部端部が角ばる	口縁部ヨコナデ
266	M40	SB35	土師器製塩土器	18.0		4.8	27	橙褐色	粗	良	器壁がやや薄い、口縁端部が角ばる	粘土ひも巻き上げ
267	M41	SB35	土師器製塩土器	15.0		5.0	33	橙褐色	粗	並	器壁がやや薄い、体部が直立し、口縁部は角ばる	粘土ひも巻き上げ
268	M42	SB35	土師器杯B蓋	17.0		3.6	21	灰　色	並	良	接地部分の引き上げが不十分で断面三角形となる	ロクロナデ
269	M36	SB36	土師器杯C	13.2		3.7	28	淡乳褐色	粗	並	器高が高い、口縁部は細くなり外反する	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
270	M3	SB36	土師器杯C	14.0		3.0	21	橙褐色	良、白色土	良	口縁部は先が細くなり尖る	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
271	M4	SB36	土師器把手付甕	27.6				橙褐色	良	良	体部外面ハケ	体部外面タテハケ（8本／1.5cm）、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
272	M5	SB36	土師器高杯	22.0		16.8	76	淡橙褐色	良	良	細長い脚部から杯部は横にはり出す。	脚部外面タテハケ、杯部外面放射状ハケ
273	M2	SB36	須恵器杯B蓋	15.6		3.6	23	淡灰色	良	良	接地部は外反する	天井部外面ケズリ、宝珠つまみはりつけ
274	M1	SB36	須恵器双耳瓶		8.8			暗赤灰色	並、砂粒多し	良	底部はやや上げ底状になる	底部に糸切痕残る
275	M29	SB40	土師器杯A	12.0		2.6	14	淡橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は外反し先細る	底部外面ユビオサエの後ケズリ
276	M51	SB40	土師器甕	29.0				淡褐色	良、白色土	良	口縁部は角ばる	口縁部ヨコナデ
277	M49	SB40	須恵器杯B	20.0		5.6	28	灰　色	並、白色砂	良	器壁はやや薄い、杯部は斜め上方に直線的に立ち上がる	ロクロナデ、ロクロ回転時計回り
278	M66	SK46	土師器杯A	17.6		3.2	18	赤褐色	精良	堅緻	器壁はやや厚い。口縁部内面に沈線を持つ	内面に暗文（4mm）、口縁部ヨコナデ
279	M67	SK46	土師器皿	16.8		2.4	14	橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は斜め上方に引き上げられ先端がわらび手状になる	口縁部ヨコナデ
280	M68	SK46	土師器甕	21.0				淡橙褐色	良	良	口縁部は外反し、先端が上方につまみ出される	口縁部ヨコナデ、南面にヨコハケが残る
281	M63	SB47	土師器杯C	14.0		3.8	27	淡褐色	良	良	器高が高い、口縁部はやや外反し先細る。	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ、体部外面ユビオサエ
282	M64	SB47	土師器甕	18.0				淡橙褐色	良	良	口縁部は内弯しつつ立ち上がる	口縁部外面、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ
283	M30	SB42	須恵器杯B		10.0			明灰色	良	良	高台が外開きになる	糸切痕ナデ消し、ハリツケ高台

第10表　C地区遺構出土遺物観察表(1)



第30図　C地区遺構出土遺物実測図（2）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態の特徴	成形上の特徴
284	M33	SD39	土師器杯A	18.0		3.5	19	淡褐色	精良	良	器壁がやや厚い、口縁部内面に沈線	口縁部ヨコナデ
285	M58	SD39	土師器皿	15.0		2.0	13	橙褐色	良	良	口縁部はゆるやかに外反し端部が丸い。	口縁部ヨコナデ
286	M35	SD39	土師器皿	19.0		2.0	11	橙褐色	良	良	平たい底部からやや急に立ち上がり口縁端が先細る	底部外面ケズリ、口縁部ヨコナデ
287	M34	SD39	土師器杯C	12.0		3.4	28	淡褐色	やや粗	良	器高が高い、口縁部内面に沈線を持つ	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ
288	M57	SD39	土師器杯A	16.0		2.5	16	赤褐色	良	良	口縁部は外反した後その先端が上を向き先細る	口縁部ヨコナデ
289	M28	SD39	黒色土器杯	17.0		4.1	24	外側橙褐色 内側黒色	良、赤色土	良	斜め上方に立ち上がり口縁部が先細る	体部内面ヘラミガキ、黒色いぶし
290	M23	SD39	土師器甕	17.8				杯褐色	荒、白色砂	良	口縁部が直線的に斜め上方に開く	体部外面タテハケ、体部内面タテハケ、口縁部ヨコナデ
291	M59	SD39	土師器甕	17.0				橙褐色	良、均質	良	体部がやや短い、口縁部は外反した後先端が上に引き出される	体部外面
292	M26	SD39	土師器長胴甕	20.8				赤褐色	良	良	口縁部は外反し角ばる	口縁部ヨコナデ
293	M25	SD39	土師器長胴甕	19.8				淡乳褐色	良	良	器壁がやや厚い	口縁部ヨコナデ
294	M24	SD39	土師器杯B蓋	21.4				淡赤褐色	精良	良	器壁がやや厚い、口縁部は外反する	天井部外面ケズリ、口縁部ヨコナデ
295	M60	SD39	土師器高杯	27.0				橙褐色	良	良	口縁部は外反し先端が上を向く	体部外面ハケ、口縁部ヨコナデ
296	M27	SD39	土師器蓋					橙褐色	精良	良	宝珠部高さ2.2cm、最大径3.2cm	宝珠つまみはりつけ
297	M54	SD39	須恵器長頸瓶	8.0				青灰色	良	軟	頸部は急に立ち上がる	まず体部を成形した後、頸部が継ぎ足される
298	M	SD39	須恵器杯B蓋	14.8		3.5	24	淡灰色	良、白色微砂	良	口縁部先端が真下を向く	天井部外面ケズリ、宝珠つまみハリツケ
299	M56	SD39	須恵器杯B		18.0			灰　色	良	良	高台がはりつけ時に強くヨコナデされ左右に端部がひろがる	はりつけ高台
300	M55	SD39	須恵器甕	30.0				青灰色	並、白色砂	良	頸部は斜め上方に外反しつつ立ち上がる、頸部19.0cm	体部外面タタキ体部内面青海波文
301	M20	SB48	土師器杯A	14.0		2.9	21	赤褐色	良	良	体部は外弯しつつ斜め上方に引き出され口縁端は外反する	口縁部ヨコナデ
302	M19	SB48	土師器皿	23.5		2.4	10	橙褐色	良	良	口縁部はやや外反する	底部外面ケズリ、底部内面乱ナデ、口縁部ヨコナデ
303	M7	SB48	須恵器杯B蓋	16.4		1.8	11	灰　色	粗、白色砂	良	器高が低い、口縁端面は断面三角形となる	天井部外面ケズリ、宝珠つまみハリツケ、ロクロ回転時計回り
304	M8	SB48	須恵器杯A	12.0		4.0	33	灰　色	良	良	体部は急に立ち上がり、口縁部内面に面を持つ	底部外面ケズリ、口縁部ロクロナデ、ロクロ回転時計回り
305	M74	SK52	土師器皿	20.4		2.6	13	橙褐色	良	良	口縁部は丸味を持つ	口縁部ヨコナデ
306	M75	SK52	土師器杯B蓋	23.0		4.0	17	橙褐色	粗	良	口縁部が外反し、先端は直立する	天井部内外面ハケ
307	M73	SK52	土師器甑	32.6				赤褐色	良、赤色土	良	口縁部内面に面を持つ	体部内外面ハケ、口縁部ヨコナデ
308	M8	SK52	須恵器杯B蓋	16.8		3.8	19	青灰色	良	良	口縁部端が直立する	天井部外面ロクロケズリ
309	M73	SK56	土師器杯A	16.0		3.8	24	淡橙褐色	良	良	器壁が薄い。口縁部は直立し先細る	口縁部ヨコナデ
310	M2	SK56	土師器杯A	15.2		2.7	18	赤褐色	良	良	体部は直線的に斜め上方に引き出される、口縁部は丸い。	口縁部ヨコナデ
311	M77	SK56	土師器杯A	17.8		2.5	14	赤褐色	良	良	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁内面に沈線	口縁部ヨコナデ
312	M3	SK56	土師器杯A	15.0		2.4	16	濁褐色	良、白色砂	良	体部丸味を持って立ち上がる。口縁部は外反する	口縁部ヨコナデ
313	M80	SK56	土師器短頸壺	11.0				橙褐色	良、赤色土	良	口縁部は内傾し角ばる。いわゆる業壺である	口縁部ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケの後ヨコナデ
314	M76	SK56	土師器甕	27.0				橙褐色	良	良	口縁端が上を向き先細る。	口縁部ヨコナデ
315	M81	SK56	須恵器短頸壺	9.4				淡赤褐色	良、白色砂	良	口縁部は直立し、上端面を持つ	口縁部ヨコナデ
316	M82	SK56	須恵器短頸壺	6.2				淡赤褐色	良	良	底部平底	底部外面ヘラケズリ、底部下半ヘラケズリ
317	ME1	SK56	土師器甕	17.0				濁褐色	良	良	口縁部は外反し、先端がつまみ出されて上を向く	体部外面タテハケ（8本／1.8cm）、体部内面上半ヨコハケ、体部内面下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
318	ME72	SB58	土師器甕	25.0				淡橙褐色	良	良	口縁部は外反し、先端がつまみ出されて上を向く。	口縁部ヨコナデ
319	ME83	SB59	土師器皿	14.6				淡褐色	良	良	口縁部は斜め上方に立ち上がる	口縁部ヨコナデ
320	ME5	SD59	土師器皿	15.4		2.3	15	赤褐色	良	良	器高が低い。口縁部が外反する	底部外面ユビオサエ、内面乱ナデ、口縁部ヨコナデ
321	MF7	SD60	土師器杯A	15.0		3.2	21	淡褐色	良	良	口縁部は直線的に立ち上がる	底部外面ヘラケズリ、底部内面ラセン状暗文、口縁部ヨコナデ
322	MF8	SD60	土師器甕	13.6		12.0	88	濁褐色	粗	並	口縁部はやや厚く、端部が上を向く	体部外面タテハケ、体部内面下半ヘラケズリ、上半ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
323	M7	SD64	土師器甕	29.0				淡褐色	良	良	口縁端部が角ばる	体部外面ヨコハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
324	M6	SD64	須恵器杯B	18.0	11.0	6.3	35	青灰色	良、白色砂	良	器高が高い、杯部は斜め上方に直線的に立ち上がる	底部外面ヘラケズリ、ロクロナデ
325	M22	SK65	土師器壺蓋	20.2		5.0	25	赤褐色	良	良	口縁部が外反する	天井部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
326	M21	SK65	土師器杯C	10.4		3.4	33	淡褐色	良	良	器高が高い。口縁部は先細る	粘土ひも巻き上げ、底部外面ユビオサエ

第11表　C地区遺構出土遺物観察表(2)

上半をハケ調整し、下半をヘラケズリする。口縁部はヨコナデする。胴部には、把手がつく。

須恵器杯B(252)　口径16.4cmでやや器高が低い。口縁部は、外反する。

須恵器杯B蓋(253)　口径14.8cmで、接地面がやや内側を向く。折戸10号窯併行期である。

○SB34

土師器皿(254)　口径16.4cmで器壁がやや薄い。口縁部は、外反した後わらび手状に上を向く。底部は、ヘラケズリされる。

土師器杯A(255)　口径17.6cm。口縁部は、斜め上方に直線的に立ち上がり先端が丸くなる。

これらは、北辺西より2番目の柱穴から出土した。いずれも斎宮編年SK1291併行期である。

○SB35

土師器皿(260)　口径15.0cm。器高が低い。口縁部は、外反して立ち上がり先端が上を向く。

土師器杯A(261・262)　(261)は、口径18.4cmで器壁が薄い。底部外面に指圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。(262)は、口径14.4cmで口縁部は斜め上方を向いて立ち上がり先細る。底部外面に指圧痕が残る。

土師器杯C(263)　口径11.2cm。口縁部が外反し先細る。底部外面ユビオサエ。口縁部にススが付着している。

土師器長胴甕(264)(265)　口径18.6cm。口縁部は外反し端部が肥厚する。体部内外面は、ハケ調整される。(265)は、口径24.0cmで口縁部をヨコナデしている。

土師器製塩土器(266・267)　口径15.0～18.0cm。やや薄手で体部は直立し、口縁端部が角ばる。粘土ひも巻き上げ成形である。

須恵器杯B蓋(268)　口径17.0cm。接地部分の作りが不充分で断面形三角形となる。

これらの遺物は、斎宮編年のSK1445併行期で平安時代初期のものである。(261)(268)は、北辺東より3番目の柱穴から出土。(261)～(265)は北辺西より2番目の柱穴から出土した。(266)(267)は、北辺西より3番目の柱掘形から出土した。

○SB36

土師器杯C(269・270)　口径13～14cm。口縁部が外反し、先細る。粘土ひも巻き上げ成形である。

土師器把手付甕(271)　口径27.6cm。体部内外面ハケ調整され、口縁部はヨコナデされる。

土師器高杯(272)　口径22.0cm。口縁部は外反し、端部が丸味を持つ。杯部外面ハケ調整。

須恵器杯B蓋(273)　口径15.6cm。天井部外面はヘラケズリされる。接地面が外反する。色調淡灰色で、良質の胎土には白色砂を含む。在地産のものであろう。

須恵器双耳瓶(274)　底部径8.8cm。底部に糸切痕が残る。色調暗赤灰白である。猿投産のもので折戸10号窯段階であろう。(269)は、南東隅柱穴出土。(271)・(272)(274)は、東辺北から2番目の柱掘形出土。(270)・(272)は、東辺南より2番目の柱掘形出土である。

○SB38

土師器皿(256)　口径16.8cmで口縁部をヨコナデする。

土師器製塩土器(257)　口径17.6cm。器壁がやや薄く、口縁部は角ばる。粘土ひも巻き上げ成形で、体部外面に指圧痕が残る。両肩とも南端柱掘形出土である。

○SB41

土師器皿(258)　口径19.0cm。やや厚手で口縁部が直線的に立ち上がる。東辺南より2番目の柱穴出土。

土師器杯A(259)　口径15.0cm。口縁部はやや外反して立ち上がる。東辺南より2番目の柱穴出土。

○SB40

土師器杯A(275)　口径18.0cm。口縁部は、外反し先細る。底部は、ユビオサエの後ヘラケズリしている。

土師器甕(276)　口径27.0cm。口縁部が角ばる。

須恵器杯B(277)　口径20.0cm。口縁部は外反し内側に面を持つ。

(276)は、東辺北より2番目の柱掘形出土。(277)は、北東隅柱掘形より出土した。

○SK46

土師器杯A(278)　口径17.6cm。やや厚手で口縁部は、斜め上方に立ち上がる。内面に暗文を持つ。

土師器皿(279)　口径16.8cm。やや厚手で口縁部は、やや外反する。

土師器甕(280)　口径21.0cm。口径をヨコナデする。

○ＳＢ47

土師器杯Ｃ(281)　口径14.0cm。粘土ひも巻き上げにより成形される。口縁部は、ヨコナデされている。

土師器甕(282)　口径18.0cm。口縁部はヨコナデされる。(281)•(282)は、南東隅柱掘形出土。

○ＳＢ42

須恵器杯Ｂ(283)　底部径10.0cm。糸切痕を消している。高台は外開きになる。西辺南より２番目の柱掘形出土

○ＳＤ39

土師器杯Ａ(284・288)　(284)は、口径18.0cmで口縁部がゆるやかに立ち上がるものである。(288)は、口径16.0cmで口縁部が屈曲しながら立ち上がる。口縁部は、横ナデされる。

土師器皿(285)•(286)　(285)は、口径15.0cmで口縁部がヨコナデされる。(285)は、口縁部ヨコナデである。

土師器杯Ｃ(287)　口径12.0cm。粘土ひも巻き上げ痕が残る。

黒色土器杯(289)　内面に平行ヘラミガキが施される。内面黒色の土器である。口径17cm。

土師器甕(290～293)　(290)•(291)は、17cm～18.0cm程度の小型の甕で内外面ともハケ調整される。(292)は、口径20.8cm(293)は、29.0cmである。

土師器杯Ｂ蓋(294)•(296)　(294)は、口径21.4cm。(296)は、宝珠つまみのみ残存する。いずれも橙褐色で、胎土は精良である。

須恵器長頸瓶(297)　口径8.0cm。上胴部との接合は2段つぎである。猿投産のもので折戸10号窯古段階である。

須恵器杯Ｂ蓋(298)　口径14.8cm。口縁部が直立する。

須恵器杯Ｂ(299)　底部径18.0cm。高台部はりつけ。

須恵器甕(300)　頸部18.4cm、体部外面タタキ、内面青海波文が施される。

(298)•(299)•(300)は、青灰色で、胎土に含む白色砂の度合を考慮すると在地のものと考えたい。いずれも折戸10号窯段階のものである。

○ＳＢ48

土師器杯Ａ(301)　口径14.0cm。口縁部が外反する。口縁部はヨコナデされる。

土師器皿(302)　口径23.5cm。口縁部が外反する底部外面ヘラケズリ。

須恵器杯Ｂ蓋(303)　口径16.4cm。天井部外面ヘラケズリ。器高の低いものである。

須恵器杯Ａ(304)　口径12.0cm。底部外面ロクロケズリ。口縁部は、やや外反して内面に端面を持つ(301)•(302)は、南辺中央柱穴出土。(303)•(304)は、北西隅柱穴より出土。斎宮編年ＳＫ1098併行期である。

○ＳＫ52

土師器皿(305)　口径20.4cm。口縁部ヨコナデ。

土師器杯Ｂ蓋(306)　口径23.0cm。口縁部端面の断面形三角形である。天井部外面にハケ調整が残る

土師器甑(307)　口径32.6cm。体部外面にハケ調整がなされる。

須恵器杯Ｂ蓋(308)　口径16.8cm。口縁部が直立する。

これらは、斎宮編年ＳＫ1098併行期である。

○ＳＫ56

土師器杯Ａ(309)～(312)　口径15.0cm～17.8cm。口縁部ヨコナデである。

土師器短頸壺(313)　口径11.0cm。口縁部は、内傾する。

土師器甕(314・317)　(314)は、口径27.0cm、(317)は、17.0cmである。共に口縁部はヨコナデされる。

須恵器短頸壺(315•316)　(315)は、口径9.4cmで口縁部が直立し端部が角ばる。(316)は、底部径6.2cmで底部外面をヘラケズリしている。

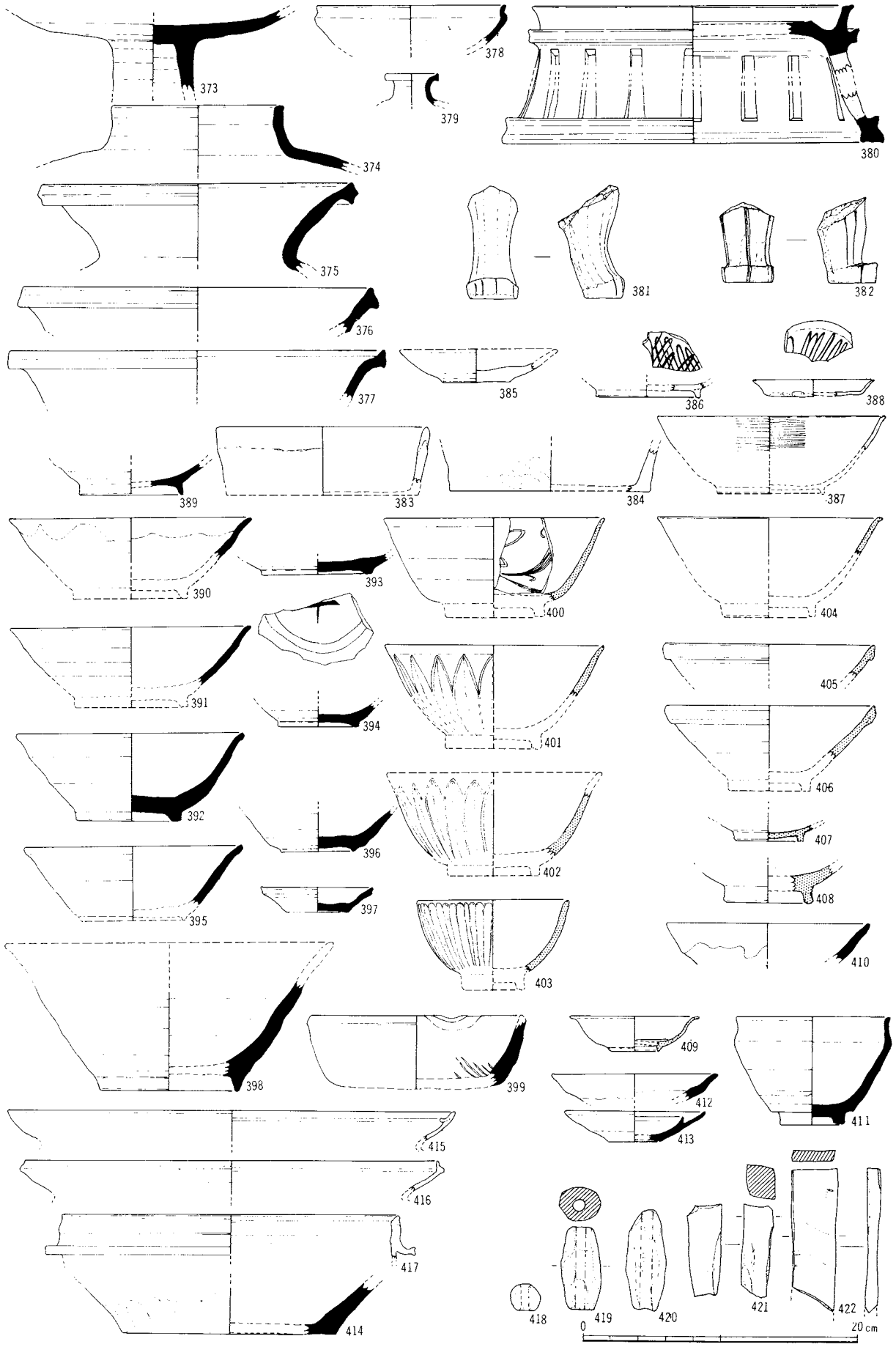
これらは、奈良時代末期から平安時代初期のものである。

○ＳＢ58

土師器甕(318)　口径25.0cm。口縁部をヨコナデする。奈良時代末期から平安時代初期のものである北辺中央柱穴から出土した。

○ＳＢ59

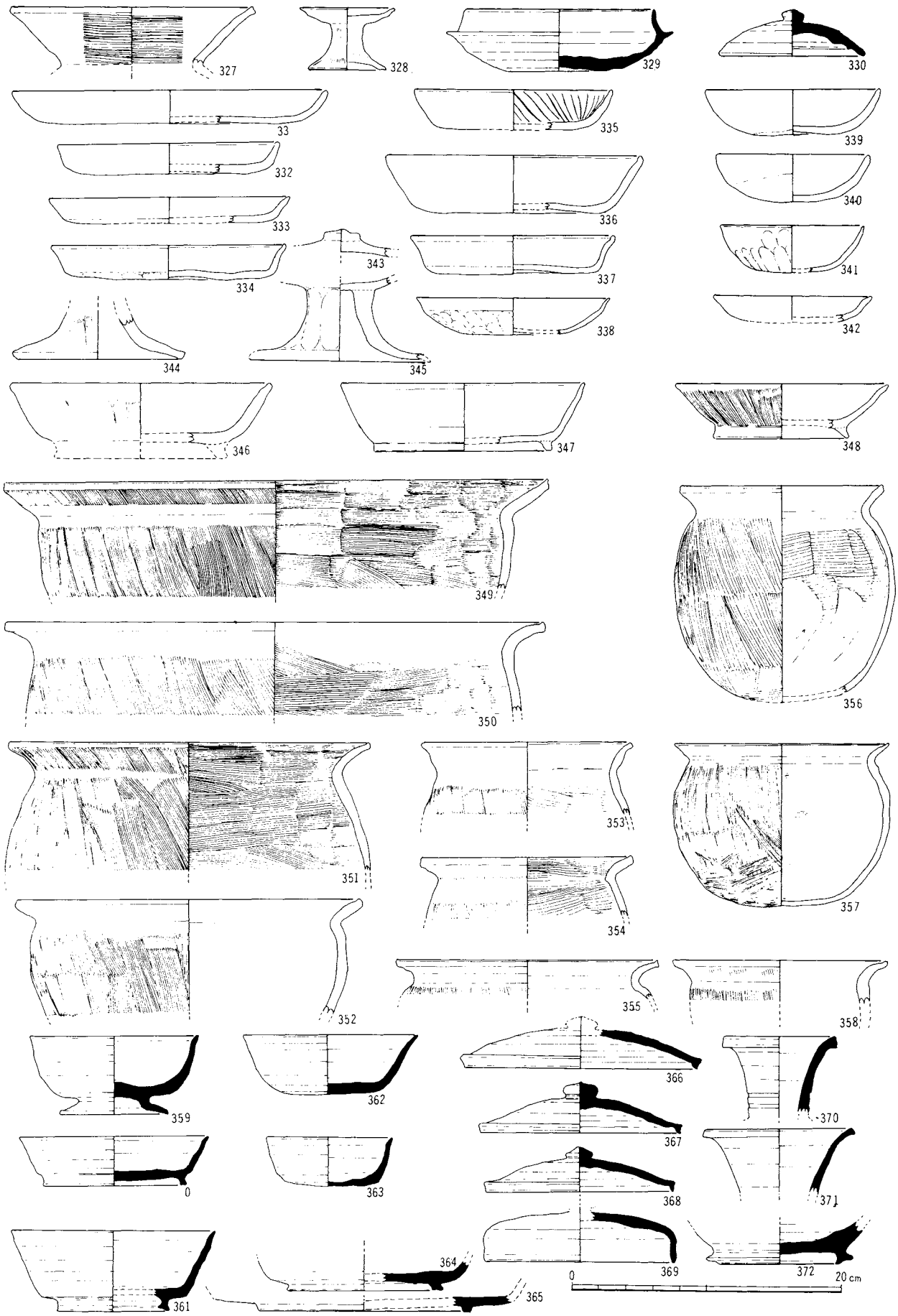
土師器皿(319•320)　口径14.6cm、15.4cm。口縁部ヨコナデ。(320)は、底部指オサエである。平安時代前半のものである。(319)は、南辺西より３番目の柱穴から出土した。(320)は、南辺西より４番目の柱穴から出土した。



第31図　C地区包含層出土遺物実測図（1）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	経高指数	色調	胎土	焼成	形態上の特徴	形態上の特徴
327	M25	C11	土師器壺	18.0				濁赤褐色	稍良	良	口縁部端部が角ばる。	口縁部外面ハケ＋ヘラミガキ、内面ヘラミガキ
328	M131	F17	土師器小型器台	7.0		4.4	63	淡褐色	良砂粒	良	底部接地面が尖る。口縁部外反する。	底部外面ハケ、脚部外面ハケ、杯部外角ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
329	ME2	E区	須恵器杯身	14.0		4.5	32	濃灰色	良	堅緻	口縁部は内傾して急に立ち上がる。	底部外面ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り
330	NE26	E区 D24	須恵器杯蓋	10.6		32		淡灰色	良、砂粒多し	良	口縁部に反りが認め。	天井部外面ケズリ。
331	ME31	E3	土師器皿	23.0		2.4	10	淡赤褐色	良	良	口縁部は斜め上方に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。
332	N54	B2	土師器皿	16.2		2.2	14	乳褐色	良、白色砂	良	器壁が厚い。	底部不明　口縁部ヨコナデ。
333	MF2	C区	土師器皿	16.0		2.0	13	赤褐色	良	良	口縁部は斜め上方に向き、先端部が尖る。	底部外面ケズリ。
334	M102	B7	土師器皿	16.2		2.6	16	橙褐色	稍良	堅緻	底部に凹凸がある。口縁部は直立する。	底部ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。
335	MF4	E5	土師器杯	14.8		3.0	20	淡橙褐色	良	良	器壁が厚い。口縁部内面、内面と沈線。	口縁部ヨコナデ。
336	N37	F16	土師器杯	18.4		4.4	24	淡赤褐色			斜め上方に立ち上がり先端が内側につまみ出される。	口縁部ヨコナデ。
337	M102	B11	土師器杯	15.0		2.8	19	橙褐色	良	良	体部の立ち上がりが急である。口縁部がわらび手状になる。	底部外面ユビオサエの後ケズリ。口縁部ヨコナデ。
338	M931	B13	土師器杯	14.4		2.7	19	淡橙褐色	良	良	体部は斜め上方に立ち上がり口縁部は外反し先細る。	底部外面ユビオサエ、内面乱ナデ、口縁部ヨコナデ。
339	N43	A7	土師器皿	12.8		3.4	27	淡褐色	良	並		粘土ひも巻き上げ、底部ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。
340	NE29	D24	土師器椀	11.2		3.6	32	淡茶褐色	良	良	器高が高い。口縁端部が丸くなる。	粘土ひも巻き上げ、口縁部ヨコナデ。
341	MF3	E6	土師器椀	10.4		3.4	33	淡褐色	並、白色砂	並	器高が高い。口縁部は斜め上方に引き出され先細る。	粘土ひも巻き上げ、底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。
342	NE16	E5	土師器杯	11.6		2.0	17	赤褐色	良、金雲母	良	口縁部がヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。
343	N54	A4	土師器薬壺蓋	つまみ径 2.6				淡赤褐色	良	軟	つまみの凹みがない。	はりつけ。
344	N57	A1	土師器高杯		12.0		カス	淡赤褐色	良、砂粒多し	軟	器壁がやや厚い。	外面ハケ、内面ナデ。
345	MF14	C8	土師器高杯		13.6	脚高 5.6	42	赤褐色	良	良	脚部6面以上の多角形。	脚部外面タテケズリ、内面上半棒状工具ぬき取り底。
346	N38	A3	土師器杯B	18.8	12.8	5.4	29	乳褐色	良、細砂	良	器壁が厚い。口縁部内面に沈線。	杯部外面タテハケ、内面暗文か、口縁部ヨコナデ
347	ME3	排水路	土師器杯B	18.0	13.0	5.0	28	赤褐色	稍良	良	口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。	高台ハリツケ、口縁部ヨコナデ。
348	MG32	G区	土師器杯B	15.8	9.6	4.0	25	赤褐色	良、赤色粉	良	器高が浅く、口縁部は外反する。	体部外面タテハケ、ハリツケ高台。
349	MF5	F区	土師器把手付甕	40.2				橙褐色	良	良	口縁部は斜め上方に立ち上がる。広口甕か。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ。
350	NE19	D16	土師器甕	39.6				淡褐色	良、細砂	良	口縁部は外反し、口縁端が上を向く。	体部外面タテハケ（8寸／1cm）、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。
351	ME6	排水路	土師器甕	26.4				橙褐色	良	良	やや器壁が薄い。	体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。
352	M58	B2	土師器甕	25.0				乳褐色	良、細砂	良	口縁部は斜め上方に短く引き出され端部が丸くなる。	体部外面タテハケ、体部内面ナデ、口縁部ヨコナデ。
353	NE28	E3	土師器小型甕	14.2				淡茶褐色	良細砂金雲母	良	口縁部は直立した後外反し先が丸くなる。	
354	NE7	F5	土師器小型甕	15.4				淡褐色	稍良	良	器壁が厚い。口縁部が角ばる。	
355	MF18	E6	土師器小型甕	19.6				濁褐色	良	良	頸部は強くナデられ口縁部は外反し角ばる。	ハケ3.2cm幅14本　体部外面タテハケ、内面不明、口縁部ヨコナデ。
356	NE32	D10	土師器小型甕	14.8				淡茶褐色	良	良	体部はやや縦長となる。口縁部は、	体部外面タテハケ、体部内面上半ヨコハケ、下半ケズリ、口縁部ヨコナデ。
357	ME4	排水路	土師器小型甕	16.0				淡橙褐色	良	良	体部がやや扁平である。	体部外面タテハケ体
358	NE17	E5	土師器小型甕	15.6				淡褐色	良	良	器壁が厚い。口縁部が外反し、先端が丸くなる。	体部外面タテハケ、体部内面ケズリの後ナデ、口縁部ヨコナデ。
359	M4	C5	須恵器高杯	12.4	8.0	5.6	45	灰色	粗	並	脚部は外開きになる。体部は外弯する。	脚部ハリツケ、体部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。
360	MF15	E15	須恵器杯B	14.0	10.8	2.6	19	淡褐灰色	良	良	体部は直立し。口縁部内面に端面を持つ。	底部ヘラケズリ、ハリツケ高台、ロクロナデ、ロクロ回転時計回り。
361	MC67	SD39 上面	須恵器杯B	15.0	15.0	6.0	40	濃灰色	良、均質	良	口縁部は斜め上方に立ち上がり、内面に面を持つ。	底部外面ヘラケズリ、ハリツケ高台。
362	ME1	C10	須恵器杯A	13.4				灰色	良、白色砂	良	底部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ。
363	MC	C5	須恵器杯A	9.4		3.7	39	灰色	良	良	口縁部は急に立ち上がりやや外反する。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ。
364	NE12	D5	須恵器杯B		11.4			青灰色	良、砂粒多し	良	高台が外開きとなる。	底部ヘラケズリ、ハリケツ高台
365	N27	G5	須恵器杯B		15.4			淡褐灰色	良、砂粒多し	良	高台は直立し、断面四角形である。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロクナデ、ハリツケ高台。
366	N15	C2	須恵器杯B蓋		17.0			暗灰色	並	良	口縁端部が断面三角形となる。	天井部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ、ロクロ回転時計回り。
367	MF1	C8	須恵器杯B蓋		15.6			明灰色	良、鉄粉	並	口縁部が直立する。	天井部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ、ロクロ回転時計回り。
368	M3	B9	須恵器杯B蓋		14.0			淡黄灰色	良、白色砂	良	口縁部が直立する。	天井部外面ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ、ロクロ回転時計回り。
369	N14	C区	須恵器壺A蓋	14.0				淡灰色	良	並	全体に丸味をもつ。	天井部外面ケズリ。
370	N7	B13	須恵器長頸瓶	8.0				淡褐灰色	良	良	頸部が細い。口縁部は外反し、端部が下垂する。	頸部に2条の沈線を施す。口縁部ロクロナデ。
371	N8	B3	須恵器長頸瓶	10.8				淡灰色	良	良	口縁部は外反し、口縁端部は丸味を帯びる。	ロクロナデ。
372	M6	B3	須恵器長頸瓶		11.0			灰色	並	良	高台が外開きになる。	底部外面ヘラケズリ、ハリツケ高台。

第12表　C地区包含層出土遺物観察表(1)



第32図　C地区包含層出土遺物実測図（2）　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態上の特徴	成形上の特徴
373	包M9	C10	須恵器高杯	脚部外径6.0				灰色	良	良	脚部は細長く、杯部が横に開く。	脚部内外面ロクロナデ、杯部外面ケズリ
374	包N4	F10	須恵器短頸壺	12.4				灰色	良、白色砂	良	口縁部は、内傾しつつ立ち上がり端部が角ばる。	口縁部ロクロナデ
375	包N1	B3	須恵器甕	22.4				暗青灰色	良	良	口縁部は、外反し、端部は上下に肥厚する。	口縁部ロクロナデ
376	包N11	D19	須恵器甕	24.8				灰色	良	良	口縁部は外反し、端部は下垂する。	ロクロナデ
377	包N2	E19	須恵器甕	26.8				淡褐灰色	良	良	口縁部は外反する。	ロクロナデ
378	包NE30	E3	須恵器鉢	13.4				淡青灰色	良	良	口縁部が直立した後外反する。	ロクロナデ
379	包N6	E17	須恵器双耳瓶	3.8				淡褐灰色	良	良	口縁部は外反し、上下に肥厚する。	ロクロナデ
380	包M1	C区	須恵器円面硯	23.4	27.6	9.8	42	青灰色	精良	堅緻	口縁部は大きく外反し、口縁部は上下に肥厚する。	陸部分使用痕あり、透し、約24個分
381	包M139	C区	須恵器獣足盤	脚筈3.4		脚高8.0		灰白色	良	良	やや、長脚で上半が弯曲する。	獣足底部ケズリ、側面ケズリ、爪の部分4条のヘラ描
382	包M134	C区	須恵器獣足壺	脚幅3.0		脚高5.6		灰色	良	良	やや短脚で直線的になる。	獣足底部ケズリ、側面ケズリ爪の部分刻み目(3条)
383	包M132	B7	土師器製塩土器	15.3		5.0	33	赤褐色	荒	良	やや器壁が薄い、口縁部は直立し端部が角ばる。	粘土ひも巻き上げ
384	包M133	C2	土師器製塩土器		14.6			赤褐色	荒	良	平たい底部から体部が直立する。	体部外面下半に指圧痕あり、粘土ひも巻き上げ
385	包MF7	D4	ロクロ土師器皿	11.4	4.8	2.4	21	淡褐色	良、白色砂赤色土	良	器高が低い	底部糸切り　ロクロ回転、時計回り
386	包Nφ117	C区	瓦器椀		7.6			黒灰色	並、白色砂	並	高台、断面四角形。	高台部ハリツケ底部内面に格子状のヘラミガキ
387	包M126	C区	瓦器椀	16.4		5.0	30	黒灰色	良	良	体部はゆるやかに立ち上がり口縁部内面に波線を持つ	体部内外面に横方向のヘラミガキ
388	包M127	C9	瓦器皿	8.6		1.2	14	黒灰色	良	良	器高は低い、口縁部は外反する	底部外面指圧、底部内面平行ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ
389	包M129	C区	灰釉陶器椀		7.8			灰色	良	堅緻	高台部が三日月状になる	ハリツケ高台、ロクロナデ
390	包M117	C区	灰釉山茶椀	17.4		5.9	34	釉灰緑色	精良	良	口縁部が外反する	口縁部ツケガケ
391	包M119	A4	山茶椀	17.6		5.9	34	灰色	良、鉄土	良	口縁部外反する	口縁部ロクロナデ
392	包NE9	D12	山茶椀	16.0		6.3	39	淡灰色	良、白色砂	良	やや厚手で、口縁部が外反する	底部糸切痕ナデ消し、ハリツケ高台、底部重ね焼痕
393	包M123	F9	山茶椀		8.0			灰色	並	並	底部に「十」の墨書あり	ハリツケ高台　糸切痕残る
394	包M109	F9	山茶碗		5.8			淡褐灰色	並	並	高台がやや高い	ハリツケ高台　糸切痕残る
395	包M125	E17	山茶碗	16.0	7.6	5.3	33	明灰色	良、鉄土	良	口縁部は直線的に立ち上がり、端部が丸味を持つ	口縁部ロクロナデ
396	包M110	C区	山茶椀		5.4			灰色	良、白色砂	良	口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる	ハリツケ高台　糸切痕残る　もみ跡痕あり
397	包M119	E19	山皿	8.0	4.4	1.8	23	灰色	荒	良	平座、口縁部は先端がつまみ出される	底部糸切痕残る
398	包M404	C区	練鉢	24.0		11.0	46	明灰色	良、白色砂鉄土	堅緻	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる	底部外面不明、ハリツケ高台　体部外面ヘラケズリ
399	包N4	C区	卸皿	14.8		5.4	36	淡灰色	良	良	器壁が厚い、片口となる	口縁部ロクロナデ、底部内面に4mm間隔でカキ目
400	包M12	C区	青磁椀	16.0		7.2	45	釉濃緑灰色	良	堅緻	胎土灰白色　口縁部がやや外反する龍泉窯系劃蓮花文青磁椀	体部内面に蓮弁と茎が線彫される
401	包M116	D12	青磁椀	16.0		7.4		釉灰緑色	良	良	胎土灰白色　口縁部がや外反する龍泉窯系青磁椀	体部外面鎬蓮弁
402	包M115	C6	青磁椀	16.0		7.5		釉灰緑色	良	堅緻	胎土灰白色　腰部が張る	体部外面鎬蓮弁
403	包M205	C8	青磁椀	11.0		6.5		釉灰緑色	良	良	胎土灰白色	体部外面鎬蓮弁
404	包MF1	F6	白磁椀	16.4		7.3		釉灰白色	良	良	胎土白色　口縁部が真横に伸びる、森田分類白磁椀	内外面施釉
405	包M202	E9	白磁椀	15.4				釉乳白色	良	良	胎土灰白色　口縁部玉ノ縁となる　白磁椀B類	内外面施釉
406	包M201	G5	白磁椀	15.0		6.2		釉濁乳緑色	精良	堅緻	胎土灰白色　口縁部玉ノ縁となる　白磁椀B類	内外面施釉
407	包203	F4	白磁椀		5.0			釉乳白色	精良	堅緻	胎土白色　高台断面形四角形	ケズリ出し高台、底部内面のみ施釉
408	包M3	C区	青磁椀		6.4			釉灰緑色	良	良	胎土灰白色　高台が高い	ケズリ出し高台、釉底部内面までかかる
409	包M204	C区	染付小椀	9.4	2.4	2.5	27	瓶色緑コバルト釉	良	良	胎土白色　口縁部は外反する	底部ケズリ出し、釉は内外面かかる、底部内面同心円線
410	包NE4	F5	灰釉縁釉皿	14.4				釉褐色	緻密	良	胎土淡褐色　口縁部は外反する	口縁部内外面のみ施釉
411	包M137	C6	天目茶碗	11.4		7.8	68	釉橡黒色	良	良	胎土淡褐色　口縁部の屈曲が大きい	底部ケズリ出し
412	包NE15	D21	灰釉縁釉皿	10.4				釉茶褐色	良	堅緻	胎土灰褐色　口縁部は外反する	口縁部内外面施釉
413	包M136	C区	施釉陶器灯明皿	10.4		2.2	21	釉灰緑色	精良	良	胎土白色　口縁部は斜め上方に直線的に引き出される	ロクロナデ
414	包MF15	D2	常滑焼捏鉢		15.5			褐色	良	良	平底で体部は外反する	鉢部下半ヘラケズリ　使用痕あり
415	包MF119	B8	土師器鍋	32.6				乳褐色	良	良	口縁部は折り返される	口縁部ヨコナデ
416	包M118	B10	土師器鍋	30.0				淡乳褐色	良	良	口縁部は、つまみ出されて断面三角形となる	口縁部ヨコナデ
417	包M132	C4	土師器土錘	24.8				乳褐色	並	並	口縁部内面に段を持つ	鍔ハリツケ
418	包MF15	D4	土錘	φ1.8				淡褐色	良	良	穿孔径0.6cm　球形である	手づくね
419	包MF6	F5	土錘	全長5.8				褐色	良	良	穿孔径0.7cm　円筒形である	手づくね　棒状のものに巻きつけて作る
420	包M131	C区	土錘	全長7.0				褐色	良	良	穿孔径0.8円筒形である	手づくね　棒状のものに巻きつけて作る
421	包M133	F19	砥石	全表6.2	幅2.4			淡灰色			泥岩製	2面を使用している
422	包M15	C区	砥石	全長9.2	幅3.0			明灰色			泥岩製	上面のみを使用

第13表　C地区包含層出土遺物観察表(2)

○ＳＤ60

土師器杯Ａ(321)　口径15.0cm。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。底部外面は、ヘラケズリされる。内面にはラセン状暗文が施される。

土師器甕(322)　口径13.6cm。小型の甕である。体部をハケ調整し、体部内面下半をヘラケズリしている。斎宮編年ＳＫ1291併行のものである。

○ＳＫ61

土師器杯Ｂ蓋(325)　口径20.2cm。色調赤褐色で胎土は良好である。

土師器杯Ｃ(326)　口径10.4cm。体部外面に指圧痕が残る。口縁部は、斜め上方に引き出され先細る。

○ＳＤ64

土師器甕(323)　口径29.0cm。体部内外面ハケ調整。口縁部は、ヨコナデされて端部が角ばる。

須恵器杯Ｂ(324)　口径18.0cm。器高6.3cmである。杯部の立ち上がりが直線的である。奈良時代後半のものである。

２．包含層出土遺物

○古墳時代

土師器壺(327)　口径18.0cm。口縁部外面ハケ調整の後ヘラミガキを施す。内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。

土師器小型器台(328)　口径7.0cm。器高4.4cm。杯部は浅く、外反する。体部外面にハケ調整をしている。

須恵器杯身(329)　口径14.0cm。やや大ぶりで口縁部は内傾した後直立する。ＭＴ15併行期のものである。

○飛鳥・白鳳時代

須恵器杯蓋(330)　口径10.6cm。口縁部の反りがわずかに残っている。

須恵器高杯(359)　口径12.4cm。高さ5.6cm。脚部は、大きく外に開く。杯部は弯曲して立ち上がり口縁部は外反する。

須恵器杯Ａ(362)　口径13.4cm。底部は、丸味を持つ。口縁部は外反する。

○奈良・平安時代

土師器皿(331～334)　(331)は、口径28.0cmの大形のものである。(332)～(334)は、口径16cm程度のものである。器壁が薄くなり、口縁部が外反するものは後出の要素である。いずれも奈良時代後期のものである。

土師器杯Ａ(335～338)・(342)　(335)は、口径14.8cm。内面に暗文を持つ。(336)は、口径18.4cmで口縁部を横ナデしている。(337)は、薄手であるが底部ヘラケズリの古い要素も残している。口径15.0cm。(338)は、口径14.4cmで底部外面指オサエで口縁部は外反する。(338)は平安時代前期に比定できる。(342)は、口径11.6cmで口縁部は外反する。

土師器杯Ｂ蓋(343)　宝珠つまみのみ残存する。つまみの径は、2.6cmである。

土師器高杯(344)(345)　底部径12～13.6cmでいずれも短脚である。(345)は、面トリをしている。

土師器杯Ｂ(346～348)　(346)は、器壁が厚く杯部はゆるやかに斜め上方に立ち上がる。体部外面にハケ調整がなされる。(347)は、やや薄手で杯部が直線的に立ち上がる。(346)・(347)は、奈良時代のものである。(348)は、薄手で高台が高く、杯部が浅い。体部外面は、ハケ調整される。平安時代前半のものである。

土師器把手付甕(349・350)　口径が40.2cm、39.6cmと大きく体部内外面をハケ調整している。

土師器甕(351～358)　口径は、25cm前後のもの18cm前後のもの、15cm程度のものがある。体部内外面にハケ調整を施す。(356)は、内面をヘラケズリしている。

須恵器杯Ａ(363)　口径9.4cmで、無高台のものである。口縁部は、やや外反する。

須恵器杯Ｂ(360・361・364・365)　(360)は、口径14.0cmで器高2.6cmとやや低い。底部をヘラケズリしている。(361)は、口径15.0cmで器壁は厚く斜め上方に直線的に立ち上がる。(364)・(365)は、底部径11.4cm・15.4cmと大きい。いずれも奈良時代のものである。

須恵器杯Ｂ蓋(366～368)　(366)は、口径17.0cmで大ぶりである。奈良時代後半でもやや古相を帯びる。(367)・(368)は、口径14.0cm～15.6cmで口縁部が細くやや屈折する。奈良時代末期のものである。

須恵器薬壺蓋(369)　口径14.0cmで宝珠つまみがつく。全体になだらかに作られている。老洞期併行

の在地産であろう。

須恵器長頸瓶(370～372) (372)は、底部で奈良時代以前のものである。(371)は、口径10.8cm。(370)は、口径8.0cmで口縁部が上下に拡張される。(371)は、奈良時代前半のものである。(370)は、鳴海32号窯期のものである。

須恵器高杯(373) 脚部径6.0cm。かなり長脚になる。

須恵器短頸壺(374) 口径12.4cm。口縁部がやや内傾する。

須恵器甕(375～377) 口径24.8～26.8cm。(375)は、口縁部が上下に拡張される。(376)・(377)は、猿投窯にあるタイプの甕で、折戸10号窯段階のものであろう。

須恵器小型短頸壺(378) 口縁部は直立した後外反する。口径13.4cmで器壁は薄い。

須恵器小型双耳瓶(379) 口径3.8cm。よく焼きしまった淡褐灰色の胎土と器形から、猿投産と考えられる。

須恵器円面硯(380) 底部径27.6cm。口径23.4cm。高さ9.8cmである。陸部、海部の稜がしっかりしている。透し孔は、約20個程度か。折戸10号窯段階のものである。

須恵器獣足壺(381・382) 脚部のみ残存する。(381)は、高さ8.6cmで緑色の自然釉がかかる。(382)は、高さ5.6cmで爪部をヘラで深く刻み込んでいる。鳴海32号窯期のものである。

土師器製塩土器(383・384) 底部14～15cm、口径15～16cm程度で、赤褐色の粗い胎土の土器で平底となる。平安時代前半のものである。

○平安時代後半・鎌倉時代

ロクロ土師器皿(385) 底部径4.8cm。底部には糸切痕を残す。

瓦器椀(386)・(387)・(386)は、底部径7.6cmで底部内面に格子状のヘラミガキが施される。11世紀代後半のものである。(387)は、口縁部がやや外反するもので口縁部内外面ともヘラミガキされている。12世紀後半のものである。

灰釉陶器椀(389)(390) (389)は、底部径7.8cmで高台が三日月状になる。(390)は、口縁部が外反し、口縁部のみつけがけによる灰釉が施される。11世紀代も後半のものである。

山茶椀(391)～(396) (391)・(392)は、12世紀前半の山茶椀である。(393)・(394)は、13世紀前半代に位置づく。(393)の底部には、「十」と墨書きされている。(395)・(396)は、13世紀後半のもので高台の断面形は三角形である。

山皿(397) 平底で糸切痕を残す。口径は、8.0cmである。13世紀も後半のものである。

練鉢(398) 底部径11.0cm。体部は、直線的に斜め上方に立ち上がる。13世紀代のものであろう。

卸皿(399) 口径14.8cm。やや厚手で口縁部は丸味を持ち片口になる。底部内面には卸目が施される。

青磁(400～402・408) (400)は、劃花蓮華文青磁椀で、内面に茎と蓮弁が彫られる。釉色調は、濃緑灰色である。胎土は灰白色である。龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2類である。(401)・(402)は、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類である。釉の色は、灰緑色である。(408)は、青磁椀底部である。

白磁(404～407) (404)は、口径16.4cmで口縁部を外反させ端部を水平にするもので白磁椀Ⅴ－4類である。12世紀後半代のものである。(405・406)は、いわゆる玉縁口縁の白磁で釉色は、灰白色・乳白色である。白磁椀Ⅳ類である。(407)は、小ぶりの白磁椀で口縁部はおそらく小さな玉縁状となろう。腰部外面は、無施釉である。白磁椀Ⅲ類である。

○室町時代

青磁椀(403) (403)は、線彫りで粗略な細蓮弁を刻む椀である。15世紀後半から16世紀に位置づく。

染付小椀(409) 口径9.4cmで口縁部が外反する。底部内面にコバルト釉で円を描いている。16世紀代のものか。

瀬戸・美濃産灰釉椀(410) 口径11.4cm。内面全体と、外面口縁部のみに黄褐色の釉が施される。

瀬戸・美濃産灰釉縁釉皿(412) 口径10.4cm。口縁部のみに施釉される。

瀬戸・美濃産天目茶椀(411) 口径11.4cm。口縁部の屈折がやや強い。

土師器鍋(415・416) (415)は、口縁部を折り返す。(416)は、口縁部断面形が三角形になる。15世紀末～16世紀のものである。

土師器土釜(417) 口径24.8cm。乳褐色で鍔部が

短い。

常滑産捏鉢(414)　底部径15.5cm。体部外面下半を幅広くヘラケズリする。

○江戸時代

灯明皿　口径10.4cm。施釉は口縁部外面縁までである。

○その他の遺物

土錘　(418)は、直径1.8cmの球形のものである。(419)•(420)は、長さ6.2cm、9.2cmで4～5mmの穿孔がされる。

砥石　(421)は、全長6.2cm、厚さ2.0cmの淡灰色泥岩である。(422)は、全長9.2cm、厚さ4.0cmの明灰色泥岩である。

D 地区

1．遺構出土の遺物

○SD67

土師器鍋(423～426)　(423)は、口径20.8cm。口縁部が折り返される。体部外面は、ハケ調整される。時期は、室町時代であろう。(424)は、口径26.0cmで口縁部が折り返される。15世紀後半代のものである。(425)•(426)は、口縁端部の断面形が三角形となる。16世紀代のものである。

土師器皿(427)　口径8.4cm。赤褐色で口縁部にススが付着している。16世紀代のものであろう。

白磁椀(428)　口径約16cm。口縁部が玉縁状になる。白磁Ⅳ類である。

青磁椀(429)　口径16.0cm。内面に平行区画線と飛雲文を施す。釉色調は、灰緑色である。龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類である。

瀬戸・美濃産擂鉢(430)　口径39.4cm。小片のため擂目は不明である。江戸時代のものである。

瀬戸・美濃産鉄釉皿(431)　口径9.4cm、口縁部が斜め上方に引き出される。口縁部の一部をつまみ出している。灯明皿であろう。16世紀以降のものである。

SD67の遺物は、かなり混りがある。(428)•(429)は、混入であろう。

2．自然流路出土遺物

○縄文時代

深鉢(432)　頸部のみ残存する。赤褐色の堅緻な土器である。突帯による横位の区画がなされ、区画された中に、4条の沈線による横方向の文様が展開する。中期末葉山ノ神式併行期の土器である。

3．包含層出土遺物

○古墳時代

S字口縁甕(433)　底部径7.8cm。外面にハケ調整がされる。内面には指圧痕が残る。

高杯(434)　脚部上端直径2.8cm。外面にハケによる平行線が引かれる。

○奈良時代

土師器杯A(436)　(436)は、口径14.0cmで口縁部をヨコナデしている。底部はヘラケズリである。

土師器皿(435)　口径17.4cm。底部ヘラケズリで、口縁部は横ナデされる。斎宮編年SK1291併行期である。

土師器長胴甕(444)•(445)　(444)は、口径26.0cmで、口縁部は角ばる。(445)は、口径25.8cmで口縁部がやや外反する。

○平安時代

土師器皿(437•439•440)　(437)は、口径14.2cmで口縁部は、横ナデされる。平安時代後半のものである。(339•340)は口径10.9cm、9.6cmで小型の皿である。底部指オサエで、口縁部は横ナデされる。平安時代末期、12世紀後半のものである。

土師器台付椀(438)　高い外開きの高台がつく。高台は、はりつけである。斎宮編年SK1730併行期で、平安時代末期のものである。

土師器甕(446•447)　口径17cm前後のものである。体部外面ハケ調整をしている。(446)は、平安時代

初期に位置づき斎宮編年ＳＫ1445併行期である。(447)は、斎宮編年ＳＫ3127併行期で９世紀後半のものである。

灰釉陶器椀(453)　(453)は、底部径8.0cmで、高台が三日月状になる。東山76号窯式で11世紀前半代のものであろう。

ロクロ土師器皿(460・461)　(460)は、底部径4.2cm。色調淡褐色。底部に糸切痕を残す。(461)は、底部径4.0cm。底部に糸切痕を残す。

○鎌倉時代

土師器鍋(448～450)　(448)は、やや厚手で口縁部がわらび手状になる。12世紀後半のものである。(449)・(450)は、やや薄手になり口縁部がわらび手状になる。13世紀前半代のものである。

山茶椀(454～458)　(454～456)は、胎土が灰白色で精良である。Ⅱ－４からⅢ－５段階のものであろう。(457・458)は、13世紀末のものである。

山皿(459)　口径8.8cm。色調灰白色で、口縁部が外反する。高台がつくと思われる。12世紀代のものである。

練鉢(462)　底部径12.0cm。底部は、糸切痕ナデ消しである。

○室町時代

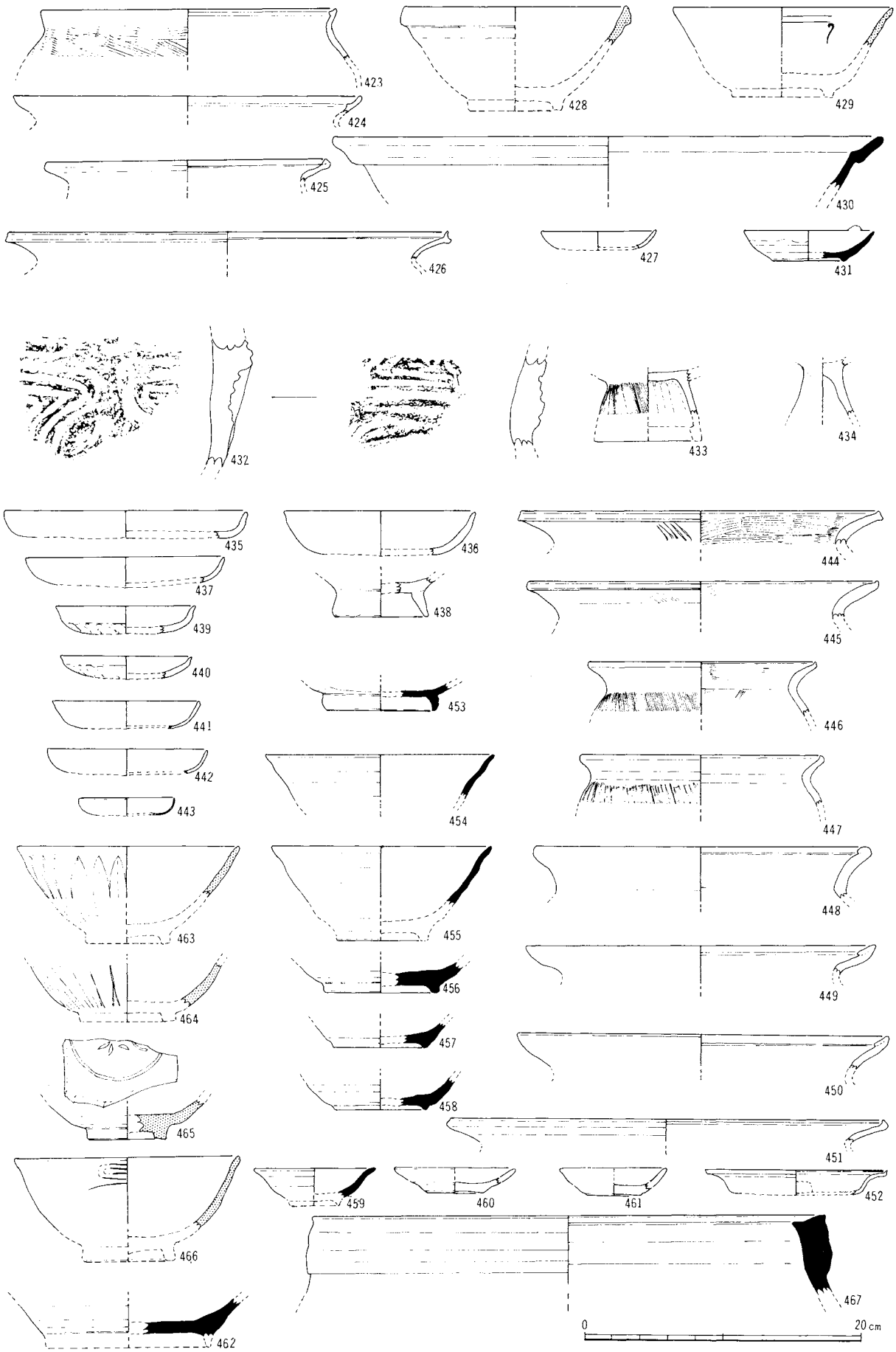
土師器皿(441～443)　口径11cm前後のもの(441・442)と、口径８cm前後の小型のもの(443)がある。器壁が非常に薄い。

土師器落し蓋(452)　口径13.0cm。薄手のものである。

青磁椀(463～466)　(463)(464)は、体部外面に蓮弁を刻むものである。(465)は、明代印花文青磁椀である。高台内面まで施釉される。龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５bである。(466)は、口縁部が丸味を持ち、口縁部外面に雷文が刻まれる。明代・雷文青磁椀である。

常滑産甕(467)　口縁部が折り返され頸部に密着する。色調暗褐色で、胎土に白色砂を含む。焼成は良好である。

(増田安生)



第33図　D地区遺構出土遺物・包含層出土遺物実測図　（1：4）

	実測番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	径高指数	色調	胎土	焼成	形態上の特徴	成形上の特徴
423	M4	SD67	土師器鍋	20.8				淡赤褐色	良	良	口縁部は直立し内側に折り返される。	体部外面ヨコハケ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ
424	M5	SD67	土師器鍋	26.0				淡褐色	荒	良	口縁部は内側に折り返される。	口縁部ヨコナデ
425	M7	SD67	土師器鍋	20.0				赤褐色	良	良	口縁部は折り返され端部が丸まる。	口縁部ヨコナデ
426	M6	SD67	土師器鍋	32.0				赤褐色	良	良	口縁部は断面三角形になる。	口縁部ヨコナデ
427	M2	SD67	土師器皿	8.4		1.4		赤褐色	精良	良	口縁部は斜め上方に引き上げられる。	口縁部ヨコナデ
428	M	SD67	白磁椀	16.2				釉乳白色	やや粗	良	口縁部が玉縁状になる。 白磁類	口縁部内外面施釉
429	M9	SD67	青磁椀	16.0				釉灰緑色	良	良	口縁部は斜め上方に立ち上がる。龍泉窯青磁椀	内面に線刻あり
430	M8	SD67	瀬戸・美濃産摺鉢	39.4				釉茶褐色	良	良	口縁部が円帯全に肥厚する。	ロクロナデ
431	M1	SD67	瀬戸・美濃産鉄釉皿	9.4		2.2		釉濃褐色	良	良	口縁部はゆるやかに立ち上がる。	ケズリ出し高台、口縁部外面まで施釉
432	包M	自然流路	縄文土器深鉢					赤褐色	良、金雲母	硬	4条の沈線が上胴部を区画する。中期末	体部内面ヨコナデ
433	包M23	D区	古式土師器甕		8.0			淡赤褐色	良	良	薄手。脚部は外開きとなる。	脚部外面ハケ、内面タテ方向ユビナデ
434	包M24	D区	古式土師器高杯		脚上部3.8			淡褐色	良	良	脚部	脚部内面ユビナデ
435	包M7	D区	土師器皿	17.4		2.0		赤褐色	良	良	器壁が厚い。口縁部が立ち上がる。	口縁部ヨコナデ
436	包M15	F8	土師器杯	14.0		3.2		淡橙褐色	良	良	器壁がやや厚い、口縁部は斜め上方に引き出され	口縁部ヨコナデ
437	包M7	D区	土師器皿	14.2		2.2		褐色	良	良	やや小ぶりで口縁部が先細る。	口縁部ヨコナデ
438	包M21	D区	土師器椀		7.0			淡褐色	良	並	底部が外開きになる。	底部ハリツケ
439	包M4	D区	土師器皿	10.0		2.0		淡褐色	並	良	ゆるやかに立ち上がり口縁部がやや外反する。	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
440	包M31	D区	土師器皿	9.6		1.6		淡赤褐色	良	良	厚手で口縁部が先尖る。	底部外面ユビオサエ、口縁部ヨコナデ
441	包M25	D区	土師器皿	10.6		1.8		乳褐色	良	良	薄手で斜め上方に引き出される。	口縁部ヨコナデ
442	包M32	D区	土師器皿	11.6		1.8		乳褐色	良	良	薄手、口縁部は斜め上方に立ち上がり先細る。	口縁部ヨコナデ
443	包M6	G9	土師器皿	7.8		1.3		赤褐色	良	良	薄手、口縁部が直立する。	口縁部ヨコナデ
444	包M16	G7	土師器長胴甕	26.0				淡乳褐色	良	良	口縁部が角ばる。	口縁部内外面ヨコ方向ハケ調整
445	包M1	D1	土師器長胴甕	25.2				暗乳褐色	良、白色砂	良	口縁部は、やや外反した後上に引き上げられる。	口縁部内外面ヨコ方向ハケ調整
446	包M15	C3	土師器甕	16.6				淡褐色	並、白色砂	良	口縁部は外反した後、端部が上を上向く。	口縁部内面外面ハケ調整の後ナデ
447	包M8	D区	土師器甕	17.0				暗乳褐色	良、白色砂	良	口縁部はくの字状に引き出され先端が斜めにつまみ出される。	口縁部ヨコナデ
448	包M	D区	土師器鍋	23.6				淡茶褐色	良	良		口縁部ヨコナデ
449	包M28	D区	土師器鍋	25.6				淡赤褐色	良、白色砂	良	口縁部は折り返されてわらび手取になる。	口縁部ヨコナデ
450	包mmy	D区	土師器鍋	27.0				淡褐色	良	良	口縁部は折り返されてわらび手取になる。	口縁部ヨコナデ
451	包M26	D区	土師器鍋	32.0				淡乳褐色	やや粗	良	口縁部は斜め上方に立ち上がり断面三角形になる。	口縁部ヨコナデ
452	包M20	D区	土師器落蓋	13.2				乳褐色	良	良	口縁部は、水平に伸びた後斜め上に肥厚する。	口縁部ヨコナデ
453	包M13	D区	灰釉陶器椀		8.0			褐灰色	良	軟	高台部は三日月状となる。	ハリツケ高台
454	包M16	F5	山茶椀	16.6				灰白色	精良	良	やや薄手で口縁部が外反する。	ロクロナデ
455	包M4	D区	山茶椀	16.0				灰白色	良	堅徴	口縁部端が先細る。	ロクロナデ
456	包M5	F8	山茶椀		8.4			灰白色	良	堅徴	高台がやや高く外開きになる。	ハリツケ高台
457	包M11	C12	山茶椀		7.0			灰色	並	良	高台部からの立ち上がりが直線的になる。	糸切痕粗いナデ消し、ハリツケ高台
458	包M	F8	山茶椀		7.2			淡灰色	良	良	高台の断面形は、三角形である。	ハリツケ高台
459	包M29	F8	山皿	8.6				灰白色	良	良	口縁部が外反する。	ハリツケ高台
460	包M22	F8	ロクロ土師器皿		9.2			淡褐色	良	良	高台は平底である。	底部糸切痕あり
461	包M23	D区	ロクロ土師器皿		4.0			淡褐色	良	良	高台は平底である。	底部糸切痕あり
462	包M20	D区	練鉢		12.0			灰色	やや粗	良	底部が平たい。	糸切痕ナデ消し、内面にスス付着
463	包M2	C19	青磁椀	16.0	7.0	6.2		釉淡青緑色	良	堅徴	胎土灰白色、釉は厚く外面に蓮弁が刻まれる。	蓮弁ケズリ出し
464	包M14	B5	青磁椀		7.0			釉灰緑色	良	良	胎土灰色、外面に蓮弁が刻まれる。	蓮弁ケズリ出し
465	包M3	D区	青磁椀		5.8			釉灰緑色	良	良	胎土灰白色釉は高台部内面までかかる。	内面に小花弁が刻まれる
466	包M33	D区	青磁椀	16.0	7.5			釉淡緑灰色	良	良	胎土灰白色口縁部が肥厚し丸まる。	口縁部外面に雷文が刻まれる
467	包B27	B22	常滑産甕	37.0				暗褐色	良	良	折り返し部が密着する。	口縁部折り返し

第14表　D地区遺構出土遺物・包含層出土遺物観察表

V　柱根・木製品

1．A地区出土柱根

W1　残存長58.8cm。幅120cm。厚さ10.7cmである。側面にチョウナ痕が残る。SB4南西隅柱穴から出土。

W2　残存長66.0cm。19.8×14.6cmで、三面ともていねいなチョウナ痕が残る。SB4南辺東から3番目の柱穴出土。

W3　残存長45.4cmで幅12.0×13.0cm。二方柾目材で一面のみにチョウナ痕が残る。スギ材。SB4南辺東から2番目の柱穴出土。

W4　残存長49.0cm。幅16.9cm×12.0cm。表面にチョウナ痕が残る。ヒノキ材。SB4南東隅柱穴から出土。

W5　残存長49.3cm。幅18.3×14.0cm。三方柾目材で、一辺は、未加工。SB4東辺南から2番目の柱穴出土。

W6　残存長53.0cm。幅11.3×11.5cm。表面をチョウナハツリしている。スギ材。SB4東辺南から3番目の柱穴出土。

W7　残存長58.8cm。幅14.0×15.0cm。二方柾目材。表面にチョウナ痕が残る。ヒノキ材。SB4北東隅柱穴から出土。

W8　残存長29.3cm。幅13.2×5.4cm。部材をミカン割りした後平面に仕上げている。ヒノキ材。W7の北側から出土。

W9　残存長37.5cm。幅11.0×12.0cm。二方柾目材である。断面形四角形で表面にチョウナ痕が残る。スギ材。SA3北端柱穴から出土。

W11　SB4の南側セクション近くで検出された。残存長41.0cm。直径16.7cmの白木材。SB4南方の調査区境で単独出土。

2．C地区出土柱根

W14　幅22.6×27.4cm。厚さ8cmの礎板である。スギの板目材。SB45西辺中央の柱穴から出土。

W15　直径29cm。残存長73cmのコウヤマキ材。木口には、部材が太いためか連続的に打ち込んだ斧跡が残る。外面にチョウナ痕が残るが、基本的に上から下へ向かうが部分的に向きが逆転している箇所もある。チョウナ痕の幅は3.4cmである。なお根元から8.4cmの部位に、一辺8cmの正方形の穴を横位に4cm間隔で2個穿孔し、2孔は内部で貫通している。いわゆるイカダ穴と呼ばれるもので、運搬時に縄をかけて木曳用としたものである。SB45北東隅の柱穴から出土。

W16　直径13.6cmのスギ材。白木で部分的にチョウナ痕が残る。SB42南辺西から2番目の柱穴出土。

W17　直径14.0cmのスギ材。側面に幅3.3cmのチョウナ痕が残る。SB42北辺東から2番目の柱穴出土。

W18　直径14.0cmのスギ材。側縁部にチョウナ痕が残る。SB42東辺北から2番目の柱穴出土。W16・W17・W18とも白木丸太に粗いチョウナ痕を残すいびつな八角形である。チョウナ痕は2方向認められ、非常に類似したパターンを示す。

W19　他の部材と異なり16.0×6.5cmで断面長方形である。杭状に根元を尖らせている。ヒノキ材。SB42北辺西から2番目の柱穴出土。

SB40

W12　SB40南辺東から2番目の柱穴出土。直径20.8cmのコウヤマキ材。側面にチョウナ痕がわずかに残る。根元部分を深さ2.5cm、幅10cm程度で輪状に削り、木曳きの縄掛にしている。

W20　直径25cmで原木を半分に割って使用している。木口に斧による切断痕がある。スギ材。SB41北辺西から2番目の柱穴出土。

W21　直径21cm。原木の$\frac{1}{6}$がのみが残存する。木口には斧痕がある。SB41北辺西から3番目の柱穴出土。

W22　原木の直径は20cm前後。原木の$\frac{1}{4}$が残存する。スギ材。木口には斧による切断痕が残る。SB41東辺中央の柱穴出土。

W23　直径20cmで原木の$\frac{1}{4}$が残存する。樹齢約40年のスギ材。SB41南辺西端の柱元から出土。

W13　残存長42cm。幅18cmで厚さ８cm、断面形四角形である。ＳＢ40北西方の柱穴出土。

W24　幅21.0cm、厚さ6.0cm、残存長38.0cmである。再利用材であろう。上部に６cm×4.5cmの通し枘穴または、凹面形の切り込みがある。ＳＸ61の南端出土。

W25　残存長38.0cm。幅20.0cm、厚さ4.7cm。根元部分が腐食しているので再利用材であろう。残存部上面に5.0×6.0cmの通し枘穴または、凹面の切込みがある。W24の北方で出土。

W26　南北列北東隅板材。残存長41.0cm、幅22.0cm、厚さ5.2cmのスギ材。W24•25と同じく約６cm×6.5cmの凹状加工が残る。ＳＸ61の南側出土で、W36までが群在出土。

W27　幅17.2cm。厚さ5.3cmのモミ材。

W28　幅21.3cm。厚さ6.4cmの板目材である。木口部は斧による切断痕が残る。

W29　幅22.6cm。厚さ7.6cm。板目材である。イヌガヤ材材。

W30　幅21.8cm。厚さ9.4cm。板目材である。板目部にチョウナ痕が残る。

W31　幅22.7cm。厚さ5.5cmの板目材である。ヒノキ材。

W32　幅9.2cm。厚さ4.2cmの柾目材である。ヒノキ材。柾目部に粗いチョウナ痕が残る。

W33　幅9.2cm。厚さ4.2cm。ヒノキ材。辺部を板目取りし、木心側から斧による２次加工があり、打ち込みやすくしている。側縁にチョウナ痕が残る。スギ材。

W34　幅15.3cm。厚さ7.9cmの板目材。スギ材。

W35　原木を$\frac{1}{4}$に分割している。木口に斧の切断痕が残る。

W36　残存長44.0cm。幅12.3cm。幅22cmの薄い板材でモト部の両端を切断してクサビ形にしている。

W37　残存長12.6cm。幅27.8cm。厚さ6.4cmのスギ材。

W38　残存長13.2cm。幅7.7cm。厚さ5.2cmのヒノキ材。木口を斜めに切り込んでいる。

W39　残存長34.0cm。幅15.0cm。厚さ2.2cmのスギ材。木口を杭状にしている。

W40　残存長27.0cm。幅12.0cm。厚さ9.8cm。木口に切断痕が残る。

W41　残存長107cm。幅26.8cm。厚さ7.0cm。両端を凹形の組手とする。スギ材。Ｄ区自然流路南壁出土。

W42　93×16.5×1.0cm。細長い板材である。Ｄ区自然流路出土。

3．そ　の　他

W43　39.8×1.5×1.0cmのスギ材。ヤリガンナ又は刀子で面トリしている。先端部側縁を凹状に加工

W44　26.7×2.2×1.0cmのスギ材。断面四角形。

W45　21.0×2.4×2.2cmのスギ材。断面隅丸四角形。柄か。

W46　残存長22.2×1.5×1.0　端を面取りする。柄か。

W47　10.9×2.7×1.3の小加工木である。スギ材

W48　径3.8cm。高さ7.8cm。自然木の先端を円錐状に尖らせ上端を抉ったコマである。広葉樹材。

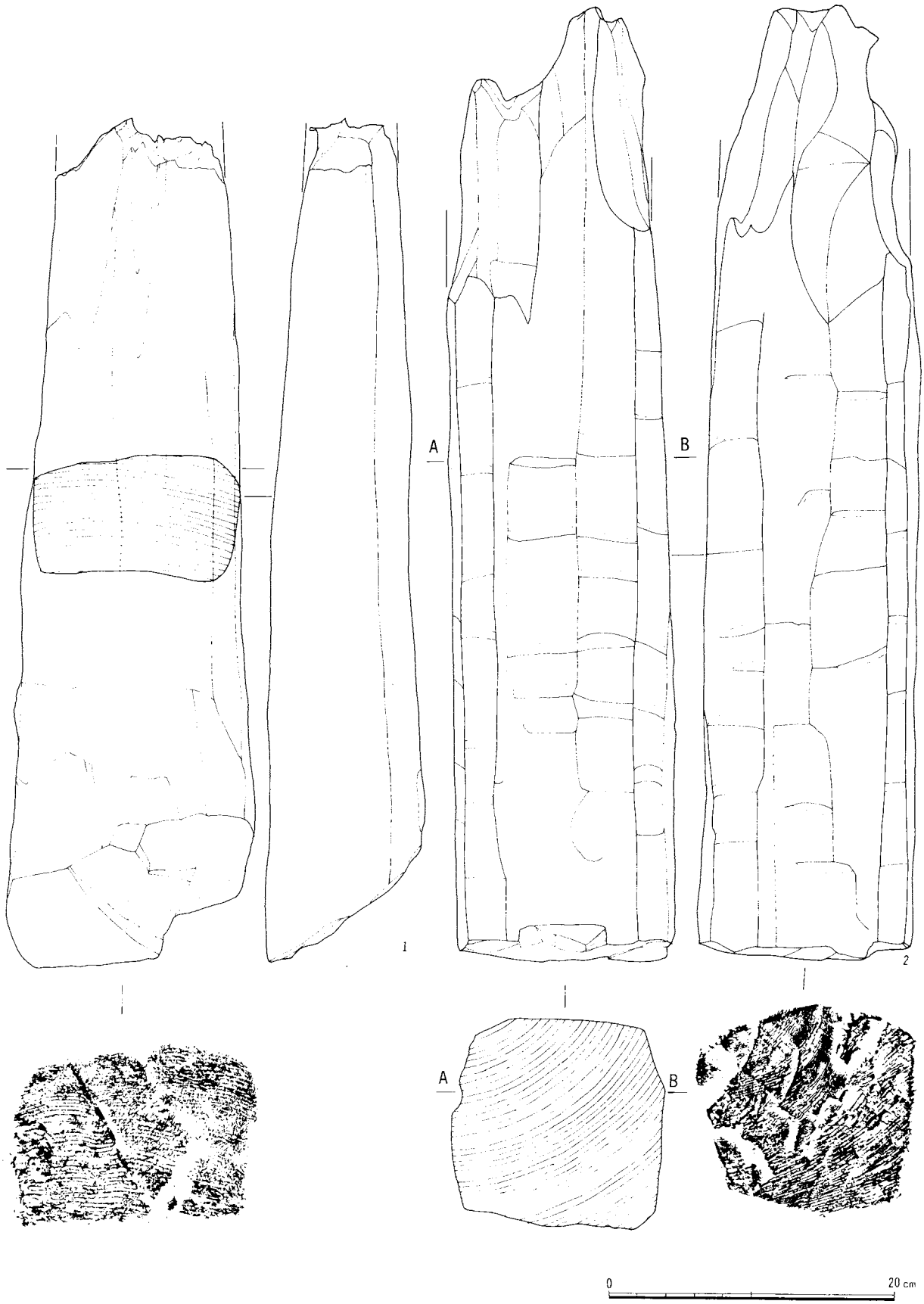
W49　直径18.0cm。厚さ0.6cmの曲物の底部である。側面に木くぎが残る。

W50　11.0×5.5×1.2cm。長方形の２角を隅丸に削り、下端の２角をノミで欠き組物の受け部としている。平面に2.7×1.2cmの断面形三角形の止め枘を開けている。

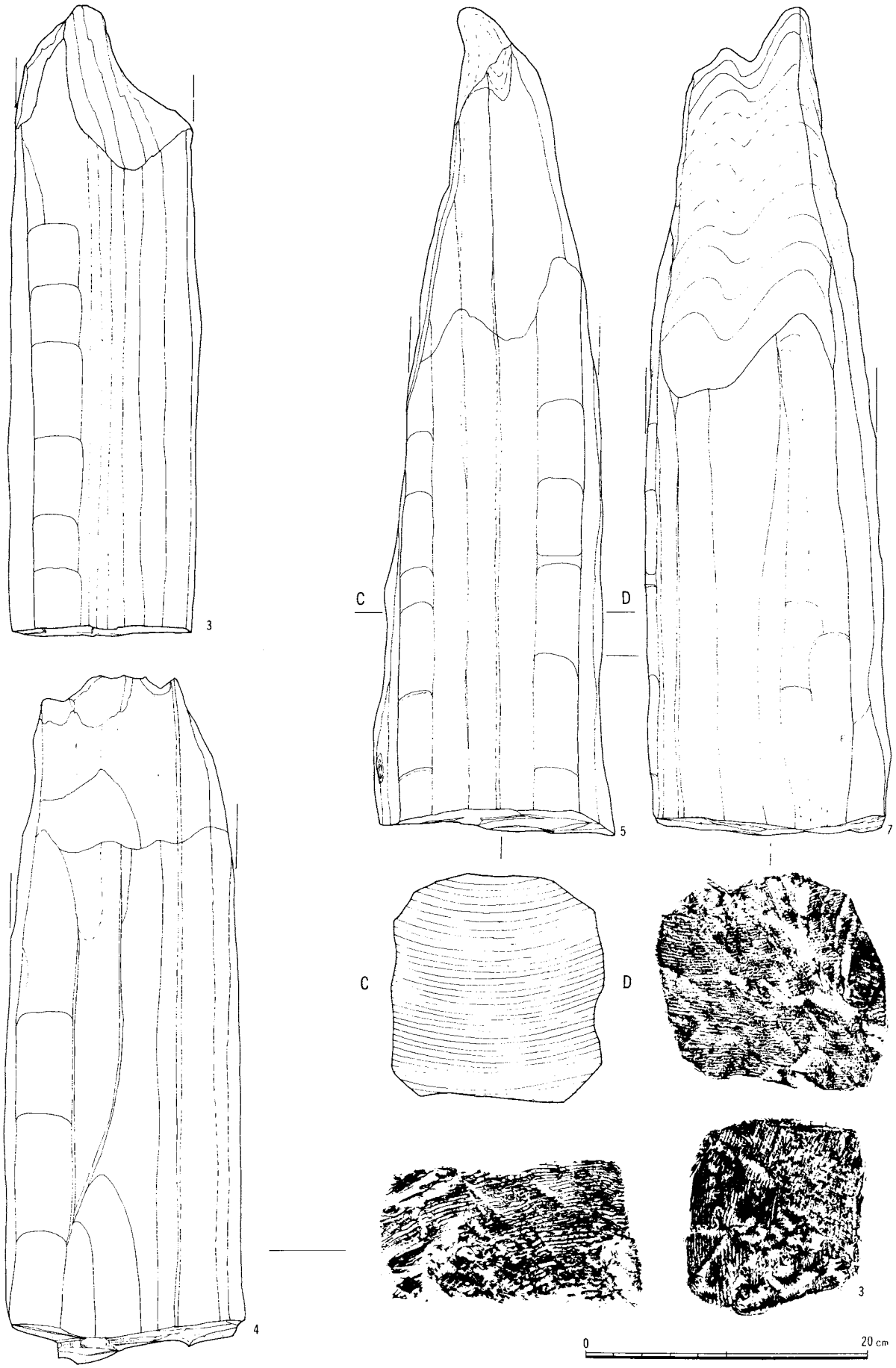
W51　外面黒漆、内面朱漆を塗った椀である。外面に直径約30cmの家紋風の模様が施される。

なお、Ａ・Ｂ・Ｃ区とも加工木に混じって、クルミ、モモ、ウメなどの核、約20〜30個が出土している。

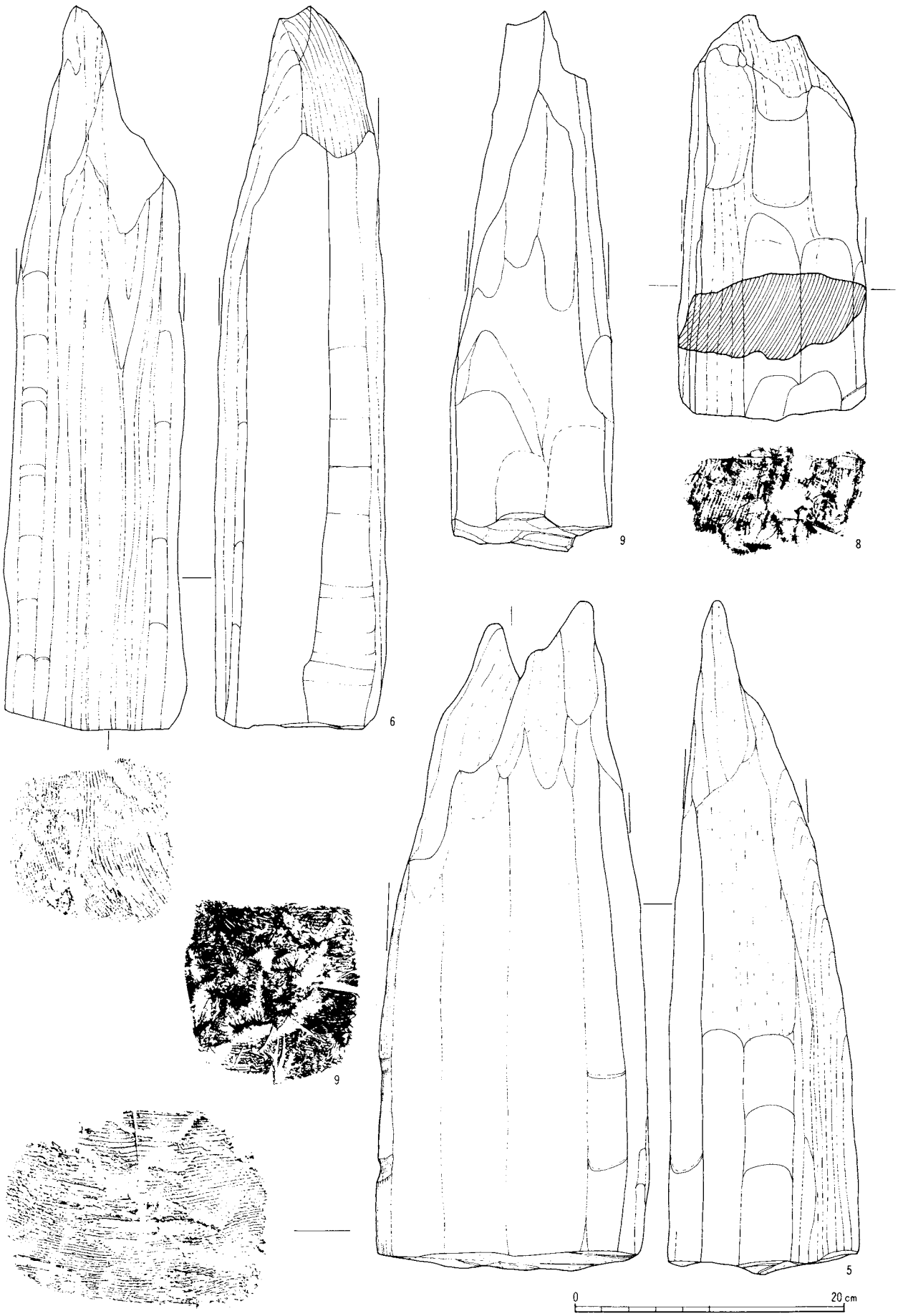
（増田安生）



第34図　A地区ＳＢ４柱根実測図（１）　（１：４）

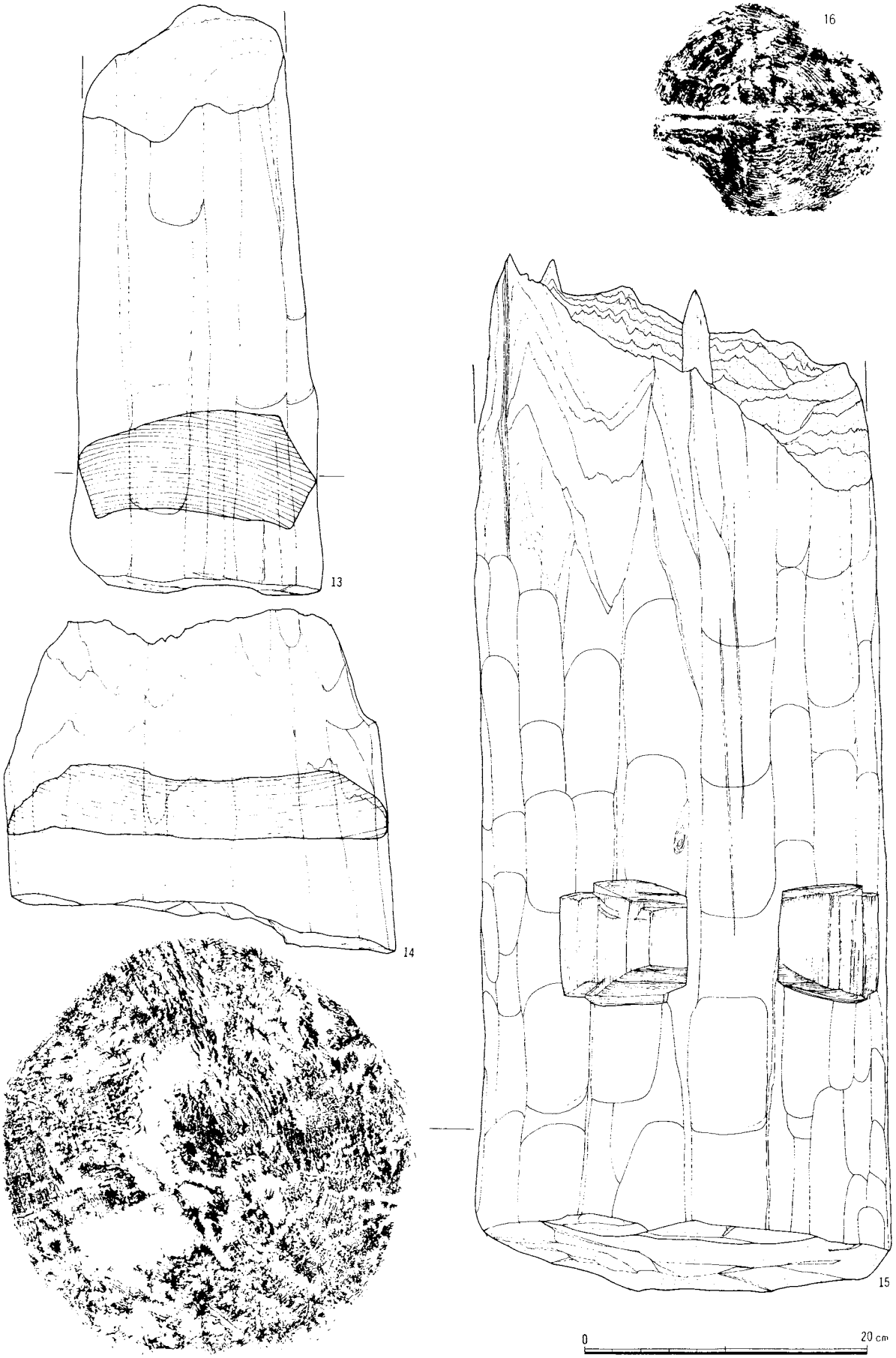


第35図　A地区ＳＢ４柱根実測図（２）　（１：４）



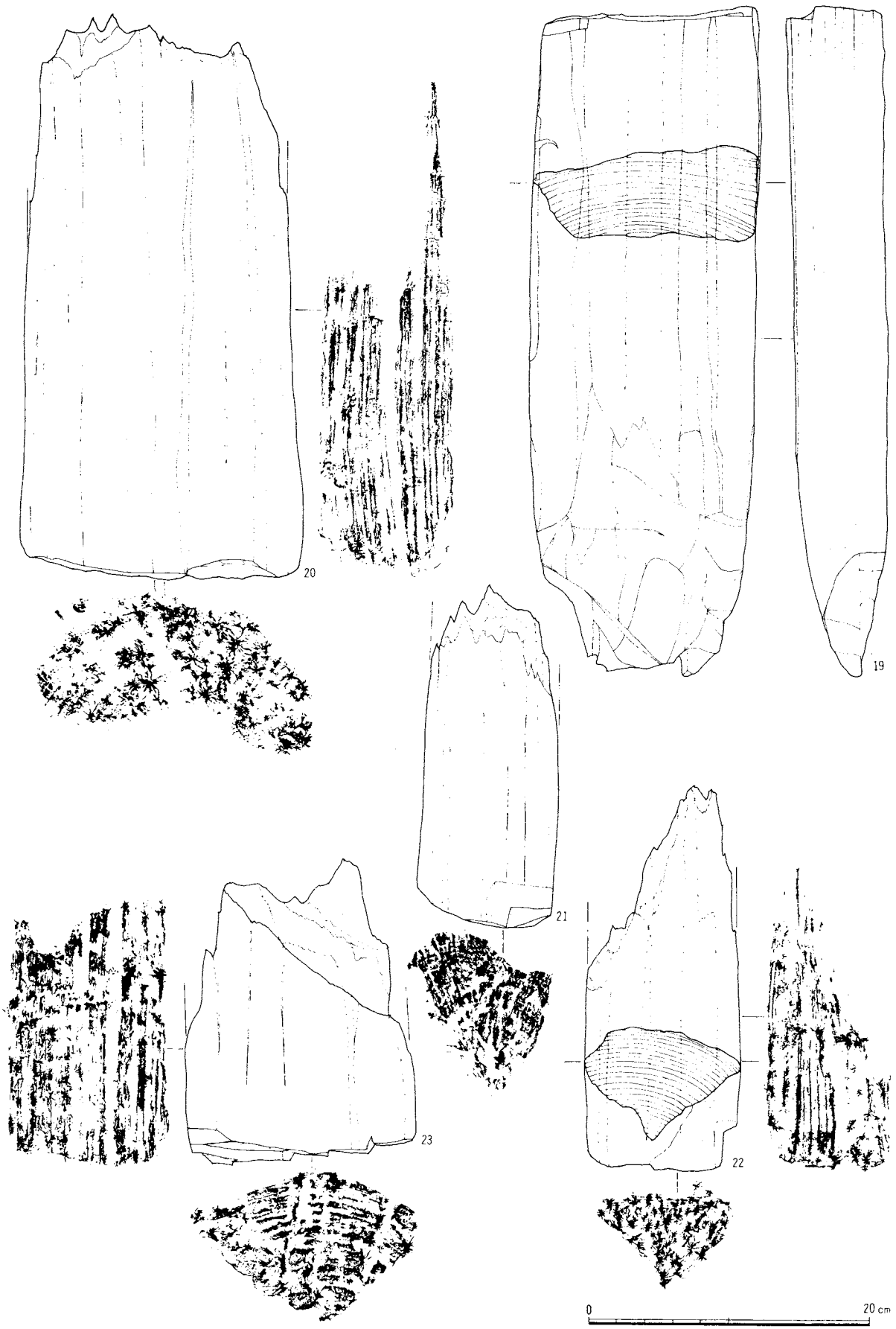
第36図　A地区ＳＢ４柱根実測図（３）　（１：４）

第37図　A地区ＳＢ４・W11・C地区ＳＢ40柱根実測図　（１：４）



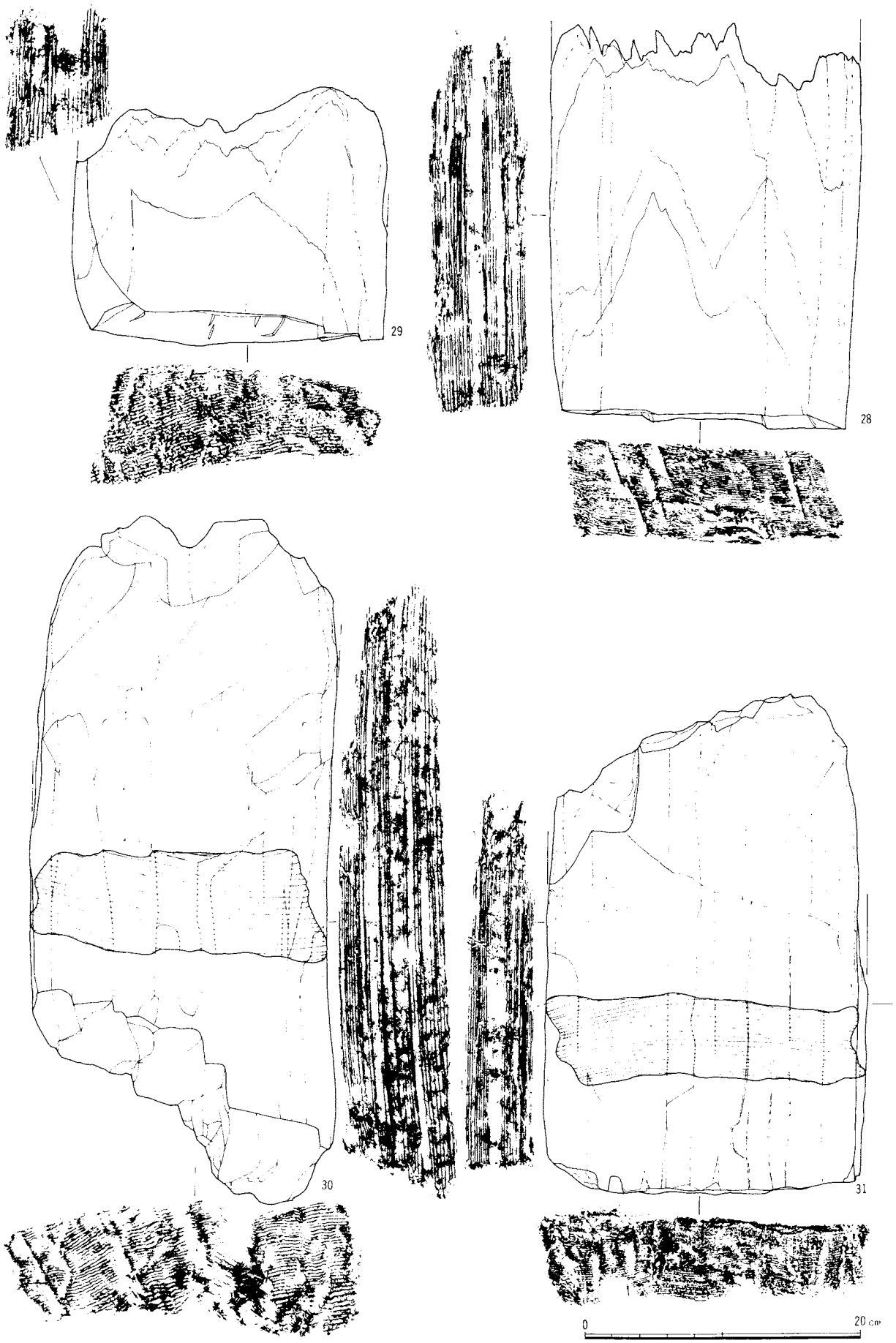
第38図　C地区W13・42・SB45柱根実測図　（1：4）

第39図　C地区ＳＢ41柱根実測図　（1：4）

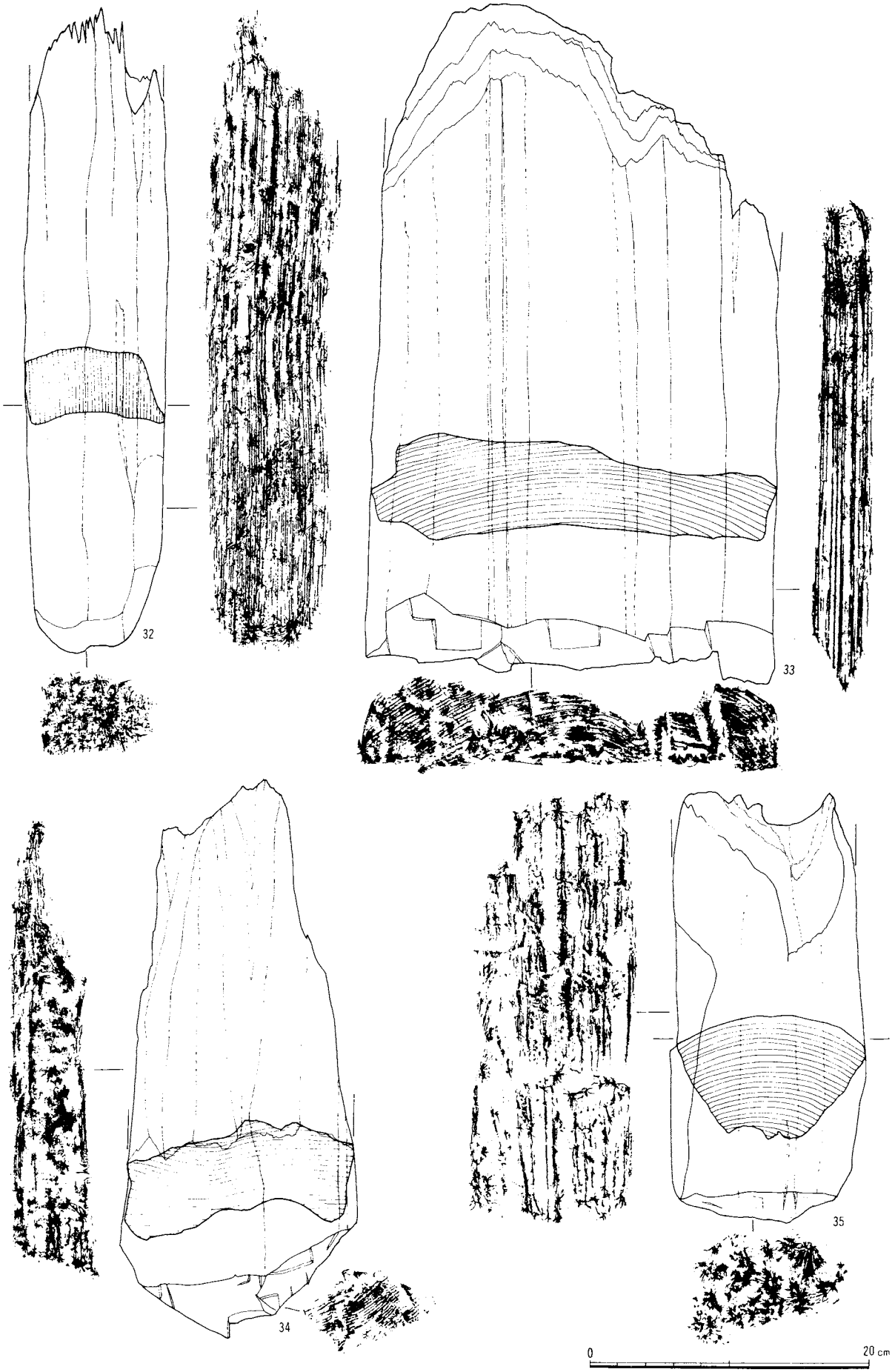


第40図　C地区ＳＢ35柱根実測図　（1：4）

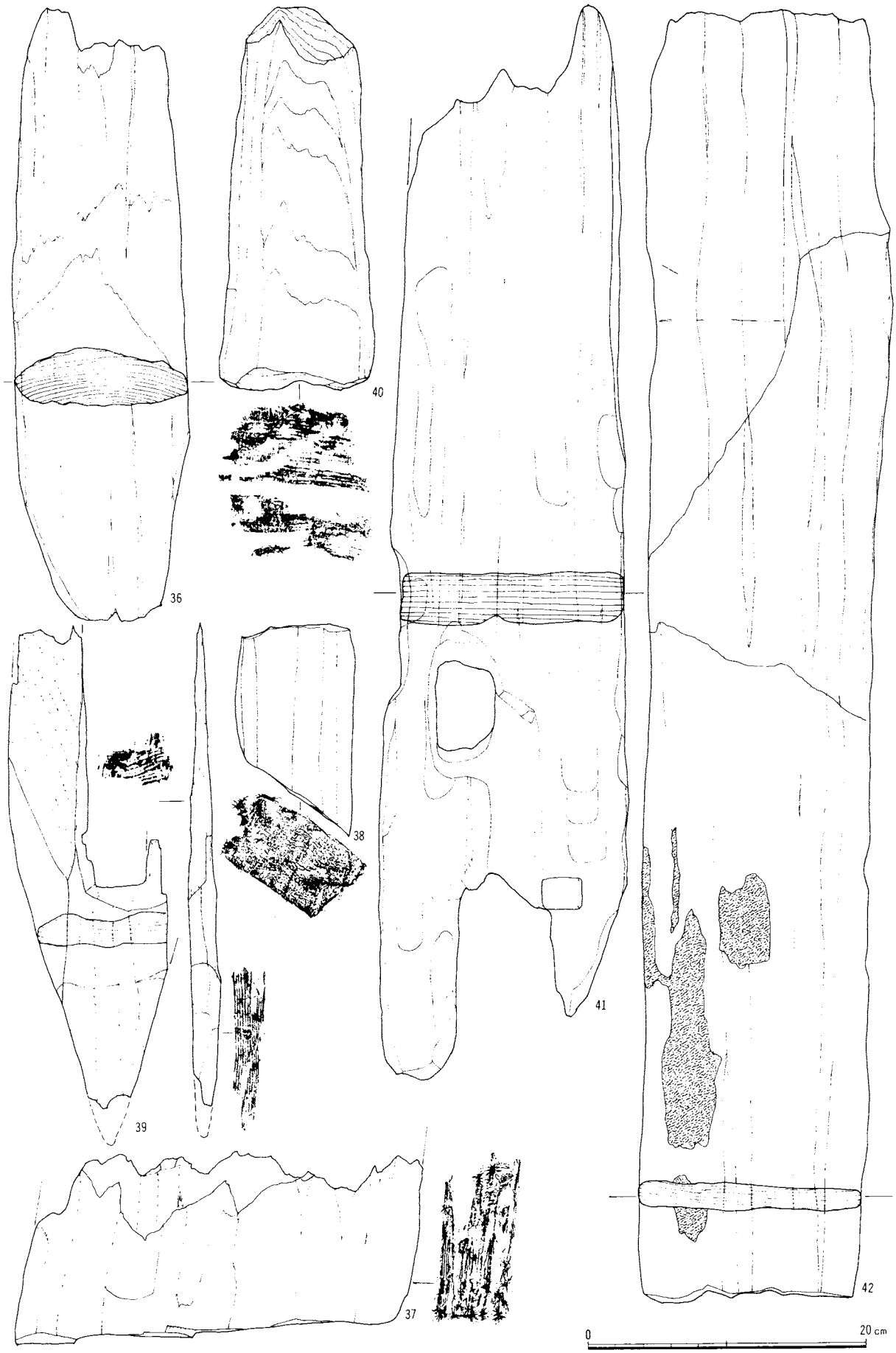
第41図　C地区ＳＸ62板材実測図　（1）　（1：4



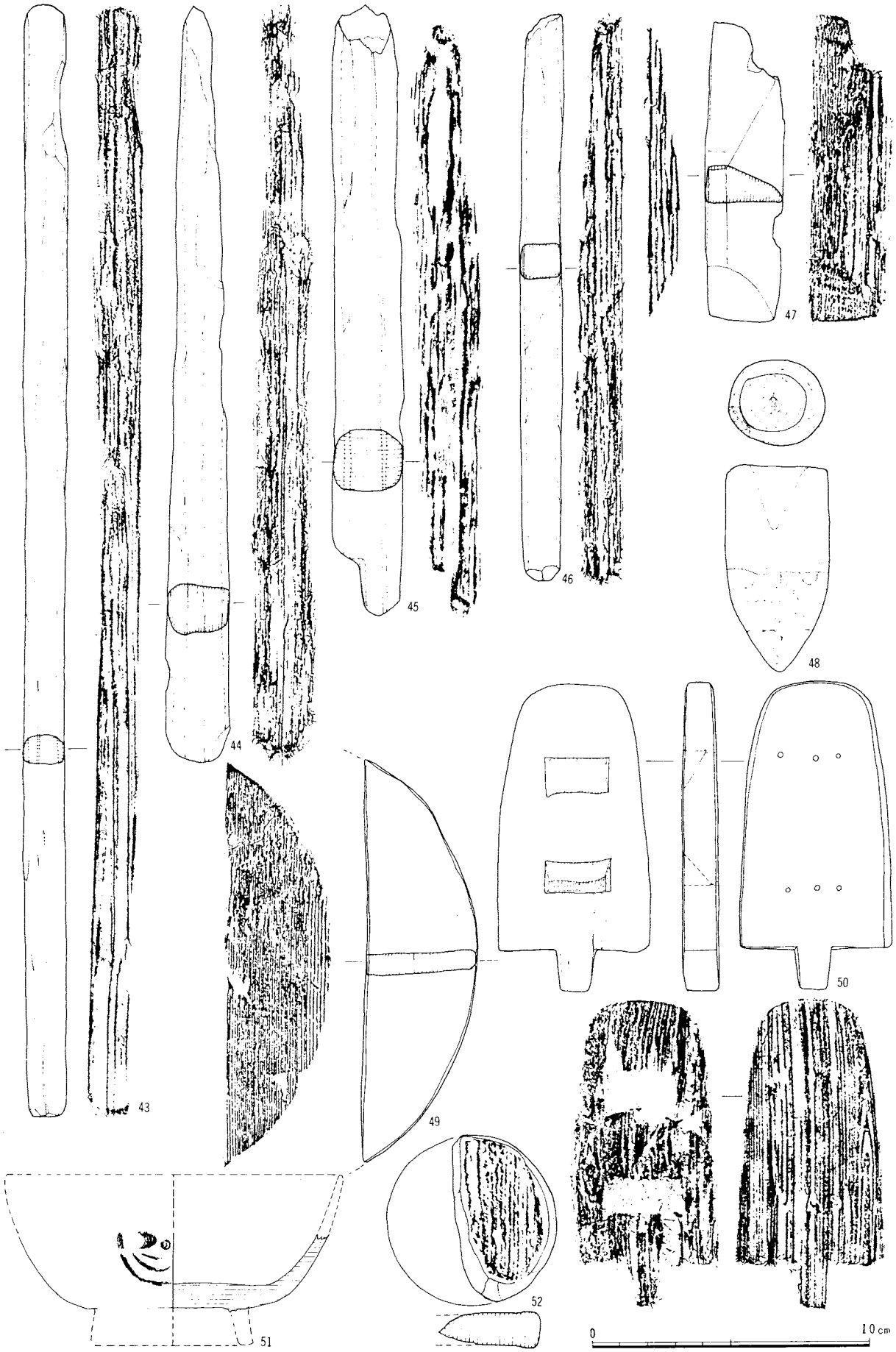
第42図　C地区ＳＸ62板材実測図（２）　（１：４）



第43図　C地区ＳＸ62板材実測図（３）　（１：４）



第44図　B・C・D地区板材、角材実測図



第45図　木製品・漆製品実測図　（1：2）

	名称	出土地区	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	形態上の特徴	部材に施された加工技法・備考
1	柱	A区 SB4	残存 58.8	モト 17.0 スエ 12.0	モト 10.7 スエ 6.4	スギ	母材直径62cm、樹齢120年か、断面形長方形。モト部イキ。スエ部腐食。	モト部分の切断は斧を利用。側面部チョウナハツリ。板目部分加工痕不明。
2	柱	A区 SB4	残存 66	14.8	14.6	ヒノキ	母材直径60cm以上、樹齢150年以上、断面形正方形。四方柾目材、断面形正方形。	モト部分木口斧による切断。一辺は片側のみ下から上へチョウナハツリ。一辺は4回のチョウナハツリ、他は3回のチョウナハツリ。
3	柱	A区 SB4	残存 45.4	12.0	13.0	スギ	母材直径50cm以上、樹齢130年、断面形正方形。二方柾目材、一面のみは樹皮をはがした自然面である、モト部イキ。	モト部木口、斧による切断、一辺のみ2面をチョウナハツリし、他の2面は片側のみ上から下へチョウナハツリしている。
4	柱	A区 SB4	残存 49.0	16.9	10.0	ヒノキ	母材直径65cm、樹齢150年以上、断面形長方形、二方柾目材、モト部イキ、一辺は木表の表面に近い部分	モト部木口、斧による切断、チョウナハツリを上から下へ施している。2辺は片側のみ
5	柱	A区 SB4	残存 49.3	18.3	14.0	スギ	母材直径150cm、樹齢140年以上、断面形長方形、二方柾目、一面は自然木表面	モト部木口、斧による切断、斧とクサビを用いて側縁を割り裂いた後、チョウナハツリをしている。方向は2方向ある。
6	柱	A区 SB4	残存 53.0	11.3	11.5	スギ	母材直径55cm、樹齢約120年、断面形正方形（面トリ）、二方柾目材、モト部イキ、1辺は樹皮近くの自然面を利用	モト部木口、斧による切断。側縁の角を整えるためにチョウナを上から下方向に施す。
7	柱	A区 SB4	残存 58.8	14.0	15.0	ヒノキ	母材直径65cm以上、樹齢130年以上、断面形正方形（面取り）、二方柾目材、モト部イキ、スエ部腐食	モト部木口、斧による切断、幅3.6～4.2cmで上から下方向にチョウナハツリによる面取り
8	柱	A区 SB4	残存 29.3	13.2	5.4	ヒノキ	母材直径70cm、樹齢140年以上、断面形長方形、二方柾目材、モト部イキ、スエ部腐食	部材をミカン割にした後、チョウナハツリで平面に仕上げている
9	柱	A区 SB4	残存 37.5	11.0	12.0	スギ	母材直径70cm、樹齢150年、断面形正方形、二方柾目材、モト部イキ、スエ部腐食	モト部木口、斧による切断、その後に4方向より打痕があり、直角に加工したものであろう。下から上へチョウナハツリ。
10	柱	A区 SB4P	残存 41.0	14.7	14.8	スギ	母材直径50cm、樹齢110～120年、断面形四角形、モト部イキ、スエ部腐食、二方柾目材	チョウナハツリ、上から下へ施される。原体幅（3.8cm）
11	柱	A区	残存 42.0	直径 16.7		不明	樹齢136年、自然木を未加工のまま使用している、断面形円形、モト部イキ	モト部斧による切断。その他は未調整。
12	柱	C区 SB40	残存 71.0	直径 20.8		コウヤマキ	樹齢110年、断面形、工具の制約からか一辺6cmの正多面となる。モト部イキ	モト部斧による切断、切断の後直角を意識して二次加工をしている可能性もある。側面チョウナによるハツリ（上から下へ）
13	柱	C区	残存 42.0	18.0	8.0	コウヤマキ	母材直径90cm以上、樹齢250年前後、モト部イキ、辺材を年輪に沿って割りはがしている、板目取り	モト部木口斧による切断、板目部分にチョウナハツリ痕あり
14	礎板	C区 SB45	残存 22.6	27.4	4.5	コウヤマキ	母材直径80cm以上、樹齢150年以上、板目材、原木の辺材部をはぎ取っている、スエ部腐食	モト部木口、斧による切断、側縁部斧とクサビによる割り
15	柱	C区 SB45	残存 73.0	直径 29.0		コウヤマキ	樹齢、丸材を作る意識で加工しているが、チョウナの原体幅の制約で側面多面体になる	モト部木口、斧による切断、側面はチョウナハツリする、（方向上から下へ）根元側面に木工用の穿孔あり（8×8cm）
16	柱	C区 SB41	残存 71.3	直径 13.6		スギ	樹齢40年、モト部イキ。部分的に加工した丸材である	モト部木口、斧による切断、部分的にチョウナハツリ痕がある。
17	柱	C区 SB41	残存 72.8	直径 14.0		スギ	樹齢40年、部分的に加工した丸材である、モト部イキ、スエ部は腐食	モト部木口、斧による切断、原体幅3.3cm程度のチョウナハツリ痕が認められる。
18	柱	C区 SB41	残存 85.3	径 16.2		スギ	樹齢50年、部分的に加工した丸材である、モト部イキ、スエ部は腐食	モト部木口、斧による切断、幅3.8cmで面取りした痕跡がわずかに残る。モト部木口、斧による切断
19	束柱か	C区 SB41	36.2	16.0	6.5	ヒノキ	母材直径90cm以上、樹齢250年以上、断面形四角形、板目ドリ、モト部イキ、スエ部腐食、かなり大きな木の辺材部を利用	モト部木口、斧による切断、斧とクサビを用いて辺材ハギ取っている。側縁部チョウナハツリ
20	柱	C区 SB40	残存 38.0	21	9.0	スギ	母材直径25cm、樹齢50年、断面形半月形、原木の半分が残存	モト部木口、斧による切断、表面の加工痕は不明
21	柱	C区 SB40	残存 24.0	9.3	11.0	スギ	母材直径21cm、樹齢50～60年、原木の$\frac{1}{6}$が残存	モト部木口、斧による切断、表面の加工痕は不明
22	柱	C区 SB40	残存 27.0	12.6	8.4	スギ	母材直径20cm、樹齢35年、原木の¼が残存	モト部木口、斧による切断、表面の加工痕は不明
23	柱	C区 SB40	残存 19.5	15.6	9.8	スギ	母材直径20cm、樹齢40年、原木の¼に割っている	モト部木口、斧による切断、原木を分割する際には斧とクサビを使用
24	板材	C区南拡 SP61	残存 48.8	21.0	6.0	ヒノキ	母材直径90cm、樹齢200年以上、モト部腐食、板目取り、原木辺材部をハギ取っている	板目部分表、裏とも未調整、中央に通し枘穴あり（6cm×4.5cm以上）、側縁部に斧による割り痕跡あり
25	板材	C区南拡 SX61	残存 38.0	20.0	4.7	ヒノキ	母材直径90cm、樹齢200年以上、板目取り、モト部分腐食、原木辺材部をハギ取っている	板目部分表にもかすかにチョウナ痕あり、中央に通し枘穴あり（5×6以上）
26	板材	C区南拡 SA61	残存 41.0	推定 22.0	5.2	スギ	母材直径80cm、樹齢150年以上、板目ドリ、モト部腐食	モト部加工痕不明、側縁部チョウナハツリ、中央部に通し枘穴あり（6cm×6.5cm以上）、筏穴はノミ使用

第15表　柱根・板材観察表

	名称	出土地区	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	形態上の特徴	部材に施された加工技法・備考
27	柱	SX62	残存39.0	17.2	5.3	モミ	母材直径60cm、樹齢140年以上、断面形長方形、板目ドリ、辺材部分を利用している	モト部木口、斧による切断、板目部分未調整、側縁一方をチョウナハツリ
28	板材	SX62	残存27.4	21.3	6.4	ヒノキ	母材直径100cm、樹齢200年以上、板目ドリ	モト部木口、斧による切断、側縁斧とクサビによる割り
29	板材	SX62	残存16.0	22.6	7.6	イヌガヤ	母材直径80cm、樹齢100年以上、板目ドリ、モト部はイキ。スエ部は腐食	モト部木口、斧による切断、側縁、斧とクサビによる割り。正面部は辺材の樹皮
30	板材	SX62	残存29.0	21.8	9.4	ヒノキ	母材直径80cm、樹齢150年以上、板目ドリ、モト部イキ、やや厚くしっかりした部材である	モト部木口、斧による切断、板目部チョウナハツリ、側縁部斧とクサビによる割りの後チョウナハツリ
31	板材	SX62	残存35.0	22.7	5.5	ヒノキ	母材直径120cm、樹齢200年以上、板目ドリ、モト部イキ、木口の切断面が直角である	モト部木口、斧による切断、板目部未調整、側縁部斧とクサビによる割りの後、荒くチョウナハツリ
32	角材	SX62	残存46.0	9.2	4.2	ヒノキ	母材直径80cm以上、樹齢150年以上、柾目ドリ	モト部木口、斧による切断、柾目部荒くチョウナハツリ、斧とクサビによる割り
33	板材	SX62	47.0	28.4	7.2	ヒノキ	母材直径60cm、樹齢140年以上、辺材部を板目ドリしている	モト部伐採時の斧跡の他に木穴側から斧による2次加工があり、地面に打ち込みやすくしている。側縁チョウナハツリ、板目部未調整
34	板材	SX62	31.0	15.3	7.7	スギ	母材直径70cm以上、樹齢140年以上、辺材部を板目ドリしている	板目部分、表、裏面とも荒くチョウナハツリ、モト部四方から斧を入れて杭状にしている
35	板材	SX62	残存31.0	10	10	スギ	母材直径20cm、樹齢30～40年、原木で¼に分割したものか	モト部木口、斧による切断、その他は未調整
36	板材	SX62	残存44.0	12.3	2.2	スギ	断面長方形の薄い板状で、モト部の両端を切断してくさび形にしている。部材の表面を使用している。	表面自然状態、裏面チョウナハツリ、側縁、モト部両端斧によるハツリ
37	板材	SX62	残存12.6	27.8	6.4	スギ	直径80cm以上、樹齢200年以上、板目ドリ	モト部斧による切断痕、原木を引き裂きその後内外側をチョウナハツリする
38	角材	C区EB包	13.2	7.7	5.2	ヒノキ	母材直径90cm以上、樹齢300年以上、二方柾目	モト部斧による切断（断面形三角形）、側縁部チョウナハツリ
39	杭(転用材か)	C区F16包	残存34.0	推定15.0	2.2	スギ	母材直径40cm以上、樹齢80年以上、辺材部を板目ドリしている	モト部側縁を斧によりくさび形に成形。表面裏面イキ、チョウナハツリ。ノミによる枘穴穿孔（3.2cm×4.4cm）
40	柱	B区C25包	残存27.0	10.0	9.8	スギ	モト部分が太く漸次幅がせまくなる、二方柾目、断面形正方形	モト部分、斧による加工痕があるが腐食が著しく、床跡をとどめるのみである。両側縁チョウナハツリ
41	板材	D区自然流路南壁	残存107.0	26.8	7.0	スギ	母材直径60cm前後、樹齢100年以上、柾目板	モト部分、斧による切断、板部モト方向よりチョウナハツリか小（3.2×3.2cm）側縁部モト方向からのチョウナハツリ、枘穴（9×7cm）、凹面継手
42	板材	D区自然流路	93.0	16.5	1.0	ヒノキか	母材直径35cm以上、樹齢60年以上、表、裏面ともチョウナハツリか、柾目板、一面のみ部分的に炭化している	表面チョウナによるハツリか、材の腐食のためやや不明瞭
43	柄	B区G31包	39.8	1.5	1.0	スギ	断面形四角形、角をヤリガンナ又は刀子で面取りしている。先端の1辺に凹形の刻みを入れている	割られた小部材を利用し、ヤリガンナ又は刀子で加工している。
44	柄	C区南半	残存26.7	2.1	1.6	スギ	断面形四角形で下端部の方が太い、下端部はイキ。	ヤリガンナ又は刀子によるケズリ、4辺も面取り。下端部もケズリ。
45	加工木	C区南半	残存21.0	2.4	2.2	スギ	断面形隅丸四角形	面取り痕あり。
46	柄	B区G31包	20.2	1.5	1.0	スギ	断面形四角形。下端部はイキ	ヤリガンナ痕か、4辺も面取り、下端部もケズリ。
47	不明加工木	C区SD63	10.9	残存2.7	1.3	スギ	偏平な四角錐の頂部を切断したような形をしている、柾目	小刀によるケズリ、薄板を製作する時の半製品か
48	こま	A区包含層	直径3.8		高さ7.3	広葉樹林	自然木の一方を円錐形にケズリ、上部を扱っている。	上端面、回転させながら刀子でケズる。円錐部、刀子によるケズリ。
49	曲物底部	C区南半B11	直径18.0		0.6	ヒノキか	樹齢80年以上、柾目材	側縁ヤリガンナ痕か、表面裏面とも調整不明
50	不明木製品	B区G31包	11.0	5.5	1.2	スギか	長方形の2辺を隅丸に加工し、下端部両側からノミで欠いて突起状に材を残している。柾目	表面中央に幅2.7cm、たて1.2cmの止めホゾ穴をうがつ。ほぞ穴の断面は3角形。材を固定するため表面から3個ずつ竹くぎを打つ。
51	漆椀	A区D11	口径12.0	底径6.0	高6.2	不明	横木どり、底部がやや厚い	外面黒漆、内面朱漆、外面に円帯文を朱彩する、類例島根県富田川河床遺跡（内朱、外黒、紋様朱）
52	木器底部	C区南半C9、SD62	直径6.0		0.9	スギか	柾目材	側縁部が斜めに加工される、工具は不明

第16表　柱根・板材・木製品観察表

Ⅵ　前沖遺跡木質遺物の樹種同定

三重大学教育学部　堀　場　義　平

1．はじめに

この報文は、三重県松阪市前沖遺跡から出土した木質遺物の樹種同定を目的としたものである。

出土した木質遺物の多くは、奈良時代の建築構造物の遺骸で、主として柱、梁、杭などの加工材である。今回、三重県教育委員会の依頼により木質遺物25点の樹種を同定したので、その結果をとりまとめた。

2．供試片及び同定方法

供試片は、図1に示した材片25点である。

供試片の大きさは、およそ厚さ1～5㎜、幅3～6㎜、長さ10～50㎜の微小材片である。

樹種同定は、次の手順で調整した。

まず、各供試片の年輪幅、比重、堅さ、保存状態、色調、汚れ度などの一般的性質を分類整理した。

年輪幅は、各試片の任意の年輪について、ノギスを使用して1／20㎜まで測定した。

比重は、科学天秤で1／100ｇまで秤量した各試片の重量を見かけ上の大まかな体積で除した。

汚れ度は、汚染用グレースケール（JIS・L0805）を使用して色の違い（色差）の程度を視覚によって比較しながら9段階の色標値（1～5、1号に近い程汚れ大）によって判定した。

その他の堅さ、保存状態及び色調は、筆者の主観により整理した。

次に、各供試片について、木材3断面（木口、柾目、板目）のプレパラート切片を作成し、木材組織上の特徴を光学顕微鏡観察により分類整理した。

樹種同定は、供試片の顕微鏡写真と既知木材の顕微鏡写真から組織的特徴を照合し、かつ、一般的性質をチェックしながら行った。

プレパラート切片の作成は、ミクロトームによる方法とカミソリナイフによる方法を併用した。

ミクロトームによる方法では、微小試片の場合、一般にポリエチレングリコールで包埋したブロックの切片作成によるが、今回は時間的余裕がなかったので軽軟なバルサ材を保持材（保持材の間に試片を挿入）とし、保持材と共に試料切片を作成した。

カミソリナイフによる方法は、微小木口では輪切りの要領で切片を作成したり、或は柾目、板目の正断面が得難い試片では小刀ナイフによる鉛筆削りの要領で切片を作成した。

組織的特徴の識別拠点としては、針葉樹材の木口面における仮道管細胞の春夏材の推移、樹脂細胞の分布。柾目面における分野壁孔、らせん肥厚。板目面における放射組織細胞高などに重点をおいた。

3．結果及び考察

同定した樹種は、針葉樹材5種（スギ9点、ヒノキ10点、コウヤマキ4点、イヌガヤ1点、モミ1点）である。

各供試片について、年輪幅、比重、汚れ度、色調、堅さ、保存状態などの一般的性質と、放射組織細胞高、分野壁孔、樹脂細胞、らせん肥厚などの組織的特徴を表1に示した。

なお、一般的性質のうち、年輪幅と汚れ度の関係から同定した樹種を区分すると、第46図になった。

即ち、年輪幅と汚れ度の数値は、樹種により差異があるので、樹種区分に役立った。

各樹種の一般的性質と組織的特徴の識別拠点は、次の通りである。

(1)　スギ　*Cryptomeria japonica*

〔性質〕　年輪幅2.76±0.44㎜、比重0.37±0.05、汚れ度2.06±0.50、暗褐色系、稍軟、保存状態稍不良、肌目粗。

〔組織〕　春夏材の推移急、樹脂細胞は年輪の外半分に散在、分野壁孔はスギ型、放射組織細胞高2～15。（PL26）

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*

〔性質〕 年輪幅1.84±0.51mm、比重0.31±0.03、汚れ度2.05±0.47、灰褐色～灰黄褐色系、稍硬、保存状態稍良好、肌目稍精。

〔組織〕 春夏材の推移は緩、樹脂細胞は夏材部近辺に散在、分野壁孔はヒノキ型、放射組織細胞高2～13。（ＰＬ26）

(3) コウヤマキ *Sciadopitys verticillate*

〔性質〕 年輪幅1.48±0.24mm、比重0.43±0.04、汚れ度2.88±0.22、灰黄褐色系、堅硬、保存状態良好、肌目精。

〔組織〕 春夏材の推移は緩、樹脂細胞欠く、分野壁孔は窓型、放射組織細胞高１～７。（ＰＬ25）

(4) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*

〔性質〕 年輪幅1.4mm、比重0.5、汚れ度1.5、暗黒褐色系、稍硬、保存状態稍良好、肌目精。

〔組織〕 春夏材の推移は稍緩、樹脂細胞は年輪内に平等に散在、分野壁孔はトウヒ型、仮道管内壁にらせん肥厚、放射組織細胞高１～４。（ＰＬ27）

(5) モミ *Abies firma*

〔性質〕 年輪幅2.4mm、比重0.2、汚れ度１、汚染のせいか暗紅褐色系、極軟、保存状態不良、肌目不明。

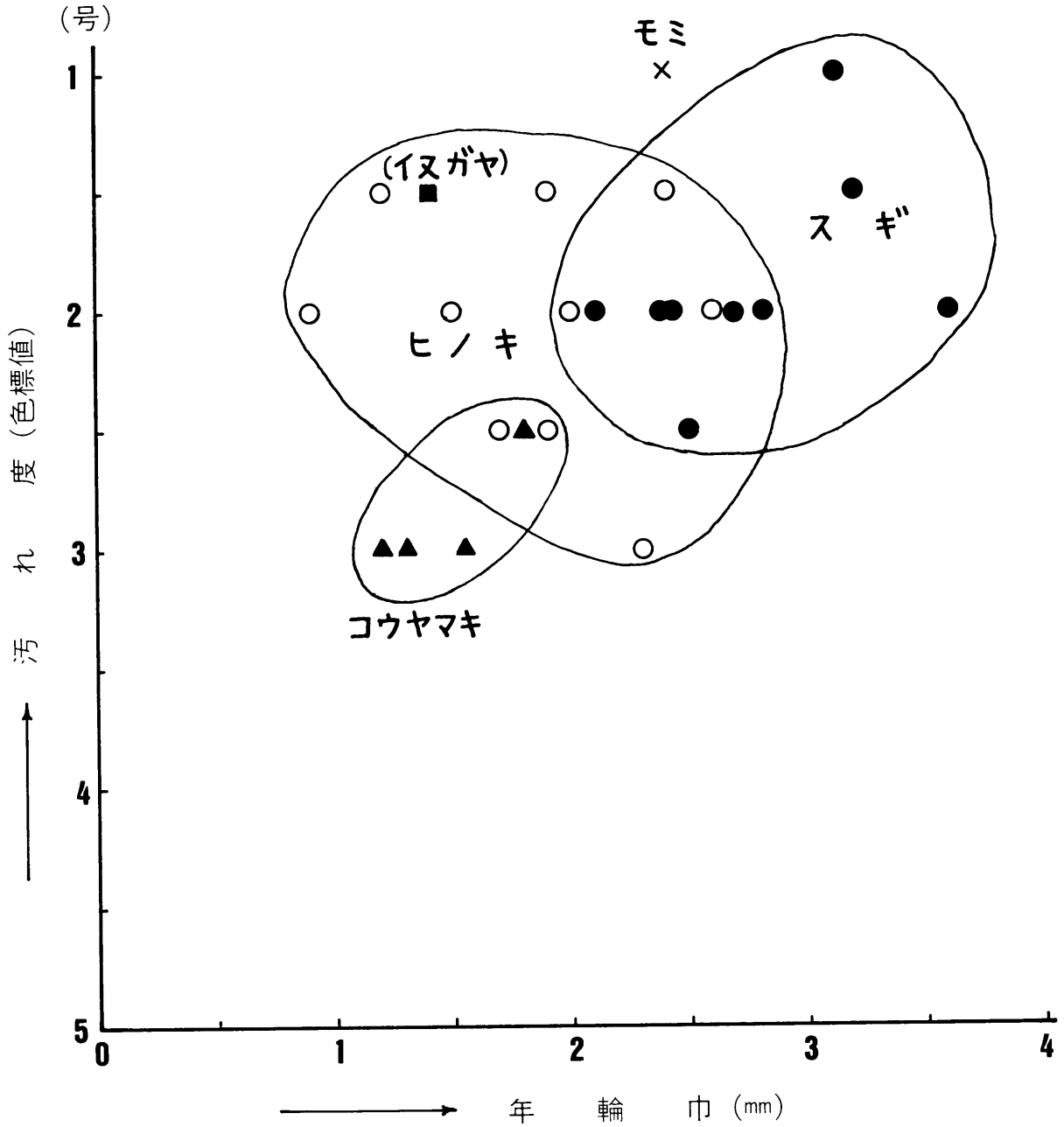
〔組織〕 仮道管細胞は、半径方向からの外力により圧潰。このため木口面と板目面の光顕観察不能。柾目面観察によると、分野壁孔はスギ型、放射組織細胞高極大。識別拠点少ないがモミと同定した。（ＰＬ25）

4．あとがき

今回、依頼された樹種同定は、試料提供から報告書提出まで３週間しかなく、再検討の余裕がなかった。

No.	記号	樹種名	一般的特徴						組織的特徴		
			年齢巾（mm）	比重	汚れ度	色調	堅さ	保存状態	放射組織細胞高	分野壁孔	その他
1	W 1	スギ	2.7	0.4	2	暗紅褐色	稍軟	稍良	2～9	スギ型	樹脂細胞
2	W 4	ヒノキ	2.3	0.3	3	暗黄褐色	稍硬	〃	1～11	ヒノキ型	〃
3	W 2	スギ	2.4	0.4	2	暗紅褐色	〃	〃	2～4	スギ型	〃
4	W 3	〃	2.4	0.4	2	〃	軟	不良	2～10	〃	〃
5	W 5	〃	3.1	0.3	1	暗黒褐色	稍軟	稍良	2～8	〃	〃
6	W 6	〃	2.5	0.4	2.5	暗紅褐色	〃	〃	3～12	〃	〃
7	W 8	ヒノキ	2.6	0.3	2	〃	〃	稍不良	3～15	ヒノキ型	〃
8	W 16	スギ	2.1	0.4	2	暗黒褐色	稍硬	稍良	3～6	スギ型	〃
9	W 17	〃	2.8	0.3	2	〃	稍軟	稍不良	2～12	〃	〃
10	W 18	〃	3.6	0.4	2	暗紅褐色	稍硬	稍良	3～9	〃	〃
11	W 13	コウヤマキ	1.3	0.4	3	灰黄褐色	硬	良好	1～7	窓状	－
12	W 19	ヒノキ	1.9	0.3	2.5	暗黄褐色	稍硬	稍良	2～6	ヒノキ型	樹脂細胞
13	W 14	コウヤマキ	1.2	0.4	3	〃	硬	良好	2～6	窓状	－
14	W 15	〃	1.8	0.4	2.5	〃	〃	〃	2～6	〃	－
15	W 27	モミ	2.4	0.2	1	暗紅褐色	軟	不良	30以上	スギ型	樹脂細胞
16	W 32	ヒノキ	0.9	0.4	2	灰黄褐色	稍硬	稍良	2～13	ヒノキ型	〃
17	W 29	イヌガヤ	1.4	0.5	1.5	暗黒褐色	〃	〃	1～4	トウヒ型	らせん肥厚
18	W 24	ヒノキ	1.5	0.3	2	暗黄褐色	稍軟	〃	2～9	ヒノキ型	樹脂細胞
19	W 26	スギ	3.2	0.3	2.5	暗紅褐色	〃	不良	2～12	スギ型	〃
20	W 25	ヒノキ	1.2	0.3	1.5	灰黄褐色	〃	〃	2～8	ヒノキ型	〃
21	W 28	〃	1.7	0.3	2.5	〃	軟	〃	6～9	〃	〃
22	W 30	〃	2.0	0.3	2	〃	稍硬	良好	5	〃	〃
23	W 31	〃	2.4	0.3	1.5	〃	稍軟	稍良	2～14	〃	〃
24	W 33	〃	1.9	0.3	1.5	〃	稍硬	良好	2～8	〃	〃
25	W 12	コウヤマキ	1.6	0.5	3	〃	硬	〃	3～4	窓状	－

第17表　供試片の特徴



第46図　試片の年輪幅と汚れ度

Ⅶ 結　　語

Ⅰ 遺　　構

前沖遺跡は、伊勢寺扇状地の扇端部に位置する約150,000㎡にも及ぶ広大な遺跡である。今回の調査は遺跡内の東西に道路幅25m、4地区の総延長合計約470m、南北に幅10m、長さ約145mの十字トレンチを設定した調査となった。

検出した遺構・遺物などから、当遺跡は奈良時代から平安時代初期にかけての集落であることを確認した。扇状地扇端部に立地するため、所々に湧水があり、土中の木材の保存状態が良く、掘立柱建物の掘形内に柱根が残存していた建物は、7棟（A地区1棟、B地区1棟、C地区5棟）ある。また、柱列の掘形内に柱根が残るものは2条（A地区1条、C地区1条）、さらにC地区では、ピット内に柱根を持つものは6箇所がある。そして、時期・性格ともに不明であるが、加工板材の埋設箇所を中心とした木材の群もある。これらの柱根などは、加工痕が明瞭なものが多く、古代の木工技術を知るための手掛りを与えてくれている。なかでもA地区のもの以外は、その殆どがC地区に集中している。なお、C地区でも特に掘立柱建物が集中した箇所から西側は湿地帯であり、現在も暗渠排水が設けてあった。

さて、全調査地区を概観すると、掘立柱建物群を中心とした遺構の集中箇所が、それぞれ一定の間隔をおいて分布しているのがわかる。各地区間は遺構が極めて少なく、また地盤も軟弱な箇所が多い。それは遺構の集中箇所でも同じで、比較的軟弱な箇所には遺構の密度は少ない。

A地区は、掘立柱建物や竪穴住居が集中する箇所の地盤が比較的安定している。特にSA3、SB4の位置する箇所が最も安定しており、発掘区外の南西方向に延長すると考えられ、集落の中心をそこに想定することが可能である。なお、掘立柱建物は3棟あるが、奈良時代と平安時代初期では、その柱通りの方向が異っている。

B地区は、SB29以西を除くその殆どに遺構が分布しており、東に向うほど安定した地盤である。竪穴住居・掘立柱建物群は、奈良時代と奈良時代末期から平安時代初期にかけての建物に分けられ、前者が多く、後者は少ない。全地区を通して奈良時代の竪穴住居が最も集中するのは当地区であるが、竪穴住居とはいえ、居住空間としては狭く、或いは食物の貯蔵や煮焚きの場所とも考えられる。SB15は倉庫と推定されるが、竪穴住居3棟が倉庫を取り囲むように位置しており、相互に機能的な分担をもっていたとも想定できる。掘立柱建物のうち、倉庫であるSB15•24を除く奈良時代の建物は、柱通りの方向に極端なズレはなく、多少の時期的な幅はあるにしても、同時併存と考えられる。また発掘区中央を南北に走る溝SD21は、掘立柱建物群の間に位置することから、集落内の区画溝と考えられようが、生活用水としての機能を想定したほうが良さそうである。なお、B地区でも奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物SB25の柱通りの方向は、奈良時代とやや異なっている。

C地区は、全地区を通じ最も掘立柱建物が集中している。奈良時代の掘立柱建物は、SB48が位置的にやや東に偏在するものの、SB42以西に集中しており、奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物は、大半が奈良時代の建物から東に位置している。両者の間はさほど距離がなく、単純に分離する訳にはいかないが、少なくとも建物の柱通りの方向は明らかに異なっている。SB42を中心とする奈良時代の建物は、柱通りの方向がほぼ共通しており、計画性が認められるが3棟と少ない。この西側に生活の場を想定すれば、調査地区外に建物群が広がるのかも知れない。奈良時代末期から平安時代初期の建物の柱通りの方向は、多少のズレはあるが共通性が認められる。おそらく、時期不明の建物SB51•52は、この時期に含まれる可能性が高い。しかし、SB50•53•57は柱通りの方向が、やや他のこの時期の建物

とズレていることから、奈良時代の建物に近く、若干時期が古いとも考えられる。いずれにしても、この時期の建物群は、南側に建物が検出されなかったことを考え合わせると、ＳＢ34～36•40•41などを中心として、一定のまとまりをもって、北側に展開していたと想定できる。

さて、湧水が多いのが当地区の特徴であり、溝が多いのもそれと無関係ではなかろう。ＳＤ60•63•64などは区画溝というよりも、排水路的な機能を考えたい。ただ、ＳＤ39はＳＤ32•64よりも新しく、方向も遺跡東方に広がる条里地割とほぼ直行しており、何等かの関連をもつと考えられよう。ＳＤ54•55も、ほぼＳＤ39と平行しており、時期不明で道路に伴う溝とも推定されるが、ＳＤ39との関連も想定可能である。

Ｄ地区は調査地区の西端に位置し、遺構・遺物とも少ない。しかし、発掘区の西側は湿地、東側は少し開析された谷筋であり、その間の地盤は安定しており、立地条件としては良好である。古墳時代の竪穴住居ＳＢ66を検出したのは、その安定した地盤であり、その範囲は東側発掘区外の南へ広がるものと想定される。しかし、耕土直下は地山であり、削平を受けているため遺構の残存度は低いと推定される。

前沖遺跡には、奈良時代から平安時代初期に、扇端部のうちでも比較的湧水の影響の少ない安定した箇所を選んで集落が点々と形成されていたことが確認された。掘立柱建物は、桁行３間ないし４間の小規模な建物が多く見られるものの、廂付建物や、大形の柱掘形をもつ倉庫の存在、さらには、比較的柱通りの方向を揃える建物群がいくつか見られた。また、円面硯、墨書土器が出土している点を考慮すると、単なる一般集落とは考え難く、在地有力者層を包括した集落と考えたい。

（河瀬信幸）

Ⅱ　遺　　物

上述のごとく前沖遺跡出土の土器形式は、大きく奈良時代前期から平安時代初期に四細分され、当遺跡の盛行期と比定することができる。以下遺跡の性格を考えるうえで特徴的な遺物について簡単に述べることにする。

１）墨書土器

ＳＤ21出土須恵器杯Ｂ蓋の『□内』、包含層出土山茶碗の『上』・山茶碗『十』がある。

県下出土の墨書土器は、次第に増加している。主要なものを略述すると、多度町柚井遺跡[12]灰釉陶器椀『大善』・『大福』などの吉祥文字。明和町斎宮跡の土師器杯『水司鴨』[13]・土師器皿『大』[13]・土師器杯『萬』[14]・須恵器皿『膳』[15]・土師器高杯の墨書人面[16]。松坂市榎長遺跡[17]の土師器杯『諸人』。多気町カウジデン遺跡[18]の灰釉陶器椀・皿『中万』。山茶椀類では、津市宮間戸遺跡[19]の『上』・『下』・『十』・『ち□』・『か』。亀山市山城遺跡[20]の『⁘』（梅花紋）。松阪市小野遺跡[21]『⁘』。明和町古里遺跡[22]（Ｄ地区）の『の』・『⁘』・『∴』・『大』・『井』。松阪市曲遺跡[23]の「メ」などがある。また磯部町侍岡遺跡[24]では、蔵骨器に転用された室町時代鍋の内面に、阿弥陀三尊と地蔵菩薩の梵字がある。

これらを大別すると吉祥文字、官職名、人名、地名、呪術的絵画、梵字、記号などに分類できる。

前沖遺跡の『□内』は、人名、地名、官職名のいずれかであろうが次に述べる円面硯の出土と併せて識字層の存在が考えられる。山茶碗の『上』・『十』については、前述したように大量普及する山茶椀には、ひらがな、「上」・「井」などの漢字の他、『⁘』・『メ』などの記号化したものが多い。生産時または流通時における墨書か、消費地における墨書かは今後の資料の増加を待って考察しなければならない。前沖遺跡の墨書山茶椀もこうした記号化したものと考えられよう。

２）円面硯

Ｃ地区包含層出土の円面硯は、大ぶりでしっかりしており型式的に折戸10号窯古段階のものである。県内出土例では、名張市観音寺遺跡[25]、安濃町浄土寺南遺跡[26]、四日市市岡山２号窯[27]よりもやや後出のものと思われる。なお円面硯の他にも、須恵器杯Ｂ蓋、

杯Ｂの転用硯が約10点出土している。

3）製塩土器

掘立柱建物ＳＢ35の柱掘形およびその周辺において集中的に出土した。いわゆる「志摩式土器」[28]と呼称されるものである。二次的に火を受けているため赤褐色を呈し、もみ殻痕を残す平底の底部から粘土紐巻き上げにより成形される。粗い砂粒を含む土器である。この「志摩式土器」は、おそらく堅塩の生産と運搬に使用されたと想定されるが、その分布範囲は、東員町新野遺跡[29]、上野市下郡遺跡[30]、同市馬場西遺跡[31]などの海浜部から離れた遠隔地においても発見されている。また、中南勢の奈良時代末葉から平安時代の集落跡でも少量出土している。斎宮跡においての出土は多く、ＳＫ3127では黒色土器椀、灰釉陶器を伴う製塩土器が厚手であるのに対し、奈良時代末葉から平安時代初期のものは薄手であることが確認されている。

前沖遺跡では、この薄手のものに近く、灰釉陶器を伴わない奈良時代末葉から平安時代初期のものといえよう。しかも、ＳＢ35は５間×２間の規模を持つ大型の掘立柱建物で、集中出土したことは注目されよう。なお近隣の曲遺跡においても、平安時代前半の５間×２間以上の掘立柱建物に伴い製塩土器が出土していることから、集落内でも優勢な階層者が堅塩の集積や分配・堅塩を用いた祭祀などの管理に携わっていたことが推定される。

なお、遺構出土遺物の概要については前述してきたが、各遺構出土遺物数を第18表に掲げた。

（増田安生）

		土師器													須恵器										黒色土器
		Ⅲ	杯A	杯B	杯C	杯B蓋	高杯	甕	小型甕	把手付甕	甑	製塩土器	盤	カマド	杯A	杯B	杯B蓋	双耳瓶	長頸瓶	短頸壺	小型短壺	高杯	甕	脚	杯
A区	SB 7				2			1	1														1		
	SA 3						1																		
	SB 4							1																	
B区	SK12							3	1																
	SB13		1		1			1																	
	SB14	1	2		2		1	1				1					1								
	SB15	1						4	1										1		1				
	SB16				1																				
	SB17	1	4		3			1																	
	SB18				1				1																
	SK19	2	4				1	2	1								1					1	1		
	SB20	1	1		1																				
	SD21	7	8		4		短脚1	7	4							4	3		1				1		
	SK22	1	3	1				2				1													
	SD29		2					1	1																
	SD30		2														1								
	SD31		1																						
C区	SK33	1	7		2			5	3	4						1	1						1		
	SB34	1	2					3															1		
	SB35	4	7	1	1		1	5	1			7			1		3		1						
	SB36	1	3		1			3	1									1					1		
	SA38	1	4									3													
	SD39	4	5		2			4	1		1				1	5	4		1				3		1
	SB40	1	3					2								1					1				
	SB42		3					1	2															1	
	SK46	1	3					1	1							1								1	
	SK47	2	3					2	2							1								1	
	SB48	1	3		1			4	1						2										
	SK52							1						1											
	SK56	1	3					3	2																
	SB58							2																	
	SB59	1									1														
	SD60	1	3					2	1	1						1	2	2	1				1		
	SK61	1	2		1	1		1								2									
	SD64	3	6		1	1		7	2							3	3						3		

註

①三重県斎宮跡調査事務所年報1984　三重県斎宮跡調査事務所

②三重県斎宮跡調査事務所年報1979　三重県斎宮跡調査事務所

③中村信裕「浄土寺南遺跡」昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告、三重県教育委員会1981年

④横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4．1978年

⑤藤澤良祐「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ」瀬戸市民俗資料館　1982年

⑥近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ　三重県教育委員会　1986年

⑦久志本鉄也「丹生川上域発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告70　三重県教育委員会　1985年

⑧愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）愛知県教育委員会　1980年

⑨　⑧同掲書　P.44～P.45

⑩　⑧同掲書　P.68

⑪　久志本鉄也、松本覚　「山田城発掘調査報告」東員町教育委員会　1982年

⑫　「三重考古図録」　三重県教育委員会　1954年

⑬　倉田直純「史跡斎宮跡第37―4次発掘調査報告」P.15　明和町
三重県斎宮跡調査事務所　1985年

⑭　『三重県斎宮跡調査事務所年報　1979年　史跡斎宮跡発掘調査概報』　P.32　1980年

⑮　『三重県斎宮跡調査事務所年報　1982年　史跡斎宮跡発掘調査概報』　P.32　1983年

⑯　『三重県斎宮跡調査事務所年報1985年　史跡斎宮跡発掘調査概報』P.40　1986年

⑰　近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査「榎長遺跡」現地説明会資料　1986年

⑱　谷本鋭次『昭和54年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』P.59～P.76　三重県教育委員会　1980年

⑲　中村信裕『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』P.29～P.44　三重県教育委員会　1983年

⑳　『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ　北瀬古・山城（二次）・大鼻遺跡』　三重県教育委員会　1986年

㉑　『松阪市史第2巻（考古編）』松阪市教育委員会

㉒『谷本鋭次、山沢義貴　『古里遺跡発掘調査報告―D地区―』　三重県文化財連盟　1974年

㉓　『昭和59年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』P.47～P.92　三重県教育委員会

㉔　伊藤保、高見宣雄　『侍岡中世墓発掘調査報告』磯部町教育委員会　1982年

㉕　仁保晋作　『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　P.136～P.168　三重県教育委員会　1985年

㉖　中村信裕　『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』P.45～P.72　三重県教育委員会　1981年

㉗　小玉道明、山沢義貴『岡山古窯址群発掘調査報告』四日市市教育委員会　1971年

㉘　伊藤保　「三重の土器製塩Ⅰ」『郷土志摩』第52号別冊　1979年

㉙　小玉道明「西山遺跡・新野遺跡」　東員町教育委員会　1976年

㉚　「下郡遺跡試掘調査概報」　三重県教育委員会　1979年

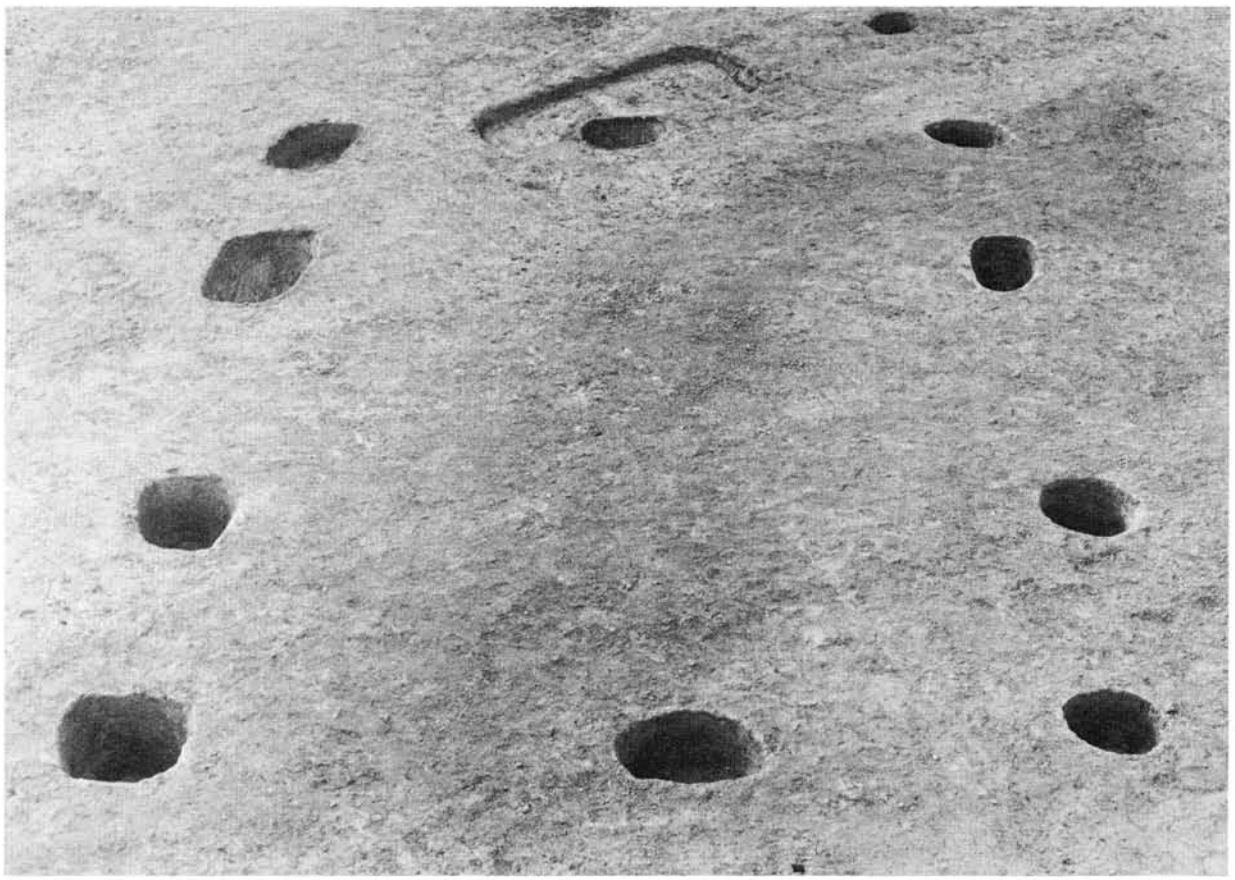
㉛　山田猛、森前稔　「昭和56年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告」P.63～P.68　三重県教育委員会　1982年

図　　版

航空写真（南から）

A地区全景（東から）

SA3，SB4（東から）

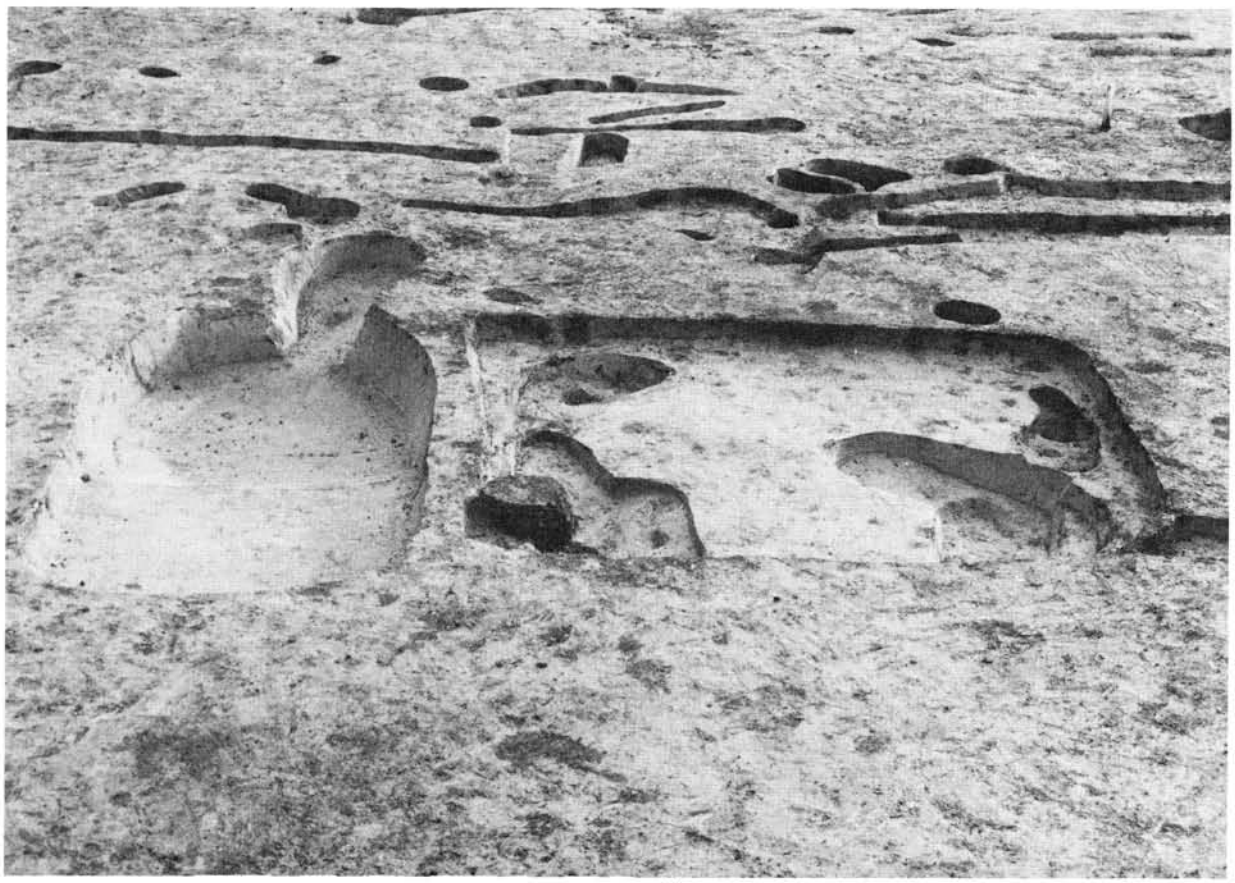


SB5（東から）

SB7（北から）

B地区全景（東から）

SB15周辺（西から）



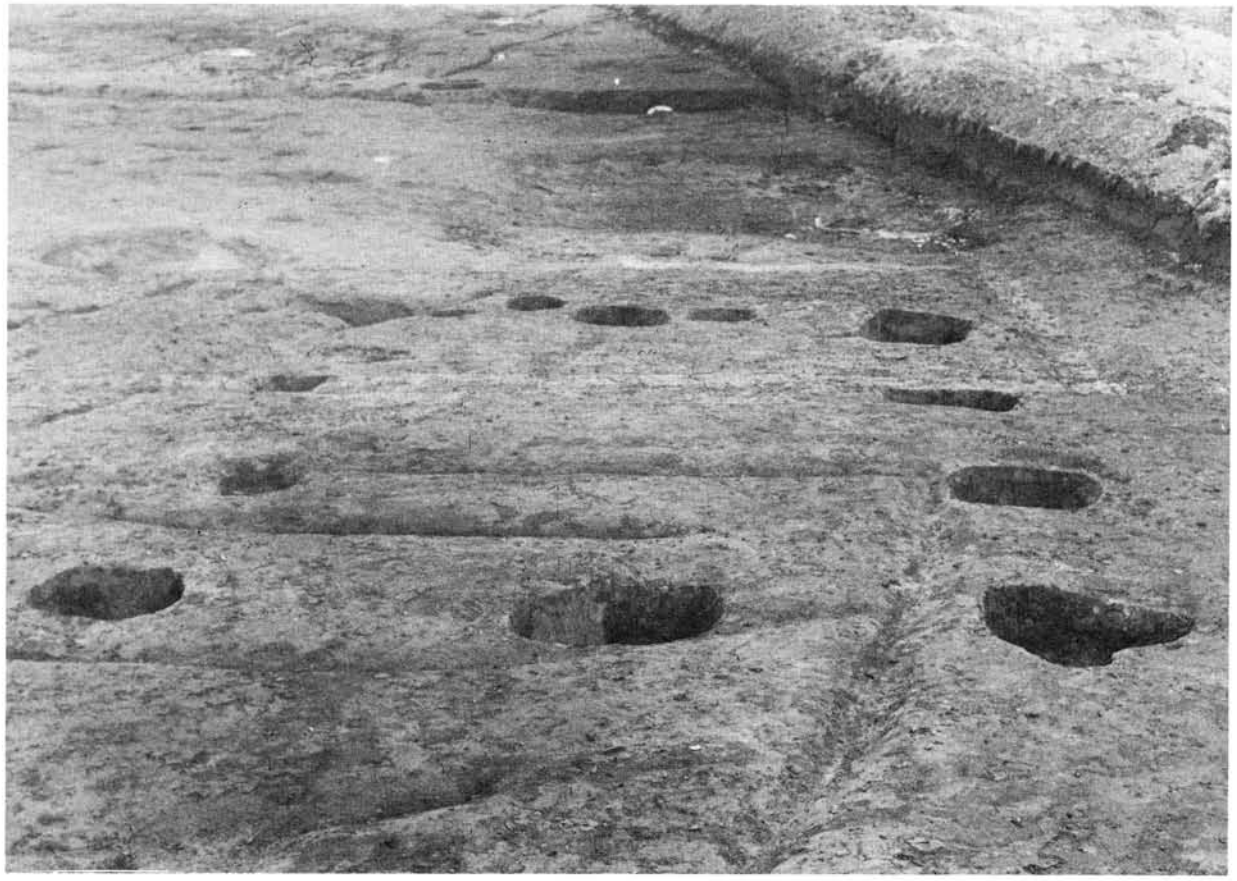
SK12, SB13（北から）

SB14（南から）

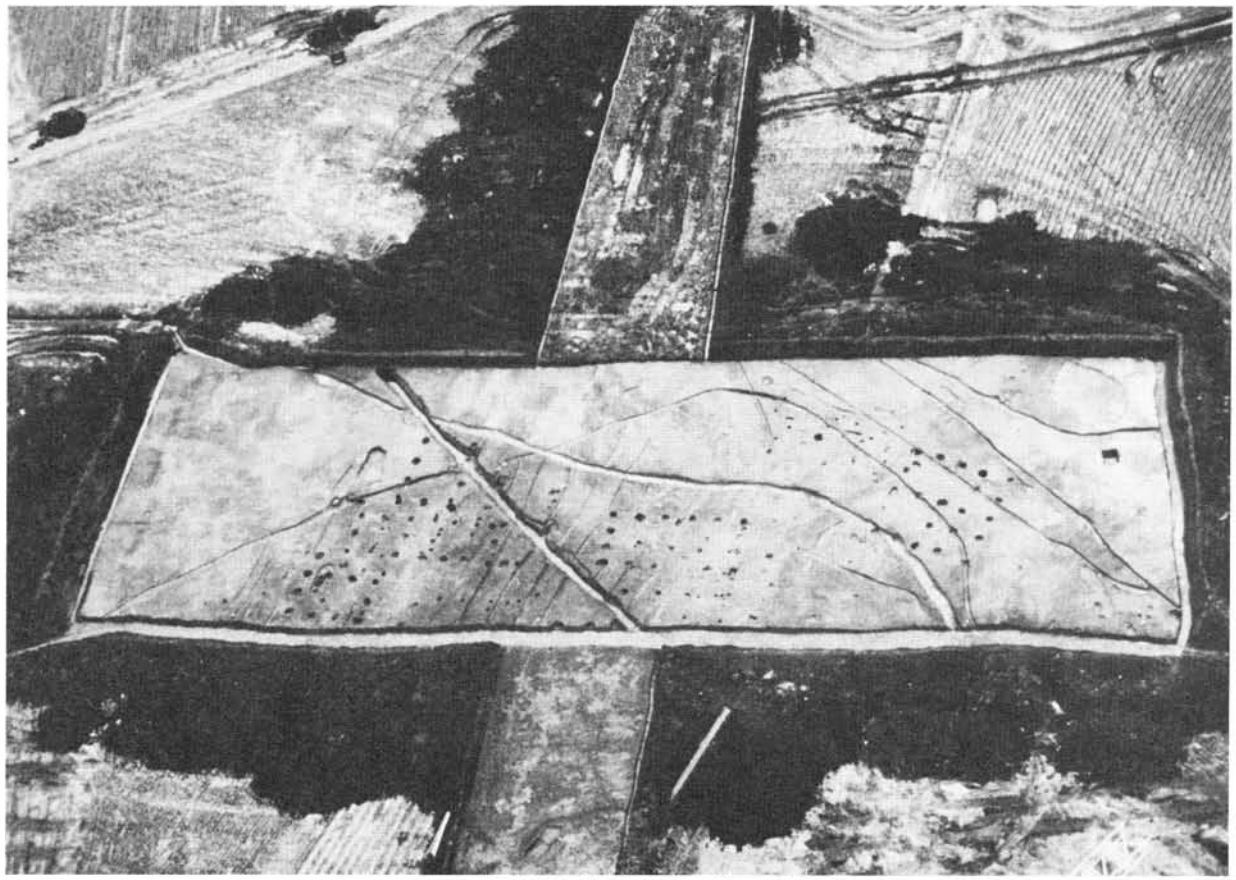
SB17（北から）

SB15（北から）

ＳＫ19・22，ＳＤ21（南から）



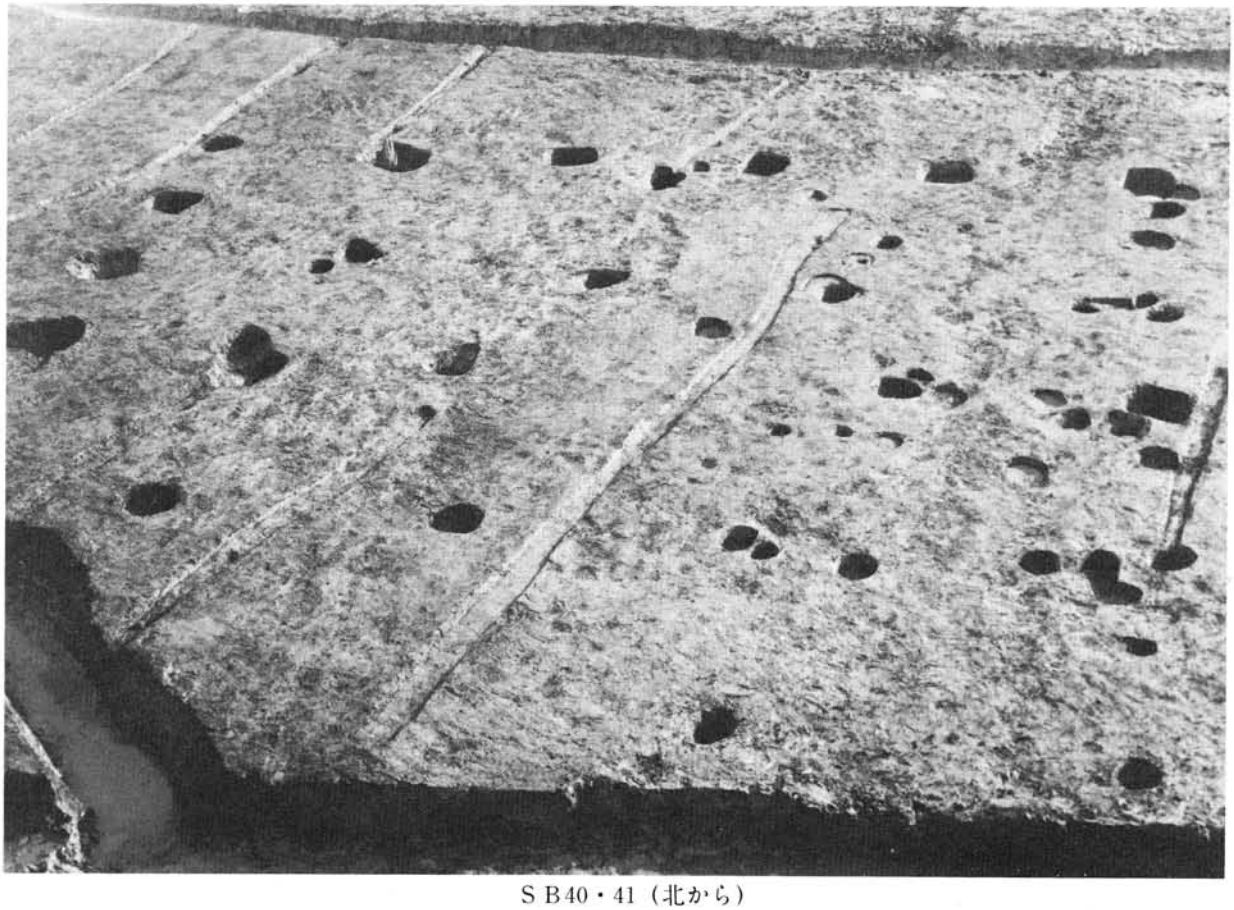
ＳＢ25（西から）



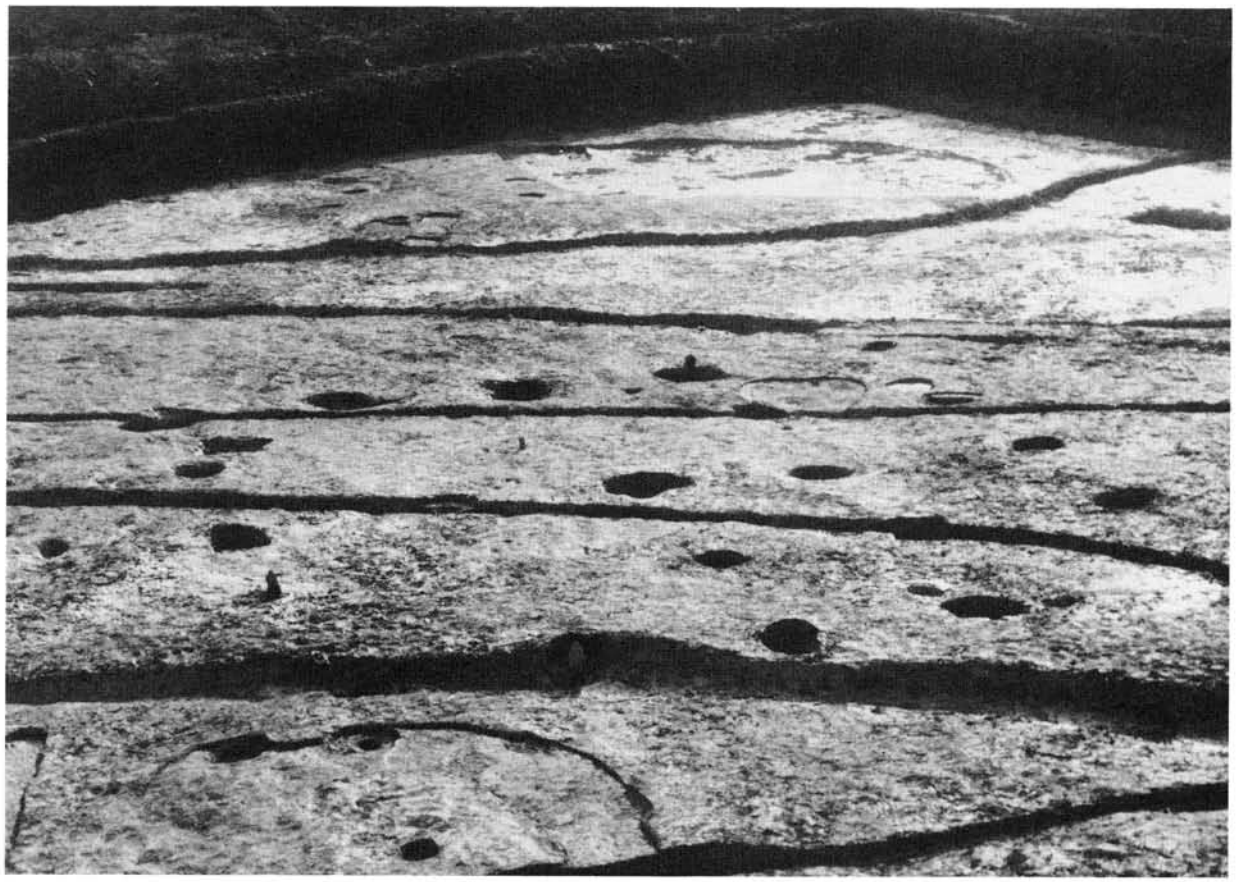
C地区全景（航空写真・北から）

SB34, SK65（北から）

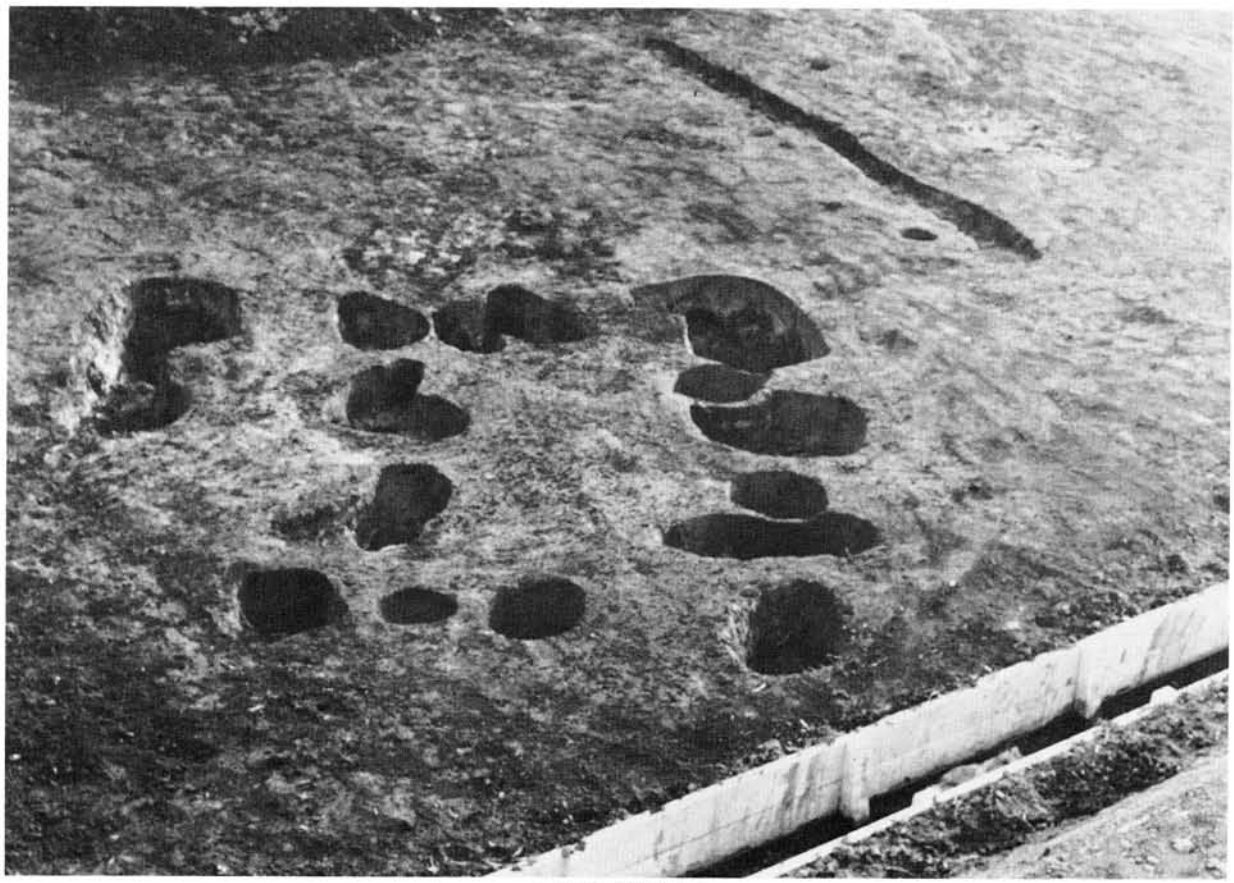
ＳＫ33，ＳＢ35・36，ＳＤ39（南から）



ＳＢ40・41（北から）



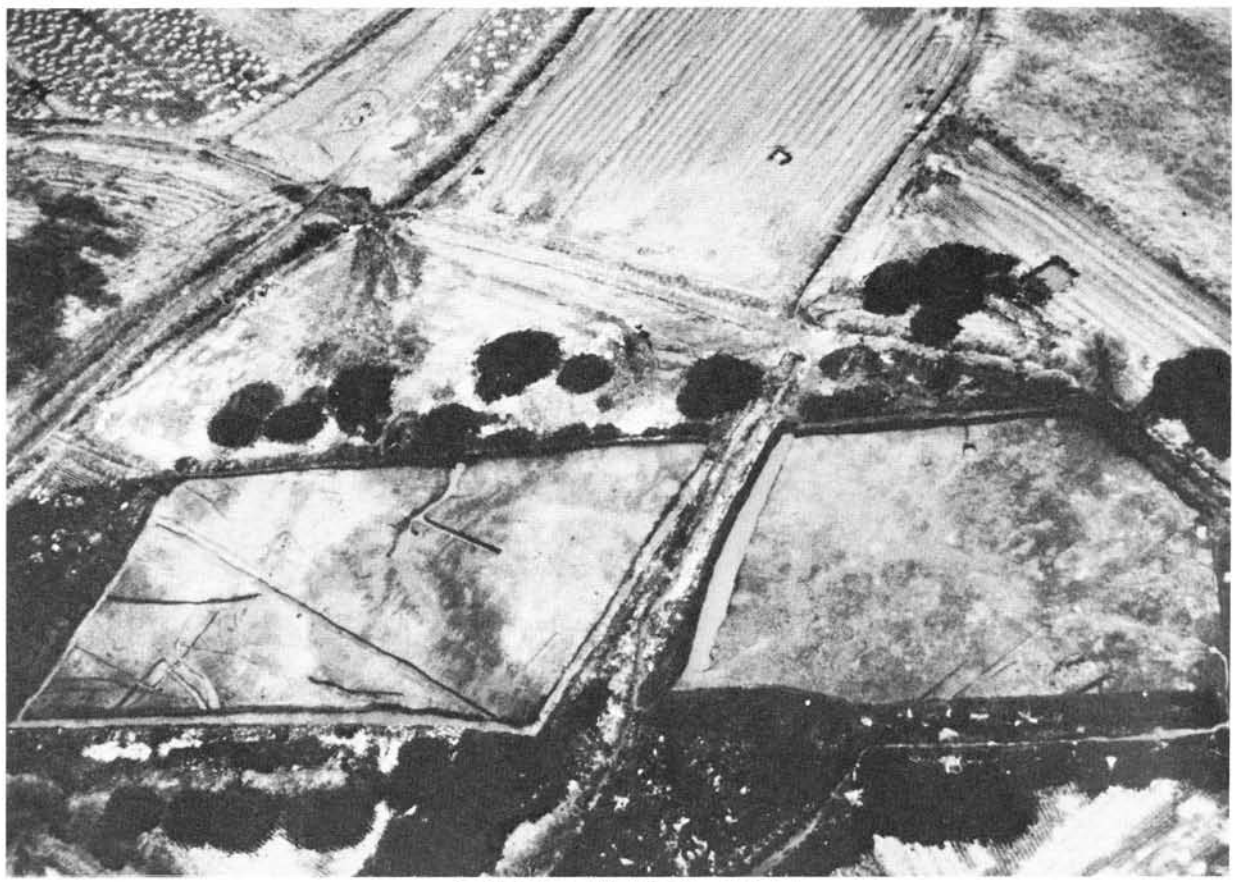
SB42（北から）



SB45（北から）

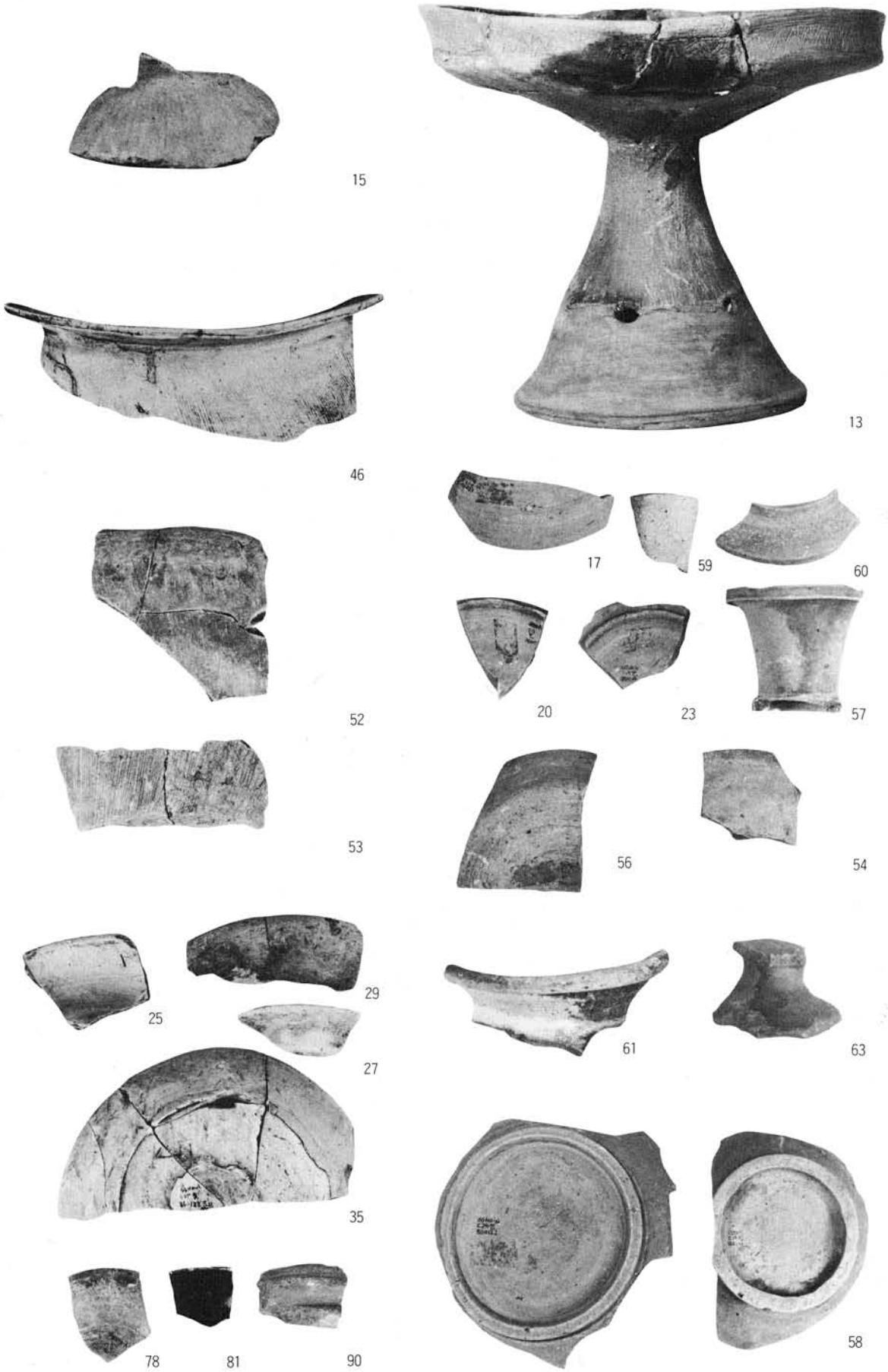
C地区北全景，SB48（南から）

C地区南SX62（北から）

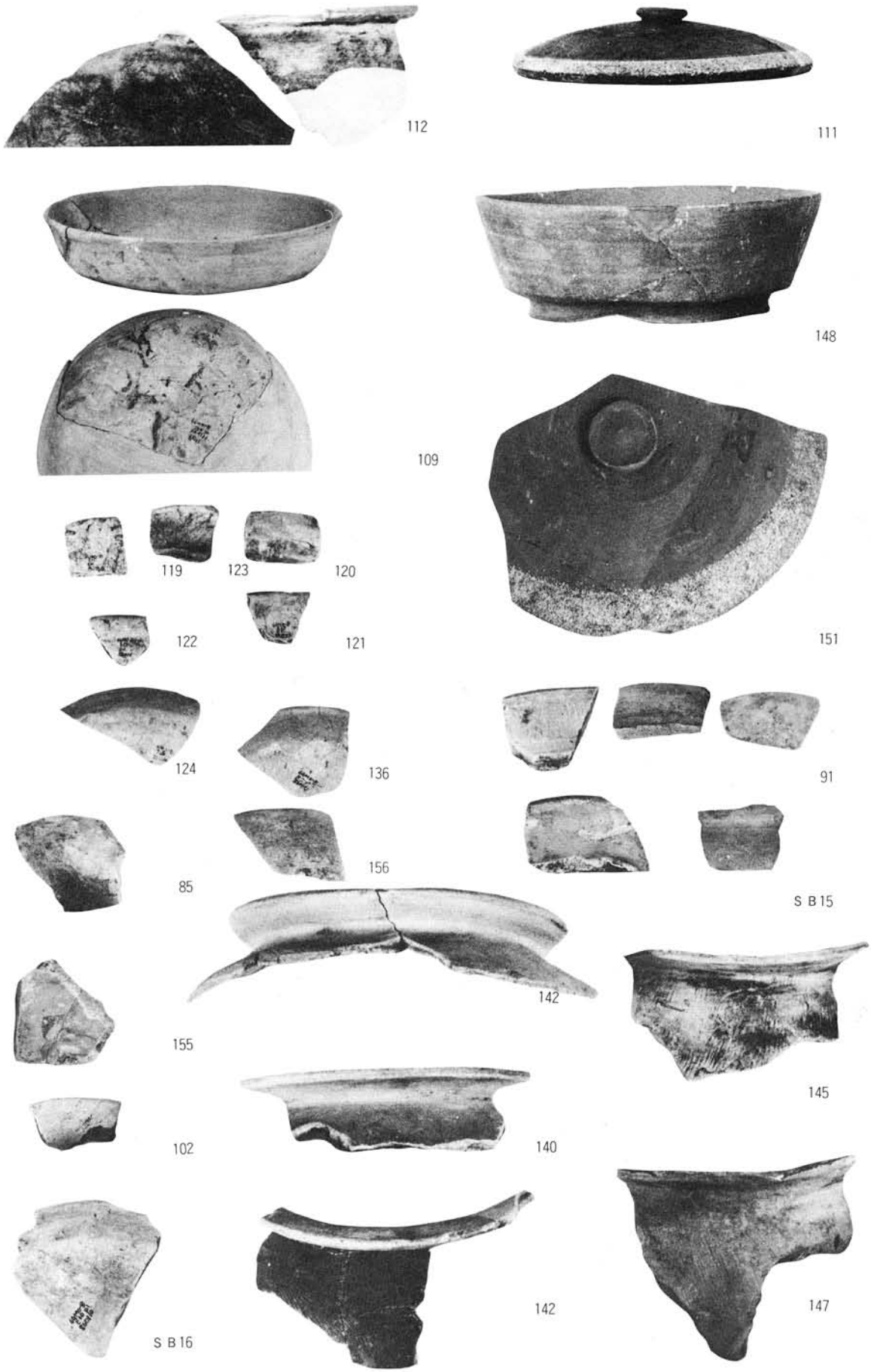


D地区全景（航空写真・北から）

SB66（北西から）

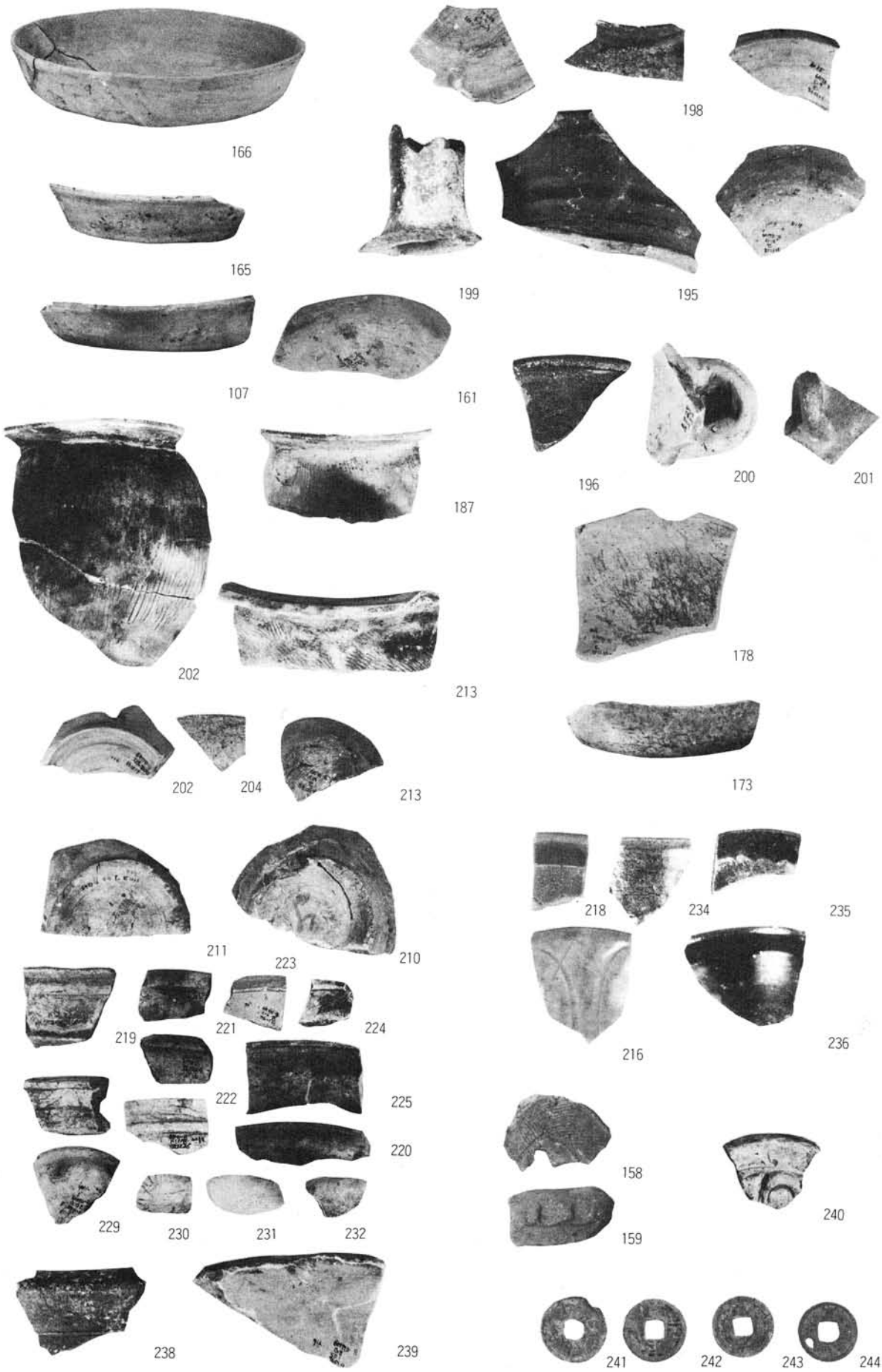


A地区出土遺物　　(1：3)



B地区遺構出土遺物

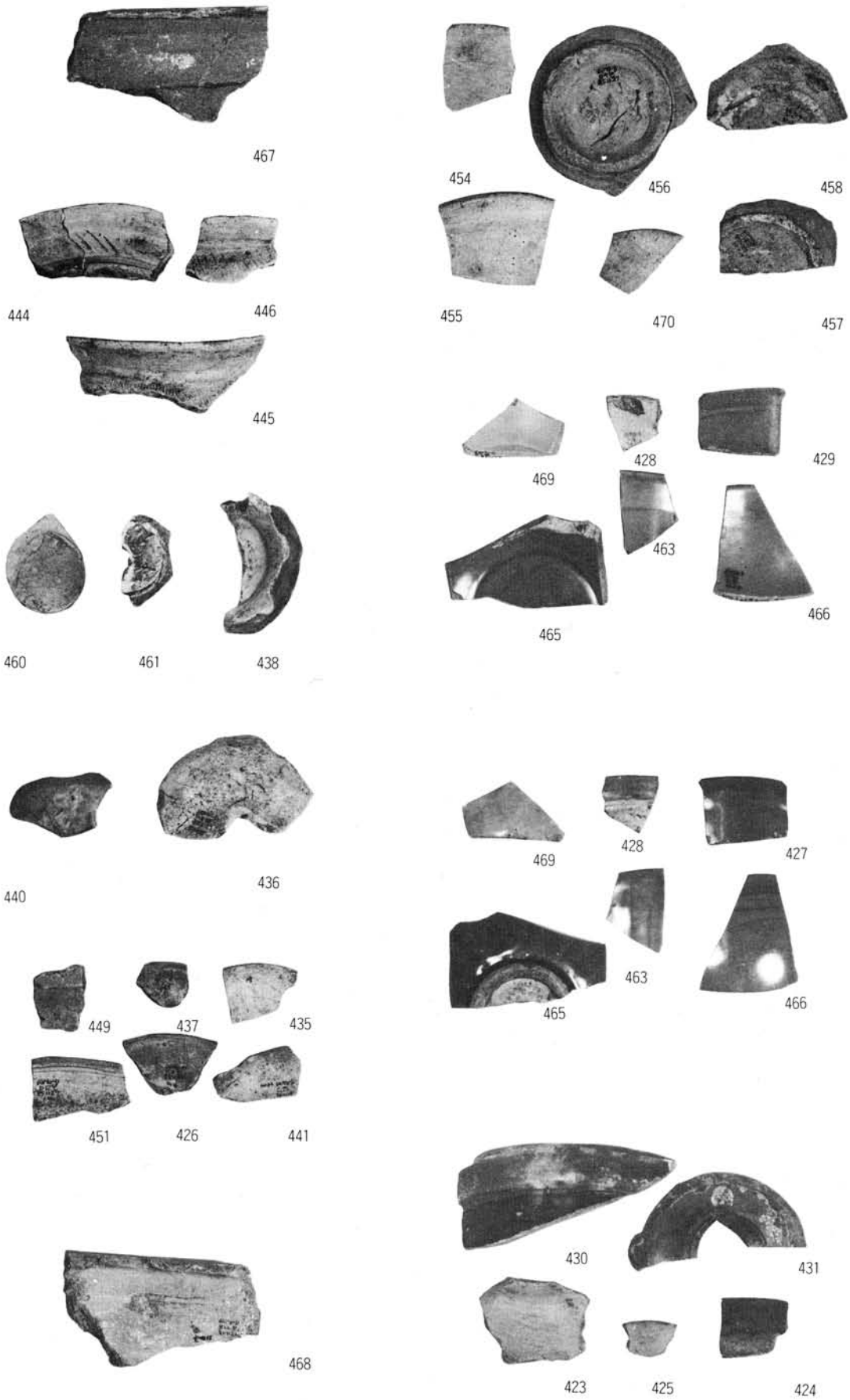
(151 は任意) (1 : 3)



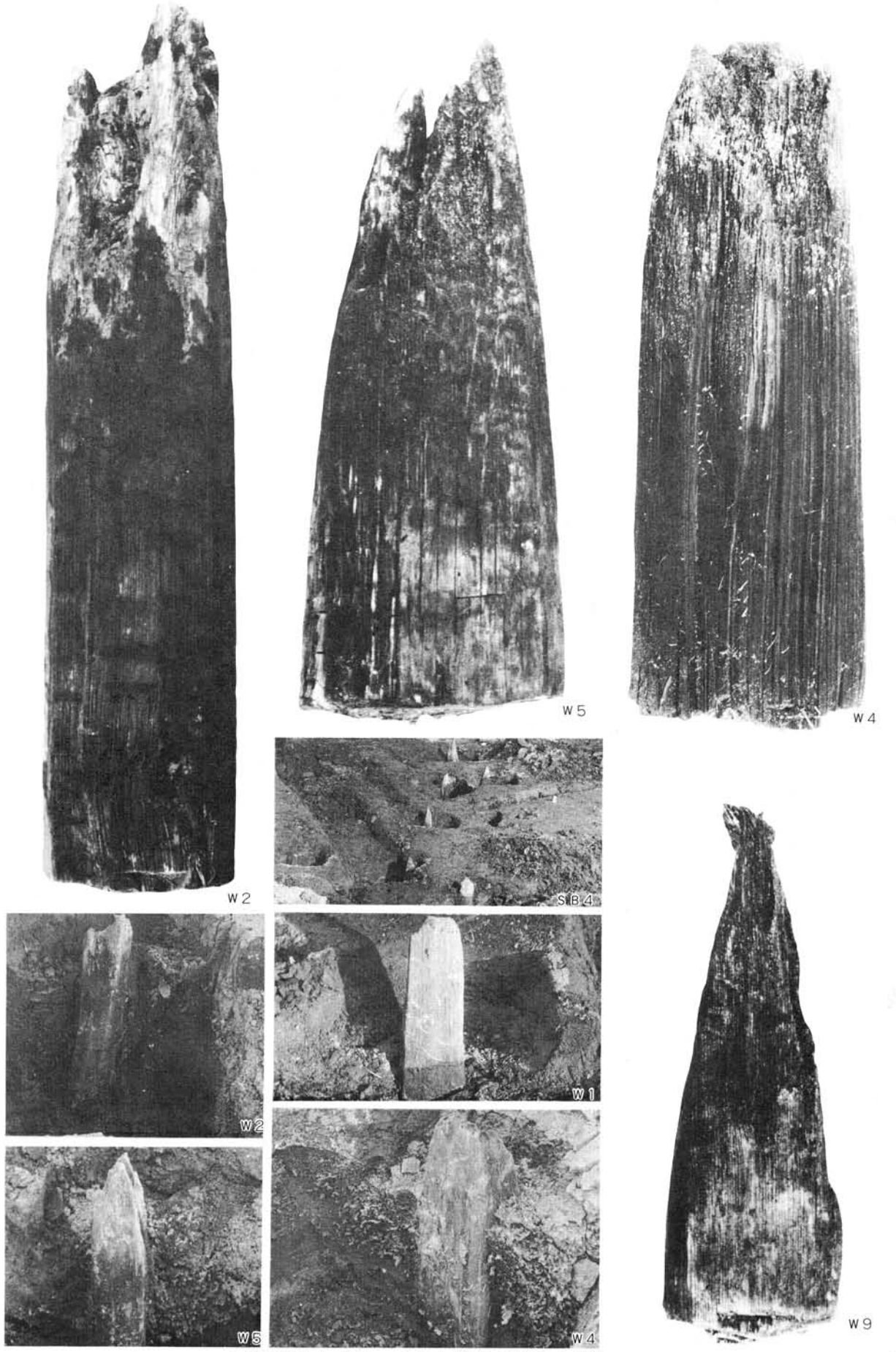
B地区包含層出土遺物　（1：4）（銭貨1：2）

C地区遺構出土遺物　　(1：3)

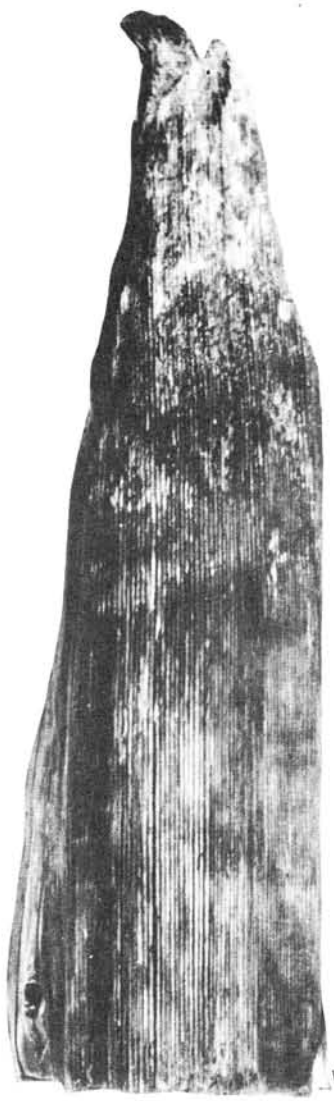
C地区包含層出土遺物　　(1：3)

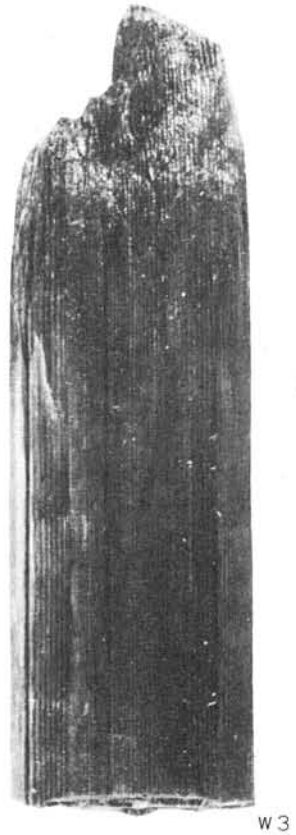

467
454
456
458
444
446
455
470
457
445
469
428
429
463
460
461
438
465
466
440
436
469
428
427
463
449
437
435
465
466
451
426
441
430
431
468
423
425
424

D地区出土遺物　　(1：3)

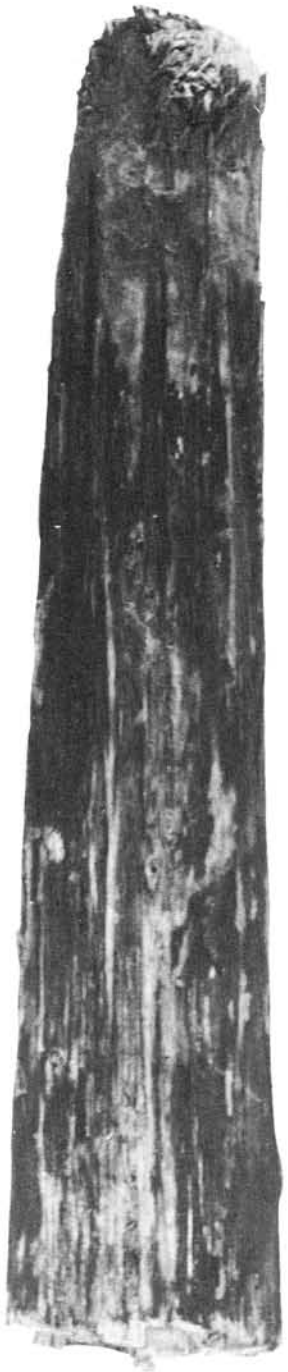


A地区SA3 W9　SB4 W2、W5出土状況　(1：4)





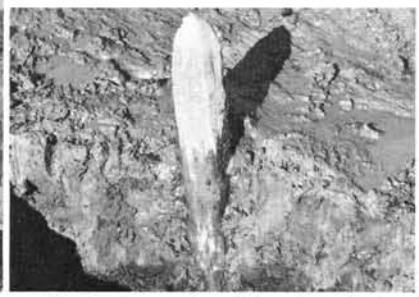
A地区　ＳＡ３W10、ＳＢ４Ｗ３、Ｗ７出土状況　（１：４）



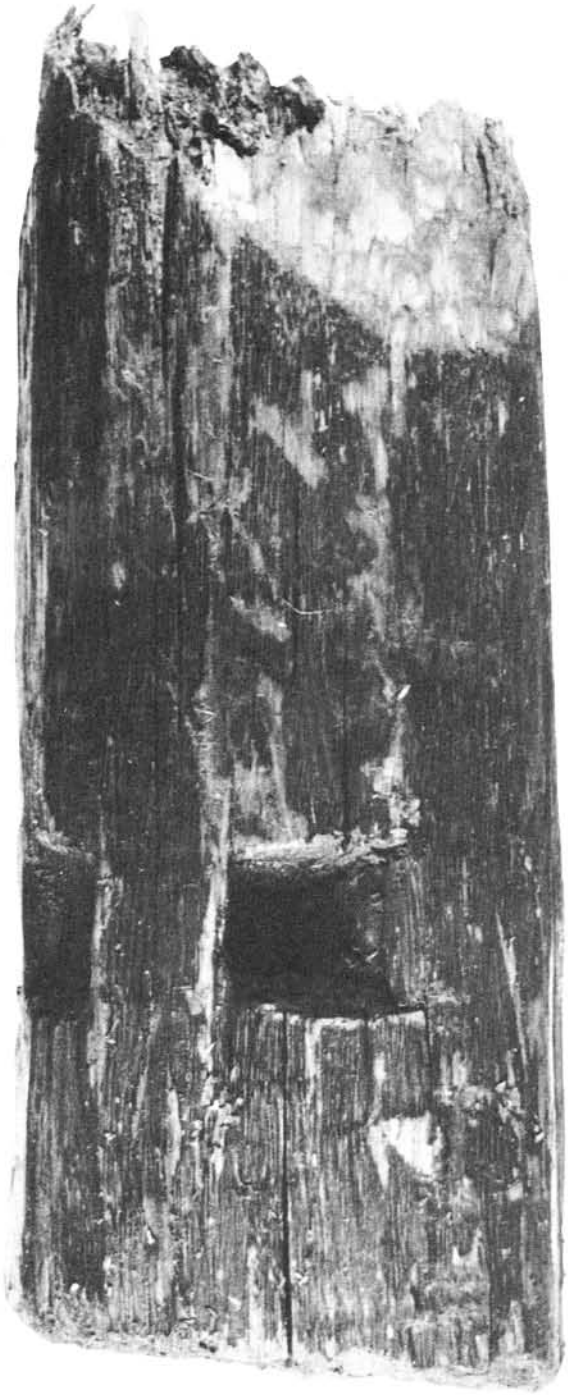
W16

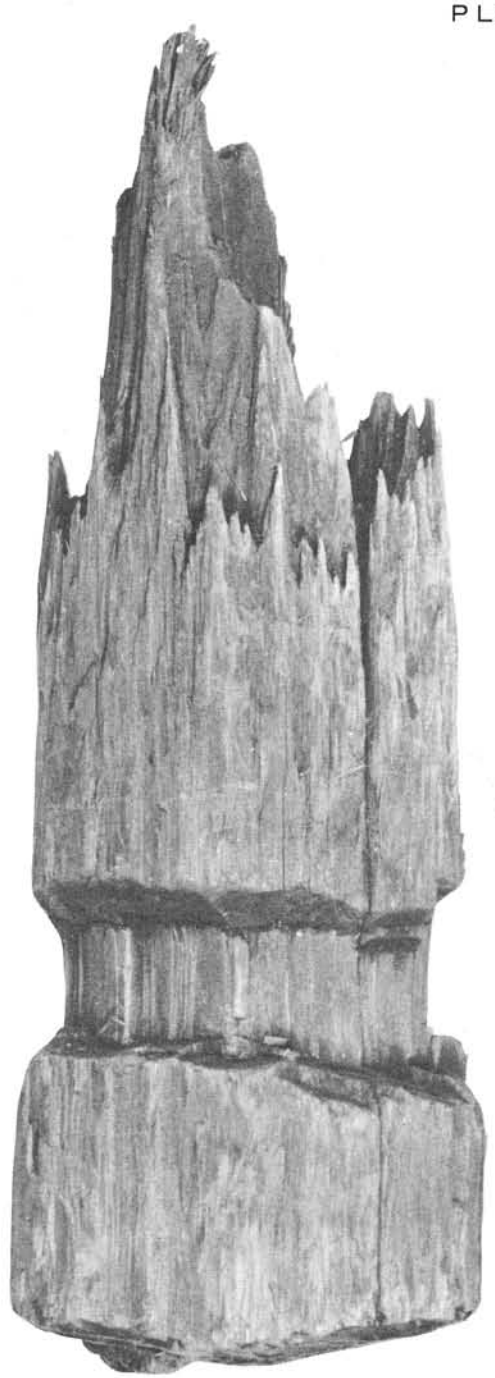
W18

W17



C地区ＳＢ42 W16、W17、W18出土状況　（１：４）

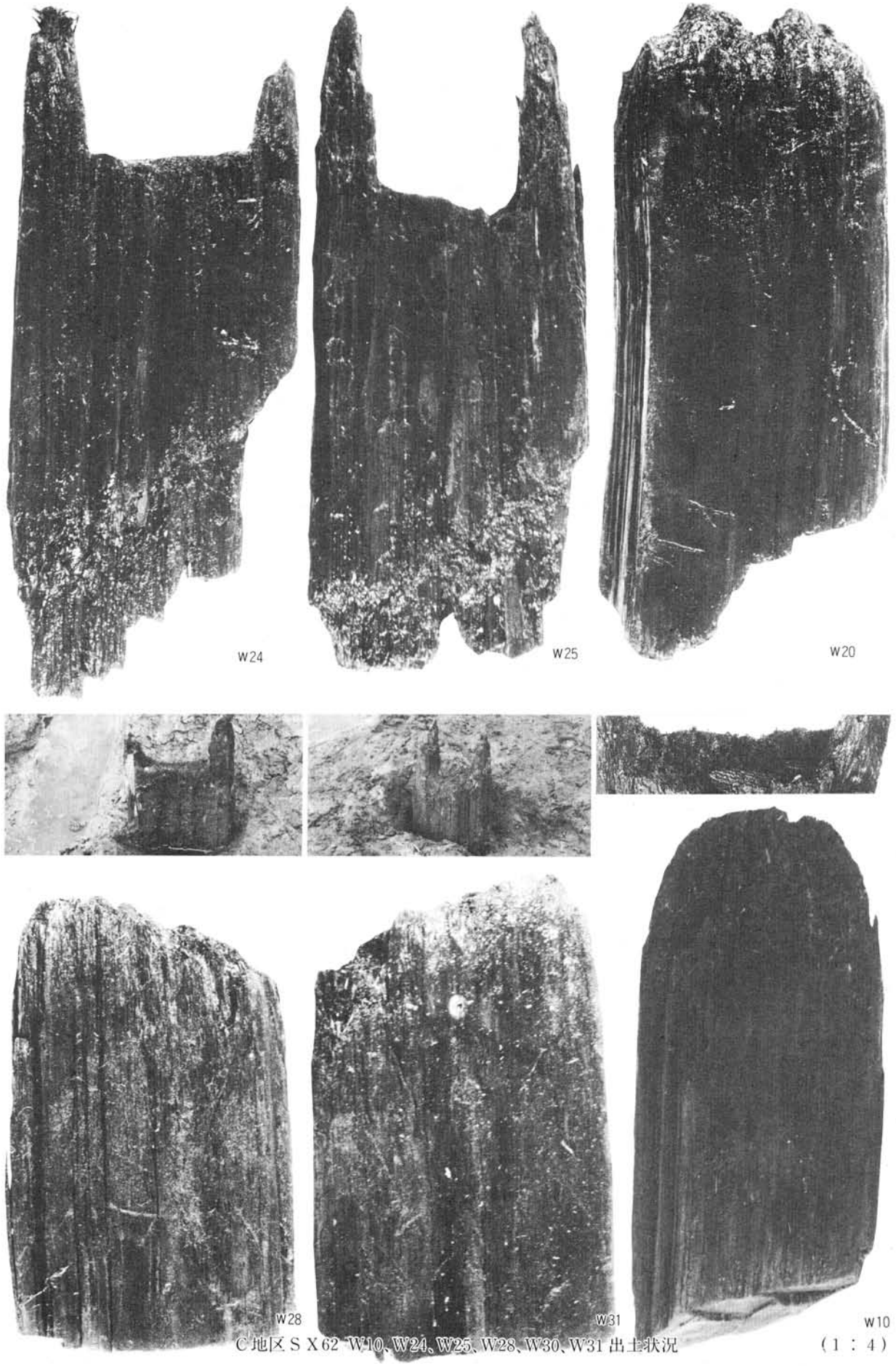




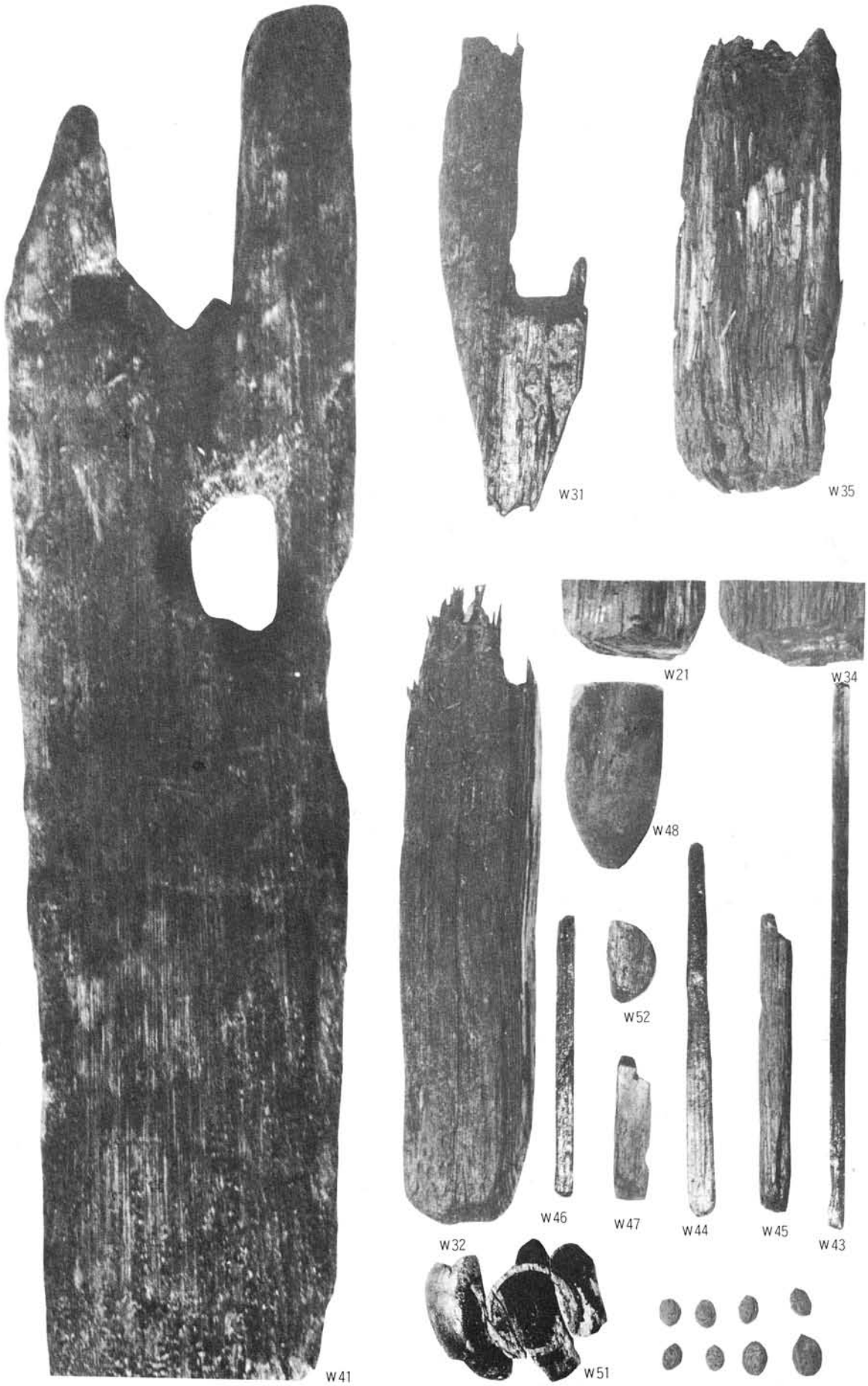
W15

W12

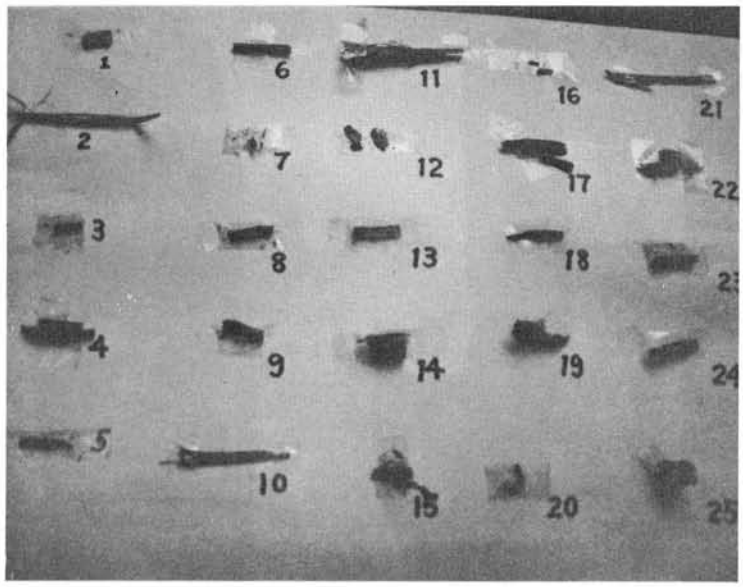
C地区 SB45 W15、SB40 W12出土状況 (1：4)



C地区SX62 W10、W24、W25、W28、W30、W31出土状況 (1：4)

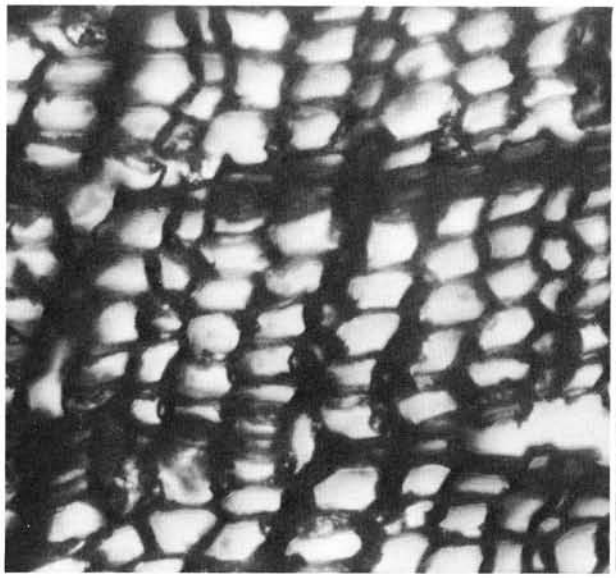


A・B・C・D地区出土柱、板材、（1：4）木製品、漆椀、種子（1：2）

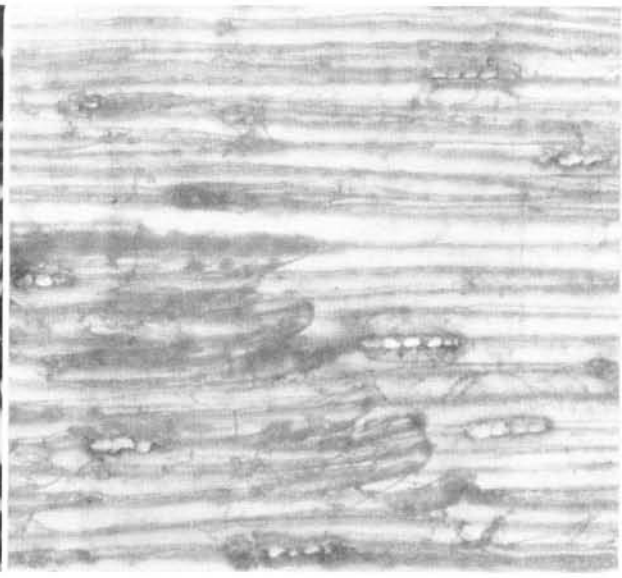


樹種同定供試片

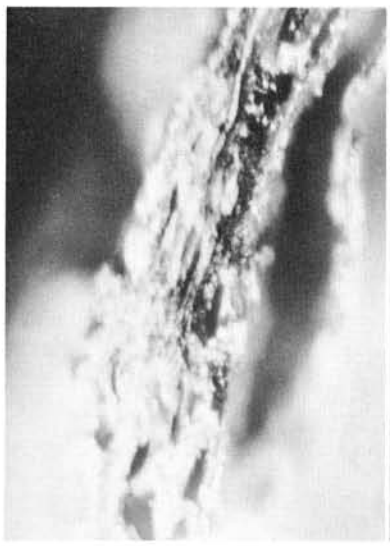
コウヤマキ×600



コウヤマキ×150



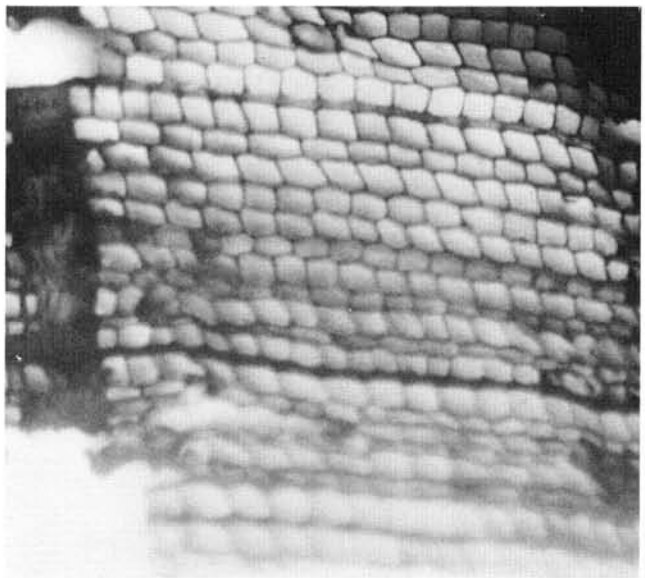
コウヤマキ×150



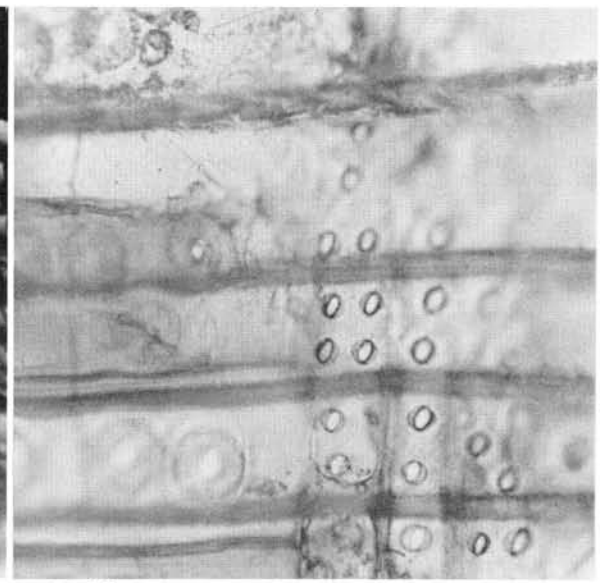
モミ材×150

モミ材×600

コウヤマキ材・モミ材 顕微鏡写真（木口・柾目・板目）

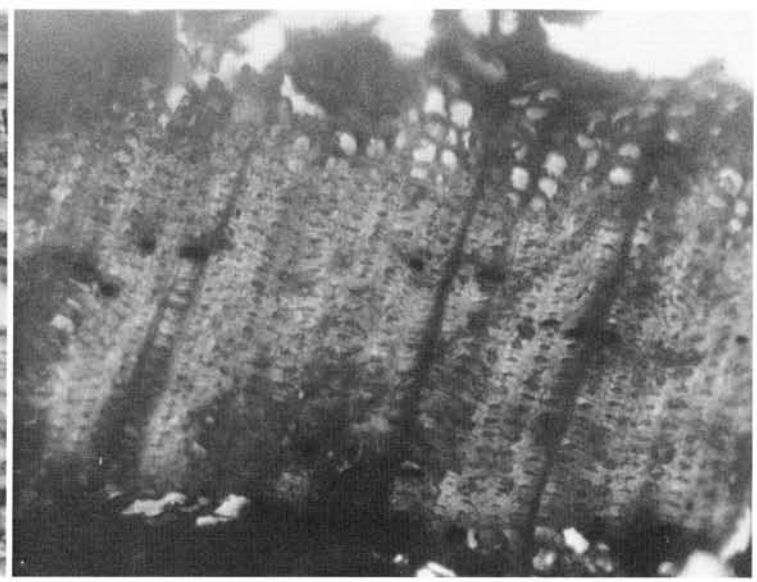


ヒノキ×150

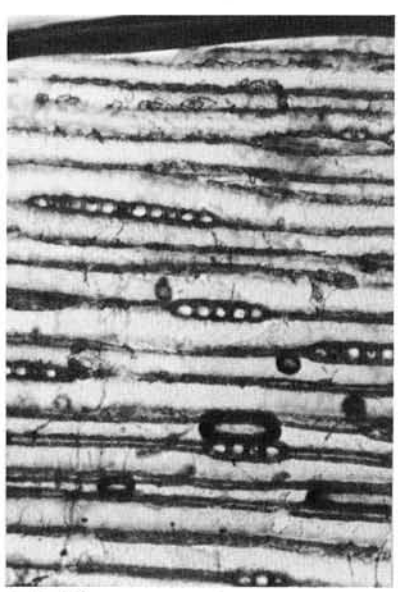


ヒノキ×600

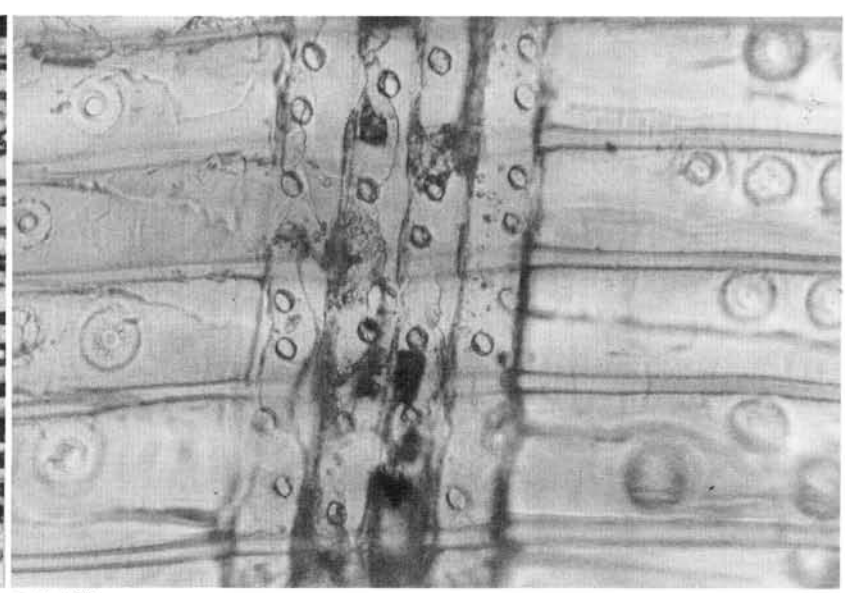
ヒノキ×150



スギ木口×150

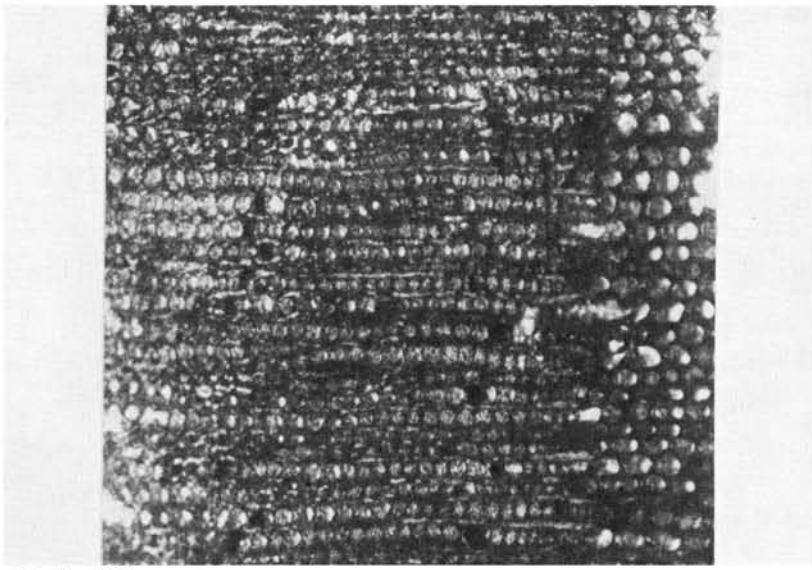


スギ×150



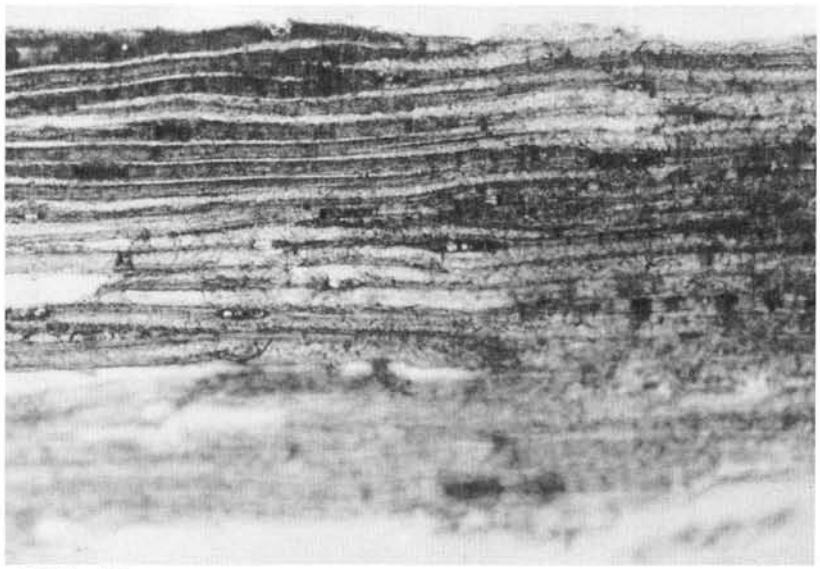
スギ×600

ヒノキ材・スギ材　顕微鏡写真（木口・柾目・板目）



イヌガヤ×150

イヌガヤ×600



イヌガヤ×150

イヌガヤ材　顕微鏡写真（木口・柾目・板目）

昭和61(1986)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告74

前沖遺跡発掘調査報告

1986年3月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　伊勢印刷工業株式会社